
クラウン・タイム！

晴野有希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラウン・タイム！

【Nコード】

N8668X

【作者名】

晴野有希

【あらすじ】

世界中で中高生にしか発見されず、しかも二桁しか見つからない特殊な血液型「TOR (Type Of Rookie)」通称R型。

その血液型を持つ少年「村雨明日香」。

またR型の人間しか動かすことのできない兵器「TORNADO」。

これはその超絶技術「トルネード」を扱う学園TND学園に入学することになった村雨明日香とその周りで起きる数多くの出来事を綴った物語。

* 縦読みをおすすめします。

プロローグ「昨日へのいざない」（前書き）

これは僕が初めて最後まで書き終えた作品です。

勢いでとある書店へ投稿しました。

新参者ですがどうか宜しくお願いします。

プロローグ「昨日へのいざない」

プロローグ「昨日へのいざない」

P 8 5 9 | 3 0 4 エリア・オルゴ島。

『オルゴ島一体異常なし。TNDテスト機二機正常始動を確認』

『これよりテスト飛行を行う。江戸川と村雨は海面を低空飛行したうえで三千メートル上昇せよ』

「了解」

「明日香君、お先に」

「どうぞ桜花さん」

桜花は海面を二百メートル程滑空し、一気に上昇した。それに続き明日香も同じルートで桜花の後を追う。

「どう明日香君、【トルネード】久しぶりでしょ？」

「そ、そうですね」

「あ、やっぱり気が進まないのかな？」

「正直・・・はい」

「どうして？ 鳥になったみたいじゃない。私はこのトルネードを開発してくれた日本に感謝するけどね」

「確かにこの技術はすごいと思います。でも僕はまだ中学生で、少し怖いです」

「なに言ってるの！ 男の子でしょ？」

「こういう場合は関係ありませんよ」

「ふん。そうかな アハハ」

「もう桜花さんは」

その時、赤い警告マークと共にサイレンが鳴り響く。

『緊急事態発生。未確認飛行物体をエリア内に確認。時速千メートルでそちらに向かっている。江戸川、村雨、両員帰還せよ』

「未確認飛行物体？ ど、どういことでしょう？」

「わぁ面白そう！」

「そんな言っている場合じゃないですよ。速く戻りましょう」

「ちえ、ケチ・・・えっ・・・あっ、明日香君後ろ！」

「え？ うっ！」

明日香の声が鈍く響いた。

明日香は急に後ろから迫ってきた円形飛行物体の脚のような物に捕まり、急降下していく。

「なんだ、これ？ うっ、だ、ダメだ。回避できない。どうしたら

――」

「明日香君！ 顔を手で隠して！」

「は、はい！」

明日香は装甲で覆われた手で露出している顔を覆った。

「ハアアア！」

桜花は一瞬のうちに出現させたライフルで飛行物体を撃った。飛行物体の背の部分が少し破損したと同時に飛行物体は明日香を離し、桜花に向かってくる。

その時、円形の飛行物体に目のような物があるのに桜花は気付いた。その目は機械的なもので、赤く輝いている。その感情を感じさせない唯の赤く光る玉のような目にも殺意を感じるのは気のせいか。飛行物体はグネグネと左右に体を振りつつ、異常なスピードで桜花を襲う。

「そう簡単に私は落ちないわよ」

桜花はその飛行物体を避けつつ確実に銃弾を当ててゆく。すると飛行物体から無数の触手が現れ、桜花を絡め捕った。

「くっ、なによ、これ？」

『江戸川、退避しろ。退避するんだ』

「きよ、教官。退避できません。うっ、くっ、苦しい」

「桜花さん！」

「くっ、あ、明日香君・・・」

明日香は召喚した片手剣で触手の一本を切り落とした。しかし、別の触手が鞭のように撓り明日香を襲った。そのスピードに追い付けず明日香はその鞭を諸に腹にくらう。明日香は再び真つ逆さまに落ちて行つた。青く輝く海が眼前に広がる。

「明日香君！ くそっ！」

桜花は手を前に出す。

すると空中にスクリーンが現れ、この機体のバランスシステムを示した。桜花は全てのエネルギーをエンジンに注ぎ込むように設定し、全速力で孤島へと飛行物体と共に突っ込んだ。

飛行物体はそれを察したのか触手を桜花から離そうとしたが、今度は桜花が離さなかった。

桜花はまたしてもスクリーンを出現させ、

「明日香君・・・ゴメンね」

そう呟くと、その画面を消し、目を閉じた。

明日香が水面ぎりぎり状態で態勢を立て直したまさにその時、桜花と飛行物体は孤島へと落下。ものすごい爆音が一带に響き、緑の島に炎が上がった。

「お・・・桜花さ——ん！」

明日香の叫び声はむなしく虚空に響いた。

尚、後日、島内で桜花はおろか、飛行物体の破片さえ見つからなかった。

第一話「春の日のこと」

第一話「春の日のこと」

四月。

グツグツグツ

醤油の香ばしい香りが部屋一面に広がっている。一人の男が台所で料理をしていた。

男の名は『村雨^{むらぬめ} 明日香^{あすか}』。村雨家の長男であり今年高校一年生になる。身長は百七十五センチ。目、髪共に黒色。整った顔立ちが性格の良さも映し出している。また色白で中性の顔立ちをしており女装させると十人が十人男だとは思わないだろう。

料理をしているその姿は紳士のような雰囲気醸し出している。

ガチャ

「うわー お兄ちゃん、なんか、いいにおいがする。今日の夜ごはん、なに？」

「おかえり美和。今日はカレイの煮付けだよ。姉さん帰ってくるまで待つとくからな」

「もーう、一回つまみ食いしただけじゃん。分かってますよ」

「さっさと手、洗ってこい」

「はーはい」

明日香はグツグツと音を立てるたれに小指をつけ、味見をする。

「うん。こんなもんかな」

明日香はフライパンで作った三人分のカレイの煮付けを皿に盛り、保温バッグに入れ、台所の隅に置いた。

「あとは野菜を――」

「きゃー――」

美和の叫び声が家中に響き渡る。

「どうした、ゴキブリでも出たか？」

明日香が廊下に出ると、玄関に四人、全身黒尽くめの男が立っていた。

「あつ、どなたさまですか？」

「村雨明日香、美和。一緒に来てもらっぞ」

「えっ、何処へ、ですか？」

「トルネード学園へ、だ。お前たちにはそこに入学してもらっ」

「いや、二人とも学校はきまっているんですけど」

「そこは既に退学届を出した。お前たちにはもう席は無い」

「！ すいません。帰ってもらえますか。その・・・妹も怖がっていますし」

「さっさと来い！」

四人組は拳銃を取り出し、明日香に向けた。

「俺が消えたら、【先生】が容赦しませんよ」

「なにを言う。お前の情報を我々に流したのはお前の尊敬する先生さまだぞ。」

「なっ！？」

明日香は今までの余裕が嘘のように取り乱す。

「嘘だ。うそだうそだうそだ。先生がそんなことするはずない」

「嘘ではないさ。お前の【血液型】を教えてくれたのはあの男だ」
「ハッ——」

明日香は言葉を失い倒れ込んだ。

そして二人は男たちが乗ってきた車に乗せられ、町を出た。

？

（そんな、先生が。俺を。先生、何をお考えですか？ 俺に何をさせよう）

「着いたぞ。降りろ」

（くそっ、どうしたらいいんだ。力尽くでなんとかしたいところだ

が美和がいる。危険にはさせない)

「お前の姉さんもお待ちだぞ」

「えっ、あつ姉さん！ 姉さんも捕まったの？」

「明日香、捕まったなんて言い方は無い。私達は助けてもらったんだ」

「どっ、どういことなんだ、姉さん？」

「お前にしては頭の回転が遅いな。まあ仕方ないか。先生が関わっているんだからな。この人たちは【TND学園】^{トルネード}の人たちだ。お前の身の危険を案じて、この学園への入学を勧めてくれたがお前は以前断わったよな。だがもう、そうはいかなくなってきたのだ」
(なんなんだよ。分かったような言い方して)

「でも、俺はいやだ。こんな学園には入らない。だって・・・ここに入れば、トルネードを使うことになるんだろ！」

「当たり前だ。もう【昨日】は忘れる。お前のせいでは——」

「あれは、俺のせいだ。桜花さんが死んだのは・・・俺のせいなんだ」

(そうだ。あの時、俺がもっとちゃんと行動していれば桜花さんは死なずに済んだんだ)

パシン

頬に痛みを感じる。

「こういうありきたりな行為は嫌いだろうが、仕方ない。今のお前は打たれて当然だからな。私にはお前の気持ちを分かってやることはできん。だがな、きつとあいつも。桜花ももう許してくれているはずだ。いや、その前にあいつは怒っていないだろう、最初からな」
「じゃあ、どうしろって言うんだ。それで、ああそうかってまたトルネードに乗れって言うのか？」

「そうだ」

「えっ？」と俺は思わず聞き返した。あまりにも予想外だ。

「そうだ。乗れ。そしてあいつの夢をお前が追え。掴め。そして昨日を超え、明日へ向かえ！明日香！」

そんなんでいいわけ・・・姉さん。桜花さん。俺はそれでいいのか？

「言っておくが、あいつが持っていた夢は大きいぞ」

「分かってる。でも俺がしたことと比べると――」

「また打たれたいか？ 十分だと思うぞ。あいつはきつと喜ぶぞ。」

お前が成し遂げればな。」

「・・・・・・・・」

「どうする、それでも逃げるか？」

「ううん。ううん。入るよ、TND学園に。そして桜花さんの夢を」

「そうだ。ウソみたいに早く立ち直るところがお前の取り柄だろ」

「そう・・・・・・・・だね」

桜花さん。俺が成し遂げる。それで許してもらえとは思わないけど、やる。やってみせる。

「それで、高等部だよな。俺」

「ああ。美和は中等部だ。ちようどどっちも今年度入学だから良かったじゃないか」

「姉さんはどうするんだ？」

「私はTND学園の国語の教師だ。教員免許は持っているからな」

「なるほどね。でもこの学園、家から通うのは辛いな」

「大丈夫だ。お前は寮生活をする。だが問題が一つある・・・」

「問題？ っていうか寮って時点で問題おありだがね」

「その比ではないぞ」

「？ で、問題ってなに？」

「お前のルームメイトは女子だ」

「「えっ~~~~！」」

俺とほぼ同じタイミングで美和が叫ぶ。

「だめだよ。だったら私がお兄ちゃんと同じ部屋になる！」

そ、それはそれで問題では？

「確かに少しそれは困るよ」

「相手も同じように考えているさ。それにお前はそういうことには鈍感だしな。お前がもう少し早く立ち直れば、こんなことにはなっ

ていない」

ぐさっ それを言うか・・・

「お姉ちゃんダメだよ。お兄ちゃんが可哀想だよ！」

（俺は良い妹を持った。にしても必死だな、おい）

「私がルームメイトになる。私が、私が、私が！」

すると姉さんは美和の耳元で、何かをささやいている。

なんて言っているのか聞こえなかったが、見る見るうちに美和の顔が明るくなっていく。さすが姉さんと思うとともに、嫌な予感もする。なぜだ？ おつ、美和の眼が獲物を捕えた眼に！

「分かった。お兄ちゃん、がんばってね」

「えっ、いや、がんばれと言われても」

「心配するな。ツインだから」

それは当り前であってまったく疑っていなかったことだぞ。

「ちなみに1005号室。ルームメイトの名前はアレラーテ・オランジュ フランス人だ」

「・・・なあ姉さん。そいつ本名か？」

「なぜだ？」

「いや、少し気になっただけ」

「当然、本名だ。探偵の卵だからってなんでも疑うな」

「わかってるよ」

「じゃあ私は美和を中等部につれて行く。お前は那些人たちと寮へ行け」

「わかった。じゃあ」

俺は姉さんたちと別れ、黒尽くめの四人組と寮へ行き、1005号室へ一人で向かった。

ここで寮の説明をしよう。

外見はまさにどこかのホテルのようで、一階がフロント。二、三階が食堂。ちなみに朝、昼が二階の食堂で、夜が三階の食堂らしい。

四、五階が図書室と資料室。違いは不明。六階が男子寮で七、十階

が女子寮となっている。男子寮が少ないのは文字通り男子が少ないからで十人しかない。

どうせだからTND学園の説明も。TND学園は日本が開発した超ハイテク技術、【トルネード】を扱うエキスパートを養う学園だ。トルネードはある特定の血液型でしか動かせないのが特徴というか欠点だ。その血液型はAでもBでもABでもOでもない。2025年に発見された新型血液。通称【TOR】。Type Of Rookieの略称。現在世界に二桁しかない。しかも今の中高校生の年代でしか発見されていない。

トルネードはTorNaDo——【Type Of Rookie's New Ability Doctrine】の略称。要するに【ルーキー型の新しい能力理論】とも言うのか。名称が子供っぽいのは命名したのが十五歳の少女だからだ。実を言うと幼馴染であるがそれは後々語ろう。

トルネードは簡単に言えば装着アーマ的なもので何処かの口ボットよりはごつごつしていないが（例外あり）露出部は顔のみ（例外あり）である。もともと戦争用に開発されたが、新世界平和国際条約Version?により地球上に武器は（表向きは）無くなったので必要なくなり、専ら今は日本のお国自慢である。なお使用権はほとんどの機体が日本にある。

こんなことを頭で考えていると、十階の1005号室に着いた。

コンコン

.....

返事がない。もう一度したが同じことだった。

（いないのか・・・?）

カシャ 鍵は開いている。俺はすうと入っていく。

（おお。メツチャ広い）

まあツインであるということ差し引いてもかなり贅沢な部屋だ。割と設備は整っている。キッチンはないか。

コンコン

（もしかして）

俺はドアを開けた。

「はじめまして。私アレラーテ・・・えっ？ えっ！？」

「あつ、あの、る、ルームメイト・・・俺なんです・・・あ、アハハ、ハハ・・・ハア・・・」

案の定、彼女は言葉を無くす。

ブロンドのセミショート。背は俺（180くらい）の首下あたりだろうか。整った顔立ちだ。

「えっ、えっと——」

「と、とにかく入らないか。その立ち話もなんだし」

「はっ、はい」

俺達はベッドにそれぞれ座り（アレラーテはなぜか正座）、ちょっとした自己紹介を始める。

「えっと・・・アレラーテ・オランジュです」

「俺は村雨明日香。明日香でいい」

「えっ？ あつ私、その、えっと・・・」

「どうした？」

「いや、あの、な、なんでもないです」

「そうか」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

（重すぎる沈黙だ。このままじゃ今後に関わるな）

「あの、なんだ」

「ひゃえ」

アレラーテは変な声を出した。そしてみるみる赤くなる。

「同じ年なんだし、それにこれからルームメイトなんだから、その宜しくな」

「あつ、はい！」

アレラーテはまた赤くなって少し俯いたがすぐに顔を上げ、満面の

笑みを見せた。意識しないようにしても・・・うん。多少ドキドキするな。

？

話は数分前、アレラーテが明日香と出会う少し前に遡る。

（ど、ど、ど、同室が男の子！？ どうしようかな、髪、変じゃないよね？）

アレラーテは一人、盛り上がっていた。こんな境遇の人間はこの学園中探してもいないだろう。

（で、でも期待・・・とかしたら駄目だよね。すっごい嫌な人かもしれないし・・・）

と、言いつつも実は期待度は百二十パーセントオーバーだ。アレラーテは1005号室の前に着き、深呼吸を二回して、ノックした。

コンコン

（最初が肝心だよね！）

「はじめまして。私アレラーテ・・・えっ？ えっ！？」

言っている最中に明日香の顔が見えた。

（き、き、聞いてないよ！ こんな、こんなイケメン・・・なんて——）

当初、明日香は、アレラーテは出てきたのが男子だったから驚いたのだろうと思っていたが、実は顔を見て、期待以上であったことにパニックになっていただけだった。

（うっ、うそっ！ 夢みたい！！）

アレラーテは一瞬で恋に落ちた。一目惚れだ。

明日香の「入らないか」という何気ない一言にも、ものすごく気遣いが感じられて嬉しくなっていた。

そんなこんなで部屋へ入り、自己紹介。名前は知っていたが声をできるだけ聴きたかったという乙女心だ。

「あ、明日香って呼んでいいの？」

「おう。じゃあ俺は」

明日香は何かを思いついたように微笑み、

「アルルってどうだ？」

と問うた。

（あ、あ、あ、アルル！ どうしよう、いきなりあだ名だ〜）

アレラーテは顔を真っ赤にしながら、

「い、いいよ！アルルで！！」

「なんでアルルって言ったか分かる？」

「えっ？」

アレラーテは頭をフル回転させている。そしてある解答にたどり着く。

「もしかして、都市の名前？」

「そう。アレラーテもオランジュもフランスの町の名前だよ。現在アレラーテはアルルって言わないっけ？」

「よく知ってるね。それにはね……理由があるんだ。じ、実はね——」

まさか、明日香がその都市の名を知っているとは思わなかった。アレラーテは驚きを隠せていなかった。しかもアレラーテにとって【この話】を人にするのは初めてで少し躊躇われた。でもこれからルームメイトになる人に名前が都市の名であることだけ知られ、その先を教えないというのも気持ち悪く、なにより明日香には聴いてほしいような気もした。

これはみんなには秘密だよ、と付け加えアレラーテは語りだす。

「実は私ね。両親が離婚したんだけど、どっちも引き取ってくれなくて。それで孤児みたいなものになったんだ。親戚の家を何軒か回ったけど迷惑がられて。直接は言われてないけど、あるでしょ、そういう空気っていうの？ それで色々やってなんとか生きてたんだけど、ある日、私がR型（ルーキー型）だって分かってね。親戚の人、みんな私を引き取ろうとしたんだ。勝手だよ。散々、邪魔扱いしてたのにさ。だから私、逃げてきたんだ。ここなら安全だから。」

入学者の安全は保障されてるし。でね、両親が離婚したのが物心つく前だったから名前がよく思い出せなくて。親戚の人もちゃんと呼んでくれないし。だから町の名前をとったんだ。」

「・・・・・・・・」

「あつ、ごめんね。暗くなる話ししちゃって」

アレラーテは俯きながら少し涙目になっている。

「こっちこそごめん。俺、探偵を目指してるんだ。事務所でバイトみたいにして修行してる。だからつい探る癖がついてて。本当にごめん」

「うっん。いいよ。これからも、その、アルルって呼んでね」

「うん。アルルがいいならそうするよ」

「うん！ でも探偵なんだ」すごいね！」

「そんなことないよ。すごいのは先生だけ。俺は全然」

（ま、まずいよ。私、なんて言ったらいいんだろ？ と、とりあえ

ず話題を・・・）

と考えた末、出た答えは、

「な、なんで探偵になりたいの？」

「ああ、アルルも話してくれたし、俺も話そうかな。でも、この話はまだ誰にも話したことないから、とりあえず秘密にしようって」

（えっ、ひ、ひ、秘密に！？ ふ、二人の秘密ってこと！）

アレラーテは少し頬を赤くし、顔を反らした。

「どうかした？」

「うっん。気にしないで。どうぞ！」

「おう」

明日香は声のトーンを少し下げ、語りだした。

？

「俺、五人家族だったんだ。両親と姉さんと妹と俺。俺が五歳だったある日な、姉さんと俺と妹で夏祭りに行ったんだ。あとで両親と

合流するはずだったんだけどな。その日、両親は家で射殺されたんだ。犯人は逃走。今でも行方は分からない。一緒に出ていればって何度も思った。もしくは夏祭り何かに行かなければ、一緒に逝けてたのにつて。そんな時、事件を担当してたのが当時とても有名だった私立探偵の先生だったんだ。でも、その先生ですら犯人を見つけれなくて、結局マスコミも見捨てたよ。それから六年くらい中国に渡って親戚の家に住んで。帰国した後は、姉さんは俺達を一人前にするために教員免許を取って必死に働いた。俺はその犯人を何時の日か捕まえる為に先生に弟子入りしたんだ。

それから忙しかったけど平穏な日々だった。でも先生は俺がR型であることに気付いたんだ。それでこの学園に俺の情報を。それで今に至ってる。考えてみればトルネードを使えば犯人が見つかるかもな。な、アルル・・・つて、え？」

俺がアルルの方を見ると大粒の涙を流していた。えっ？ そんなに泣きます？

「うっ・・・ごめん。で、でも私・・・自分が特別不幸なんだって考えてて、で、でも今の話を聴いて、自分が、は、は、恥ずかしくなっ——」

言い終わるか終わらないかのうちにアルルは顔を伏せ号泣し始めた。「お、おいアルル。そんなに泣くなよ。そのなんだ、泣かれても困るというか俺まで泣きたくなるというか。アハハ」

どうしたらいいんだ、この状況？ 今、俺は何をすべきなんだ？

教えてくれ・・・あつ、そうだ、こういうときは——

俺は部屋にあるポットでお湯を沸かす。その間もアルルは泣きつばなし。だが泣く子も黙る秘儀を俺は知っているのだ。えらいぞ、俺。ピューとお湯が湧いた音がする。それにはさすがにアルルも顔を上げる。フッフ。イツツ・ショータイム！

？

（なにしてるんだろ、明日香？）

アレラーテは自分への悔しさやら明日香への申し訳なさで涙が止まらない。

（だ、駄目だ。顔がくずれてる。最初が肝心だったのに。こんな顔でしかも明日香を悲しませるような話題ふっちゃった・・・もう私の馬鹿・・・）

そんなことを考えていると、

「ほれ」

と明日香がカップをアレラーテに手渡した。

「な、なに？」

「ホットミルク。体が温まるぞ」

「えっ、私に？」

「うん」

（あ、明日香のほ、ほ、ホットミルク！ 私に！！）

悲しかった気持ちはどこへやら。嵐が吹き荒れていたアレラーテの心の中は一瞬でお花畑になった。

「あ、ありがとう」

アレラーテは満面の笑みで明日香にお礼を言う。

「おう。喜んでもらえてうれしいよ」

明日香の気持ちに素直に喜んでいるものの、アレラーテは満面の笑みをしてても反応が変わらないことに多少、焦りを憶える。

（わ、私って魅力ないのかな？）

明日香としては必死でアレラーテの笑顔攻撃で照れ顔になりそうなのを隠していたのだが。

「じゃあ一緒に食堂行くか？」

「う？ うん。ちょっと待ってて。今、飲んじゃうから」

「おう」

（うわゝ、いきなり二人でディナーだ。どうしよう。だ、大丈夫。頑張れアルル。行くぞ。うっ？ あれ、あれ・・・）

「あ、明日香。あのさ・・・」

「どうした？」

「あ、足がし、痺れちゃった。う~~~~」

「えっ、ああ。アルル正座してたもんな。大丈夫か？」

「うっ、痛くて動けないよ」

足を崩し始めたアレラーテはその痛みに顔を歪めていた。

「待ってたら治るだろ。それまでここにしよう」

「この前は三時間かった・・・」

「さ、三時間！？ 食堂閉まるな。よし持ってきてやるよ」

「えっ、で、でも——」

「あっそうか、選びたいよなメニュー。じゃあ、おぶってやるよ」

（お、おぶる？）

「あっでも足がきついからこうがいいか？」

そういつて明日香はアレラーテをお姫様抱っこした。

（こ、これって。お、お、お、お、お姫様抱っこ？）

そう考えた瞬間、アルルは顔を真っ赤にし、一瞬力が抜けたようにグタツとした。

「おい、大丈夫か？気分でも悪いのか？」

「えっ、いや大丈夫だよ。足以外は・・・アハハ・・・それで明日香？」

「うん？」

「本当にその、これで運んでくれるの？」

「ああ。アルルが良ければだけ——」

「いいよ。うん。すっごくいい」

「そ、そうか。じゃあいくぞ」

明日香はアレラーテの押しに多少困惑しつつ、部屋を出て、階段に向かった。

アレラーテはあまりの幸せに痛みなど感じなくなっていた。

「あっ、あれ？ エレベーターで行かないの？」

「だって人がいたら恥ずかしいだろ？ それに混んでて足が人に当たると痛いし、相手にも悪いもんな」

（明日香って優しい！ 外見も最高だよ。わ、私、つり合えるかな？）

「明日香って優しいんだね」

「そ、そうか？ 初めて言われたよ」

「えっ、そうなの？」

「ああ」

（て、っていうことは、わ、私にだけ優しい・・・ってことかな？）
そうこうしているうちに十階から三階まであっという間に時間が過ぎた。実際のところ慎重に動いていたので十分はかかっていたがアレラーテにとっては一分もあつただろうかといった感じである。

（わあ、もう着いちゃったよう・・・もう少し、このままでも良かったのになあ・・・）

「もう足、大丈夫か？」

「うっ、うん」

「じゃあ降ろすぞ」

「・・・うん」

「どうかした？」

「ううん。大丈夫」

明日香がアレラーテを降ろそうとすると――

「あっ、あれ、誰あの子？ うわあ、お姫様抱っこだ！」

「もしかして急ぎよ入学が決まったって子？」

「すっごいイケメンじゃん！」

「私もされた〜い！」

入学を間近にし、寮に入っている女子が明日香に群がる。

（あっ！ やっぱり集まるよね・・・明日香はかっこいいもん・・・ら、ライバル増える予感・・・）

一方で・・・

「ふん。あんな奴の何処がいいんだか」

「目の付けどころが悪いよ、うちの学園女子は」

そんな明日香に憎悪むき出しなのは十人十色という言葉が無意味化

する程、品のない男子達である。

ちなみに入学式以前でも寮に入れるのがこの学園の売りの一つだ。また、微妙な男子ばかり集まっているのは・・・七不思議ってことにしておいてほしい。

明日香は男子はいるがいないも同然の中でまさにハーレム状態である。だが問題があり――

「ちよつと、い、いいかな料理選んでも？」

「もう少し話しましょうよ！」

「私達の部屋来ない？」

「なに、しれつと誘ってんのよ」

「ご、ごめん。話はまた今度。行こうアル」

明日香はアレラーテの手を引き、オーダーへ向かった。手を急に握られたアレラーテは、

（えっ、こ、これって、わ、わ、私を選んでくれたのかな！？）

明日香にしてみればアレラーテと一緒に食べるので連れて行くのは当然だ、といった認識しかなかったがアレラーテは顔を今までで一番赤らめた。

「どうした顔赤いぞ？」

「だ、大丈夫だよ」

「そうか」

明日香はアレラーテと共にカウンターでそれぞれ好きな夕食を頼む。

明日香は豚生姜焼き定食A（Aは野菜サラダ、Bはコンソメスープのセット）、アレラーテはクリームシチューだった。

「と、ところでさ――」

「うん、なんだ？」

「明日香のT o r ってどんな能力なの？」

簡単に言えば、AでもBでもA BでもOでもないT o r（通称・R型）の血を持つと、ほんのわずかだが能力が得られる。それは人によって様々で、透視や近距離への瞬間移動、またその血の濃さ（能

力の度合い）によつては一カ月無呼吸生活や数時間の時間スキップ、他人の考えていることがわかるなどといったものも確認されている。「俺の？ うーん。実際の所よくわからないんだ。血はかなり濃いらしいんだけど能力をいまだに見いだせてないんだよな。アルルは？」

「わ、私？ 私は一日数回数秒だけだけど人の心が読めるんだ」

「そ、それはすごいな！ 短くてもかなり興味深い」

「ほ、本当？」

「うん。アルルって結構強いんじゃない？」

「そんなこと・・・ないよ」

「心が読めるのか」でも読まれる方にとってはちよつとばかり困るな」

「やつ、やつぱり、そうかな？ そうだね・・・」

「気にするなよ。いつか有効活用できる時が来るさ」

「うつ、うん！」

（やつぱり明日香は優しいな。わ、私もがんばんなきゃ！）

二人の食事風景を周りの女子（男子は女子から邪魔扱いされ、ふくれっ面で部屋へ帰って行つた）が凝視していた。しかし、いくら気になつても中に入つていたり、ちよつかいを出さないところが彼女たちの良いところなのか。

二人はそれから食事を終え、早めに就寝した。アレラーテは少し名残惜しかったが、これから毎日同じ部屋なのだから、と自分に言い聞かせ床に就いた。

ちなみにその翌日は入学式である。

？

入学式当日の朝。

俺はいつも以上に早く起きていた。もつてのほか緊張している。

（この学校、一体どんな授業するんだろう？）

もともと誘われても入るうなんて考えていなかったので説明書の類はまったく手つかずだ。

いろいろと疑問もある。第一に男子の数が少なすぎる。これじゃあただでさえ友達を作るのが苦手な俺には友達ができない。どうしたものか。

「うつ、うつ〜」

「おっ、アルルおはよう」

「ひゃあ、よ、よ、よはよう」

「よはよう、って。ところで今日何時に出る？」

「えっ、えつと〜 七時半にご飯食べようかな」

「そっか。じゃあ一緒に行こうか」

「ひえ・・・うん！」

さつきからアルルはそわそわしている。やっぱり男と同室は嫌だな。すいません。

「じゃあ、俺そとに出とくから」

「えっ、何で？」

「いや、着替えるだろ？」

「あっ・・・そうだね。うん。じゃあ、お願い」

「おう」

俺は廊下に出た。この学園の廊下はホテルのように空調設備があり最悪の場合、廊下でも寝れる。TNDホテルにしても誰も疑うまい。おっ、しかも新聞まで来るのか！ これは暇なんかできないな。

新聞を読みふけり、時間を忘れていると、よっかかっていたドアがおもいつきり開いた。

ゴスッ

朝っぱらから鈍い音が廊下中に響いた。

「うあっ、ご、ご、ごめん！」

「いや・・・大丈夫。うん。じゃあ行こうか？」

「うん！」

昨日に引き続き笑顔いつぱいのアルル。少し赤くなっているのはまだ気にしているのかな？

それから俺達は食堂で軽い食事をすまし、部屋へ戻ったあと、クラス発表を見るため掲示板へ向かった。

「明日香は1組だよな」

「えっ、もう決まってるのか？」

「？もしかして知らないの？」

「うん。俺は1組決定？」

「当たり前だよ。男子はみんな1組なんだよ」

「かたまってるのか。っていつても俺入れて十一人なんだよな」

「そうだね。わ、私もその……1組がいいな」

「なんで？」

「なんでって、それはその――」

変なやつだな。どうせなら男がいない方がいいだろうに。それともあの十人の中に好きな人でもいるのかな？

アルルは頬を赤く染めている。

「1組に好きな人でもいるのか？」

「えっ、いやや、その、そんなこと……」

「いや、言いたくないならいいんだ。無理には聞かない」

「えっ……そう」

あれっ、なんか悲しい表情になったな。なんでだ？

？

（うう） もう少し理由聞いてくれれば、それにのって、こ、告白できたのに……）

昨日出会って今日告白とは気が早いようだが特急アレラーテ号は今夜光より速い。

二人は大きな電子掲示板へと着いた。もうすでに多くの学生（ほぼ女子なのは言うまでもない）が集まっていた。

「アルル、1組だいいいな！」

「えっ、うん！」

「えっ~~~~と、あっ、アルル残念だったな。お前2組だ」

「うっ…….…….そう」

「まっ、そう落ち込むなよ。なっ？」

「うん——」

すると電子掲示板を見ていた生徒が騒ぎ出した。

「えっっっっ、なんで~~~~~~~~?」

「嘘! こんなことがあるんだね」

「あゝあ。私も2組が良かったな」

女子は2組の掲示板を凝視して騒いでいる。

「なあアルル。どうも2組の方が人気らしいぞ」

「うん。なんかそうみたいだね」

(なんで、みんなあんなにザワザワしてるんだろっ?)

その疑問はあっさりと解けた。

「えっ、俺2組になってる——」

「あ、明日香が2組? なんで!？」

「しかも男子俺だけ…….かよ」

(こ、これは神様がくれた今世紀最大のプレゼントだ! でも明日香、悲しそう…….か、神様。ずうずうしいですが明日香にも何かプレゼントをお願いします)

彼女以外で、と付け加えたうえで俯く明日香をアレラーテは2組へと誘った。

教室では既に担任の先生と思われる人(女性 アップテール 割とラフな服装)が笑顔で入ってくる生徒を一人一人眺めていた。

「みなさん全員揃いましたか? ロングホームルームではLHRを始めます。まず、私は大澤 由美といいます。このクラスの担任で、この学校で一年生教員唯一のトルネード専門教師です。よろしくね、みんな！」

「宜しく願います!」

全員が声を合わせて返事をした。

「じゃあ、自己紹介してもらおうかな？　あと、趣味や将来の夢もね」

当然だが、ここは小学校ではない・・・はずである。

「じゃあ、出席番号一番の人からどうぞ！」

「一番、相川　翔子です。趣味はギターで将来はギタリスト兼最高のトルネード（トルネードを扱う者）です。一年間宜しく願います」

「二番——」

ちなみに明日香は急遽入学が決まったので出席番号は最後だ。

？

（名前くらいは覚えなきゃだろ。うん）

一応、探偵志望なのだから人の名前は瞬時に覚える必要がある。しかし、いつも俺が自己紹介などの時にしてしまうのが珍しい名前の人探した。特にこの学園は世界中から生徒が集まっているから名前は十人十色。多種多様！　面白くて仕方ない。

「四番、江戸川　丹花。趣味はトルネードによる空中浮遊。将来は姉のようにトルネード選手権で優勝したいと思っている。以上です」

（江戸川さん・・・えっ、江戸川・・・丹花？　せ、選手権優勝？　姉・・・）

ま、まさか。江戸川桜花さんの妹？　俺はその丹花という女子の顔を見た。間違いない。桜花さんの面影がある。妹の方が少しキリッとしている。髪型は桜花さんと同じロングヘア。

俺はそれからどのくらい考え込んでいたのか。いつの間にか俺の番が回ってきた。

「——村雨　明日香です。趣味は読書。将来の夢は探偵です」

俺が自己紹介すると生徒全員が歓声を上げた。

「読書だって！」

「一緒に読もうよ、明日香君！」

「探偵だつてさ。かつこいいい！」

「将来、相談しちゃう！」

俺はそんな声に耳を傾けず、桜花さんの妹——丹花——を見つめていた。あつちもこちらを見つめている。その瞳が何を訴えているのかまったく分からない。恨んでいるのかもしれない俺を。そして、よりによって同じクラスになってしまった運命を。

その黒い瞳は俺が席に着くまでずっと向けられていた。確かに何かを伝えようとしている。そんな風に見えた。この場合、俺はどうすべきなのか。話しかけるのか。それともあちらから来るのを待つべきか。

一時間目のLHRが終わり十分間の休み時間に入る。

どうする俺？ 行くか。いや話したくないかもしれないしな。あああああ、くそつ。

「あ、明日香」

「えっ……？ えええええ！」

後ろから話しかけてきたのはなんと丹花だった。

「あつ……ああ。丹花さん……だよな」

「さんはいらん」

「そ、そうか。なつ、なんだ………？」

「えっ？ ああ。その……なんだ。今日の放課後、一緒にだな・

・

「一緒に？」

「ああ。一緒に帰らないか、寮に」

「えっ——」

俺は一瞬なにも分からなくなった。どういうことなんだ？ 放課後に仇でもとるつもりか？

俺は唾を飲み込み、

「ああ。いいけど」

「そ、そうか・・・わ、忘れるなよ！」

「えっ、ああ。わかつてる。」

忘れるわけあるか。今日は一日中このことで悩まされるんだろうな。思い切って聴いてみるか。

「でも、なんで一緒に帰ろうって？」

「い、い、い、いや、その、ななななんでもない。特に理由は・・
・ああ。ないぞ！」

しどろもどろだな。ウソをつけないタイプなのか？ やはり何か隠してるな。

？

自己紹介の時、丹花は頭の中で――

あつ、あつ、明日香と同じクラス！ これはまたとないチャンス。そういえば。ちょっと昔に壁が出来るような事件があつて姉が亡くなったことを明日香がすごく気にしているって聞いた。きっと私とも話しぶらいと思っているのだろう。でも、私が気にしていないと言えば壁は消えるとまでいかなかったも薄くはなる筈だ。だんに私は気にしていない。そうだ。事情は聞いた。未確認飛行物体にやられたと。その時、明日香は戦ってくれた。明日香が自分のせいだと考えていることも知っている。確かに最初は姉の死を受け入れられなかった。しかし今は違う。立ち直った。だいたい私は初めて明日香に会ったときから・・だったわけで全然恨んでなんかいなかった。だから私が笑って明日香に接すれば、二人で壁を乗り越えて、それから―― うん。これは良い流れではないか？ 同じ苦痛を味わった者同士の絆は深い。そして強い！ 最終的には二人は・・みたいな感じにも持っていきやすい。よし。ここは私が率先して話しかけよう！

明日香はこのとき一人葛藤していたが、そんなこと知る由もない丹花は唯、妄想に駆られていた。まさか明日香も自分がこんな風に

思われているとは夢にも思わないだろう。しかし丹花にしても、まさか明日香がそこまで警戒しているとは思っていなかった。誘いにも乗ってくれて完璧だと思っていたが、明日香は裏があると疑っている。

ちなみに丹花の部屋は905号室。明日香の一階下である。

？

二時間目。第一グラウンド。

今日は早速自らが今後三年間使うトルネード（量産機）の装着を行うらしい。しかもその授業にトルネード開発者とその助手が来るというのだから驚きだ。さすが専門の学園だな。

助手の方は実は幼馴染である。中国に住んでいたところ知り合った。そいつも日本人だ。

「みなさん。デイソン博士が到着されます。少し下がってください」その言葉を追うように飛行機の音のようなものが聞こえてくる。俺達全員は空を見上げた。小さな点が徐々に近づいてきて――

ドォーン！

初日にもかかわらず、第一グラウンドに大きな穴が開いた。俺達はその穴の中を覗くと、丸いボール（直径四メートルはある）のような物があった。

「みなさん、大丈夫ですか？」

先生が生徒たちに話しかけていると、ボールが真ん中から二つに割れ、二人の女性が出てきた。

一人はトルネード開発者『メアリー・デイソン』（超ロングヘア）。もう一人が助手の『メリール・デイソン』（ツインテール）。

この二人は共に日本人だが外国人のような名前をつけている。要はペンネームだ。

出てきたメアリー博士が目ざとく俺を見つけ、

「おっ、明日香君！ お久々！ 大きくなったね！ 大人になっ

たのかな？」

「相変わらずですね博士」

「博士はやめてよ。照れるじゃん」でも、もっと言って！」

「どっちなんですか。ところで」

「ちよつと！ 私をほつとかないでよね」

「おつ、悪いなメリー」

「メリーって言うな！」

「ああ。メリーがいいんだったな。でもメリーの方が呼びやすいんだが」

「あんたが呼びやすいかどうかは問題じゃないのよ」

「すまん、すまん。ところでまだ雇ってもらえてたのか」

「失礼ね。私は優秀なのよ！」

「あゝあ メリーちゃん、そんなこと言っているのかな」この間の実験でね・・・」

「あつ、博士！ 駄目ですよ！ あの話は・・・」

「ったく。二人とも——」

と、ここまで話した時に後ろにいた先生が、

「あのゝ もういいですか？ 授業したいんですが・・・」

「あつ、すいません。先生。」

「いえ。お知り合いなのは知ってましたから。では、みなさん。こちらにいるのがトルネードの開発者、メアリー・デイソン博士です」

「おお。生徒諸君、青春してるゝ？ あつても明日香君はとっちやだめだよ！ 明日香君はメリーの——」

「な、なに言ってるんですか博士！」

「だって取られちゃうよ」明日香君

「うつ、と、取られる訳ないでしょ。こんな男、好きになる人なんかいません！」

「ふゝん。そうなんだ」

「す、すいません。あの、授業を・・・」

「あつ、そうだねゝ。じゃあ早速やろうか。まず量産組の・・・と

言っても明日香君以外全員か。」

「えっ、俺にはないんですか？」

「うっん。明日香君には専用トルネードを使ってもらうよ」

「せ、専用トルネード？」

「うん。君はR型の血が濃いからね。異常に。だから専用で合わせないと機体が君について行けなくて大変なことになるんだよ」

「そうなんですか。お手数おかけします」

「なぐに言ってるの。私達の仲でしょ。じゃあ量産組のみんなは利き手を上に挙げて！」

するとみんな一斉に手を挙げた。やはり若干、右手が多い。

みんなが挙げたのを確認し、博士は指をパチンと鳴らした。すると――

シュツ

と機会音のような音がしたかと思うと、上空から眩い光が降り注いでいた。

その光は二、三秒皆の体を包んだ後、消えた。

それからみんなが騒ぎ出す。それもそのはずだ。気付けば挙げていた手にブレスレット（薄く、腕に密着するタイプ）が装着されている。さっきの光がその正体なのだろう。

「うっん。みんなまだ子供ね。ブレスレットに、はめられてるわね」

「いや、そういう言い方はしなと思いますよ」

「じゃあ、次は明日香君ね」

「はい。お願いします」

俺は右手を挙げる。

「あっ、明日香君は挙げなくてもいいのよ」

「えっ、なんで、ですか？」

すると博士は答えるより先に指を鳴らした。

少し前に聴いた機会音――とは少し違う。人の声のように聞こえる。外からと内からでは聞こえ方が違うのか？

光が消えたのを確認し、俺は顔を上げた。

「あれっ、俺には両手にプレスレットが・・・」

「そうよ。あとチャーカーも」

俺は首に手をやった。うん。確かにぴったりと薄いチャーカーが付いている。

「なんで俺は多いんですか？」

「専用機だから圧縮が難しくって。だから三つに分けてるのよ。本当は大きな一つのプレスレットにする予定だったんだけど。メリールがねー」

「あつ、あつ、余計なこと言わないで下さいよ！」

「なあメリール。なんで三つにしたんだ？」

「べ、別に！ と、特に理由は無いわよ！」

無いのかよ！ と言いたくなっただが、こいつは割と速く手が出るのでやめておいた。

？

（もう博士ったら、いつも一言多いんだから！）

と憤慨しているのはメリールだ。

（明日香も明日香よ。なんでこんなにかっこよくなってるのよ！）
もはや、それはやつあたりのではあったが彼女もまだ十五歳。しかも明日香に恋しているので仕方のないことか。

（ふふふ。でも両手にプレス、そしてチャーカー。これでこの学園内に明日香の事を好きになるような女子がいても、大丈夫。なぜなら、なにかプレゼントしようとしてもどこも空いていない！ やっぱ天才ね、私）

明日香の問いに答えられなかったのはこういうことだからである。専ら博士はわかっていて協力している。

（もう少してこの学園に転入できるから、そんなときになって明日香はもううー！）

そうこうしていると、

「村雨君。お手本にトルネードを展開してください」
と言ったのは大澤先生だ。

「はい。それじゃ——」

明日香は手をクロスさせる。

トルネードは待機形態（ブレスレットやチョーカーの状態）の時に瞬時に装着者をスキヤニングし、特性をインプットする。

トルネード起動時には心の中（声に出しても可）で【ログイン】
と言う。するとすぐさま戦闘モードへ移り変わり、身体に装着される。平均で身長は三メートルほどになる。

姿かたちはそれぞれ（量産機以外）で、また近、遠、中（近遠両用）距離機の三種類が製造されている。

明日香は皆に分かりやすいように口に出し、

「ログイン」

と呟いた。すると一瞬、明日香が光に包まれ、明日香の目線の先（空中ディスプレイ）に、

【START UP】と表示され、光が薄れていき、その機体の全貌があらわになった。

その機体は群青をベースに銀色のラインが印象的な割とスマートなものだ。背中に機械の翼が付いている。

「その機体はスピード重視の近距離攻撃型の機体よ」
と説明したのはメリアルだ。

「で、機体の名前は？」

トルネードにはそれぞれ固有名が設定される。

「まだ正式名は決まってないわ。あんたが決めなさい。ちなみに仮名称は——」

「仮名称は？」

第二話「昨日と明日と真実と」

第二話「昨日と明日と真実と」

「仮名称は【トゥモロー】よ」

「とう、トゥモロー・・・？」

「ふふん。感づいたわね。そうよ。【あれ】の継続機よ」

【あれ】とは、そう。明日香と桜花が以前乗っていた——攻撃を受け破壊された——機体である。

明日香はひどく動揺した。その様子を誰もが不思議がり、ざわざわしだした。そんな中、大澤先生がいち早く理由を聞く。

「あの、どうしたんですか村雨君？」

「それについては私が」

とメアリー博士が真剣な表情で話します。

そこで初めて大澤先生はじめ、生徒全員（丹花以外）があの日の実を知った。

「そして、その時、落とされた機体の名は——【イエスタデイ】」

【昨日】という名の機体。そして今、明日香が乗っているのは【明日】という名の機体。

【今日】を介し、対となる存在。

「トゥモロー・・・ですか」

「そうよ。トゥモローよ。あんたはもう立ち直ったんでしょ？ なら大丈夫よね？」

その言葉の後に、

「なんでそんな真似をする！ 傷をえぐるようなことをして、なんのつもりだ！」

丹花がメリアルに向かって叫んだ。

「なによ、あんた。あつ、江戸川丹花ね。引つこんで、これは私達の問題よ!」

「明日香が可哀想じゃないか! 立ち直ったことを試してでもいるつもりか!」

「明日香とは私が一番長い付き合いよ。一番、明日香の事はわかってるの!」

「二人ともそのへんで。明日香君を見てごらんよ」

二人は明日香の方に目をやった。明日香はというと微笑を浮かべていた。

「えっ? あ、明日香?」

「ほらね。言った通りでしょ?」

「丹花、ありがとよ!」

「えっ、あつ、ああ」

「メリール、丹花をいじめるなよ。俺の事は別にかまわんが」

「ふん。えらく丹花に優しいわね!」

私にだって、とは言えない。

「別にそんなことは無いと思うがな」

「でもやっぱり私の方が明日香を分かってるわ」

「明日香・・・平気なのか?」

「まあな。立ち直りが早いのが俺の唯一の取り柄だから」

「そうか。なら・・・いいんだが」

「にしてもメリールの心理攻撃は強烈だな」

「あんたがぎりぎり耐えられる程度にしてるのよ!」

ここまでの三人の会話を聞いて、この学園（一年生）の女子の約八割は明日香を諦めた。

キンコーン カンコーン

一時間目終了のチャイムが鳴った。三時間連続でトルネードの時間にあてられているので、余裕はあったが先生はここまでほぼ雑談で終わると思わなかった。

「つ、次はちゃんと授業をしますよ!」
「はい」

?

二時間目が始まった。

トウモロローか。少し体が重い。本当にこれ俺の専用トルネードなのか?

「明日香、今からあんたには、こいつと戦ってもらわよ!」
「戦う? どういう――」

言い終わる前にメリアルは指を鳴らす。すると、二つに割れたボールの中の一部が光り、その光が四メートル程上空へ浮遊し、徐々に形が人型になる。そして最終的に出来たその形、それは以前、桜花と明日香が乗った機体であるイエスタデイであつた。

「こ、これは・・・?」

「これは無人トルネードのイエスタデイよ。手始めにそいつを倒しなさい!」

「こいつを倒せって?」

「明日香君、悪いね」 みんなに戦い方なんかを教える為にさ。でも、気をつけてね」

「えっ?」

「じゃあ、ショータイム!」

メアリー博士の言葉に合わせ、無人イエスタデイが白い煙を出し、空高く飛び上がった。

「はあ、仕方ない。」

俺はセスナ機のように十メートル幅に行ったり来たりし、ある程度高度を取ると思いつきりスピードを上げた。すると備え付けられているスピーカーから、

「明日香君、やっぱり優しいね。みんなに機体が生む風を浴びせなようにしたんでしょ? 君らしいね」

「いや、まあ、あの風はきついですから」

「照れてるね」

「もう、からかわないでください」

「じゃあ始めるよ!」

「あつ、はい!」

「では、始め!」

博士のその言葉にイエスタデイは反応し、直立不動の状態から手足を軽く広げ、右手に銃を、左手に盾を出現させ、背中から青白い光を出しながら迫ってくる。

（行くぞ、トウモロー!）

トルネードは頭で考えた行動を電波に変え受信（しかし、頭には装着物はない）することで動く。反射運動程の機動力がある上、機体及び露出部（頭だけの場合が多い）はバリアで守られており、攻撃による致命的なダメージは限りなく免れる。トルネードが空を飛べるのはこのバリアの技術が関係しており、一種の無重力のような状態になっている。

?

（俺は勝つ!）

俺は銃弾を避けながら機体を大きく上下させ、敵をかく乱させる。

「博士、トウモローの武器は?」

「真剣【月光】よ」

そう言うのと目の前に剣の画像が現れる。

（【月光】よし、来い。月光!）

そう心の中で叫ぶと、手元に光を放ちながら剣が形成される。その剣で銃弾を弾きつつ、敵に迫る。しかし、ここで俺は違和感を覚えた。

（こいつ、動きづらい。機体が俺についてきてない!）

イエスタデイの攻撃が上手くかわせない。ダメージは右上のパーセンテージで分かる。最初は【100・00%】と表示されており、徐々に下がっていく。現在【94・56%】と表示されていた。

本当にこれ俺のトルネードか？ そう思った瞬間、目の前に字が浮かび上がった。

【I want a name】

（なんだ、これ？ 名前が欲しい？）

【You must give me a name】

【With you to become one】

【Now my name is said!】

このタイミングで名前の要求か。それじゃあ――

俺は目の前に現れたアルファベット二十六字の空中投影パネルに手をやり、名前を打ち込んだ。

その瞬間、俺達はイエスタデイのラストウェポン（必殺武器のよ
うなもの）である、バズーカからの小型ロケットの直撃を受けた――

？

「あつ、明日香！」

「村雨君は大丈夫でしょうか？」

メリール、先生の順で明日香の無事を博士に問うた。生徒たちは固まっ
ていて言葉も出ない。

空にはまだ黒い煙が浮かんでいる。

「いや、明日香君、ナイスタイミングだよ！」

「えっ？」

その場にいた人たち全ての視線が博士に注がれる。すると先生のスピー
カーから、

「本当ですね。でも今度からは最初にこういうのは設定させとい
て
ください」

紛れもなく明日香の声だ。

「いや」 ごめんね。忘れてたよ！」

「たく」 明日香！ 心配かけて！」

メリールの言葉の後、皆が空を見上げた。

そこにはもう黒煙はなく、さっきまでよりはるかに美しく光の加減で紫色にも見える青さを放ち、また背中からメタリックブルーの翼が展開されている機体が浮いている。

【Save mode release】（セーブモード解除）

【Initialization update】（初期設定更新）

【Name registration completed】（名前登録完了）

と、次々に英語が流れる。

「で、なんて名前にしたのかな？」

「Blauer・Wind UW（ブラウアー・ヴィント ユー
ダブリュー）」です」

「【蒼い風】ね。ドイツ語で。でもUWって？」

「【Unterfahrender・Wind】ウンターファレーナール ヴィントですよ」

「面白いわね。【青い】をかけたのね。色と未熟で」

「はい」

「なによ、あんた。そんな長文を書ける余裕あったんじゃない！」

「名前だからな。あんまり変なのも嫌だろ」

イエスタデイは銃弾を放つ。

「もう、当たらない！」

本当の専用トルネードとなったブラウアー・ヴィントはトゥモロー時のスピードをはるかにこえていた。もはや銃弾はかすりもしない。「こいつのラストウェポンは？」

「精神統一すれば分かるよ」

「そんな暇は・・・分かりました」

明日香はイエスタデイから十分に距離を取り、【月光】を両手で構え、目を閉じる。

「頼む。俺に力をくれ。奴を倒すために。【昨日】を越えるために――」

その言葉を聴いたかのように、【月光】が光輝きだした。

「はあああああ！」

明日香の叫びに呼応し、【月光】は元ある長さよりも長く光を出現させる。

イエスタデイの銃口がこちらを向き、下の方に【LOCKED】と赤い字で警告してくる。

「今の俺達には関係ねえ！」

明日香は真正面からイエスタデイに向かっていく。目の前に容赦なく弾丸が襲ってくるが数ミリ単位で避け、

「くらえ！」

スウィン——と気持ちがいい音が学園内にこだまする。

生徒の眼は皆、交差した明日香とイエスタデイの方を向いている。カッン——その音と同時にイエスタデイは斜めに体が真っ二つに割れ、大爆発を起こした。

？

「ふう、やったか」

俺はゆっくりと皆の待つグラウンドへ降りてきた。

「もう、あんたは！心配したじゃない！」

「いやゝ さすが明日香君。もうほぼ完璧に【ブラウアー・ヴィント】を乗りこなしてるね」

「村雨君大丈夫ですか？」

「はい。大丈夫です。こ、これでみんなに分かってもらえたのかな？」

俺が他の生徒の方に目をやると、どよ〜ん、とした空気が流れていた。

「あっ・・・れ？」

「そりゃあ、あんなん見せられたらこうなるよね」

「博士が言っただけじゃないですか！」

「あはは。でも、十分トルネードのすごさは分かってもらえたよ！」

「はあ。あつ、そういえば、この機体にはまだ何かあるでしょう？」

「ほほう。良く分かったね。そうだよ！ あるんだよ、もう一つ！」

「それはなんですか？」

「その前にみんなの授業さ！」

「あつ、はい」

「それではみなさん。自分のトルネードを展開させてください」と、言っただけは先生だ。

生徒達はそれぞれに「ログイン」と言い、量産型トルネードを展開した。

その機体は黒を基調とし、白いラインが入っていてもつてのほかにお洒落な出来である。

「じゃあ、明日香君。説明お願いね」

「博士がしてくださいよ。」

「名付け親は明日香君でしょ？」

「どういふことですか？」

と先生。

「明日香君は私の昔からの知り合いで、試作三号機からほぼ全てのトルネードに名前を付けてもらってるのよ。そうだ先生。ここで少し歴史の勉強いいかな？」

「えつ、あつ、はい」

「え」とね。トルネードは私が作ったのは知ってるわよね。でも当時お金がなくてね。資金提供をアメリカから受けてたわけ。そこで試作一号機は【はやぶさ】、二号機は【Adventure^{アドベンチャー}】って

付けた。でも、すつごくありきたりだから、そのあとに作った機体の名前を知り合いの明日香君にお願いしたの。最初はただの興味本意だったんだけどね、そしたら、そしたらもつてのほかネーミング

センスがよくてね。びっくりしちゃった！」

「過去の話はいいでしょう博士？」

「ううん。大事なことだよ、歴史は！　ちなみにアメリカには試作二号機と試作七号機の権利しかないけど。それでね、三号機以降の機体は明日香君が付けてるんだけど、みんなその名前知りたくない？」

「知りた〜い！」

ほぼ全員の生徒が高らかに叫ぶ。男子の低い声は押し消されたのか、いやたぶん声を発してないんだろな。

「試作第三号及び近距離戦闘用第一号【トウラウム】は【夢】

試作第四号及び遠距離戦闘用第一号【ホフヌング】は【希望】

試作第五号及び近距離戦闘用第二号【リーベ】は【愛】

試作第六号及び遠距離戦闘用第二号【ゲレヒティヒカイトウ】は【正義】よ」

「もう、恥ずかしいじゃないですか！」

「いいじゃない、かつこいいよ、名前！」

「全部ドイツ語なんですか？」

「はい」

「えっと、どうして村雨君はドイツ語で名前を付けるんですか？」

「ううん。好きだからですかね」

「ああ」

先生はきょとんとした。でもそれしか理由ないんだよな・・・。

「じゃあ、明日香君この量産型トルネード【イエーダー・ターク】の説明をお願いね」

「はあああ。はい。えっとこの機体【イエーダー・ターク】は中距離・・・えっと近遠両用機で、約五秒で片手剣から銃またはその逆への変換が可能で、スピードは量産型では最速、質力も最大で質量は最小と割と使いやすい機体になっています。また、圧縮率も良く腕のプレスレット程の圧縮なら簡単に行えます。ちなみに試作機第九号及び中距離戦闘用第二号です。なにか質問ありますか？」

「はい、はい！」

「えっと、エドモンドさん・・・だよね？」

「そうだよ！ えっと、その機体もドイツ語だよね？」

「そ、そこ？ うん。そうだよ」

「なんて意味？」

「【日々】って意味だよ」

「ありがとう！」

ブロンドの髪が大きく上下した。

「他にある？」

「・・・・・・・・」

名前の意味だけだよ！

「ちなみに、現在のデータ上、装着者との【友情度】は百パーセント中、七十四パーセントが最大よ」

【友情度】とは装着者とトルネードの相性のようなものだ。高い程機動力が上がる。

それからみんなそれぞれに剣を振ったり、銃を的目掛けて撃ったりとトルネードを好きに動かした。

「ところで、ブラウアー・ヴィントのもう一つの力ってなんなんですか？」

「ふふふ。それはね、WFシステムだよ！」

「WFシステム？」

「そう！ 明日香君の為にドイツ語仕様なんだよ。【Wei？e・Fl？gel】（ヴァイセ・フリューゲル）の略さ！」

「【白い翼】ですか？」

「そう。まあ見た目が白い翼ってことなんだけどね」

「どんな機能なんです？」

「明日香君、はっきり言って今のブラウアー・ヴィントのスピードじゃあ物足りないでしょ？」

「確かに。【雷音^{らいおん}】に比べたら遅いくらいですね」

【雷音】はスピードのみに重点を置いた試作第八号機。実戦目的はなく、トルネードが出せるスピードの限界を目指し開発された。俺は【イエスタデイ】に乗る以前にその機体のテストパイロットに選ばれた。雷音は音速での飛行を五分間したのちに徐々に光速に近づく設定になっている。こいつに乗った感想を一言で言えば、
「世界の全てが一瞬にして見える」
といったところか。

俺は雷音に乗り、光速に達した。しかし、事故が発生した。俺は止まれなくなった。完全なる設計ミスだった。デイソン博士の指示に従わなかった一人の科学者がいたのだ。その男は姿をくらました。俺は三日間くらいを空の上で過ごした。光速で。博士達も解決策を考えていた。しかし止める方法は見つからない。その男がどこをどう改造したのか分からなかったからだ。データ上では雷音は設計図通り。ミスが発覚したのは俺が空中ディスプレイで発見したからだ。でも俺にはどうしようもない。ただ、助けを待つほか無かった。ちなみに暇だったから【口笛】って歌を作詞作曲を・・・という話はまた別の機会にしておこう。

その時、俺は夢を見た。

白い霧の中——俺は唯一人で歩いている。

「おーい」

後ろから声が聞こえる。俺の後ろには顔は見えないが声と背格好から少年だとわかる人が立っている。

「誰だ？」

「まだ君は俺を知らない」

「じゃあ、なぜ君は俺を知っている？」

「俺は君の運命そのものだから・・・かな」

「ここはどこなんだ？」

「【雷音】の中央処理装置の中ってとこかな」

「なぜ俺はここにいる？」

「そんなこと俺にも分からないね。なにせ俺がなぜここにいるのかもいまいち分からないからね」

「そうか」

「出たい？」

「・・・そうだな。ずっとここにいるわけにもいかないしな」

「じゃあ出ようか」

「お前、俺を出せるのか？」

「うん。じゃあまたいつか。未来で会おうね」

その少年は手を軽く挙げた。

急に無重力になったように俺は宙に浮き、意識が遠のいていった。俺が目覚めた時、雷音はどこかの森に着陸していた。

どうやって着陸したのか俺には分からなかった。

博士達も、急に雷音の反応が消えたと思ったらこの森に着陸していたという。

結局、なにもかもが分からずじまいで、【雷音】は改造されたのち、【雷鳴】^{らいめい}や【雷叫】^{らいけう}へと進化を遂げた。

「でね、その雷音のブーストユニットを小型化及び分子化してね、ブラウアー・ヴィントに搭載したんだ！」

「ってことは、ブラウアー・ヴィントもあのスピードを？」

「いや、あれほど速くはならないよ。さすが戦闘においてあのスピードは危険だからね」

「そうですか」

「でも、十分速いよ！ 他機と比べると雲泥の差だね！」

「それでなんで【ヴァイセ・フリーユゲル】なんですか？」

「そのモードに切り替えると、翼が今よりもっと展開してね、白く輝くんだよ！ かつこいいよ！」

「WFモードへの転換の仕方は？」

「それは自分で見つけてね」

「えええ？」

「ふふふ。それが君の義務さ！」

いやいや。それって本当に素人にも分かる範囲のことかな？

「生徒諸君聴いて〜〜〜」

個々に練習していた生徒達はみな博士の方を見る。

「来週、早速だけどね。【トルネード・トーナメント】をやるんだ！もちろん景品が付くよ！」

「景品！？なんだろう、なんだろう！」

みな、景品に釣られている。トーナメントだよ？みんな！

「景品はなんと〜優勝者にのみ専用トルネードを進呈するよ〜」

「きゃーー」

学園中に女子（男子も今回は叫んだかもしれないが女子の声にかき消されていた）の聲が響いた。

「いいんですか？博士？」

と言ったのは喋れなくて、うずうずしていたメリールだ。

「うん。そのくらいしないと本気出さないでしょ？あつ、あと生徒諸君！優勝者が決定した後にやる予定の【明日香君とのトルネ

ード勝負】で明日香君に勝ったら明日香君になんでも言うこと聞いてもらえるよ！」

「きゃーー」

つてまた女子（さすがに今度は男子は叫んでないかな）の聲が響く。・・・って何勝手に決めてんだ博士！

「博士・・それはさすがに・・」

「もう言っちゃったから！」

いやいや、なにそれ？拒否権無しなの？勘弁してよ。

「は、博士！その・・私も出ていいですか？」

そう言ったのはメリールだ。

「量産機でならいいよん」

「あつ、ありがとうございます！」

「お前、出るのか？」

「ふん。そうよ！　そして勝って、あんたにも勝って、言うこと聞いてもらうわよ！」

怪談より恐ろしい話した。なんとしてもこいつには勝たなければ！

「お前は専用機無いのか？」

「あるに決まってるんじゃない！」

「見せてくれよ！」

「えっ・・・ええ？」

「なんでそんなに驚くんだ？」

「いや、べ、別に！」

「じゃあ見せてくれ」

「う、うん」

メリールは自分が付けているネックレスに軽く触れた。それが待機形態なのか。

眩い光とともに、真紅のトルネードが現れた。ピンクのラインが所々にあり、可愛い感じた。

「可愛い機体だな。名前は？」

「な、名前！？」

「ああ。ないのか？」

「あるわよ・・・」

なんで赤くなってるんだ？

「ゆ、【YOUR・LOVER】（ユア・ラヴァー）よ」

「【あなたの恋人】か。良い名前だな！」

メリールは顔を赤くしている。そんなに恥ずかしい名前か？

「に、鈍い奴・・・」

「うっ、なんか言った？」

「なにも！」

なんでだ？　不機嫌になっただな・・・。

？

（なんなのこいつ！ からかってんの？ 鈍いだけ？）

【YOUR LOVER】これはメリールが明日香を意識して、自分で付けた名前だ。

以前、中国にいたときにもメリールは明日香にかなりアプローチしていたが空振りに終わっている。明日香が鈍いのか、メリールのやり方が遠まわしすぎるのかはわからないがメリールにしてみれば毎回一世一代の・・・だったので、まったく気付かない明日香に憤慨していた。

「その機体はどんな性質があるんだ？」

「これは、あんたのと、対になる存在よ」

「ほう」

「まあ、詳しく言うならば遠距離型で球形のバリアで自分を包み込んで守るのが特徴ね」

「バリア？ なんかすごいな！」

「でしょ、でしょ！ すごいよね〜」

と会話に博士が割り込む。

「トルネードの新たな時代が来たんだよ！ このバリアは元々トルネードが装着者を守るためにあるバリアを増幅させたものだよ！

し・か・も、それに敵が触れるとその敵にダメージを与えられるんだよ！」

「驚異的なシステムですね。あまり戦いたくないです」

「何、言ってるの！ 私はあんたと戦って、そして私が勝つのよ！」

「言い忘れてたけど、もしメリールが最終戦に残ったら専用トルネードで戦うから」

「えっ！？ ってことは、俺はユア・ラヴァーと戦うんですか？」

「そういうことだね！」

「まじですか・・・」

「とにかく、負けないからね！」

「俺だって、そう簡単には負けないからな！」

「いつまでその強がり可言えるかしらね！」

と、言いつつもメリールは迷っていた。

私が勝ったとしたら、男としては女に負けるといふのはきつと屈辱。つてことは多少、私達の間に壁が出来るんじゃない？

私が負けたとしたら【明日香になんでも言うことをきかせられる】つていうシステムで私と付き合うつていう条件を出せない。

壁がある二人が付きあつても楽しめないだろうし……。

（うん。壁なんて、ふ、二人のあつ、愛でなんとかしてみせる！）
なにぶん勝手な考えだが恋する十代女子はこつこつものなんだろう。
（見てなさいよ、明日香！ 私が勝つて、私だけの明日香になつて
もらうんだからね！）

「どつしたメリール？ 顔赤いぞ？」

「な、な、なんでもないわよ！」

第二・五話「届け、少女達の想い」

第二・五話「届け、少女達の想い」

いつの間にか三時間のトルネード演習も終わり、食事の為に寮へとみな向かっていく。

（あゝあ、明日香とメリールさん仲いいな……。幼馴染って聞いたけど……。かなり不利だね）

（明日香にあんな幼馴染がいるとは、な……。しかもメリールとかいうの、悔しいが可愛かったな。私よりはかなり可愛かった）

（丹花めゝ　もしかして明日香が好きなの？　だとしたらかなり強敵だね。なにしろあの黒髪がね。まあ顔もだけどさ）

それぞれ思ってもみないライバルの出現に戸惑いつつ、作戦を考えていた。

（よ、よし。今日は明日香を食事にも誘おう。うん。先手必勝だ！）

「あ、明日香！」

「うつ？　ああ。なんだ、丹花？」

「今日一緒に、その、食事しないか？」

「えっ、うん。いいぞ」

「そ、そうか。良かった。じゃあ行こう！」

「おう。」

（よし！　こういうのを重ねていつてメリールに追いつくぞ！）

（ちっ、先に行かれたゝ　しかも私は博士と戻らなきゃだし……。大丈夫、あと数日で私もこの学園に来れるんだから！）

（あっ、先に行かれちゃった……。で、でも私は明日香と同室だし、

「ちゃ、チャンスはあるよね？ うん」

「あつ、そのブロンド君！」

「ひゃえ？ わ、私？」

メリールに話しかけたのはアレラーテだった。

「あのさ、明日香と丹花って・・・っ、付き合ってるの？」

「えっ・・・たっ、たぶん、付き合っていないと思いますけど・・・」

「そう！ 良かったわ！ それ本当よね？」

「えっ、今日、聞いてみます」

「う？ あんた、そんなに明日香と仲いいの？」

「えっ！？」

アレラーテはしまったあと心から思った。下手したらこの状態で敵対されてしまう。それはかなりまずい。

「いや、仲がいいっていうか・・・そのっ、えっと——」

「なんなのよ！ はつきり言いなさいよ！」

メリールの怒号に半ば脅え、人一倍押しや緊張に弱いアレラーテは「もうダメ！」と心で叫ぶと、

「わっ私達、寮で同室なんです！」

「ど、ど、同室！？」

「・・・はい」

「あつ、あんた。あんた明日香のこと・・・好きなの？」

「えっ、いや、その、えっと、あの——」

「わかったわ。あんたもライバルってわけね！」

「えっ？」

「な、なにが言いたいかわかるでしょ！ で、あんたの名前は？」

「あつ、アレラーテ・オレンジユです」

「そう。私・・・負けなからね！」

「わっ、私もです！」

「それじゃあね！」

メリールは博士の所へ向かった。

アレラーテは一人立ちつくしていた。

（なんだったんだろ、今の？）

と、我に返った瞬間、最後の「私もです！」はなかったなと後悔した。

また後悔したのはアレラーテだけではなく、

（ううう。私なにやってんだろう？ さすがにやばいよね、さっきのは！）

メリールも同じく、自分の発言に後悔していた。

（私、あんなキャラじゃないのに……。明日香のせいだ！）
とことん明日香は不遇であるが、それもまた致し方ない。

？

「あ、明日香は何を食べる？」

「俺か？ そうだな、焼き魚定食にするか。丹花は？」

「わ、私は……。オムライス」

「オムライス？」

「やつ、やつぱり変か？」

「いや、そんなことはないぞ。ちょっと意外だっただけで」

「明日香には私はどう映っている？」

「どうって言われてもな」

「そ、そうだな。すまん」

「別に謝らなくても」

と、こんな風に俺と丹花は食堂へと向かう道で話をしていた。

なんとなく丹花の様子がおかしい。少し頬が赤くなっている。これは風邪か？ それとも何か心配事かなにかでもあるのか？

そんなことを考えていると、すぐに食堂に着いた。

この学園の食堂はまさに夢の世界だ。全て無料で食べ放題。メニューも豊富で食堂員の人に聞けばメニューの作り方だって教えてく

れる。こう見えて俺は料理が好きで、家では毎日、俺が作っていた。ちなみに家事は執事やメイドなみだと言われたこともある。

「すいません！ 焼き魚定食とオムライスください！」

「はいよ」

オーダーを終えると俺達は席を確保した。

「あのだな・・・」

「うん？ なんだ？」

「その、明日香は、す、好きな人はいるのか？」

「いない」

「即答だな・・・」

「まあ、人よりは速いかもな。探偵、目指してるし」

「そうか。うん？ 関係あるか・・・？」

どうしたんだ丹花？ いるって言った方が良かったのかな？ でも嘘は言えないしな。

「村雨さんと江戸川さん！」

「はい！ じゃあ俺、取ってくるから待っててくれ」

「あ、ああ」

うん。どうも丹花の元気が無くなった。だいたい何で急に好きな人なんて聞いてきたんだ？

俺は焼き魚定食とオムライスを席に運んだ。

「じゃあ、食べるか」

「ああ・・・」

丹花のスプーンが進まない。やはり風邪でも引いてるんじゃない？ にしてもオムライスもおいしそうだ。

俺は大根おろしを魚に絡ませパクリ。うん。これはなかなかだ！

「丹花。なんか元気ないがどうかしたか？」

「いや・・・別に」

「そんなことないだろ？ 顔色悪いし」

「強いて言えば――」

「強いて言えば？」

「明日香のせいだ」

「えっ？ 俺？」

「そ、そうだ！」

急に大きな声を出したので数秒間周りの視線がこちらに集まった。つて、俺のせい？ うゝん。思い当たる節がない。何か悪いことしたか？

「それはすまん」

「別に謝らなくても」

あれ、これはデジャブ？ 逆の。

そういうと丹花はパクパクとオムライスを勢いよく食べ始めた。何だったんだ一体？

俺が食べ終わろうとしていると、

「あ、明日香。隣いいかな？」

誰かと思えばアルルか。

「おう。いいぞ」

「ありがとう！」

アルルはというとサンドイッチだ。ハムサンドとタマゴサンド、そしてカツサンドのセットのようだ。それはそれでおいしそう。

「江戸川さん、でしたよね」

「ああ」

丹花の声が不機嫌だ……。またか？ そして俺のせいかな？

「私はアレラーテ・オレンジュです。宜しく願います」

「宜しく」

そっけないな。どうも丹花の気持ちは分らない。

「二人で、なんの話してたの？」

「ああ。他愛も無い話だな。俺達、幼馴染だから昔の思い出なんかを」

「ふゝん。わ、私ももっと前から、その、明日香と知り合えたら良かったのにな」

「ぶっ！」

飲んでいた水を噴き出したのは丹花だ。おいおい大丈夫か？

「ゲホッ・・・ゲホッ」

「大丈夫か丹花？」

「あ、ああ」

俺がアルルに目をやると、こっちはこっちで顔を真っ赤にしていた。二人ともどうしたんだ？

そんな状態が生むのは和やかな雰囲気でも笑い声でもなく、気まずい沈黙だけだった。

ぐえゝ 耐えられん。静かな空間は好きだが、この状態はそうではない。

「な、なあ。どうしたんだ？ 二人とも」

「な、なんでもないよ」

「そうだ。なんでもない・・・ぞ」

「えっと。俺、教室戻つとくよ。二人で仲良くな」

「えっ、行っちゃうの？」

立ち上がった俺の眼に飛び込んできたのはアルルの子犬のような瞳だ。

や、やめてくれ。その瞳は卑怯だぞ！ ここは探偵の卵なのだから乗り越えねば！

「あ、ああ。じゃあ後で・・・な！」

「うっ、うん」

「ああ」

丹花は相変わらずそっけない。もしかやアルルが嫌いなのか？ いやそんな感じは読みとれなかった。あとで様子をアルルに聞か。こいういのは女同士の方がいいだろ。

？

（うっうっうっ 強気で、強気で！ って思って話しかけたけど、

やっぱり無理だ〜)

(アレラーテか。フランス人。ブロンド。可愛い。なんでこう揃いにそろっている？ たぶんこいつも明日香が好きだよな。もうこれ以上ライバルは欲しくないものだ)

二人は沈黙の中で時間も忘れ(会話は当然ない)それぞれ考え込んでいた。

(江戸川さん、私達が同室って知ってるのかな？)

(今度は明日香に【女性の好み】を聴かねば！)

そうこうしていると遠くの方で授業の予鈴の音が聞こえる。いや実際はすぐ近くで鳴っていたのだが二人には新宿駅西口と東口からの距離に感じた。

「うっ？ あっ！ 授業だ！」

「えっ、えっ、えっ！」

「アレラーテさん走るぞ！」

「はっ、はい！」

丹花の言葉にかなり動揺しつつアレラーテは走った。

(この人、優しいな〜 明日香も優しいけど、江戸川さんは外から見ると分らないからギャップがあって・・・それもいいよね)

(こ、こいつ。つい世話をしたくなってしまっ・・・か、可愛すぎる！)

それぞれ相手を心の中で褒めつつ、ぎりぎり授業に間に合った。

「二人とも遅かったな」

「あ、明日香のせいだぞ！」

「えっ、それはすまん」

「そうだよ、明日香のせいだよ！」

「悪かった」

丹花とアレラーテはわざとらしく顔を背ける。

「明日香が置いて行くからだ。今度からはその・・・ずっと一緒にいてほしいものだな」

はっ！ とアレラーテは丹花に目をやる。そしてすぐさま明日香に目をやった。今のは誰が聞いてもかなりきわどい発言だ。

当の明日香はというと、

「そうか。でも二人とも仲良くなれたんじゃないか？」

ぽか～ん まさにそんな文字が二人の後ろに書かれているのではないか？ と思うような反応だ。

（い、今のをスルーするか！？）

（顔色一つ変わっていない・・・これって江戸川さんのことを意識してないから？ でも普通意識しなくても今のはドキツとするよね？）

「と、ところで明日は暇か？」

「俺？ 明日は土曜だよな。ああ。暇だけど」

「じゃ、じゃあ何処か出かけないか？」

アレラーテは再び丹花に目を向け、そして明日香に目をやる。

「おう。いいぞ。何処に出かける？」

次は違う意味での ぽか～ん だ。あつさりすぎる。

明日香としては何も考えておらず（いや内面では多少警戒している）、普通に遊ぶつもりなのだが、丹花にとって今の誘いは五千メートル程のハードルを飛び越えたに等しかっただけに拍子抜けし倒れそうになった。

「お、おい。大丈夫か丹花？」

「あ、ああ。だ、大丈夫だ。では、何処に行こう？」

「そうだな～ あつ、アルルも行くか？」

「「えっ！？」」

二人の声が重なる。片方は歡喜に満ち、片方は・・・いや言うまでもない。

「い、いいの？ 一緒に行つて」

「ああ。人数は多い方が楽しいだろ？ でも俺、あんまり男友達いないからな」

「うつん。いなくていいよ！」

「そうか。じゃあ丹花は何処行きた・・・い？」

丹花は現在、目に魔王を宿していた。と言っても過言ではないほどその黒い瞳が明日香を睨んでいた。

「な、なんだ？」

「なんでもない！」

「本当に私も一緒に行っているの？」

「当たり前だ。しかし三人までだからな。明日香、もう誰も誘うなよ！」

「・・・ああ」

丹花にとってこれは忌々しき事態だ。せつかくのデート（明日香には自覚なし）にまさかのライバルが加わるのだから。

（明日香め、なんで誘うんだ！ うっ？ ま、まさか明日香はアレラーテが好き・・・なのか？ だから誘ったのか？）

例のごとく明日香は同室で自分だけ遊びに行くのも、と考えてアレラーテを誘っただけであった。

？

（まさか、丹花が遊びに誘ってくるなんて・・・ますます分からなくなっただけだ）

俺は放課後に部活説明会を受けた後、寮へと帰った。

部屋には既にアルルがいた。

「おかえり。遅かったね」

「ああ。部活動の説明を受けてきた。アルルは何処に入るんだ？」
ちなみにこの学園は絶対に部活に入らなければならない。

「うーん。まだ考えてないよ」

「そうか」

「明日香は？」

「うん？ 俺か？ 俺は文芸部かSF研究会かアニメ研究会あたりかな」

「ふん」

なにやらアルルが微笑んでいる。決して俺を馬鹿にしている表情ではないな。それは確かだ。

「じゃあ私、明日香と同じ部活に入るね」

「えっ？」

「ダメ？」

「いや、ダメではないがなんとなくプレッシャーだ」

「どうして？」

「だって俺が決めるところにアルルも入るってことは俺がアルルの部活も決めるようなもんだからな。他人の人生を変えてしまいかねん」

「そんなこと気にしなくていいよ！」

眩しい笑顔と澄んだ瞳に吸い込まれそうだ。

「わ、分かった」

「うん！」

「じゃあ食堂に行くか。アルルは？」

「私も行く！」

ドンドン

誰かがドアをノックした。うつ？ 誰だ？

アルルが「はい」と言っでドアを開けた。そこに立っていたのは、

「明日香いる？ あっアレラーテ。今、明日香いる？」

ツインテール女子がアルルに俺がいるかどうかを尋ねている。あの声は何かの秘密組織の幹部でもなく、俺を殺そうとしている輩でもない。紛れもなくメリアルだ。

「あつ、いたいた。明日香、明日は暇？」

またですか？ 明日ってなんかあるの？

「いや、明日はアルルと丹花と遊びに行く予定だが。なにかあるのか？」

「えっ・・・じゃあ私も行っていいわよね？」

うん どうしたもののか。丹花には三人だけと言われている。でも誘ったわけではないからいいかな？

「ああ」

「よし。じゃあ明日何時集合？」

「十時だ」

「だったら九時半にこの部屋に来るわ！」

「ああ。そういえばお前、帰らなくていいのか？」

「うん。私ももう少ししたらここに転入するから」

「おおおお！ そうなのか。いやー また一人話せるやつが増えるのか」

「たぶん私は一組だろうけどね・・・」

「男子がいるから嬉しいだろ？」

「あ、あんただって男子じゃない！」

頬が朱色に染まった。熱いのか？ いやこの感じは何か恥ずかしいことが・・・もしかして、

「お前、一組に好きな奴でも——ぐえ！」

言い終わる前に殴られた・・・

？

「いつてえええ！」

「ふん。そんな奴いるわけないでしょ！」

「そうか。じゃあ何で赤くなってるんだ？」

「な、な、なんでそんなこと聞くのよ！」

さっきの発言は多少遠まわしであったが、かなり恥ずかしいものだった。

「別にいいだろ。俺達の仲だしさ」

「えっ——」

メリールは一瞬で酸性のものにつけた青色リトマス紙のように赤くなった。

「そ、それって・・・」

「う？」

（も～～　こいつ無意識であんなことを！）

「まあ、明日九時半に来るんだな？　準備しとくよ」

「えっ？　・・・うん」

メリールは静かにドアを閉めた。来たときとは対極的だ。

「あれ？　メリール元気なかったな」

「明日香」

「うん？」

「今のは明日香が悪いんだよ」

「えっ？　なんで？」

アレラーテはプイとそっぽを向いた。

（もう明日香は～　っていうかみんな結構言っな・・・私ももっと大胆になるべきかな？）

アレラーテはそのままベッドに倒れ込み、考え込んでいた。

「なあ、アルル。どうした？」

「えっ？　ううん。大丈夫！」

アレラーテは満面の笑みを浮かべる。

「そ、そうか」

明日香はそういつて顔を赤らめベッドに座りこんだ。

（あれ？　明日香どうしたんだろ？）

まさか明日香が自分の笑顔でそうなっているとは夢にも思っていない。要するにお互いに鈍感なのである。

その頃メリールは、

（よ、四人でおでかけ。こんなに人数が多いの初めて・・・）

メリールは中国にいたころ明日香と知り合ったが、その当時から人と触れ合うのが下手で友達が少なかった。明日香が初めての友達と言っても過言ではなかった。同じく友達が少なかった明日香とはすぐに打ち解けた。その時にはまったく恋心などはなかったが一緒に過ごす時間に比例してそれは強くなっていった。だからこそ割と人と話せるようになっていてもライバルを生まぬ為に極力友達を作らなか

った。後悔も無い。

しかし明日香が日本に帰ってからは少し寂しかった。友達がいなかったのではない。明日香がいなかった。それだけは言える。

そんな中、メアリー博士と出会った。そこで頼みこんで雇わせてもらうことにした。というのはトルネードに関われば日本に行つて明日香に会えるかもしれないという淡い気持ちを抱いたからである。

その夢が今、叶ったのである。しかし、そこにはライバルが二人も（これからまた増えるかもしれない）。しかもかなり積極的だ。

（うん。私が一番付き合ひは長い。丹花は古いけど明日香はたぶん認識ないし、大丈夫よ、きっと！）

メリアルはメアリー博士が学園から借りている宿舎へと帰った。

もうお解りだろうが、探偵の卵である明日香は唯一、乙女心が読めない。故に不条理なまでに【鈍感】の烙印を押されてしまうのである。

？

「アルル。そろそろ寝るか？」

「うん！」

「電気消すぞ。おやすみ」

「うん。おやすみ！」

明日は遊びに行く。一人増えたが大丈夫だろ。丹花が怒らないといいな。にしても丹花は何を考えてるんだ？ まさか桜花さんの妹と入学早々遊びに行くとは。

今日は土曜日。快晴。気温二十度。実に過ごしやすい。俺にとっては。

俺は寒がり属性だからな。ちなみに一番好きな季節は梅雨だぜ。雨大好きっ子な、俺。

そんな俺は今、部屋で出かける準備をしている。もちろんアルルもいる。身だしなみを気にすること一時間つてとこだ。つくづく女子はすごいと思うね。

準備をしているアルルは・・・うん。なんというか可愛いな。同室である以上はそういう気持ちを抱いてはいけなないと分かつてはいる分かつてはいるんだけどね。

と、自分の不甲斐なさに嘆いていると、

「明日香、これどう思う？」

と、アルルが新品らしい服を着てクルツと回って見せた。

おお。春らしい感じた。正直こういうのには疎いがこれがお洒落なのは分かる。えっとワンピースって言うんだっけ、これ？

探偵の卵として恥ずかしいのだが、イマイチ一般常識で抜けている部分がある。それは先生にも一度言われたが、

「でも、それも個性だよな。うん。君はそういうキャラで行けば？」

と先生は開き直らるような形になった。俺としては豆知識の塊よりは一般常識の塊でありたいんだが・・・。

「可愛いと思うぞ」

「か、か、可愛い！？」

「ああ」

「そんな・・・そんな・・・」

えっ？ 何か言葉のチョイスを間違ったか？

「あ、ありがとう」

「う？ おお」

どうも分からん。結局俺はあつてたの？ 間違ってたの？

そうこうしていると、

トントン

「明日香~~~~ 来たわよ！ 開けなさい！」

メリールか。声がいつも以上に明るいな。そんなに出かけたかったのか。

「おう。入れ—— よ？」

思わず疑問形のように語尾が上がってしまった。

その理由。それはメリールの格好だ。

普段の私服はボーイッシュに近いものが多かったメリールだが今日は違った。黒のスラツとした上着に紺色のスカート。派手とは言えないが圧倒的なオーラを放っている。

「ど、どうしたんだ？」

「なにがよ！」

「その格好」

「失礼ね。似合っていないって言いたいの！」

「いや、断じてそのようなことはない。意外な格好だったんで少し驚いたんだ」

「で？」

「で？」

「何か言うことはないの？」

「・・・・・・ない」

バコッ！

メリールのストレートが俺にクリーンヒットした。

「なによ！ か、可愛いとか、似合ってる、とかないの！」

「言われたきや他をあたれ」

「ほんとにもう！」

これは仕方のないことだ。確かに可愛いとか似合ってるって言うのは簡単だ。こいつ以外になら。逆にこの手のは幼馴染には言いづらい。俺だけではないと思うよ、これは。

俺達は丹花を迎えに行った。迎えと言っても一階下だけだが。

俺達が丹花の部屋の戸を叩き、中へ入ると、

「な・・・・・・」

そのまま沈黙。

予想してなかったわけではないが、いざこうなると気まずい。

「えっと丹花。別に誘ったわけではないんだが、その成り行きでメ

リールも一緒に・・・な？」

「・・・ま、まあいい。ただし、行くところは明日香が決める」
「えっ？ いいのか？」

「それがいいんだ」

「そうか」

なんだ。そのくらいのことですむのか。俺は一生下僕にされるかと（それはさすがにないか）思ったら。

とにかく行く場所つと。個人的には水族館に行きたい。地球上の中で一番好きな空間だ。でもみんなアウトドアな服装だし、動物園にするか。

「動物園ってどうだ？」

「「動物園！」「」」

三人が一斉に動物園コール。あれっ？ ダメだったか？

？

「「動物園！」「」」

「だ、ダメか？」

「ううん。私はいいよ」

「い、意外な場所を言うのね」

「明日香がいいなら、そ、そこにするか」

「そうか。嫌なら別の所に——」

「「そこに行こう！」「」」

「！ そうか」

明日香の動物園発言に一同脳内では、

（ぜ、絶好のデートスポットだよ。よ、四人だけどチャンスはあるかもだし）

（ど、ど、動物園。明日香め。どうせなら二人きりの時に言えばいいのに。しかも服装褒めてくれなかったし・・・あんまり好みじゃなかったかな・・・）

（二人でなら最高だったんだが、仕方ない。隙を見て・・・いや抜け駆けはありなのか？ いやダメってことはないだろう。今のうちに各動物ごとにどう明日香にアピールするか考えておくか！）

「じゃあ行くか！」

「・・・おう！」「・・・」

TND学園から二駅程して（TND学園は一つの市のような扱いになっており、TND駅というものもある）動物園に四人はやってきた。

「この雰囲気。最高だな！」

「あんた動物園好きなの？」

「おう。水族館の次にな」

「でも、あんたって割とインドアじゃなかった？」

「ああ。だから外に出るならって条件付きだ」

「なによそれ！ まったくあんたは——」

と暇さえあれば明日香とメリールは仲好く（喧嘩口調だがどうみても付き合ってる者同士に見える）会話をしている。

丹花とアレラーテが面白くないのは言うまでも無い。

「二人でばっかり会話するな！」

「そうだよ　ずるいよ」

「えっ、ああ、すまん。ついな」

「あんた達も小さいわね」

「行くぞ、明日香！」

「おう。あつ、俺がチケット買ってくるからここで待っててくれ」

「うん。わかった」

明日香はチケット売り場へと走っていく。

「やっぱり長く一緒にいた方が有利よね」

不意にメリールが腰に手をやり話す。

「わ、私は寝食を共にしてるんです！」

「私は・・・古い」

やはり一番不利なのは丹花であろう。

幼馴染で仲の良いメリール。

同じ部屋で過ごすアレラーテ。

それに比べ、あまり話したことも無く、しかも過去に色々あった。巻き返すのはかなり難しいと言える。

「だ、大丈夫だ！ 私は負けない！」

「ふん。勝負は見えてるけどね！」

「わ、私も負けません！」

ここまであからさまにライバルに宣戦布告する女子もそういないだろう。

第三話「彦星の殺し屋・愛の殺し屋（ノック・アウト）」

第三話「彦星の殺し屋・愛の殺し屋」 ノック・アウト

動物園にて。

もう楽しいとしか言いようがないね。トラや白クマ、ラッコやバク。多種多様な動物達が俺達を迎えてくれた。他の三人も楽しそうだ。
「そろそろ昼だな。どこかで昼ご飯を食べるか」

「明日香」

丹花が俺の名前を呼ぶ。

「なんだ？」

「その・・・だな。お弁当を作ってきたのだが。食べないか？」

「えっ？ まじで！ そっか。じゃあみんなで食べようぜ」

「ああ」

「でも、一人増えたけど足りるのか？」

「十分だ。多く作ったからな」

そういつて丹花は持っていたバッグから重箱を出した。えっ？ ぐっ、六段ですか丹花さん？

丹花がそれを開く。

「・・・おお・・・」

一言で言えばすごい！ そう。一番適切だと思うよ。手が凝ってそうなものばかりだ。

「す、すごいな。なあ丹花。お前今日何時に起きた？」

「さ、三時・・・」

「・・・三時！」「」

俺でさえ妹の遠足の時に四時半に起きたのが最速だ。ちなみにその時は出汁巻き卵にタレ付きのから揚げ、煮物などを作った。当然、出汁やタレは手作りだぜ。

まあ六段も作るにはそのくらいかかるか。

「ありがとな、丹花」

「よ、喜んでくれたならいい。その、早く食べて・・・感想を頼む」
「おう」

俺は定番の卵焼きから食べた。

「うつ！　おいしい！」

「そ、そうか。それなら良かった。ドンドン食べてくれ」

「ああ。うん。この酢の物もいける！」

俺達はほとんど口もきかずに丹花の弁当を食べた。いやゝ　全部食べきるとは思わなかったが。

午後からも動物園を見て回る。おおパンダの赤ちゃんが初お披露目だと！　運がいい俺達。

そんな和やかな雰囲気を楽しんでいると――

ウーン　ウーン　ウーン

警報器の音が園内中に響き渡った。

「な、なんだこれ？」

「なにかあったのか？」

「んもう、こんな日に！」

「な、なんでしょう？」

「うつ？」

俺は無意識に空を見上げていた。現在どんな施設でも特殊バリア（トルネード搭載のものと同一）が建物を覆っている。これは2014年以降確認された異星人対策だ。地球は今日、木星の有人飛行船着陸に成功しており、そのおかげで異星人の発見もした。初めて友好関係を持ったのが地球の言語発音では【ウェボン】がもっとも近いその異星人の名前である。要するに【ウェボン星人】だ。しかし、友好的な者ばかりでないのは目に見えており、その対策としてあらゆる建造物（特に公共物）にはバリアが張られている。

そのバリアは何らかの衝撃が加わらなければ目には見えない。

俺は今、その目に見えないバリアを見つめている。厳密には空を見

上げているのだが。

その空を見上げていると、妙に揺れて見える。空が波打っているという表現が一番ピンとくるな。

「なあ、みんな。あれ何か変じゃない？」

俺は空を指差した。

「……うん？」

全員が顔を上げたまさにその時――

ギューン

そんな音がしたかと思えば、空に円形の黒い輪が発生した。俗に言う「ワームホール」だ。

「あ、あれは……」

俺は見えてしまった。そのワームホール内にいる別の物質。形は円形。忘れもしない。あれは桜花さんを殺した飛行物体！

「あ、あれは……桜花さんと戦った……」

「えっ？ 明日香、あれがそうなの？」

「ああ」

丹花はうつむいていた。

なんなんだ。なぜこんなところに？

？

その飛行船はワームホールを抜け、動物園へと突っ込んできた。

「大丈夫よ！ バリアがあるもん！」

しかし、飛行船はバリアを破り、園内へと侵入した。

「な、なんで!？」

すぐさまバリアは自己修復される。

飛行船は以前と似た赤い目で頻りに何かを探している。いや【誰か】を――

「あいつは……俺を探してるんだ」

「何言ってるの！ 速く逃げなきゃ!」

「俺は行く。こいつと」

明日香は両手のブレスレットを見つめた。

「明日香、学外での使用は禁止なんだよ！」

「分かってる」

「じゃあ、なんで？」

「もう、大切なものを奪われたくない」

「明日香、今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょうが！」

明日香は何も言わず飛行船を見つめている。

飛行船の赤い光が明日香に当たった。すると飛行船は以前とは違う動きをし、形がみるみるうちに変貌していった。その形は――

「あいつ・・・人型になってる!？」

そう、円盤型であった飛行物体は全体的に丸みを帯びているが人型になっている。首は無く頭と胴体が直接つながっている。手足は長くばねを思いつきり押して隙間を無くしたかのように黒い胴体に横にラインがある。赤かった目の様な物は顔部分にある。

明日香は何も言わずにトルネードを起動させた。両手のブレスレットと首のチョーカーが輝き、ブラウアー・ヴィントUWが姿を現す。

「明日香ダメだよ！」

「そつよ逃げるわよ！」

「・・・・・・丹花」

丹花は俯いたまま、

「なんだ・・・・・・？」

とだけ答えた。

「お前は どうする？」

「私は・・・」

丹花は僅かに肩を震わせ、

「私は戦いたい。明日香と・・・あいつを倒すために」

丹花は勢いよく顔を上げ、量産型トルネード、イエーダー・タークを起動させた。

「行くぞ、丹花」

「ああ」

明日香は月光を出現させ、元円形飛行物体に突っ込んだ。丹花はライフル銃で明日香の背後から敵を撃った。

人型円盤は素早く明日香と弾丸を避け、空高く舞い上がる。ブースターの様なものは見当たらず、なぜ飛んでいるのか分からない。異星の技術だろうか。

明日香はそれをすかさず追う。丹花もスピードは劣るものの必死に食らいつく。

「丹花、左から頼む！」

「分かった！」

丹花は左へ、明日香は右へと方向を変え、敵に左右から迫ったが避けられる。

すると敵は機械の五本指を広げた。掌の中心からビームが放たれる。丹花はそれを華麗に避けるが、明日香は月光にビームを当て相殺させている。

「明日香、なぜそんなことを？」

「下にはまだ動物達がいる！」

「あつ——」

丹花は下を見下ろす。確かにまだ動物達が地下施設内に避難出来ていない。

「明日香・・・」

「油断するな！」

「ああ。分かっている！」

二人が人型円盤と交戦していると、トルネードのセンサーに何かが入り込んできた。

「なんだ？」

「なにか聞こえる」

その音は壊れかけのラジオのように雑音混じりで何かを発している。

「ル・・・ル・・・ラ・・・」

「うん？」

「なんて言ってるんだ？」

「アル・イル・ラー アルタイ・キラー」

「き、キラー？」

「殺し屋・・・なのか？」

そしてはつきりと聞こえた。

「アルタイルキラー」

「アルタイルキラー？」

「彦星を狩るのか、彦星から来た殺し屋なのか」

明日香は妙に冷静に語る。

【アルタイルキラー】は明日香と丹花、それぞれの動きを完全に把握しているようにビームを確実に浴びせてくる。

二人が苦戦を強いられていると、明日香の横から六方のビームが飛んできた。

「なっ!？」

「ふふん。苦戦してるようね！」

ビームを撃ったのはメリールだった。

「【ユア・ラヴァー】か」

「そうよ。今のが、この機体の特色。フルバースト形態よ！」

ユア・ラヴァーは両手に銃、両肩、両腰にそれぞれ二機、合計六機の銃砲が付いており、それらを同時に放つ体制を俗に【フルバースト】形態という。

「でも、一発も当たってないぞ」

「ふん。あんたよりましよ！」

「二人とも、行くぞ！」

「二人じゃなく、三人だよ！」

明日香とメリールの横に飛んできたのはアルルだ。

「私だけ戦わないのはダメだよな」

「行くぞ、みんなで！」

「ああ」

「わかってるわよ」

「うん」

四人は四方に分かれ、アルタイルキラーに攻撃をする。アルタイルキラーは理想的な動きで攻撃を避ける。

「かすりもしないわ」

「どうすれば・・・」

するとアルタイルキラーの背中に小さな穴が開き、そこから無数の実弾が放たれた。

「くっ、この数」

明日香達はそれぞれ距離をとり追ってくる弾を撃ち落としていく。

しかし、明日香はその弾を撃ち落とした時に起きる爆撃の炎と煙に隠れつつ、アルタイルキラーとの距離をつめ、ついに目の前へと突っ込み、

「くらえー」

月光はその名の通り青白く輝きアルタイルキラーの頭に剣先が当たった。

「やったの？」

しかし、その剣先は下に向くことがなく、

「き、切れない!？」

明日香はアルタイルキラーの強力な右手で跳ね飛ばされた。そのまま急降下していく。

「くっ」

この感じは過去に同類と思われる円盤の触手から受けた打撃に似ていた。二度と味わいたくはない物理的ダメージだけでなく心理的ダメージさえ与えるこの打撃。

「俺は——負けない——過去に打ち勝つ！」

明日香は態勢を立て直し、アルタイルキラーを見上げる。

「みんな、ちよつと力を貸してくれないか？」

「もう貸してるでしょ」

「いつでも貸してあげるよ」

「愚問だぞ、明日香」

「手はあるんでしょうね？」

「ああ」

明日香は微笑を浮かべている。

「で、どうすればいいの？」

「あいつから俺を守れ！」

「「へ？」」

三人が三人同じ反応をした。

「どういう意味？」

「そのまんま、だ！」

「・・・やろうよ、みんな！」

「ああ」

「仕方ないわね！」

三人はアルタイルキラの周りを回りながら銃で、明日香に気を取らせないようにした。

その間、明日香は少し離れた所で飛びまわっている。

「そろそろだな」

明日香はそう呟くと、

「みんな、どいてくれ！」

三人はその声を聴き、すぐさまアルタイルキラから離れる。

「行くぜ！」

明日香は信じられないようなスピードでアルタイルキラへと突っ込み、

「名付けて【インスタント・ショック（一瞬の衝撃）】！」

光を帯びていない月光で明日香はアルタイルキラに切り込んだ。

当然、その剣は弾かれる——と思ったが、

ズイン！

一瞬、月光が雷のごとく輝き、ものすごい爆音とともにアルタイルキラは真つ二つに切り裂かれた。

アルタイルキラは空中で左右に胴体が分かれ地面へと落ちた。

鈍い音と共にその黒い屍は動かなくなった。

明日香達はゆっくりと降り、そしてトルネードを解除した。

「どうして切れたの？」

アレラーテが明日香に問う。

「スピードエネルギーと既存のエネルギーを全て月光に注いだんだ。そして一瞬でその力を解放した。だからスピードを上げる為に君達が戦っている間中、俺は助走していた」

「なるほどね。スピードエネルギーを変換できるのか」

「ああ」

みんなが納得した後、

「でもこいつ、なにが目的だったのかしら？」

メリールがぼそつと呟く。

「たぶん。俺だ。そんな気がする」

「その節があるの？」

「たぶん。桜花さんの時のかな」

「しかし！」

ここで沈黙が生じた。なんとも言えない空気が漂っている。

その沈黙を破ったのは、

ピ　ピ　ピ　ピ　ピ

という機会音だった。

「なにこの音？」

「この感じって・・・」

「まさか！」

四人は動かぬアルタイルキラーを見た。その赤く輝いていた目が点滅している。それはまるで、

「・・・時限爆弾!?」

四人が考えていたその音の意味は同じだった。

「くそっ！」

明日香はそういつとアルタイルキラーに向かって走り出した。

「明日香！」

その次の瞬間、明日香は光に包まれる。トルネードを発動したのだ。さっきの戦いでエネルギーゲージは「4・57%」と表示している。明日香は真つ二つになったアルタイルキラを抱え、飛び上がった。「明日香、だめだよ!」

その声は明日香に届かない。

「間に合え!」

明日香がそう叫ぶと空中パネルに文字が表示された。

【Wei?e・Fl?ge!——WFシステム使用許可——STARRTUP】

するとブラウアー・ヴィントの背中から今まで以上の大きさの翼が展開され、それが白く輝き始めた。

「こ、これは?」

その白い光の発生と共に明日香のスピードはぐんぐん速くなる。

「そうか。これが!」

明日香は瞬時に理解し、

「行つけえええ!」

明日香は月光を発動し、WFのスピードエネルギーを変換し、動物園上空のバリアを破った。

そしてバリアは再構成された。そのすぐ後、大きな爆発が起きた。

「明日香!」

「きゃあああ!」

「あ、明日香・・・」

三人はそれぞれ倒れ込んだ。

?

WFシステムは自分の機体のダメージに関係なく【ある物】を使ってスピードを加速させる能力だったのか。

【ある物】、それは——【強い想い】。そう。自分を突き動かす何か。その何かはなんでもいい。誰かの為に使う強い想いなら。

俺は今ならそう言えるね。

「明日香くっく」

「えぐっ えぐっ うくく」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

メリール、アルル、丹花。何で泣いてるんだ？

「えっ？ あ、明日香？」

「あんた・・・・・・・・」

「明日香・・・・・・・・」

みんなが振り向いた。

「おう。なんだ？」

「あゝんくたゝね」

「明日香！」

「明日香。良かった！」

「良くないわよ！ 死んだと思ったじゃない！」

「勝手に殺すな。あれっ？ 俺、見えなかった？」

「見えなかったって・・・段々加速してバリアを破ったあたりで爆発して」

「なるほどな。あの辺で雷音と同速になったのか」

「えっ、えっ、どういうこと？」

「確かブラウアー・ヴィントには雷音のブーストユニットを小型化して搭載しているんだ。スピードアップはそれのおかげだろう。しかも以前より加速するのが速い。そして減速や解除も簡単に出来た」
「ふゝん。それで速くなつて見えなくなった。そして今ここにいる」
「ああ。俺は奴を放つて引き返した。俺が中に入ってしまったからバリアが修正した。で爆発が起きた。でもお前達には俺が爆発に巻き込まれたように見えたのか？」

「そうよ！ もう・・・心配したじゃない！」

「そうだよ。心配したんだよ」

「わ、私もだ！」

「でも、あの円盤の目的ってなんだったんだ？」

「アルタイルキラーク」

「俺を狙ってたんだと思う」

「どうして？」

「以前、殺り損ねたもう一人を今度こそ殺るために」

「考えすぎではないか明日香」

「でも、あいつは確かに俺の姿をとらえた瞬間本格的に起動した。俺を探してたんだ」

沈黙が生まれた。仕方ないけれど。俺を死んだかもって思ってたやつもいるし。

俺達はザワザワしてきた動物園をそそくさと出て、

「ごめん。ごめん。元気だそうぜ。なんか奢るからさ。な？」

三人は目を押さえている。泣いていたようだ。悪かった。

「ふん。奢るのね？　じゃあ三人にあれ、奢って！」

指差したのは駅前のサーティーン・ファースト・アイスクリームの期間限定「超メガのせ六種のアイスクリーム」だった。定価千五百円。それを×3。いや俺も食べたくなってきた。×4・・・。

六千円か。仕方ない。

「分かったよ。食べるぞ〜〜〜！」

「おう！」「」

俺達はアイスクリームを食べて帰ろうとしていた。

あつ、忘れてた。

「すまん。俺、学園には戻らないから」

「えっ？」「」

「俺、今日は家に帰るから」

「なんで？」「」

「なんでって本当は金曜から帰る予定だったんだ。でも今日は遊んだからな。だから今日帰るんだ」

「『そうじゃなくて!』」

「ああ。待っている人がいるから」

「『待っている人!?!』」

「ああ」

あれっ? みんな怒ってる? なんで?

「それって・・・それって彼女!?!」

ひあや! メリールの後ろに鬼が!

「・・・同居してるの?」

無表情のアルルって・・・・・・・・怖い。

「通い妻か?」

いやいや。俺は十五だぞ?

「そんな訳あるか! 幼馴染だ!」

「あんた私以外にいたの!?!」

少ないけど、いないわけではないぞ。

「ああ」

「何人?」

「日本人」

アルルの質問の意図が分からないんだが。

「何時からの付き合いだ?」

「産まれた時から。同じ病院だからな」

「なっ・・・・・・・・」

どうして暗くなる?

「じゃあ、そういうことだから」

「お邪魔しちゃダメ?」

「夜ごはんは二人分しかないからな」

「なくていいぞ、私は」

「それはこっちが困る」

「行かせなさい!」

「無理言っな!」

三人とも、むす~~~~とした。べつに来てもいい物は無いぞ。

「じゃあ、月曜日に！」

「「「ちよつと！」」」

「特急だから止まれないんだ！」

俺は家の方向へ顔を向けた。

「行っちゃうの？」

うわっ！ アルルの声だ。攻撃力四千はあるな・・・

「そうだぞ」

「なんで行くのよ！」

この映画みたいなのなに？ しかもなんでって・・・。あつ、そう
だ。ふふふ。言ってみるか。

「何故帰るか教えてやろうか？」

「「「うん！」」」

「【ジャスミン】を見に行くんだ！」

「「「えっ？」」」

「じゃ！」

俺は走ってその場を後にした。後ろを振り返らず。ちよつと決まっ
たかな？

？

「あんた達、分かってるわよね？」

「ああ」

「うん」

三人は顔を見回した。そしてアイコンタクトをした。後は何をする
のか、それは言うまでも無い。

三人は気付かれないように明日香の後を追った。

三十分程歩くと、明日香は一軒の大きな家に入っていた。

三人は表札を見る。

【村雨】

「ここが明日香の家？」

「大きい！」

「確かに」

三階一戸建て。大豪邸だ。部屋数が二十はあるのでは？ と三人は考えていた。

そのドアに耳を当てる。傍から見ればかなり怪しい三人組である。
「ただいま」

「おかえり。遅かったね」

女性の声。同姓でもドキッとするようななにかがあった。

「ああ。ひと騒動あったんだ。ハハハ。ノックアウトされかけた」
あの、バカっ！ 三人が同時に心の中で叫ぶ。なぜか三人はその女性を明日香の奥さんと解釈し、心配かけるなよ、的なので考えを進めていた。しかし奥から聞こえてきた返答は予想外のもので、
「そんなのいつものことでしょ？ もう心配すらしなくなっちゃった。でも他人に迷惑かけちゃダメだよ！」

「ああ。わかってる。もう少しかけちゃったが」

「もう、ダメだな」

「また謝つとくよ」

「仕方ない。許してあげよう」

「ありがと」

三人の頭の上に【驚愕】の二文字が。仲が良すぎる。自分たちとはハードルと棒高跳びほどの差がある。たとえば微妙だが。

「今日は当番だよな？」

「なんの！？」

「うん。もう作ってるよ！」

「なにを！？」

「メニューは？」

料理か！

「カレーライスだよ！ 作りすぎちゃった。五人分はあるな」
五人分！？

Loading・・・Loading・・・チン

ピンポン ピンポン ピンポン

「明日香、誰か来たよ。出て。」

「おう。はい……えっ？」

「「来ちゃった」」

？

「どうして来たんだ？」

俺は一応三人を家に上げた。もう暗くなってきたし、入れないのも気の毒だ。それにしても。

「私は帰ろうって言ったんだけどね」

メリールは嘘を言っているな。

「来たくて来たわけではないぞ！」

丹花も嘘か。

「来たかった……から」

正直者はアルルだけ。でもどうしてそんなに俺の家に来たがるんだ？

「いいじゃない。カレーライス多く作っちゃったから。どうぞ召し上がれ！」

茉莉は既に五人分の皿を机に並べていた。優等生だな。色んな意味で。

「あつ、紹介まだだったな。五十嵐^{いがらし}茉莉^{まつり}だ」

「五十嵐茉莉です。いつも明日香がお世話になっております」

深々と茉莉は頭を下げた。確かにお世話になっているので否定はできない。

とうの三人はというと、

「……」

無言 無音 無味無臭……ずれたな。少なくともカレーの匂いはするし、って場違いだぞ俺。

三人からジトゝとした空気が流れている。何か話題を出そう。えゝと……

「明日香と茉莉さんはどういう関係なんですか!？」

突然叫んだのはアルルだった。って説明したよな？

すると茉莉が、

「フフフ。親友―以上かな」

適切と言えば適切だ。産まれた時から一緒に俺が中国にいた時も文通してたし（俺は携帯電話を持たない主義）、親友では収まりきれないな。

「何以下ですか!？」

以下？ なんだろうな。ここは茉莉に一任するか。

「うゝん。ご想像におまかせします」

「おつ、茉莉さんは思いつきませんでしたか？」

「明日香さんは思いついたの？」

「お察しの通りです」

「じゃあ思いついてないんだ」

「ご名答!」

普段はさん付けではありませんのであしからず。

「ゴホン」

丹花が咳払いをした。

「あつ、すまん、すまん。ついつい二人で話してしまった」

「べ、別にそういうわけでは・・・」

嘘が下手だな、丹花。

「さあ皆さん食べましょう!」

茉莉の一声で皆席に着きカレーライスを食べ始めた。少し辛口だった。

？

背は明日香と並ぶと丁度いいカップル具合。丹花の自慢の黒髪を上回る上質なセミロングの黒髪をしている。印象は出来のいいお嬢様。明日香との仲は親友以上。要するに未知数。勝てないかも・・・

。そんな不安が三人を襲っていた。

結局、明日香の家に泊まることになった三人だが、茉莉の行動や発言はやや際どい。自分達の発言に動じなかったのはこのせいか！
と思い知らされた。なんといつてもずっと傍にいる。現在九時半だが離れていたところを見ていない。

三人は作戦会議が必要だ、と言わんばかりにアイコンタクトを交わし、明日香と茉莉に気付かれないように集まり、小さな声で話し始めた。

「かなりの強敵ね。」

「あれが明日香の好みなのか？」

「幼馴染なだけじゃないの・・・？」

「あんたにはそう見える？」

「・・・うつん」

「でしょ！ だから作戦A女子会のもりで明日香の好みを聴きだす。」

三人は要領を確認し合い、

「そういえば、茉莉さんって彼氏とかいるんですか？」

メリールがそれとなく聞く。

「いいえ。いません」

「どんな人が・・・その・・・好みなんですか？」

アレラーテも応戦。

「うつん。日本人で黒髪、優しくて強くて近くにいてくれる人かな」

（（明日香のことだ〜〜））

世界中探せば何人でも出てきそうなほど曖昧な答えだったが三人にとっては明日香しか該当していなかった。

「で、では明日香はどうだ？」

エネルギーを振り絞って丹花が訪ねる。

「俺？ 俺は・・・良く分からない」

「逃げんな！」

「そうだよ、茉莉さんは答えたよ！」

「男らしくないぞ！」

「いや、そんなこと言われても。今まで好きな人とか出来たことないからな」

「明日香は確か黒髪が好きじゃなかった？」

「えっ!？」

メリール 栗色 ×

アレラーテ 金髪 ×

丹花 黒髪 ○

「あと、胸は小さい方がいいんだよね」

「お前、なに言ってたんだ！」

メリール 2位

アレラーテ 1位 ○

丹花 3位 ×

「髪型はツインテール！」

「ああも~~~~~~~~う！」

メリール ツインテール ○

アレラーテ セミショート ×に近い

丹花 ロング

三人で合体すればいいのかな？ と顔を見合わせつつ作戦Aは終了した。

次の日。

「ふあ~~~~ 眠い」

「私も」

「明日香と茉莉さんどうしたんですか？」

「顔色悪いです」

「くまも出来ているようだが・・・」

「あつ、これ毎週のことだから気にするな」

「「毎週の事？」」

「うん。私達毎週深夜映画や深夜アニメを見てるの。だから朝眠く

って」

「『『えっ！？』』」

「昨日・・・私達が寝るタイミングで部屋に入りませんでした？」

「ああ。お前達まで巻き込むのも、と思ったからな」

（巻き込めよ！）

「今日日曜だし、買い物にでも行こうかな」

「じゃあメモとるから待って」

「ああ」

三人にとって疎外感が立ち込める休日となった。

「『『ノックアウト・・・』』」

？

「あのさー　じゃ、ジャスミンって何だったの？」

月曜日。アルルからの質問。

「ああ。ジャスミンって茉莉花って書くんだよ。だから格好つけてあんなセリフを言っただけ」

「じゃ、じゃあ別に茉莉さんが・・・好きとかではないの？」

「うーん。よく分からないな」

「え~~~~~！」

「そういう発想に持って行ったことがなかったからな。考えとくよ」
「・・・・・・うん」

アルルの表情が一気に曇った。どうしたんだ、一体？　いきなり家に来たり質問攻めしたり。

昨日も結局三人は俺の家に泊まり、こうして学園に来た。

ズキッ！　後ろに妙な視線を感じる。なんだ？

俺が後ろを振り向くと、そこには仁王立ちする女子生徒が・・・って美和かよ！

「うん？　どうした美和？　なんか用事か？」

「お兄ちゃん、その人、彼女？」

「ひやえ！ い、い、いや私はその・・・」

急に聞かれアルルは恥ずかしそうに顔を赤く染めた。まあ俺は妹からのこの手の質問は慣れている。昔からしょっちゅう聞かれたからな。

「いや、友達だ」

「・・・」

あれっ、アルルの顔がまた曇った。今日は一体どうしたんだ？

「そうだよね」 お兄ちゃんは私のものだもん！

へいへい、と軽く受け流す。この行為、四ケタは経験したと思うぞ。なにせ昔から俺が女子と一緒にいると探りを入れるからな。その度に女子はアルルみたいな反応をする。で、俺が説明するとこれまたアルルと同じ反応をする。もしかしてみんな自分で説明したいのか？ そんなことはないと思うが。

「ねえ、お兄ちゃん、来週の土曜暇？」

「また土曜か」

「ま・た・？」

「あつ、いや最近【土曜】ってワードをよく耳にするからさ。アハハ」

「ふん」

うん。女子三人と遊びに行つたなんて言ったら暴れだしそうだ。

「暇だけど。何するんだ？」

「お姉ちゃんから遊園地のチケット二人分もらったの。お兄ちゃんが女の人と同じ部屋になるのを許す代わりにつて。一緒に行こう」
うん。この前のひそひそ話しはそれだったのか。だったら断れないな。

それにしても中学生の妹が高校生の兄に言うセリフなのだろうか？

昔、友達に「お前の妹って極度のブラコンだよな！」って言われたが、これがブラコンってもんなのかイマイチ分からない。言われてみればそうにも感じるが案外当事者には分からないものだ。

「お前、他に誘う人いないのか？」

「いない！」

いや、堂々と言うことではないような・・・。

「じゃあ行くか」

「うん。お弁当は私が作るから！」

「おう」

妹は満面の笑みで中等部へと走って行った。

「す、すごい子だね」

「言ってくれるなアルルさん」

「ところでさ」

「うん？」

「どうして茉莉さんは明日香の家にいるの？」

「ああ。あいつの両親が今どっちも仕事が忙しくてな。どちらも心配性で茉莉を一人にするのは言って言っさ。それで家に来たんだ。平日は姉さんが帰ってるし、休日は俺がいるから安心なんだろう」

「ふ~~~~ん」

それにしても茉莉の話ばかりだな。そんなに気になるのか？

俺達は九割茉莉の話をしながら教室へと向かった。

俺が教室へ入ろうとすると、

「あつ、村雨君。ちょっと話があるんですが」

と言ってきたのは大澤先生（担任）だ。

「はい。何ですか？」

「職員室まで来てください」

「はあ。じゃあアルル後でな」

「うん」

俺は大澤先生に連れられ職員室へと向かう。

なんの話だ？　もしかして動物園のことか？　あれが大ごとになったのか？

気温調節の行きとどいた広い職員室へと入る。

「あの、ですね」

「はい・・・」

「実は――」

？

（どうしたんだろ明日香？）

どうにも先生に連れて行かれた明日香が気になるアレラーテ。

（もしかして先生も明日香のことが！？）

そんなことまで頭をよぎる。そして一人顔を赤らめる。

「うん？ 明日香はどうした？」

そう話しかけてきたのは丹花だ。

「あつ、先生に呼ばれて職員室に」

「まさか、あの事件のことか！？」

「よく分からない」

「そうか・・・」

しばらくすると、

「おつ、丹花おはよう」

「あ、明日香。先生は何の話だったんだ？」

「ああ。別に大した話じゃなかった。もちろん事件のことではなかったぜ」

「そうか。ならいいんだ」

それから生徒全員が席に着きSHRが始まった。

放課後。明日香は第五アリーナで練習をしていた。第四アリーナで量産組が何人か練習していたがえて別の場所を選んだ。

今週の金曜日はトルネード選手権がある。それに明日香は出ないがそのあとが問題だ。負ければ何でも言うことを聞かせられる破目になっている。明日香はトルネードに慣れているのでハンデとして【50・00%】から始めるというルールまで出来た。これは意地でも勝たねば！

ということでブラウアー・ヴィントの全てを知るため明日香はこ

ここに来ていた。

しかし、ここに来ていたのは明日香だけではなく、

「明日香！」

「うん？ おうメリール。お前も練習？」

「ふん。私に練習なんて必要ないけどね！」

「言ってる、言ってる。コテンパンにやられるぞ」

「じゃあ模擬戦でもする？」

「ほう。この明日香様に戦いを挑むと？」

明日香はわざとらしくポーズをとる。

「フッフ。メリール様がおいしく調理してあげる！」

メリールは不敵な笑みを浮かべ専用トルネード、ユア・ラヴァーを呼び出した。それを見て、明日香もブラウアー・ヴィントUWを呼び出す。

青と赤の機体が並び立っている。それは壮観とも言えるだろう。

「どっからでもかかってきなさい！」

「じゃあ行くぞ！」

明日香は月光を構え、メリールに正面から飛び込む。メリールは両手にスナイパーライフルのような銃を出し、明日香に放つ。しかし、割と至近距離で放っているにも関わらず明日香には一発も当たらない。素早い身のこなしで避けている。メリールは後進しながら銃で明日香を狙うが明日香はそれ以上のスピードでこちらとの距離を縮め、その刃を向けてくる。

明日香はメリールにとって幼馴染であり、また恋する人でもある。しかし今はそれを考えている暇は無かった。むしろ恐怖を感じる。それ程に明日香の動きに無駄がなく、且つ下手すれば一瞬でやられそうである。

メリールがあつ、と思った時には既に明日香は懐に入り、月光で自分の腹部を攻撃していた。バリアや装甲があるといっても痛みは感じる。それは今まで何度も味わってきたトルネードの痛みではなかった。どこか冷たく一瞬を感じさせる痛み。それは文字通り「村

雨】のようであった。

メリールはブースターを逆噴射させ明日香と距離をとった。そしてこの機体の十八番である自分を球形のバリアに包む【GB（Global Barrier）システム】を発動する。

すると明日香の動きが止まる。

「知ってる？ 明日香！」

「何を？」

トルネードに乗っている者同士は他の人に聞かれることのない会話ができる。

「このバリアは内側からなら攻撃できるのよ！」

そう言つてメリールは銃を放つ。

明日香はそれを避けながら、

「キーワード1」

とそれだけ言つた。

明日香が【98・40%】のとき、メリールは【63・76%】となっていた。

メリールの弾丸を明日香が避けていると、一瞬メリールがGBを解いた。その瞬間、

「90」

明日香がそうメリールにも聞こえない程小さく呟くと、

「キーワード2」

と次はメリールにも聞こえるように言う。

「さつきから何よそれ！」

「当ててみな！」

明日香はスピードを上げた。

「あんたのと私のは対なんだからスピードは同じよ！」

そう叫ぶと、メリールは上昇し、上から明日香に向かって銃を放つ。やはり当たりはしない。

「80 WF発動！」

明日香が叫ぶと、【START UP】と表示され、明日香が銀色

に輝きスピードを一気に上げる。メリールが気付いた時には明日香は背後にいた。そして、

「90」

と言うと、メリールのGBが一瞬消える。その瞬間、明日香はメリールの背中に張り付いた。すぐさまGBが包むが今度は明日香と共に包んだ。

「あ、明日香!？」

「インスタント・ショック!」

バリア内で爆発が起きた――

?

「俺の勝ちだな。」

「ふ、ふん。勝たせてやったのよ!」

そういうメリールだが顔が赤い。やはり最初の言葉からして恥ずかしかったのだろう。それに俺も最後の一発はやりすぎた。装甲とバリアしかないボディにインスタント・ショックは強すぎた。そのせいでメリールのエネルギー残量が一気に00・00%になり、空中に放り出された。なんとか地面に落ちる前に俺が抱きかかえたが結構危なかったと思う。トラウマにならないことを願うね。

「にしても、あのスピードはなんなの？」

「WFか？」

「違うわよ! その前のスピードよ。私の機体と同じ筈なのに一発も弾が当たらなかった」

「要領だろ？」

「じゃあ私は要領が悪いつて言いたいなの？」

メリールが怒鳴る。やばい目がマジだ。

「いや、そういう意味ではないんだが・・・」

「じゃあ、どういう意味よ？」

うん。

「俺にもどうしてあんなに避けられたのか分かんないからな。説明のしようがない」

「ふん。自分は天才って言いたいわけね」

「いや、そうじゃなくて！」

ああ言えばこう言うが必殺技のメリール。こいつとは長い付き合いだが一度も勝ったことがない。勝てる気もしないしな。

「もう、いいわよ。そのかわり――」

この、そのかわりも必殺技だ。それで何度財布を薄くされたことか。しかもこいつは質より量なたちだから安いものを大量に買って俺の財布のライフを削る。荷物持ちが俺であることは言うまでも無いか。

「そのかわり、今度付き合いなさい」

「今度は何処に行くんだ？」

「べ、別に買い物に行くとは言ってないわよ」

「ほう。じゃあ遊園地とかか？」

「その、後で考えるわ！」

「そうか」

珍しいな。まあ、その手のところならゼロが五つ並ぶような買い物はないだろう・・・お土産売り場のものの全部とか言わない限り。

「ふ、ふ、二人きりで行くんだからね」

「うん？ ああ。いいぞ」

メリールの顔が赤い。さっきよりも。まだ恥ずかしいのか？ いやその赤みではないな。じゃあ何だ？

俺達はそのままアリーナを出て、空がオレンジ色から群青へと変わる姿を見つつ歩いてた。

「今日は寮に来るのか？」

「うん。帰らなきゃ」

「そうか」

「でも、もうすぐ入れるし。嬉しいでしょう？」

「お前の方が嬉しいんじゃないのか？」

メリールが俯き、

「ば、バカ！ そんなわけないでしょうが！」

「本当か……？ 顔が赤いぞ！」

バツと顔を隠し、

「な、なによ！ 暑いだよ！」

「へいへい」

「信じてないわね！」

「ご想像におまかせします」

「も……う！ あんたなんか嫌い！」

？

「も……う！ あんたなんか嫌い！」

「俺も同感だね」

（えっ……）

メリールは明日香のセリフが予想外だった。明日香自身は笑いながら言っているので冗談なのだが、今現在、疲労などで心身ともに不安定になりかけているメリールにはダメージが大きかった。それは茉莉や丹花、アレラーテなどのライバルの登場に焦っていたからかもしれない。

「今、なんて……？」

「うん？ 同感って言ったんだが？」

「それって、明日香は私の事……嫌いつてこと？」

「お前も俺の事嫌いなんだろ？ おあいこだろ？」

明日香はなぜわざわざそんな事を？ と言いたげに笑っている。

しかしメリールは平常心を保てなかった。冗談なんだと自分に言い聞かせてもダメだった。明日香の言葉が真実に感じた。それは先ほどの戦いの明日香が少し怖かったからかもしれない。自分の知らない明日香が目の前にいた。ライバルが急に増えた。中々学園に入れない。そして今の言葉。

嫌い——明日香は私の事が嫌い——私はこんなに好きなのに、あ

んなの嘘なのに。

本当は気持ちを素直に伝えたいのに、つい逆の事を言ってしまう。自分は小さくて、醜くて、そして弱い。

メリールは目に涙をため、何も言わずに走り出した。

「おいメリール、どうした!？」

その言葉に降り返ることはなく、ただただ走っていった。明日香は一人群青の空の下、沈黙と共に立ち尽くしていた。

第四話「過去との邂逅」

第四話「過去との邂逅」

選手権当日。あれから俺は一度もメリールを見ていない。

俺は何か気に障る事を言ってしまったのか？ いまだに分からない。

それにしても・・・今日は確か【選手権】だよね？ 妙に盛り上がっている。お祭り騒ぎだ。しかも聞こえてくるワードが【専用】【明日香君】【デート】【言いなり】っておい！ 何考えてんだ？ さて、俺は午後まで暇になる。俺は2組の優勝者と戦うだけだからな。ちなみにこの選手権は全国放送されるらしい。日本国民にとってトルネードは一つの競技のように見られているようだな。

俺は無駄に広い会場に入り、適当に観戦することにした。

午前九時。開会式が始まり、会場は大いに盛り上がる。九割くらいの席が埋まっているな。学園関係者以外でも入ることが出来るからだろう。

選手入場。1年1組から3年2組までの生徒（俺以外）が胸を張って入場してくる。こうして見るとかなり国際的だな。ヨーロッパの人が多い気もする。おっ、アルルだ。ちよつと恥ずかしそうだな。丹花もいる。こっちはかなり堂々としているな。うっ？ メリールだ。2組代表で出るのか。

午前九時半。抽選開始。ここで初めて対戦相手を知ることとなる。午前十時。1年の対戦が始まる。さて、誰が勝つのか。それによつては俺の未来も変わる。

無難に戦いは進み、ついに準決勝だ。組み合わせは、江戸川丹花VSメリール・ディソン

アレラーテ・オランジュVSミラ・アンドレス（カナダ人）
という組み合わせ。

男子の部はとくに終わっている。優勝は館^{たち} 翼^{つばさ}という男子だった。

2組は1組より速く女子の部も終わったらしく、
『ライラ・エメール（フィンランド人）』と『エリー・カナレス（スペイン人とアメリカ人のハーフ）』が同時にエネルギーゼロになりどちらも優勝となった。噂では仲の良い二人なのでそうしたのでは？ という心ないものもあるらしいが俺は信じるぞ、二人を。面識はないが。

準々決勝第一試合はアルル達だ。さすがにここからは集中して見るか。今までの所、アルルは銃撃戦が得意のようで、ミラさんは剣を使った戦闘を主にしている。集中しなくともこのくらいは分かった。まったく戦法の違う二人の戦いは少し興味がある。

ブ
—
ン

試合開始の合図だ。

二人は思いつきり前進し、正面衝突ぎりぎりで両者右へ移動した。アルルは早速ビームスナイパーでミラを撃つ。当然ミラは避けるが避けた後の弾、要するに二発目がクリーンヒット。それから三発目、四発目とアルルは外さない。ミラは剣でできるだけビームのダメージを減らそうとしているが確実にエネルギーは削られているはずだ。さっきまでは気にならなかったが、アルルの命中率は驚異的だ。まるで相手が次にどう動くのか分かるっているような・・・

そうだ。アルルのN型の能力。それは人の心を読むというものだった。それを使っているのか。だから外さないのか。謙遜するようなことを言っておいてバリバリ使ってるんだな。

その戦いはあっけなく終わった。当然アルルの勝利である。アルルはほぼ数値を減らすことなく勝利した。実に嬉しそうだ。しかし疲労もだいぶ溜まっているようである。

準決勝第二試合。丹花とメリールのバトル。今回も前回と同じで

丹花は剣、メリールは銃の構図だが、丹花はスピードも備えている。アルルのようにうまくはいかなさそうだ。しかしメリールは専用機などで培った技術がある。これはかなり見どころだ。

ブ————ン

高らかに試合開始。

二人は最初に距離をとっていた。円形ホールの会場の壁を睨みあいなながらグルグルと低空飛行している。

先に動いたには丹花だった。完全にテンポを遅らせて一気にスピードを上げたのでメリールは少し態勢を崩したがすぐに立て直し、丹花をけん制する。

接近しては遠ざかり、丹花をビームがかすめてはメリールのすぐそばを剣が通る。一進一退の攻防戦だ。会場も白熱してきた。歓声上がる。二人のエネルギーはダメージではなく戦闘時間によって削られていつている。少しずつではあるが。

こんな激戦を目の当たりにしているのに、俺はなぜか空気が気になった。ふと見上げて見る。バリアは透けているので空をくつきり映し出しているが、俺はその異様な光景を見た。

会场上空で妙な暗雲がグルグルと竜巻のように回っている。竜巻といっても縦長ではなく、横に広い楕円型の雲が渦を巻いているようにしている。

嫌な予感がする。その雰囲気はまるであの【アルティルキラー】が現れた時のようであった。

皆は気付いていないのだろうか。何度か丹花達が高く飛ぶので自分たちより目線が上に行くはずなのにその雲にピントを合わせるような仕草は見られない。

「あれ……は？」

その瞬間、その渦が大きく波打ち中から何か深緑色の【突起物】が出現した。すると皆それには気付いたのか騒ぎ始める。

警報が鳴り、会場が赤いライトで染まる。

「みなさん、避難してください。避難してください。」

会場にいた人は皆、非常口に向かい駆け出す。俺はそれでもその突起物を見つめていた。

徐々にその形が露わになる。

「あれは・・・口？」

その突起物が爬虫類系を思わせる口だと分かった瞬間、渦が急に二回りほど巨大化し、その口の正体が明らかになった。

ギヤ――

牙をむき出しにし、奇声を発したそいつは――

「ど、ドラゴン！」

全身深緑色の身長約五十メートルの西洋系ドラゴンが雄叫びを上げながら大きな翼を広げ、会場へと降り立とうとしている。

渦から完全に出て、会場のバリアに触れる。反動による電撃がドラゴンを襲うがものともせず、そのバリアを破って会場に着地した。既に丹花達は避難済みだ。未だに避難していないのは俺と非常口から遠くにいた生徒や観客数人ほだけだった。

ドラゴンはその頑丈そうな両足を地面に着けると、上を向き、

ギヤ――

と耳を覆いたくなるほど甲高い声を発した。

「ドラゴンが・・・実在したなんて・・・」

そうだ。夢を見ているのか？ 今まで伝説の生き物とばかり思っていたドラゴンが今、目の前にいる。その目は紅く、闘争本能というのだろうか。何かただ本能だけで生きているといった雰囲気眼付をしている。

そのドラゴンと目があった。俺にピントが合うのが分かる。俺は硬直したように動けなくなった。奴の五本指の手が手持無沙汰そうに動き、口が笑うように開かれ牙がむき出しになる。

俺は唯、見つめることしか出来なかった。あの瞳は恐怖を増幅させる効果があうような気がした。

俺はそのドラゴンの頭上を見た。なぜかは分からない。必然的に

そうしなければいけない気がした。そこを見て、俺は今以上に驚愕した。

人がいる——ドラゴンの頭上に人が乗っている。男性の青年だ。

「あ、あれはなんだ………？」

その男の周りに黒っぽい霧が現れたかと思うと、男が消える。幻を見ていたかのような気分になる。現在の状況もイマイチ信じられない。

ふと、一瞬緊張が解け非常口へ向かおうとすると、

「おい」

誰かに呼びとめられる。俺か、俺を呼んだのか？

俺は振り向く。そこには一人の男——ドラゴンの頭上にいた男——が立っていた。不敵な笑みを浮かべ、俺に話しかけてくる。

「やあ、村雨明日香君」

俺の名を……知っているのか？

「お、お前は誰だ！」

今出せる精一杯の声を出した。

「俺か？ 俺には名なんてねえよ。まあ世間じゃこう呼ばれてる。

【ドラゴンマスター】ってな」

「ドラゴンマスター？」

「そうだ。俺はドラゴンの支配者。全てのドラゴンを制する者だ」

「じゃあ、あのドラゴンも！」

「そうだ。俺のドラゴンだ。【スイッシュドラゴン】っていう気性の荒い最強クラスのドラゴン。まあ俺が命令しなきゃ一生あそこを動かねえだろうがな。」

どういう意味だ？ 俺は今なにをしている？ 誰と話してる？ どうしたらいい？

「うん？ 信じてねえのか？ 貴様だって十分俺達にとっては異様な存在だがな」

「ど、どういう意味だ！？」

「ふん。記憶を消されてるのは知っていたがな。まあ覚えてもら

つても困るんだが」

「記憶がなんだ！ 俺が何を忘れてるって言うんだ！」

俺はもう叫ぶことしか出来なかった。思考は止まっている。

「冥土の見上げに教えてやるよ。お前、中学の時に一日だけ失踪しただろ？」

そうだ。俺は中一の時、一時行方不明になった。俺自身その間なにをしていたか覚えていなかったたので誘拐されたもののその後放置されたという結果報告になった。

「お前はその時、異世界に行ってたんだよ。【魔法使い】の住む世界にな」

ドラゴンの次は魔法使いか？ やはり夢なんじゃ――

「まあ、記憶がないんじゃないや信じようにも信じられないよな。とにかくお前は【こっちの人間】で初めて魔法使いの世界に行ったんだ。

そこでお前は魔法の力を手に入れた。前代未聞だぜ。なにせ異世界の人間が魔法を使えるようになったんだからな。だから貴様の通り名は――」

ドラゴンマスターはワテンポ間を空け、

「アナザーマジシャン（異世界の魔術師）だ」

？

ミーン ミーン ミーン ミーン

青空の下、セミの声が町中に響いている。

「おい明日香。あまり遠くに行くなよ」

「あゝあ お兄ちゃん私も行く！」

「わかってるよ姉さん。美和、今日はちょっと我慢してくれないか？」

「ぷ~~~~」

「今度どっかに連れていくからさ」

「.....わかった。いってらっしゃい」

「うん。いつてきます!」

中学一年の夏、明日香は自転車に乗って山へと向かっていた。それは美和への誕生日プレゼントを作るためだった。中国から帰ってきたばかりで経済的に苦しかったので手作りのプレゼントを、と考えていた。

山に着き早速、明日香は『押し花絵本』なるもの（美和は現在九歳でその手のものが好き）を作るため、できるだけバリエーションに富んだ葉を探した。

朝九時から約四時間、食事を取るのも忘れ探し続けた。

「そろそろお昼ごはんにするか」

明日香はお弁当を取り出し、食べ始める。

食べ終わり、お弁当箱を直そうとしていると突風が吹き、空気が重苦しく変わった。空が灰色に見える。

「これは……?」

明日香がその変貌した空を眺めていると背後から、

「……ない? ……ばない? 遊ばない?」

少女の声が聞こえてくる。

明日香はとつさに振り向く。そこにはこちらに手を振る一人の少女が立っていた。服装は青いワンピース。涼しげな雰囲気が漂っている。

「君は……誰?」

「遊んでくれたら教えてあげる」

「何をして遊ぶの?」

「なんでもいいの。ただ、楽しくて、面白ければ、それでいいの」

「うん。わかった。遊ぼう」

「ありがとう」

明日香はその少女の方へと歩き出した。そしてあと一步で彼女の隣へ並びそうになった瞬間、明日香は自分の身体が浮いているような感覚に陥った。心地よい浮遊感。明日香は身をゆだねた。

明日香が目を覚ましたとき、彼は花畑のような場所に横になっていた。

「ここは？」

「ここはね」

隣にはあの少女がいた。明日香は気配も無く隣に現れた少女に不思議と驚かなかった。それが必然的なことに思えたから。

「ここはね、私達の故郷。そうだな」 簡単に言えば【魔法の国】かな？」

「魔法の国？」

「そう。ここに住んでいる人はみんな魔法が使えるんだよ」

「魔法……かあ」

「ところで名前は？」

「俺の？ 村雨 明日香」

「いい名だね」

「君は？」

「私はねえ。トウインクル・マーゲイ・Ｔ・メウス・ベガっていうの」

「世界が違つとこんなに名前も違つんだね」

「うん！」

「えつと、トウインクルでいいの？」

「うん。いいよ！」

「じゃあ明日香って呼んで」

「明日香！」

それから二人は遊び出した。日の暮れる事のないその【空間】で時間の過ぎるのを忘れ、いや時間自体その空間に存在していたのかどうかも怪しい。

「お嬢様！ 何をなさっているのです！？」

「あつ、アリス！ お友達ができたんだ！」

「それは……俗に言う【人間界】の者ですか!？」

「そうだよ!」

「困ります、お嬢様! あれほど連れ込んではいけないと言われましたのを!」

「伯父さんは堅いんだもん。お父さんとお母さんはいいつて言つてたし」

「しかし、伯父さまの方が格は上。背くかどうかということになるか!」

「すいません。俺、帰ります」

明日香はなんとか空気を元に戻そうとした。

「あなたお名前は?」

「村雨明日香です」

「私はアリス・サーバル・S・オスト・サジタリアスと申します。お嬢様のお世話役です」

「アリスさん。俺は帰った方がいいですよね?」

「確かに。帰られた方がいいと思いますが……」

「どうしたんですか?」

「あなたはこの空間にいてなんとも思わないのですか?」

「ええ。すごく暮らしやすそうだなって思います」

「……トウインクル様のご両親にお会いになりませんか?」

「えっ? なぜですか?」

「それは——」

「それは必然だからです」

不意に背後から声がした。

三人はその声の方へ体を向ける。

「村雨明日香がそこのお嬢様の両親に会うのは必然だから」

そこに立っていたのは黒いフード付きのマントで顔も体も隠した人が立っていた。声からして男だろう。

「もし、会わなければ村雨明日香の未来は崩壊する。だからそれを

阻止するために会う。未来の為に過去を動かす。未来の為に過去にやらなきゃいけないことをする。それを今教えている。それはまるで未来予知でもしているようだ。もう決まってしまった未来を変えようとしているようだ。矛盾も生じよう。だがそんなことどうでもいい。知る必要はない。教える義務も義理も無い。だが、そうしなければ村雨明日香の未来はない」

「どういう意味です？ それにあなたは誰です？」
アリスが叫ぶ。

「村雨明日香のパートナーとなる者」
「パートナー？」

「いわば相棒。バディー。契約者。フッフ。右腕でもいいかもしれない。でも決して物にはならない」

「なにを言っているのです！？」

「さあ。明日香。ご両親と会いな！ そして掴め。その右手に宿るはずの力を」

「力？」

「そう。お前は必要になる。いずれ。仲間が危機に陥った時、お前は欲する。その力を。そのジョーカー——切り札——を！」

「お兄さん、お名前は？」

トウインクルが多少場違いな質問をした。

「名前？」

彼はしばらく黙った後、

「

？

「お前はこの宇宙にとって有害だ。だから排除する」
「なっ——」

「安心しろ。お前を殺るのは俺ではない。あいつだ」

ドラゴンマスターが渦を指差した。渦に一瞬歪みが生じ、中から

現れたのは、

「トルネード？ しかもあの機体は・・・」

「そうだ。トウモローだ！」

渦からトウモローの脚が現れる。徐々にその全貌が明かされていく。装着者は――

「お、桜花さん！？」

顔は桜花さんだが完全に目が死んでいる。あんなに輝きを無くした桜花さんは見たことがない。

「ハハハハハハハハハハ！ そうだ江戸川桜花その人だ！ 久々のご対面は嬉しいか？」

「なんで、なんで桜花さんが！」

「あの円盤。そしてアルタイルキラー。あれは同じ惑星のものだ。そしてその惑星を侵略し、命令を出したのはこの俺だ」

「貴様、貴様が桜花さんを！」

「フン。死んじやいない。まあ、まだ精神が生きているかは保証できないがな」

「貴様！」

俺はいつの間にかブラウアー・ヴィントを起動させていた。

「おつかねえな！ だがお前が戦うのは俺じゃないぜ！」

ドラゴンマスターがそう叫ぶと桜花さんが手に剣を召喚させ、俺に襲いかかってくる。

その剣が俺の眼の前を通る。機動力ではこちらが上だ。俺は少し

桜花さんと距離をとり、

「桜花さん！ 桜花さん！」

「無駄だよ。そいつには聞こえねえ！」

桜花さんは無表情の顔のまま剣をつきたてる。精神状態がどうであれ、生きている桜花さんを攻撃はできない。

俺は徹底的に回避行動のみ行った。

「言い忘れてたがな。その機体は改造してある。あと一時間程で大爆発。せつかく再会できた桜花とも本当に永遠の別れをすることに

なるぜ！」

「き、貴様！」

どうしたらいい？ 戦えば今度こそ桜花さんを・・・でもこのままだと爆発して！

「あとなく そいつの装備は以前とは違う。そんな動きだとお前、死ぬぜ！」

「なに！？」

その時既に桜花さんの肩には巨大な砲口が四角形になっている大砲が装備されていた。

そこに光が集まり、

シィィィン

という音の後に波動が俺の腹に撃ちこまれた。

「グッ！？」

俺は観客席に墜落した。

見えない大砲か。確かにこの技術は地球のものではない。考えているうちに二発目、三発目と撃ちこまれてくる。

俺は微妙な音と風の流れて判断し、避ける。

「くそ、こうなったら！」

【START UP】

俺はWFシステムを発動し、超高速化し桜花さんの背後に回り込む。そして掴もうとすると、

「無駄だ！」

その言葉の後、彼女はすつと消えた。

「なに、なんで！」

「ハハハ。桜花のR型の能力【気化】だ！」

「気化！？」

はつと気付くと背後に桜花さんが現れ、シィィィン

と今度は背中にあの波動をくらう。

俺はまた地面へと突き落とされる。

「貴様は勝てない。そうだ【昨日】には勝てない！」

「くっ、桜花さん……」

俺は視界が薄れていくのを感じた。駄目だ。勝てない。みんな、ごめん。俺は……

？

明日香達三人はトウインクルの両親に会いに行っていた。

「俺なんかが会っていいのか？」

「うん。固くならなくていいよ。二人とも優しいから！」

「そう……」

「大丈夫ですよ。【あなた】なら」

「そう……なのかな？」

「着きました」

「おっ、おおおお」

明日香が感嘆するのも無理はなかった。なにせその城は円錐で尖っている方が下を向いており、しかも先端は浮いている。

「では入りましょう」

アリスは右手を掲げ、左から右へとスライドさせるとふと浮遊感が明日香を襲った。そして周りが光輝いた。あまりにも眩しいので明日香は目を瞑っていた。

どのくらい経っただろうか。明日香は地面に足が着いているのを確認し目を開けた。

「体調はいかがですか？」

「えっ、だ、大丈夫です」

隣にアリスとトウインクルが立っていた。そして正面を見ると大柄の男性とスラッとした女性が立っていた。

「あなたが村雨明日香さんですか？」

女性が美しい声で話しかけてくる。

「はい。は、はじめまして」

明日香は深々とお辞儀をした。

「なるほど。お主がな、顔を上げよ」

「はい」

トウインクルの両親は明日香の顔をまじまじと見つめた。明日香は自分の顔が赤く染まるのを感じた。

「ホウ　ホウ」

トウインクルの父親が右手を明日香に伸ばす。そして一瞬手に力が入ったかと思うと、空気の刃が明日香へと向かってくる。

ハッと明日香が目をつぶる。すると空気の刃は明日香の目の前で碎け散るような形で消え去った。

「ハハハハハハ」

明日香が目を開ける。するとトウインクルの父親は大笑いしており、母親は笑みを浮かべている。アリスは今まで通り表情を変えておらず、トウインクルは微笑んでいる。

「えっと、なんなんですか？」

「力を知らぬ【ブルーイリユージョニスト（蒼き魔導士）】は初々しいな」

「ええ。可愛らしいわ。その秘めた力は驚異ですが」

「よく連れてきたなトウインクル」

「うん。すごいでしょ！」

「しかし、大丈夫なのですか！」

「アリスは心配性だな」

「当たり前です。【人間界】の者なのですよ。それに、それに・・・」

・

「アハハハハハハ　アリスもしや」

「ええ。そのようですわね」

「な、なんですかお二人とも」

「あなたは【レッドイリユージョニスト（紅き魔導師）】で、色でも蒼と紅、そして士と師で、なにもかも対になっていますものね」

「意識するなと言われても無理であろう。それにもう少し成長すれ

「ばかなりよい男になるだろうしのう」

「ええ」

明日香は以前にも増して赤くなった。

「な、な、なにを！」

アリスも同じく赤くなっている。

「今は、そんなことを話している時ではないでしょう！」

「ハハハ。そうだな。そろそろ覚醒してもらうか」

「そうですね」

「わーい。明日香がんばって！」

「えっ、えっ？ 何を？」

明日香がそういうとそこにいるアリス以外の人々が右手を明日香に向ける。そして何やらブツブツと呪文のような何かを呟いている。

すると明日香の立っている周りに魔法陣が出現し、明日香が光輝きだした。

「なんだ………これ？」

「明日香さん。右手を」

アリスが少々不機嫌気味に右手を突き出してくる。

「？」

「だから！ 右手を出して下さい！」

アリスが珍しく声を荒げた。明日香には来て間もないので珍しいかどうか判断は出来なかったがこれは珍しいことだ。

「は、はい」

明日香は右手を差し出す。するとアリスは明日香の手を握った。

「！」

「そ、そんなに驚かないでください。嫌ですか？」

明日香は声が出てこなかったので必死で首を横に降った。しなやかで綺麗な手が明日香の手をしっかりと握っている。

その状態のまま一分程すると、明日香の中に自分の体に今まで感じたことのない何かが起きていた。胸のあたりに熱く燃えているような何かが不意に誕生した。その熱が体中に浸透していく。

明日香がふと握られている手を見ると、手の甲に一筆書きをした星マークが浮かび上がった。すると急に今度は体が冷えて行っただけ。しかしそれは心地よい涼しさで全てを洗い流しているかのように感じた。

「もう少しです」

アリスが小さな声でそう告げる。

明日香が目をつぶると、頭の中には海が広がっている。そこにいる明日香は無意識に右手をかざしていた。手の甲の星が輝く。そして明日香は、

「ジョーカー（切札）ペガサス（天馬）！」

そう叫ぶと、急に明日香は目を開ける。すると明日香の背中に翼が現れた。

「成功のようだね」

「ええ」

「すっごくいい さすが明日香！」

「……… さすがです」

皆の声が聞こえる。

「成功したのか」

後ろで声が聞こえた。あの男だ。

「よくわかりませんが。そうみたいです」

明日香は少し清々しい気持ちで答えた。

「これでいいですね？」

「ああ。これで未来の君はその先へ行ける。【昨日】を越えられる」

「明日香。今君はその男の知っている明日香と同期、要はシンクロナイズしている」

「わかってる。俺は苦しんでいる」

「そろそろ、起こしてやらないとな」

ブラウアー・ヴィントは苦笑いをしているような声を上げ、明日香を向いている。

「最後にさ。もう一度名前を覚えてくれよ。さっき聞こえなかった

んだ」

「もう一人の君も聞こえなかったか？」

皮肉を交えたような声でブラウアー・ヴィントが言った。

「思い出したよ。この光景。俺は確かに魔法の国に来た」

一人の明日香を通し、中一と高一の明日香が話す。

「そうだ。同期しているとどっちが話しているか分からなくて面倒だな」

「そうだな」

「そう何度も言わねえよ。それに本当は分かってるんだろ？」

「聞いてみただけだよ」

と中一の明日香。

「じゃあ、おはようだな」

「おはよう」

高一の明日香の言葉の後、二人の明日香は同時に、

「「ブラウアー・ヴィント」」

？

「ふん。立ち上がったんだ」

「フン。当たり前だ。俺はまだ【昨日】を越えてないからな！」

「で、思い出したとか？」

「ああ。だがあと一つある。忘れている。いや、思い出せていない

【あの言葉】が」

「フフフ。君も不思議な奴だ。本当に忘れているのかい？」

「どうだかな」

俺は思い出せていない。そうだ。言葉をというよりはその意味をだがな。

「でも君には死んでもらう。やれ」

その言葉と共に桜花さんが動き出した。大砲のチャージ音が鳴り響く。まだだ。まだ動く時ではない。

俺はその場から動かない。時を待つ。まだだ。あと少し――

―― 今だ！

「今だ、メリール！ 行け！」

「わかってるわよ！」

「なっ！」

ドラゴンマスターが後ろを振り向いた瞬間、桜花の背中にフルバースト形態のユア・ラヴァーからの六砲一斉光線が直撃した。当然桜花さんはそちらに気を取られる。次は俺だ！

俺はWFシステムを再起動し桜花さん目の前に移動。月光の剣先のほんの一部に全ての精神力を集中させ、

「インスタント・ハート・インパルス（一瞬の心の衝動）」
ジャン

鈍い音が響いた。月光の剣先は俺の狙い通りの所に突き刺さっている。

「決まった・・・な！」

俺が狙ったのはトルネードのアクティブ・ブレイン（通称【架け橋】）。それは装着者とトルネードを意思でつなぐ組織。それは通路なので装着者もトルネードも傷付けることなく両者を引き離すことができる組織。

桜花さんはトゥモローから解放された。俺はそつと桜花さんを抱きかかえる。

「生きていて、良かった」

「貴様！ よくも！」

メリールが明日香の近くに降りる。

「桜花さん。生きてたんだ！」

ドラゴンマスターの表情が強張っていく。

「ちっ、俺は手を出したくはなかったがそういうわけにもいかないだろうな！」

ドラゴンマスターがパチンと指を鳴らした。すると、それまで大人しくしていたスイツシュドラゴンが雄叫びを上げ、空に舞い上がった。

た。

「今度こそ殺してやるよ！ アナザーマジシャン！」

ドラゴンが大きく口を開け体色と同じような深緑色の炎を吐いた。俺は桜花さんを抱えその炎を避ける。

「なんなのよ、あれ！ 聞いてないわよ！」

「とか言って助けてくれたくせにな！」

「し、仕方ないでしょ！」

ドラゴンは羽を振るい突風を起こす。その刃にも匹敵しそうな風が容赦なく俺達に降りかかる。

「どこか、桜花さんを置ける場所は！」

「明日香！ 私に！」

それは丹花の声だ。

「丹花！ 頼む！」

俺は丹花に桜花さんを預け、メリールと共にドラゴンの前に浮遊する。

「どうやって倒す？」

「一撃で決めたいなら私が援護に回るわ」

「わかった。行くぞ！」

俺達は左右に分かれそれぞれドラゴンから一番意識が遠い位置へと移動しつつ攻撃する。メリールはフルバースト形態で主に下半身へ攻撃を集中させる。炎はGBシステムでなんとか免れている。

俺はWFシステムで相手の視界に入らず、月光で少しずつピンポイントにダメージを与えていった。しかし、

【9・45%】

俺のエネルギーが底をつきそうだ。

「ちっ、なんとかしないと！」

ドラゴンはほとんど弱った感じがしない。いや逆に凶暴化している。

「私もやります！」

ドラゴンの眼のあたりに銃弾が当たる。

「アルル！」

「私も戦う！」

現在三対一、もう少しすれば先生たちも来るだろう。

「ああああああ！ もうめんどくさい！ 俺が殺る！」

ドラゴンマスターはそう叫ぶと両手を掲げた。するとその両手から黒い稲妻が走りスイツシュドラゴンの腹部に直撃し、そこにワームホールのようなものが出現した。

「いたぶってやろうと思っていたが俺の性に合わないからな」

そう言うドラゴンマスターはそのワームホールに飛び込んだ。

「なにをする気だ？」

腹部のワームホールが閉まり、スイツシュドラゴンが苦しみ出す。

そして雄叫びを上げると、その容姿がみるみる変わっていき爬虫類系だった姿はどこか人型のようになった。一言で表すならば【龍人】もしくは【龍神】だろう。羽や手はあまり変わっていないが重量系を思わせたボディはスマートになり、脚も長く、顔は悪魔のような恐ろしい形相と化している。

「ハハハハハハハハ これがドラゴンマスターの真の力だ。ドラゴンとの融合。最強の生物だ！」

その龍神が手を広げ叫ぶと体から深緑色の振動波が発せられ、周りに合った建物を薙ぎ払った。

「な、なんだ！？」

俺達も瓦礫と共に吹っ飛ばされる。

【3・07%】

「くっ、くそ。このままじゃ・・・」

「ハハハハハハハハハハ 力の差が分かったか？ さっさと死ね」
龍神は俺に右手をかざした。その手に光弾がたまっている。しかし、それを放つ前にメリールがそれを撃ち、龍神の手の中で爆発した。

「メリール！」

「今度なにか奢ってもらうからね！」

「ちっ、黙って見ておけばいいものを！」

今度は龍神が左手をメリールに向ける。メリールは咄嗟にGBシス

テムでバリアを張った。

「バリアなんて意味ないんだよ！」

そう龍神が叫び左手を勢いよく降ろすと、メリールもそれに合わせるように地面に打ち付けられた。

「くっ、なによ、これ！」

「貴様は俺の操り人形だ！」

龍神が左手を動かすたびにその動きと同じ動きをメリールがしていた。

「コントロールが・・・効かない・・・」

と、そこに教師陣三人が到着。しかし、

「おつと入れないぜ！」

龍神は翼を大きく開くとそこから黒い霧が発生。俺達の周りを取り囲んだ。

「何だ、この霧？」

「あつ！ 先生たちがこつちに来られてない！」

「結界・・・なのか？」

辺りが一層暗くなる。その間もメリールはGBシステムを発動したまま地面や瓦礫に打ちつけられている。

どうにかしなければ！

「そろそろメインにいくか」

そう言つて龍神はボーリングをするように左手を動かす。するとメリールは地面を磨るように俺の所に来た。

「大丈夫か！」

「わ、私を誰だと・・・おもってんのよ・・・くっ」

「じゃあ、明日香に死んでもらうか」

不気味に笑む龍神の顔がこちらに向く。

「「そうはさせない！」」

丹花とアルルが俺達の前に降り立つ。イエーダー・タークのライフ銃で龍神を撃つが効果は無い。

「無駄だよ。雑魚共！」

目が見開かれたかと思うと急に黒い風が襲う。

「くっ、あう！」

二人もメリールと同じように俺の眼の前に引きずられるように倒れ込む。

「丹花！ アルル！」

「あす・・・か・・・」

「うぐっ、あ・・・あ」

三人ともほぼ意識が朦朧としている。

「どうだ、アナザーマジシャン。自分の不甲斐なさがあったか？

アハハハハハ」

？

「あなたは、もう魔法が使えます」

トウインクルの母親が明日香に告げる。

「魔法が・・・？」

「ええ。ただし我々のように自由に使うことはできません。なにせあなたは人間ですから」

「どういうことでしょう？」

「あなたが心の中で真に思う何かが分かれば使えます」

「なにか・・・」

「ここであなたに問います」

「はい」

「元の世界に戻りたいですか？」

「えっ・・・？」

「あなたは人間界に戻りたいと思いますか？」

「・・・はい」

「なぜです？」

「俺には姉と妹がいます」

「それだけですか？」

「えっ？ あゝ もうすぐ妹の誕生日なので―」

「そういうことはありません」

「はあ」

「他にあるでしょう？」

「人間界には尊敬する先生や友達がいます」

「あなたは一番大事なものを隠していますよ」

「ダメだよ、明日香！ ちゃんと言わないと」

「魔法使いを嘗めてもらっては困る」

「お三方の言うとおりに」

次々に明日香に言葉が掛けられる。

明日香は少しの間目を閉じた後、

「それに……………【心の中のジャスミン】にも、もう一度会いたいですし」

「そうですね。それが正答です。それでは帰ることを許します。しかし帰るにあたってあなたの記憶を封印します」

「封印ですか？」

「あなたは記憶喪失とは記憶が無くなる訳ではないことを知っているでしょう？」

「はい」

「大丈夫です。あなたが真にその力を望み、【真の意味】を理解したとき、その記憶の通路は開かれます」

「わかりました」

「あなたは夜中の二時の人間界に降りることになります」

「えっ！」

「安心してください。多少の辻褄はこちらでなんとかします」

「あ、有難うございます」

「こちらこそ。ブルーイリジョニストに遭遇しただけでも幸運なのに、アナザーマジシャンでもあるなんて」

「本当によく見つけたなトウインクル」

「うふふ。でしょう？」

トウインクルは胸をはって自慢げに笑う。

「人間は速く帰った方がいい」

「あら、アリス。素直じゃないですね」

「なにをおっしゃるのですか！」

アリスの頬に赤みが増す。

「えっと、本当に有難うございました」

「うん。トウインクル、アリス、明日香を人間界に帰してあげなさい」

「はい！」

幼い声とキリットした声が重なった。

「その前にあなたはすることが二つあります」

「なにを・・・ですか？」

「まず、あなたに名前を、この世界での名前を与えます」

「やったね、明日香！」

「もったいない話ですね」

「今日からあなたは【エルガー・オセロット・T・メウス・アルタイル】です」

「T・メウスってトウインクルと同じですね」

「ええ。あなた私達の家族になったのです」

「「ええ!?!」」

「トウインクルにいい【お兄さん】ができました」

そう母親が悪戯っぽく言うときアリスは安心したような溜息を吐いた。

「まだ、よく状況をつかめてないや」

「これだから人間は。自分の幸運をもっと――」

「まあまあアリス。固いこと言わないでさ。本当は好きなくせに！」

「トウインクル様、冗談はおやめ下さい！」

「それでは、この水の中に入りなさいエルガー」

「は、はい」

明日香は空中に現れた巨大な瓶の中に入った。

「いいですか。あなたはそこでやるべきことをなさい」
「はい！」

明日香は瓶の中に潜った。何処までも続く深い水の中。そこに光が見えた。

三人は暗くなつたお花畑を歩いていた。

「瓶の中で何をしてたの？」

「秘密だよ」

「いいじゃん。いいじゃん！」

「だゝめ」

「ケチ〜〜〜」

明日香とトウインクルが本当の兄妹・・・いや恋人同士にも見える様子で話している。

「着きましたよ」

アリスが少し冷たい口調で言った。

「ああ。ありがとう」

「ええ。それでは明日香さん。ごきげんよう」

アリスはそそくさと別れの言葉を告げ、明日香から離れた。その顔は少しひきつつている。

「ああ。じゃあね、トウインクル、アリス」

「うふふ。また会えるよ、きつと！ その時はもう私は立派な大人かな？」

そう言つてトウインクルは明日香の頬にキスをする。

「「！」」

これには明日香だけでなくアリスも驚いた。

「えへへ♪ あれ〜 アリスは？」

トウインクルがニヤケ顔でアリスを覗きこむ。

「その、えつと、とう・・・トウインクル様がどうしてもおっしゃるのなら・・・」

アリスの顔が真っ赤になった。

「えっ？ どうしてもなんて言わないけど」

トウインクルはわざとらしく言った。

「うっ、もう！」

アリスはそういうと、トウインクルとは逆の頬にキスをする。そしてそのまま後ろを向いてしまった。

「速くお帰り下さい！」

「うん。じゃあね！」

「バイバイ！」

そして明日香が目を瞑ると、浮遊感が襲い、いつの間にか明日香は横になっていた。それも自宅のベッドで。

「あ、明日香！ 大丈夫か？」

「お兄ちゃん！」

「姉さん、美和。ここは？」

二人が心配そうな顔で明日香を見つめていた。

「もう、心配かけて！」

「そうだよ、お兄ちゃん！」

「どうして俺はここに？」

この時、既に明日香の記憶は消えていた。

「お前は誘拐されたんだ」

「えっ？」

「でもすぐに見つかった。木に縛り付けられていたんだ」

「そう・・・だったんだ・・・」

「なにも覚えてないの？」

「ああ。なんにも覚えていない」

明日香は魔法使いの記憶への道を閉ざされていた。それがいつ開かれるのか知る者がいるのならば、それは魔法使いの国にいた住人か、この数年後に邂逅することになる【蒼い風】のみである。

？

「さて、言い残したいことがあるなら聞いてやるが？」

「くっ……」

どうすればいい？ どうすれば勝てる？

「無いなら、とつとと死ねよ。そうだ。こいつらから殺すか」

龍神はメリール達を指差す。

「なっ、待て！」

その時にはもう黒い光線が両手から放たれていた。

「はっ！」

「くそ——」

俺は気付けばメリール達の前に立っていた。

ズウウウウウウウ

「ぐあ——」

「明日香！」

「やっぱりな。庇うとおもったぜ！ アハハハハハハハ」

「うっ、ぐっ……」

俺はうつ伏せに倒れ込んでいる。ブラウアー・ヴィントが粉々になっていた。薄れていく視界の中でメリール達が近づいてきた。どうやら守れたみたいだな。くそっ、熱い。痛い。うっ？ 泣いているのか皆？ 俺、死ぬのかな？ 力が抜けていく。変だな。こんなに苦しい筈なのになんだか楽になってきやがった。おっ、走馬灯か？
今までの記憶が蘇ってくるみたいだ。

「明日香！ 明日香！」

アルル……

「明日香！ せっかく姉さんが生きていたのにお前が死んでどうする！」

丹花……桜花さん……

「明日香！ まだ私はあんたのこと許してないんだからね！ 起きなさいよ！」

メリール……

俺は……死ぬのか？

俺は．．．．．死んでいいのか？
いや．．．．．死ねない！

俺は．．．．．こんな所で死んでは駄目だ！

でも．．．．．どうすればいい？

もう．．．．．何も見えないし何も聞こえない。

頼む．．．．．力はいらない！

力は．．．．．必要ない！ だから

俺に．．．．．【光】をくれ！

皆の．．．．．所へ導く光を！

あの．．．．．蒼い風と共に――

昨日を越える為の光を！

？

「おっと、死体が残ったのか。よし消そう」

「えぐつ、そんなこと．．．えぐつ、させない！」

「明日香は．．．死んでない！」

「そうだ。まだだ！」

メリール、アレラーテ、丹花が叫ぶ。

「ふうん。じゃあ、いいよ。まとめて消すからさ！」

龍神が両手を三人に向ける。

「あの世で明日香によろしく！」

龍神の手から黒い波動が放たれた。

（明日香――聞こえてる？ 私、明日香にもう一度会いたい。だつてせっかく同じ部屋になったのに、せっかく友達になったのに、私、あなたを好きになったのに、こんなに早く別れなきゃなんて．．．嫌だよ！ 気持ちだつて伝えてないのに、伝えたいのに．．．だ

から会いたいよ！ 明日香！

（明日香——聞こえているか？ 私は今おまえに会いたい。姉さんにも会いたい。実はな。私は姉さんのことをずるいと思っていた。小さい時に私はお前を好きになった。でも、おまえはいつも姉さんといった。あの時も。そして今もお前の心は私より姉さんに向いている。醜いよな。分かっている。そんな自分が私は嫌いだ。そんな自分を直したい。直った自分をおまえに見てもらいたい！ だからもう一度おまえに会いたい！）

（明日香——聞こえてるわよね！ 私まだあんたを許してないのよ。普通女子に嫌いなんて言っちゃいけないのよ。も、もし、その子があんたの事を好きだったらどうするの？ 結構シヨックなんだからね。いいわ。謝るチャンスあげるから。だからなにそんな所で寝てんのよ。早く起きて謝りなさい！・・・ううん。謝らなくていい。だから、だから、起きてよ！ 私は、私は、明日香が好き！）

明日香！

黒い波動が三人を直撃する。するとその波動が揺らぎ霧散した。

「なっ！？」

龍神が驚嘆の声を上げる。

三人の前に誰かが立っている。それは――

「『明日香！』『明日香！』『明日香！』」

「な、なぜだ！」

龍神の叫びに明日香は余裕の笑みを浮かべつつ、

「クラウン・タイム（明日への勇氣）！」

第五話「明日への勇気（クラウン・タイム）」

第五話「明日への勇気」 クラウン・タイム

「クラウン・タイム（明日への勇気）！」

明日香がそう叫んだ。

「ハハハハハハハハ 意味までわかったか。面白い。さあ、アナザーマジシャンの力とやらを見せてもらおうか！」

龍神の顔は歪んでいた。明らかに狂ったような表情をしている。

「言われずともな。その前に——」

「あ？」

「場所を変えるか」

そう言うとき明日香は指を鳴らした。

パチン

その音と共に空気が揺れ、明日香と龍神はいつの間にかさっきまでいた学園とは違う空間にいた。

そこは巨大なランプのカードが風見鶏のようにグルグルと回っている少し薄暗く風も生ぬるい空間だった。

「アハハハハハハハ 気持ち悪い空間だな、なんだ、ここ？ お前が作ったのか？」

「ああ。あんたには気にいってももらえると思ったんだがな」

両者は顔では笑っているが目が笑っていない。明日香までも狂気的な笑みだ。

「あと、一つだけ言っておくが——」

「フン 聞いてやろう」

「俺がこの空間に呼んだのは【お前だけ】だ。」

「はあ？ 何が言いたい？ ……なっ、貴様！」

「ご名答」

龍神は自分の体を見た。明日香の言葉と共に黒い霧が龍神を包んでいく。

「な、なるほど……ドラゴンはお呼びでない……か」
その黒い霧は龍神を完全に覆い、しばらくするとその巨体は消えドラゴンマスターだけがその場に残っていた。

「で、あんたの正体は？」

「そうだな。【ブラックイリジョニスト（黒き魔導師）】とでも言っておこうか」

そう言うとドラゴンマスターは右手の甲をかざした。そこには星型のマークが黒く輝いている。

「黒がなんの目的で蒼を殺ろうとする？」

「俺がこの宇宙で一番強い存在になるためだ。別に蒼を特別殺そうってわけじゃない」

「今までに何人同族を殺した？」

「知らないね。強いと言われてるやつはみんな殺った。そこに何人同族がいたかなんていちいち覚えちゃいない」

「なるほどな」

「ハハハハハハハ それで？ 知ってどうする？ お前が俺を倒せるのか？ 蒼は確か平和的な種族だったよな？ そんなやつが好戦的な黒を倒そうと言うのか？」

ドラゴンマスターは高らかに笑っていた。

「最初に言っておこう」

「なにをだ？」

「俺はアナザーマジシャンだぜ」

「ちっ！」

ドラゴンマスターは右手を明日香に向ける。

「めんどうだ！ 死ね！」

その右手から黒い波動が明日香に向かってくる。

明日香は右手を左手で支えながらその波動に向け、

「ドリーム（召喚）玄武！」

そう叫ぶと、右手の星マークが蒼く輝き、明日香の前に緑色のシールドが現れる。そして黒い波動はいとも簡単に弾かれる。

「なっ!?!」

「次は俺の番だ!」

明日香は足を踏ん張り、

「ドリーム 白虎!」

すると明日香の右手から白い波動が放たれた。

「くそっ!」

ドラゴンマスターはそれをぎりぎりで避け、態勢を立て直した。しかし目の前には、

「遅いな!」

「貴様!」

「ドリーム 青龍!」

明日香は叫びドラゴンマスターの顔面に右ストレートをかました。するとその手から蒼い竜巻のような物が発生し、ドラゴンマスターは後方宙返りをしながら岩に衝突した。

デユユユン

岩が激しく碎ける。

「思ったよりやるな!」

「思ったよりやらないな!」

明日香は挑発するように笑う。

「ちっ! 俺の本気見せてやるよ!」

「楽しみだ」

ドラゴンマスターは右手で天を仰いだ。すると空に暗雲が立ち込める。そしてドラゴンマスターがその手を勢いよく降ろす。その瞬間、暗雲が地面に落ち辺りは真の闇と化した。

「アハハハハハハハハハハ」

ドラゴンマスターの笑い声がこだまする。

「この空間はお前の負のエネルギーがどれほどのものか分かる。貴様のトラウマや絶望、苦しみや悲しみや恐れ、全てがこの空間の闇

と比例する。いくぞ！」

パチン

指を鳴らす音が一面に響く。

その音に反応するように、明日香の周りの闇が徐々に深みを増していく。

「その闇の濃さがお前の心の中の闇だ。何も見えないだろう？ そのうちお前はその闇に侵食され負の塊となり死ぬ。今お前の耳には聞こえる筈だ。自分の苦しみの声が！ 俺はこうやって自分より強い奴を殺してきた。精神攻撃って面白いよな！ みんな叫びながら死んでいく」

明日香の耳には確かに負の言葉や自分の弱さが響いていた。心を持つて行かれそうな悲痛な叫び。今まで抱え込んでいた全ての負の部分が津波のように襲っている。

「お前の精神攻撃は終わりか？」

「なに！？」

「ハハハハハハハ 面白い技だった。じゃあ次は俺の番、だよな？」

「貴様、なぜ！？」

「ドリーム 朱雀！」

明日香の周りに蒼い炎が出現し、闇を燃やしていく。明日香が目を見開いた瞬間、もうそこに暗雲はなかった。

「なぜだ！？ なぜ俺の攻撃が——」

「希望だ」

「なに？」

「絶望より強く大きな希望があれば、絶望なんて怖くない。闇なんて怖くない」

明日香が涼しい顔で呟いた。

「そんなはずない。闇こそがすべてだ。闇は光を支配する！」

「闇があるから光があって、光があるから闇がある。人は絶望だけ

じゃない。希望だって持っているんだ。俺は今その希望を勇氣に変えた」

「勇氣だ？」

「そうだ。過去を越える勇氣ではなく、明日へ向かう勇氣に！」

「黙れ 黙れ 黙れ！」

ドラゴンマスターは倒れ込んだかと思うとその体から闇を放出した。

「みんな消えろ！」

その闇は増大し、ドラゴンマスターを飲み込んでいく。

「自爆するのは勝手だが一人でやってもらおうか！」

明日香は高く昇る闇に手を構え、

「俺のとっておき！ ドリーム 天馬！」

すると今まで以上に明日香の右手の星が蒼く輝き、その手に蒼い煙が現れる。

「ハアアアアアア！」

その煙は勢いを増し、剣のような形になる。その剣は空高く伸び、

「くらえ！」

明日香が手を振りおろすと、剣は闇を一刀両断した。

ジャヤヤヤヤヤヤン

鈍い音が響く。

「アハハハハハハ 闇に抱かれて死ぬるとは……………気持ちいいぜ！ じゃあな！」

ドラゴンマスターはそう言い残すと闇と共に淡く消えていった。

？

「終わった・・・か」

俺は自分が作り出した空間で一人考えていた。

なにか違う。今の状態の自分いつもの自分。同じ自分なのに違う気がする。これが本当の俺なのだろうか？ 魔法の国に行つて、

記憶を消された。消された状態で日々を過ごしたから違う自分が出
来上がったのか？ 俺は誰かに教わることなく戦い方を知っていた。
魔法の発動や動き。力を得た時にも知らなかったこと。なぜ俺は知
っている？

「久しぶりだね」

気付いたら目の前に人が立っていた。

「お前は……ブラウアー・ヴィントか」

「ひどい目に合ったよ」

その言葉に攻めているような雰囲気は無かった。でも一応謝ってお
こう。

「すまん」

「いや、これも一つの歴史だからね」

「治せるのか？」

「嘗めないでほしいね……博士を……」

「あつ、直すのは博士だもんね」

ブラウアー・ヴィントの顔はいまだかつて見えてないが少し恥ずか
しそうにしてる気がする。

「お前は何者なんだ？」

「そうだな。あの機体で言えば【精神】だな。あの魔法の世界で言
えば――」

ブラウアー・ヴィントは少し間を開け、

「【クラウンズ・ゴスペル（道化師の福音）】だ。まっ、お前のパ
ートナーに相應しい名前だろ？」

何処か楽しいげな声をしている。

「よろこばしい知らせは無いのか？」

「未来のことを教えているだろう。それで十分では？」
クックククツ　と笑った。

「ところでお前はここで何をしているんだ？」

「なにをつて」

でも、確かに俺はここで何のためにじっとしてるんだ？

「考えるのは後にした方がいいぞ。まあその魔法もそのうち消える」
「消える？」

「ああ。クラウン・タイムの意味はその都度変わる。君はその意味をいちいち見つけなければいけない」

「魔法の割に面倒だな」

「アナザーマジシャンだからな」

「便利なのか不便なのか」

ブラウアー・ヴィントの顔はやはり見えない。意図的に隠しているのかどうかは、まあこの際どうでもいいだろう。そういえば初めての邂逅の時も見えなかったな。

「お前って本当に何者なんだ？」

「うん？」

「俺の相棒のような存在ってことは分かったけど……」

「答えは知っているはずだ」

「それは本当に答えなのか？」

「どうだかな」

こいつの言いたいことは分かる。要するに答えは【知っていないければいけないから】とかなんとか言つつもりだろう。

「魔法の力が惜しいのはわかるがそろそろ帰らないとまずいぞ」

「別に惜しいわけじゃない。でも、まずいつて？」

「鈍いな」

ぐわっ まさかこいつに鈍いなどと言われるとは……

「君は目覚めて、この空間に来てからどのくらい経ったのか」

「うーん 十分くらいか？」

「その間、君はどういう状況なのか？」

「おっ………考えてなかった」

「消失している」

「そりや異常だな。セリフ言っただけで消えるとか………」

「君の周りには誰がいた？」

「メリール、アルル、丹花」

「その娘達は今どうしてるだろう?」

「えっと・・・・・・・・・・・・・・・・うん。やばいね」

「だろ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・帰ろう」

「そうしとけ。まあ、またすぐ会える。心配するな。俺はお前の相棒だからな。じゃあな!」

ブラウアー・ヴィントは手を振った。それに同調するように空間が歪み、俺は何時ぞやの浮遊感を味わっていた。

少し頭痛がする。いつもより浮遊感の残骸が頭に残っている。さて、俺は今どこにいる?

「・・・・・・・・か!・・・・・・・・あすか!・・・・・・・・明日香!」

微かに声がするな。うん? 風が強い? 俺は今・・・・・・・・明日香!・・・・・・・・

ギヤヤヤヤヤヤヤ ここ屋上じゃん! しかもドラゴンのせいで面積五平方メートルしかないじゃん! 怖えええええ!? スーハー 落ちつけ!

「明日香! 何処よ!」

「明日香! 返事して!」

「明日香! ! !」

今だ!

「おゝい!」

「・・・・・・・・えっ?」

三人が上を向く。俺は微笑を浮かべつつ(自分で微笑って言つのも変かな?)手を振る。

「よっ!」

「よって・・・・・・・・」

「明日香・・・・・・・・」

「よかった・・・・・・・・!」

「明日香!」

「ご無事で何よりです。お三方」

よかった。なんとなく怒られるような気がしたけど大丈夫そうだ。

俺は崩れかけている足場を伝って下りた。そこにはもう既に三人が待っていた。

「よっ、大丈夫だったか？」

「何が・・・大丈夫だったかよ！」

「心配したんだから！」

「そうだぞ！」

「ごめん、ごめん。あつ、メリール」

「なっ、何よ！」

「ごめん」

「えっ・・・？」

「ほら、嫌いとか言つてごめん」

もしかしたら、それで機嫌が悪いのかも思った。まさかとは思つが。

「きゅ、急に何よ！ あつ、あんたもしかして心でも読めんの？」

「うん？ 心？」

メリールの顔が赤くなつた。憤りの赤ではなさそうなんだが。本当にそうだったのか？

「なんでもないわよ！ それより！」

「それより？」

「なんで消えたの！？」

「そうだよ！ なにか呟いてピカツと光つて消えちゃって！」

「あの時、なにをしたんだ？」

やっぱり言及するか。えつとなんて言おう？ 俺は魔法使いだったんだ・・・とか言えん。

「えつとな・・・夢でも見たんじゃないか？」

「死にたい？」

「死にたくない！」

「言いなさい！」

「言いなよ！」

「言え、明日香！」

「あつ、それより桜花さんを病院へ！」

「誤魔化すな！」

「まずは桜花さんでしょ！」

「うっ……」

病院に行つて落ちつくまでに考えよう。白昼夢……は結局夢か。見間違い……は言つた瞬間殺されそうだ。おっ、救急飛行船が来た。行くか。地獄へ……。

鷹目区立総合病院208号室 江戸川桜花様

「姉さんは大丈夫なんですか？」

「ええ。長い間睡眠状態にあつたようです。外部に傷害はありませんが命に別状はありません。そのうち目を覚ますでしょう」

「そうですか。有難うございます！」

丹花の顔に花が咲いた。

深夜零時、自宅。

「それにしても夢のような時間だったね」

「夢だったのかもよ」

「ああ。夢だったかもな」

メリール、アルル、丹花が談笑している。

「あのさ、お三方」

「なに？」

「なんで俺の家にいるの!？」

「そりゃあ〜ねえ〜」

「だって、明日香に」

「理由を聞かねばならんしな」

「覚えていたのか……」

「夢だったんじゃないか？」

「それよりさ。心配したんだよ」

茉莉が笑顔でダメだぞ。 的なので話してくる。これはきつと助け舟だ！

「ごめん。ごめん。でも帰ってくるってわかってただろ？」

「そりゃね」

あ・・。れ？ 背後に殺気を感じるぞ・・。

「ふ~~~~ん。ずいぶんと絆が強いのね！」

「本当にただの幼馴染なのかな？ ねえ明日香？」

「逆に聞きたいんだが、どうして俺が茉莉と仲良くすると不機嫌になるんだ？」

「うっ」

メリールとアルルが言葉に詰まる。あれっ、丹花が会話に入っていない。

「ところで明日香——」

丹花がボソッと、

「私と姉さんはお前にとってどっちが上だ？」

上？ 年の事ではないよな。さすがにそれは愚問だ。だとすると何だ？

「えっ？」

「だ・か・ら、私と姉さんとどっちの方がより好きかと聞いているんだ！」

なんとなく不条理な怒られ方をされている気がするが。

「うん。そんなこと考えたことも無かった」

「なぜだ！」

「なぜって、二人とも大事な友達だからな。まあ桜花さんを友達って言うのはおこがましい気もするけど。お前の事は友達でいいよな？」

「あ、ああ」

丹花は顔を真っ赤にしている。これは憤慨30パーセントと恥ずかしさが70パーセントと見た。でも憤慨って何に？

「本当に明日香は鈍感だよな」

純粋な顔でそんなことを言う茉莉。俺のハートはガラスではないけどさすがに傷つくな。

「あつ、明日は美和と遊園地だ」

「あんた、よく行く気になるわね」

やれやれポーズのメリール。お前こそよく俺の家に来る気になるな。

「わ、私も行きたい！」

アルルが満面の笑みで手を上げる。アルルは【恥ずかしがり屋】からジョブチェンジだ。なにになったかは分かりかねます。

「なら私も行ってやろう」

やっと顔色が戻った丹花が言う。桜花さんについてなくていいのか？

「私はお留守番してるね」

言っていないかったが茉莉と美和は仲が悪い。というか美和が一方的に嫌っている。理由は言うまでも無いな。

「美和はすごいぞ」

「知ってるわよ」

メリールがうんざりと言いたげな顔で言う。

「じゃあ別に来なくても——」

言い終わる前にスナイパーもびつくりの目線。蛇より怖いなお前。

「わかったよ。じゃあみんな今日は泊まってけ……ってそのつもりで来てんだよな」

三人はグーポーズ。やれやれ。

「じゃあ九時に出るか。茉莉にはお土産買ってくるからな」

「うん」

ビクッ 悪寒がする。はあ~~~~ ジト目三人衆はほっというて寝るか。

？

土曜日の朝九時。

「なんでこんなに女の子ばかりいるの……」

「すまん。話をしたら行きたいって言うから……な？ いいだろ？」

「も……う その代わりお兄ちゃん私のものだから！」

「はいはい。じゃあ行くか」

「……お……」

明日香、美和、メリール、アレラーテ、丹花の五人は遊園地へ行くため駅へ向かっていた。

上機嫌の三人。不機嫌な一人。特に何も考えていないのが一人。誰がどれかはお分かりだろう。

五人が駅前の噴水の近くに着いたとき、

「明日香さん」

小さく風のような声が聴こえた。明日香が振り返ると、

「えっ……？ アリス？」

そこにはアリス・サーバル・S・オスト・サジタリアスが人間界の服を着て立っていた。顔は明日香が魔法の国で出会ったときと変わっていない。人間界と魔法界では時間の流れが違うのかもしれない。

「お久しぶりです明日香さん」

「アリス？ どうしてここに？」

「……お兄ちゃん知り合い？」

美和のように声には出さなかったがみんな興味津々といった面持ちで明日香を見つめた。

「えっと、中学の時に知り合ったんだ。名前は――」

「アリスと申します」

アリスは深々と頭を下げた。

「明日香さん。あなたに一度だけ魔法の力を授けます」

「はい？」

「……魔法？」

「みなさんの記憶を消すのです」

「ああ。そんな魔法があるのか？」

四人は聞きなれない言葉とそれに動じない明日香を見て呆然として
いる。

「もともと、イリユージョニストは黒が【戦闘】、紅が【覚醒】、
白が【治癒】、そして蒼は―」

「蒼は？」

「蒼は【忘却】です」

アリスは淡々と告げる。

「忘却？　というത്？」

「紅が他の色の力を覚醒させ、黒はあらゆる敵を倒し、白はその傷
を癒す。そして蒼がそれらの記憶を消す」

「なぜ記憶を消す必要が？」

「罪の意識を消すため。誰かを手にかけてという心の傷を癒すため
です」

「なるほど」

「トウインクル様のご両親がお許しになりました。あなたがアナザ
ーマジシャンとしてでなく、ブルーイリユージョニストとして魔法
を使うことを」

「俺の力でこいつらの記憶を消すってことか」

「はい」

「ちよつと待ちなさいよ。一体何の話をしてるの！」

痺れを切らしたメリールが明日香に詰め寄る。

「ちよ、ちよつと待て！　アリス頼む」

明日香は自分の右手を向けた。

コクンとアリスが頷き、呪文を唱えだした。

「な、なによこの子！　なに、言ってるの？」

「もうすぐ忘れるさ！」

「えっ？」

そうしていると明日香の右手に蒼い星が現れ、輝きだす。

それを見て四人はとうとう思考を止めた。

明日香は四人に右手をかざすと、

「悪いな。ニカタサマアキサ・イアガ・ルグア・コモス・ティスンド！」

そう呪文を唱えると星が一層輝き、あたり一帯を蒼い光が包み込んだ。

？

「私はもう帰ります」

「そうか。ありがとう。アリス」

「いえ。それでは」

そう言うとアリスは紅い光の中に消えていった。

俺の手から光が消えていく。四人は目をつぶっていた。

「うーん。なにがあったの？」

「あれ、私達ここで立ち止まってなにを？」

「お、お兄ちゃん・・・私、なんか変」

皆、戸惑っているようだな。

「じゃあ帰るか？」

「ううん。遊園地！」

「そうだ！ 遊園地だった！」

「はい、はい」

さすがに遊園地に行くっていう記憶は残しておいた。俺もそこまで残酷なことはしない。俺が光に包まれてどうか、という記憶を持っているのはアリス達だけだろう。でも、もう一人増やそうと思う。せっかく記憶を消したのに、と言う奴もいるだろう。それでも俺の正体を知っておいてほしい人が今のところ一人いる。

まあ今は遊園地を楽しむとするか。茉莉へのお土産も忘れずに、な。

夕方六時、病室。

「桜花さんが目覚めた！？」

「ええ。この通り」

そこには少しやつれてはいるものの笑顔の桜花さんがいた。

「姉さん！ 姉さん大丈夫ですか？」

「あれゝ 丹花ちゃん、姉離れはまだなのかなゝ」

「もう！ 心配したんですよ！」

「ごめん、ごめん」

桜花さんらしいな。すごく懐かしい。今なら、からかわれても平気な気がする。

「あゝ 明日香君！ いい男になったね！ うわゝ ハーレムだねゝ ！ ！ ！
いつ女つたらしになったのゝ？ そんな子に育てた覚えはないぞゝ」

あゝゝゝゝゝゝ 気がするだけだった……

「でもすごいねゝ 何年寝てたんだろう？」

「本当ですよ」

「あはは。あんまり記憶ないんだゝ」

「何年この病院で寝ていたと思っているんですか姉さん！」

そう。この辺の記憶も変えておいた。桜花さんなら大丈夫と思いつつもあの事件のことはこの地球上のみんなに忘れてもらった。覚えているのは俺だけだ。一応辻褄は合わせているつもりだ。なにかあれば誤魔化すさ。ちなみに桜花さんは急に倒れて入院。原因は不明。つてことにしている。原因が分かる日は来ないだろうな。

「でも、よく考えたらどうしてこんな家から遠い病院に入院させたんだっけ？」

ぐわっ……えっと……

「トルネードの起動準備中だったからだよ。俺と桜花さんは学園の近くにいたから」

「ああ。そうだった。そうか」

セーフ……なのか？

アルティルキラーやドラゴンマスターも原因不明なのでその辺は記憶をいじる必要はない。

それから呪文を使う時に思い出したこと。俺が雷音に乗って降りられなくなったときの少年の名前は【エルガー・オセロット・Ｔ・メウス・アルタイル】という。またの名を中一の、

【村雨 明日香】だ。俺はあの瓶の中で雷音に乗る自分を見た。自分の声があんなに自分で聞こえている声と違うものとは思わず、少年だと思っていたら、そう年は違わなかったのか。

魔法って不思議だ。矛盾だらけの話だった。でも楽しかった。今となつてはそれだけでいい気がする。変つて言われてもいいさ。もともと魔法使いつて時点でもう変だろ？

？

月曜日。TND学園。

「うん？ アレラーテ、明日香は？」

「ああ。明日香ね。今日の朝、用事があるから先に行くとか言つて学園に行つたんだけど。」

丹花とアレラーテが教室で話していた。

「でも、いないな」

「うん。何処行つたんだろ？」

二人がそうしていると担任の大澤先生が入ってきた。

「みなさん。今日は転校生が来ましたよ！」

その言葉に生徒全員が騒ぎ出した。

「イケメンかな？」

「女の子かもよ」

「ライバル増えちゃうよ」

「みなさん静かに！」

先生が静かにさせた後、

「じゃあ、入ってきてください」

それは聴きなれた女性の声だった。

「え〜〜〜〜」

「じゃあアメリカさんはその席に」

「せ、先生。ここは……その明日香の席で……す」

事件発生。

真相。

TND学園。一組。

女子は大興奮。男子は撃沈という構図。天国と地獄を一目で見られるクラスである。

ちなみに一組の担任は平田 澪。ひらた みお ロングヘアの、出来る女を思わせ

「よろしく、ライラ・エマールさんだよね？」

ライラは唯、頷くだけだった。ライラ・エマールは無口で内気、友達達はエリー・カナレスしかないという。髪は銀髪でロングヘア。美しい髪だ。可愛い容姿をしているがなにぶん雰囲気がい暗い。

？

あゝ アルル達に言うタイミング逃した……。怒られるかな？

授業が終わり、俺は避難するように別の教室に行こうとすると、

グイッ グハッ 首が絞まる！ 襟を思いつきり引っ張られ……

……だれ！

俺が振り返ると、

「ちよつと話しがあるの。来て！」

「はい？」

そこにはエリー・カナレスさんが俺の襟を掴んでいる。金髪で腰上まである。いかにも活発少女といった容姿をしている。なんだ？

初対面だよな！？

俺は教室の陰に連れて行かれた。こんな時には般若心経だ。なぜかは聴くな！

「一つだけ言っておくわ！」

顔がやばい！ こ、怖い！

「な、なんでしょう……。？」

「私はあんたのこと好きじゃないわ」

いきなり、なんですか！？ 嫌いつてことを知っておいてほしいと？ さすがに怒りますよ？

「でもライラはあんたのことが好きなの！」

「は……。い？」

なんだって！？ ライラさん？

「だから、あんたはせっかく一組になったんだからライラ以外の女性に近づくのは禁止！」

近づくなど言われてもな。どうすればいいのか？

「あのー いまいち、なにを言っているのか分からないんですが」

「だ・か・ら！ 私はあんたとライラをくつつける！ これは決定事項！」

「ええええええええ！」

勘弁して下さいよ……………。

はあ、はあ、はあ、はあ、拷問だ！

「明日香！ どういうことよ！」

もう！ 次はメリールか。

「明日香！ どうして一組になったんだ！」
丹花。

「ひどいよー 聞いてないよー」

言っていないですものアルルさん。

「『明日香！』」

「もう！ ごめん！ タイミングを逃しちゃってな」
これは事実だ。

「あんた、あんた、私が転校してきたから一組に行つたの！？」
す、するどいな。さすがにこれは、真実は伏せておこう。

「ち、違うぞ。だから気にするな」

「本当に……………？」

「本当だぞ！」

タタタタタタタ 誰かが走ってくる。まさか！？

「明日香！ いきなり契約違反か！」

エリーさんが来た…………… って呼び捨てなんですな。

「ごめん。話はあとで、な」

「『ちよつと！』」

「明日香！ 待て……………」

エリーさんはそれから俺を休み時間が来るたびに追いかけてきた。
耐えられない。

放課後。寮にて。

「あ、明日香」

「なんだ、アルル？」

「うん。えつとね」

クラスが変わってもルームメイトは変わっていない。

「あのエリーさんってなに？」

俺の方が聴きたいんだがね。

「なんかライラって子と俺をくつつけたらしい」

「くつ、くつつける！？」

「どうやらライラさんは俺の事が好きで、仲のいいエリーさんが無口で内気なライラさんの変わりに俺をライラさんと付き合うように仕向けたみたいだな」

「そっか……」

アルルが溜息をした。俺の事を憐れんでくれているのか？ 優しいな君は！

「その二人って選手権の優勝者だね？」

「ああ。専用機持ちになるわけだな。そういえばアルル達はどうなつたんだ？」

「うん。私と丹花も専用機貰えるんだって」

「そっか！ 良かったな！」

「うん。欲しかったのはそっちじゃないけど……」

うん？ どういう意味だ？ どうしてアルルは落ち込んでいるんだ？

「ねえ、明日香」

「うん？」

「今度一緒に……二人きりで遊びに行かない？」

「えっ……」

どうしたんだ？ 悩み事でもあるのか？

「ああ。いいぞ。何処に行きたい？」

「えっ、いいの？」

「うん。いいよ」

「二人きりだよ？」

「おう」

アルルの顔に笑顔が戻った。もしかして遊びたかったのか？ でも二人きりでなにをするんだ？

「や、約束だよ！」

「ああ」

俺達是指切りをして眠りに着いた。さっきのアルルの笑顔は今まで一番眩しかったな。そのおかげで俺は寝るのにだいぶ苦労した。

白い霧の中。

「なあブラウアー・ヴィント」

「ほう。俺に話しかけられるのか」

本当にすぐ会えたな。

「よく分かんないけどそうなんだろうよ」

「本当に不思議ちゃんだな」

「お互い様だろ」

相変わらずブラウアー・ヴィントの顔は見てとれない。

「なにか用でもあるのか？」

「特にないけどな」

俺が呼ばれたと思ってたくらいだからな。

「寂しいのではないか？」

「えっ？」

「男友達がいなくて寂しいのではないか？」

そうなのか俺？ そうなのかも、な。確かに今のところこの学園に男友達はいない。作ろうとはしたが何故か避けられる。

「フフフフ お前が避けられるのは幸せ者だからだぞ、男としてな」

「男として？」

「ああ。お前は鈍感だからな。分からんかもしれないが」

「鈍感、鈍感って！ 何処が鈍感なんだ？」

「自覚してないところが鈍感なんだ」

「くっ。お前はどうかんだよ！」

「お前が鈍感だと分かっているのだから俺は鈍感ではない」

ああ言えばこう言う。

「ところでお前は好きな人がいるのか？」

「はい？」

いきなりなんだ？

「少し興味があつてな」

「なんで興味を持つんだ？」

「まったく。だから鈍感だと言われるんだ」

「くそつ、なんでもかんでも鈍感に持っていきやがって」

霧が少し晴れてきた。

「で、好きな人はいるのか？」

「いねえよ！」

「ハハハハハハハハ 好みが難しいのか、男好きなのか」

「後者は絶対にない！」

「まったく何を言ってるんだろうね、こいつは！」

「そろそろ時間だ。また明日な」

「こんな話なら来ないぞ！」

「こちらから出向くまでだ」

「実はお前が男好きではないだろうな」

「どうだかな」

「否定してくれ！」

白い霧がどんどん薄くなっていく。この霧が出ている間だけこいつと話せるのか。

「では明日香。また会おう」

「ああ。じゃあな！」

――俺は目を覚ました。六時だった。

金曜日の放課後。俺は自宅に向かっていた。当たり前前の行動だ。でも今日は何時もとは違うものもあった。伝えるべきことがある。俺が魔法使いであることやそれに関連する諸々のことを知っていてほしい人がいる。決して幼馴染だからとか好きだからとかではない。

それだけの【絆】が俺達の中にはあると信じたいから。俺の全てを知っていてほしいから。だから俺は今から伝えに行くんだ。きっと、あいつなら信じてくれる。なあ、そうだな、茉莉。

エピソード「永遠の初恋は魔法を見せる」

エピソード「永遠の初恋は魔法を見せる」

とある幼稚園。

放課後の教室にて。

「えぐっ えぐっ 返してよ！ 私の絵を返して！」

「へい へい なに描いてるんだよ！」

「うわっ、こいつ王子様とお姫様描いてるぜ！」

「なんだこれ、ペガサスに乗ってるのか？」

三人の男の子が一人の女の子をいじめていた。

「返して！ 大事な絵なの！」

「自分がお姫様になったつもりか？ バカじゃなくない！」

その中で一番大きな男の子がその絵の真ん中を持ち、

「こんな絵やぶいちやおうぜ！」

そう言うとその男の子は絵を破り捨てた。その絵は王子様とお姫様がちょうど分かれる形でやぶれた。

「いやややややや！」

その女の子はその場に倒れ込み大声で泣いていた。

「いこうぜ！」

いじめっ子三人組が立ち去ろうとすると、

「おい、弱い者いじめか？」

「うん？ おう村雨か。どうだ、お前もやるか？」

「ああ。じゃあ、やるかな！」

そう言うとき明日香は廊下から思いっきり走り出し三人組のところへ行くと一番大きい子を殴り飛ばした。

バコッ

「ぐっ お、お前なにすんだ！」

一番大きい子は床に倒れ込んでいる。

「えっ？ 弱い者いじめだろ？」

「「お前！」」

残りの二人が明日香に殴りかかるが明日香は華麗に避けそれぞれの腹にパンチを打ち込んだ。

「あぐっ！」

「えがっ！」

二人とも苦しそうに倒れ込んでいる。

一番大きい男の子が起き上がり、

「村雨！ お前、王子様きどりか！」

すると明日香は笑い、

「違うな」

「「「あん？」」」

三人が同時に声を上げた。

「俺はこいつの王子さまなんかじゃない。でも——」

明日香はやぶれた絵を見つめた後、三人を睨みつけ、

「ペガサスくらいにならなれるかもな！」

そう言うとき明日香は三人を相手に大立ち回りし、五分後三人組は完全にのびていた。

「さてと」

明日香は絵を拾い教室にあったセロハンテープを手に取り、裏で張り合わせてその女の子に渡した。

「はい」

「あ、ありがとう」

「うん。あつ、あとさ」

「うん？」

「勝手にペガサスにはなれるかもなんて言ってゴメン」

明日香は頭を下げていた。その女の子はどうしていいのかわからずあたふたしている。

「じゃあね」

明日香は笑顔で教室を走って出て行った。

その女の子はそれからすぐ出て行ったので後で聞いた話だが、そのあと明日香は先生を連れてきて自分が殴ったということとどつぷり怒られ、拳句にその三人組の親の所まで謝りに行ったらしい。

金曜日、明日香の自宅。

「ただいま！」

「おかえり〜 今日一人？」

「ああ」

明日香が家に帰るといつものように茉莉が待っていた。

「今日はポテトサラダとシチューだよ」

「おう。着替えてくる」

「うん」

いつもの光景が広がっていた。

「そういえばさ」

「うん。なに？」

「この前、俺がメリール達を連れてきたとき何であんな嘘、言ったんだ？」

「嘘？ なんのことかな？」

「好みの話だよ」

明日香が恥ずかしそうに頬を赤らめ呟く。

「でも一つだけは正解だったでしょう？」

「ま、まあな」

明日香は尚更赤くなる。

「なんで嘘教えたんだ？」

「なんでだろうね？」

「まっ、いいけどな」

二人は笑い合っていた。

「そういえばさ」

「次はお前か？ なんだ？」

「うん。幼稚園の頃の話」

「いじめられていた時の話しか？」

「うん」

「なんだ？」

今度は茉莉が少し赤くなっている。

「あの後、怒られたんでしょ？」

「知ってたのか？」

「うん」

「そうか。格好悪いな」

「そんなことないよ！」

茉莉は顔をぐいっと明日香に近づけ不機嫌顔になる。

「ど、どうした茉莉？」

「えっ、ううん。ただ嬉しかったから、あの時」

茉莉は大きく息を吸い、

「ありがとう」

「もう何度も聞いたぞ」

「いいの！」

茉莉はそう言いながらテーブルに食事を運ぶ。

「あの時、明日香は私のペガサスになってくれたんだよね」

「忘れるよ。俺はお前のペガサスにはなれないさ」

「どうして？」

「どうしてと言われてもな」

明日香が考えていると、

「ねえ明日香。私のペガサスでいてよ！」

「なんだ、急に？」

「いいから、いいから」

茉莉はそう言って食事を始めた。明日香はそれを見て少し笑うと同じように食事を始める。

茉莉が描いたあの絵は今、明日香の家の茉莉の部屋に飾られている。その絵は天馬に乗った王子様がお姫様を城から救い出すという

物語が描かれていた。

現在、茉莉の部屋にはそれとは違う絵があと二枚飾られている。一枚にはお姫様と天馬。もう一枚にはお姫様と王子様。それぞれの絵には、魔法の力で天馬に変えられた王子様とお姫様との邂逅、そして真実の愛によって王子様が本当の姿に戻るといふ物語が描かれているそうだ。

食事が終わり、

「なあ、茉莉」

「うん？ なに？」

「ちよつと変な話をするけどいいかな？」

「変な話？」

「ああ。信じられないような話だ。でも本当の話」

「その話の内容を私は信じた方がいいの？」

「できれば信じてほしい」

明日香は真剣な表情をしていたが茉莉は笑顔を絶やすことなく、

「だったら、どんな話でも私は信じる。明日香も私なら信じてくれるって思ったから話すんでしょ？」

「ああ」

茉莉は明日香の瞳を屈託のない笑顔で見つめていた。楽しそうに。

また、嬉しそうに。

「それじゃあ、お願い。その話を聞かせて」

「うん」

明日香は大きく深呼吸すると、静かに話した。

「俺、実は――」

クラウン・

タイム！ 了

エピソード「永遠の初恋は魔法を見せる」(後書き)

エピソードと書いてはいますが「クラウン・タイム!」という作品が完結したわけではありません。

謂わば「第一部」の完結です。

それではまた「クラウン・タイム! 夢現」でお会いしましょう。

夢現 プロローグ「あの日の誓い」(前書き)

サブタイトルにある通りこれは所謂パート2です。

夢現 プロローグ「あの日の誓い」

プロローグ「あの日の誓い」

空が赤く染まっている。

その何処か寂しげな雰囲気の中、公園で三人の子供が遊んでいた。幼稚園児のようであった。

一人の男の子と二人の女の子。女の子二人は姉妹である。

三人は砂場で時間も忘れ遊んでいた。そんな時――

「ねえ、ねえ、あすかくん。うつつがね、お話しがあるんだって！」

一人の女の子が男の子に話しかけた。

「うん？ なあに、うつつちゃん？」

「・・・・・・えっ!？」

【うつつ】と呼ばれたその子はとても動揺していた。

「はやく言いなよ！」

うつつの姉だと思われる子が頻りに促している。うつつは、「聴いてない」と言いたげに、性格の全く違う姉を見つめていた。

「どうしたの？」

話しに着いて行けていない、あすかが問うた。

「ちよつとまってね！」

そう姉の方が言くと、うつつに何やら耳元で呟いていた。あすかは不思議そうに見つめていた。

「!」

うつつはビクツとすると、顔を大きく横に振る。そして、

「・・・・・・だめ」

とだけ言った。

「じゃあ、はやく!」

姉が文字通り背中を押すと、うつつはもじもじしながら、

「・・・・・・・・・・あすかくん」

小さな、小さな声でうつつは話しだした。

「なに？」

あすかが笑顔で答える。

「・・・・・・・・・・大人になったら」

「うん」

うつつは大きく深呼吸すると、

「・・・・・・・・・・わたしをおよめさんにして・・・・・・・・・・」

・・」

絞り出すような声で言った。

「えっ！？」

あすかは予想外のセリフに驚きを隠せていない。

「いった！」

うつつは下を向き、姉ははしゃいでいる。あすかといえば、

「うん。いいよ！」

最初のあすかの驚いた声や、うつつが今まで悩んでいたのが嘘かのように快諾した。うつつの顔がもっと赤くなる。

空が群青に染まりつつある。それでも、うつつの夕暮れは続いていた。

淡い初恋の、淡い告白の反動がうつつの心臓を高鳴らせていた。

三人は共に途中まで道が同じそれぞれの自宅へ向かって歩き出した。仲良く手をつなぎながら。

「よかったね！ うつつ！」

「・・・・・・・・・・うん」

姉の明るい声にうつつは小さく答えた。

それからあすかの口笛に合わせて姉が歌い出し、うつつはそれを楽しそうに聴いていた。

季節は夏。夜になっても蝉による合唱が町中を包んでいた。そのBGMにあわせるように町にはあすかの口笛とうつつの姉の歌が響い

ている。一週間後には祭りがある。たくさんの屋台に二千発の花火。この町の風物詩である。残念ながら二人の姉妹は母方の実家へ遊びに行くため、あすか達と共に祭りに参加することは出来ないそうだが、しかし二人の姉妹はそれ以上にそのことを後悔することとなる。

あすかはその祭りの日から外へ出なくなり、それからしばらくして引越した。中国へ。

そう、この【あすか】は紛れもなく【村雨 明日香】であり、その祭りはあの悲劇を生んだ夏祭りである。この日、明日香の両親は何者かに射殺された。それにより村雨家三人は親戚のいる中国へ渡る。

あすかの幼く、折れそうな心を支えていたもの。それは姉であり、妹の美和であり、幼馴染の茉莉であり、私立探偵の先生であり、また、夕暮れに交わした、あの日の誓いでもあった。

夢現 第一話「永遠の初恋が見せた魔法」

第一話「永遠の初恋が見せた魔法」

「俺、実は魔法使いなんだ」

「えっ？」

うーん、やっぱりか。茉莉は案の定キョトンとしている。

「その、中一の夏に俺行方不明になっただろ？」

「うん」

「俺、その時魔法の国に行ってたんだ」

自分で話していて気付いたがこの下りはまずい。どう考えてもふざけているか危ない人にしか見えない。

俺がそんな風に考えていると茉莉が、

「それで？」

先を言えと？ 意外と常識的な話なのか？ いや、それはないな。

「えっと、俺はブルーイリジヨニストっていう種類というか、まあ、紅、蒼、白、黒のうちの一種類なんだ。それで俺は元々こっちの人間だから、アナザーマジシャン。要するに異世界の魔術師っていう二つ名を持っているらしい。俺も詳しくは分からないけど」

茉莉は俺が話し終えるとしばらく考えるような顔を作っていた。

これを信じろ、って言われても無理だよな。俺でも無理なもの。

「すごいね！」

「へ？」

茉莉の意外な言葉に俺は思わず変な声を出してしまった。その「すごいね！」にはからかいなどの負の響は無く、ただ純粹に驚いてくれている。

「信じてくれるのか？」

「うん」

完璧な笑顔で返答した。

「なんでそんな簡単に信じられるんだ？」

「だって、今日は四月一日じゃないし、普段明日香は私に嘘なんかつかないし。それに私は明日香を信頼してるから」

あれっ、こんなに心あるお言葉をもらったのに涙は出ない。俺の涙腺は狂っているようだ。

とにかく。

「ありがとう」

それしか返す言葉が見つからなかった。少なくとも俺の頭の中の辞書にこれ以上の言葉はない。

「うっん」

ま、眩しい……

決定。茉莉の二つ名は【サンフラワー・プリンセス】だ。自称はしない方がいいけどな。

？

五月。TND学園にて。

「はい。みなさん。SHRを始めます」

一年一組担任、平田漣の言葉で教室中が静まりかえる。

「今日はみなさんにお知らせがあります。実は今回、【専用トルネード持ちタッグトーナメント】を行います」

その担任の言葉にクラスが湧いた。

しかし、この中で一人。真っ青になっている人がいた。村雨明日香という男だ。

SHRが終わった瞬間、明日香は疾風がごとく教室を出た。その後を追う者がいる。

「待ちなさい！ 明日香！」

その者はエリー・カナレスという女性だ。その表情は金髪の鬼のようである。

「待ちなさいってば！」

エリーはあつという間に明日香に追いつき襟を掴んだ。

「グエツ！」

「さあ、ライラと組みなさい！」

ライラはエリーの友達で明日香のことが好きな女の子である。

「拒否権を発動する！」

明日香は必死で逃れようとしていた。

「そんな権利はない！ それにどうしてそんなに嫌がるのよ！」

その言葉に明日香はよく聞いてくれた、と言いたげな顔になり、

「当たり前だろ！ お前は俺が一組になってから『ライラと明日香ラブラブ大作戦』とか言うのを何回した！」

「次で第三五六回目だけど？」

エリーはそれがどうした？ という顔をした。

「あのな。ほんの数週間しか経ってないのにどうしてそんな意味不明な作戦が三桁突入してるんだ！」

「そりゃあ、明日香が中々ライラを恋人にしないから」

エリーはあくまでも自分が正しいというような自信満々の笑みを浮かべる。

「あのさ。こっちの都合は考慮してくれないのか？」

「オフコース！」

「・・・・・・」

明日香は呆れていた。ここまで自分勝手（本人は仲間想いだと言っ）な人がいるとは。

「それとも明日香・・・好きな人でもいるの？」

突然そんなことを言われ明日香は多少狼狽した。それから、

「いや」

とそれだけ言っつて、またダッシュ。今度は自分のクラスに向かって走った。そして教室に入ると、一番後ろの窓側（明日香は一番後ろの廊下側）に座っている女子の前に行くと、

「お、俺とタッグを組んでくれ！」

五秒ほどしてクラス中が揺れるほどのビッグシャウトが起きたのは言うまでも無い。

？

「俺とタッグを組んでくれ！」

「……………えっ？」

うおっ、俺としたことが。つい必死になってしまった。しかしここはどうしても組んでもらわなければ。

「頼む！俺と組んでくれ！」

俺は精一杯の懇願の眼でその子を見つめた。するとその子は顔を赤く染め、俯き、

「……………うん」

と言った。

「決まり。一年一組タッグ一組目は俺と誰時たれどき 現うつで決定！」

我ながら良い掛け声だ。戦国武将も夢じゃない。うん。

「ちょっと待ちなさい、明日香。明日香はライラと組むんでしようが！」

「こっちは両者同意ずみ。だがそっちは第三者が強制的にやっているだけだ」

ちなみに俺はライラが嫌いなわけではない。ただ強制されるのが嫌なだけだ。

昼休み。学園食堂。

「ごめんな、現」

「……………なにが？」

「さっき、あんな誘い方して」

「……………気にしてない」

現の顔が赤い。まだ恥ずかしいのかな。まあ、みんなの前で誘ったんだからな……………。

誰時たれどき 現うつは俺の幼馴染だ。年代で言うと茉莉より遅いがメリール

よりは速い。セミロングで眼鏡をかけている。もう少し明るければもっともてるだろうに。そんなことを言うのはつまり、好みだからでもあるが。

俺達が他愛も無い話をしていると、

「明日香！」

勢いよく食堂に入り、目ざとく俺を見つけて俺の名をオペラ歌手と同じくらいの響く声で叫んだのはメリールだ。

「あんた、私と組みなさい！」

またその話題？ どうしてこう俺と組みたいのか分からない。

「先約がいるんだ。」

俺は現に手を向けた。するとメリールは、

「誰？」

まあ当然な反応だな。メリールとは中国で知り合ったのだから知らないのも無理はない。

「誰時 現だ。幼馴染の」

「お、幼馴染！？」

メリールが震えだす。うん？ 寒いのか？

「あんた何人幼馴染いるのよ！」

「別に何人いてもいいだろ」

「くっ……」

メリールは何やら悔しそうな表情をしている。

「……はじめてまして。誰時 現です」

現がぺこりと頭を下げる。なんとなく可愛らしい。

「なによ、あんた。鼻の下のばして！」

「のばしてない！」たぶん。

メリールが来たということは要するに、

「「明日香！」」

大正解。アルル＆丹花参上。

「私と組み！」

「私と組んで！」

やっぱりな。

「二人ともすまん。先約があるんだ」

「へ？」

二人ともぼくんとしている。やれやれ。

俺はまた誰？ と聴かれる前に現を指差した。

そして、あなた誰？ と言われる前に俺の幼馴染だと説明した。

そして、そして幼馴染！？ と言われる前に、

「ああ。そつだよ」と言つた。

「まだ聴いてない！」

TND学園といえども普通の授業もする。今日の五、六、七時間目はそれぞれ古典、体育、体育だった（体育二回とか・・・）。

古典は俺の姉さんが教師をしている。姉弟といえども容赦はなしだ。

そして体育で俺は倒れた。理由は貧血と酸欠。アハハ。

というのも、六時間目の体育でのこと。

「今日は普通の体育です。担当は私、大澤です！」

と大澤先生が清々しい挨拶をした。

「まずはグラウンド（一周四百メートル）十周で行きましょう！」

二言目はまったく清々しくない・・・。

四キロ！？ 走れって？ これは死ねって俺の耳には聞こえる。

授業だから走ったことは走った。二キロあたりで倒れるまではね。

「む、村雨君！？ 大丈夫ですか？」

大丈夫に見えますか？

「どうして貧血に？ あ、あと酸欠に？」

質問が根本的に間違ってます。

「朝ご飯は食べましたか？」

ええ。でも原因は分かってます。

「村雨君が倒れるなんて！？」

俺も人間です。

まあ、簡単に言えば俺は体力がない。小中と体育で五段階評価の二以上を取ったことがないときてる。

「トルネードの技術を見る限り体力がないようには……」
それはよく言われることだ。

なぜトルネードだとあそこまで戦えるのか自分でも分からない。

と、まあ、俺の苦勞人ぶりは分かってもらえただろう。

ただでさえ魔法関係や宇宙関係が俺の周りにうるついているのに、日常生活でもこれとは。

でも、苦勞はこれだけじゃなかったんだな。

放課後。文芸部室。

最近トルネードやクラスの問題児のせいで部活に来ていなかった。今日は読む、書く！

しばらく本を読んでいると、

「遅れてごめん！」

アルルが顔色を変えて入ってきた。そんなに真っ青になってどうした？ しかも泣いてる？

「えぐっ えぐっ ごめんなさい。遅れちゃって……」

「そ、そんなに謝るなよ」

「だって、だって……」

「えっ？」

「うん。なんでもない！」

だって、の後が聴こえなかったな。

二時間後。

「帰るか」

「うん」

しょんぼりしているアルル。どうした一体？

部屋に着いてもアルルは少し憂鬱そうだった。

「アルル、どうした？」

「えっ！？ ううん。なんにも！」

「そうか」

そして沈黙。どうしたんだ、アルル！

と、考えていると、

「あ、明日香！」

「うん？ なんだ？」

「こ、今度ね。ど、何処かに出かけない？」

「お、おう。いいぞ」

もしかして今までこれを言えずにダンマリだったのか？

「そ、それでね……二人きりで行きたいんだけど」

「うん。別にいいけど」

「本当！？」

今までの暗雲は何処へ、やら。急に部屋中に響く声で叫んだ。

「ほ、本当」

「ありがとう！」

アルルが満面の笑みを浮かべた。ま、眩しい。疲れが癒えそうだ！

「でも、何処に行くんだ？」

「あのね、ここ！」

アルルは一枚のチラシを俺の目の前に突き出した。

「【エンジェルズ・ワンダーランド】？」

「うん。新しく出来たテーマパークだよ！」

要は遊園地か。そういえば行ったことないな、遊園地。行こうとも思わなかったが。

「でも、そんな新しく出来た所のチケット買えるのか？」

「うふふ」

アルルは得意げに微笑むと、

「ジャーン！！！」

とチケットを取りだした。おお、もう既に持っていたのか。

「すごいでしょ？」

「ほんと、すごいな！」

俺がそう言つとアルルは嬉しそうに軽くジャンプしている。愛くるしいな。

「楽しみだな〜」

アルルはそれから終始「ご機嫌だった。遊びに行きたかったのか。でも普通こういうときは同姓の友達を誘うものでは？」

？

五月も中旬に入ったころ。

「明日香！」

「なんでしょうエリーさん」

「なによ、その他人行儀な返答は！」

今日もエリーは明日香とライラをくつつけるために奮闘していた。

「まあ、いいわ。あんたが仲良くなるのは私じゃなくライラとだから」

エリーは腕組みをして明日香を見下ろしていた。

「それで、今日はなにをするんだ？」

明日香は半ば諦めていた。

「素直な子はモテルわよ。まあ、ライラ以外の子は駄目だけど」

明日香の眼は死んでいた。

「じゃあ、来週の土曜日に二人でおで——」

とそこまで言つた時、明日香は一瞬で覚醒し、

「だめだ。その日は予定がある！」

「予定？　どんな？」

明日香の頭の中は現在フル回転していた。アレラーテと二人きりで遊園地なんて言つたら殺されると分かっていたからだ。そして明日香は、

「第一回文芸部芸術観賞会」

と言つた。

「部活？　この作戦と部活、どっちが大事なの！」

「部活」

明日香は冷静を装っている。

「ったく、分かったわ。日曜にしてあげる」

「・・・・・・・・」

？

なんだろう、この疲労感？ もはやストレスがたまるとかいう次元ではない。

来週の土曜はアルルと遊園地。

翌日の日曜はライラと何かして。

・・・・・・・・

でも、甘かった。まだあったのだ。地獄が。それはある意味俺の、いや俺とアルルの人生を大きく変える出来事だ。

木曜日。放課後。文芸部室。

俺とアルルは何時ものように本を読みあさっていた。

ちなみに俺は推理小説とライトノベル。アルルはファンタジーと歴史物。

外の遠くの方で運動部系の掛け声しか聴こえない平穏でまさに天国と呼べる空間をぶち壊したのは俺の三人目の幼馴染であり、ツインテールの偽名っ子。

「明日香！」

はい。メリール参上。

「明日香、移動よ！」

「はい？」

移動？ 何処へ？

「軽音楽部室へよ！」

「はい？」

本日二度目のアルルとのほもり。

「なんなんだ一体？」
「うん？」

その何事もなかったかのような反応はやめてくれ。

「なんで俺達が軽音楽部室に行かなきゃなんだ？ 大体そんな部あったか？」

「作ったのよ。でも人数が微妙に足りないのよ。だから入って！」

「はい？」

本日三 以下同文。

「お願い！」

「いや・・・うん」

「それは・・・」

俺とアルルが唸っていると、

「好きな楽器やらしてあげるから！」

それはほぼ必然では？

「丹花もいるわよ！」

「えっ！？」

これは驚きだ。まさか【THE 和】なイメージの丹花が軽音楽部に入るとは。

なにを扱うのかぜひ聞いてみたい。

部室前。

「明日香はなに使えるの？」

メリールドアを開けながら聴いてくる。

「ああ——」

俺が答えようとした瞬間、部室の中に丹花以外の人影を見た。
間違いない。

ライラとエリーだ。

俺は小さな声で、

「村雨く止まれ、一、二。村雨く回れく右、一、二。村雨く進め！」

「一、にーグエツ」

首がくくく

「なに逃げようとしてんの!」

原因はわかっている。エリーだ。

「くっ、メリール! 聴いてないぞ!」

「言っていないもん」

だから平然と言うな。

「大体、軽音楽は四人いれば出来るだろ!」

「えっ?」

「ギター一人、ベース一人、ドラム一人、キーボード一人で四人!

ここにはお前と丹花とエリーとライラの四人! 人数は充分だろ

!」

「ああ。私、楽器ダメだし。」

貴様、楽器もできないくせに軽音楽部を作りやがったか。信じられん。許した方も許した方だ。

「私は部長兼ボーカル」

部長だけならまだしもボーカルまでやる気か。目立ちたがりかお前は。

「エリーがドラムよ」

聴いてないし、知りたくもない。

「で、あんたは何が出来るの? まさかなにも出来ないとかくくく」

お前が言えた立場か。俺は、

「俺はドラム以外ならいける」

「くくくえ?」くくく「ビクッ!」

え? って、言ったのがメリール、アルル、丹花、エリー。体を震わせたのがライラ。

「あんた今なんて?」

メリールが目丸くしている。

「ドラム以外なら出来る。ギターでもベースでもキーボードでも」
なぜか数秒沈黙が生まれた後、

「あんたつて」
「なんていうか」
「本当に」
「すごいよね」
「コクン コクン」

？

結局、明日香とアレラーテは説得攻めの末、軽音楽部に【兼部】という形で加入された。

「で、丹花達は何をやるんだ？」

明日香はあまり乗り気でなく、少し気の抜けたように話す。

「わ、私はギターしかできないからギターだ」

と、丹花がその名の通り顔を赤くして言った。

「・・・・・・」

ライラは言葉を発せず、ベースを見つめていた。

「私は・・・・うん。キーボードかな？」

明日香と共に巻き込まれたアレラーテだったが満更でもない様子で、ただ自信なさげにキーボードを小さく指差した。

「明日香はどうすんの？」

メリールが元気二分の二倍の明日香に聞く。

「じゃあ。無難にベースでもするか」

「・・・・え！？」「」「」「ビクッ！？」

その場の全員が驚いた。

「なんでベース！？」

「どうして、明日香！」

「な、なぜだ！」

「作戦ついに成功か！」

「・・・・・・」

気付けば、メリール、アレラーテ、丹花は明日香に数センチしか動

く場所を与えていなかった。

「ちよつと離れる。良く考えてみる。ドラムは出来ないし、キーボードは二人もいらぬ。そうなるとギターかベースだが、俺の雰囲気はどう見てもベースだろ？」

そのセリフに一同は、

（いやリードギターだろ！）

と心の中で叫んだ。しかし、

「なんだって！ ライラと一緒にがしたいんだろ？」

半ば脅迫じみた視線をエリーが明日香に向けている。

「とりあえず振り分けは終了だな」

明日香はそんなエリーをスルーし、話を進める。一度やると決めたらやり通す（体育系以外）のが明日香である。

「で、でも私はリ、リズムギターがいいんだが・・・」

丹花がもじもじしながら明日香やメリールを見つめる。

「じゃあ、メリール練習しろよ。ギター」

「はい！？」

「付き合つてやるから」

「・・・えっ！？」「・・・ビクッ！？」

「デジャブ？」

明日香は溜息をつきながら呟いた。

？

金曜日。放課後。楽器量販店。

「付き合つてそういう意味だったのね・・・騙されたわ」

さつきからメリールが何かをブツブツと呟いている。しかも時々殺意のある眼をこちらに向けてきたりもする。なんなんだ一体？ こうやって楽器を買うのを付き合ってるっているのに。

「練習も付き合つてやるからギター練習しろ。かっこいいぞ、ボーカル兼リードギターなんて」

「れ、練習も・・・してくれるの・・・？」

うん？　なんか急に機嫌直ったのか？

「ああ。別に丹花に習ってもいいけど」

「ううん！　明日香に教えてもらうわ」

そう言くとメリールは胸を張って楽器店に入って行った。やれやれ。

「ところで、どんなのがいいの？」

「自分であつたのを探せ」

と、言ってもわからんか。

「うん。わかった」

わかったのか？　色んな意味で天才だ。いや天災だ。

それにしても久しぶりにこんな店に来た。何年ぶりだろうか。ベ
ースの新しいのでも買いますか。

「ところでさ、明日香」

「なんだ？」

やけにメリールが真剣な瞳をこちらに向けてきた。

「現って子、なんだけど」

「ああ。現がどうした？」

「す、す、す、」

「す？」

「好きなの？」

グハッ　なにも飲んでなくてよかった。

「べ、別に好きとかそういうわけでは・・・」

まずい。顔が赤くなってるような気がする。

「じゃあ。嫌い？」

「嫌いじゃない！」

「そ、即答ね・・・」

まずいぞ、この展開。このままだと俺は現に惚れてるということにな
ってしまふ。

「ま、いいわ。お得意様だし」

「そ、そうか」

お得意様というのは、誰時家はメアリー博士と仲が良く、色んな面で融資している。だから誰時家の二人のR型の娘である誰時まほろじ幻と現は既に専用トルネード持ちである。だから俺はパートナーに現を選んだ。ちなみに幻さんは一学年上である。ちなみにドラゴンマスタ―出現の際は現は風邪で休み。運がいい……んだよね？

「ところでさ、明日香」

またか？　と言う前にさつさとギターを買ったメリールが、

「あんた、す、好きな人とかいるの！」

勢いで言ったからなのか語尾が疑問形になっていなかった。

そしてメリールは顔を真っ赤にした。いや、赤くなりたいのはこっちですが。

「好きな人？」

「う、うん。あんた初恋とかはしたの？」

「うゝん」

初恋ねゝ　強いて言えばそんな経験がないわけではない。甘酸っぱくはなかったけど。

「あるような、ないような」

「なによ、それ！」

うわっ、メリールが本気で怒っている。買い物前よりひどいな。

「なんで怒るんだよ」

「怒ってなんか………ある！」

あるんかい。

「言いなさい！」

「なにを？」

「初恋話をよ！」

「なに！？」

バカ言っな。言えるか。

「言わなきゃ殺る」

あれ？　眼が本気だ……。

「本当に聞くか？」

「えっ！ う、うん」

仕方ない。少し思い出話でもするか。最後まで聞けよ。

？

これは村雨明日香の中学生の時の物語。

中一の二学期の始業式。一人の転校生が来た。

それは誰もが一度はテレビで見たことがあるというアイドル――

「レモンちゃんだ！！！」

その子の名前は【明星^{あかほし} 檸檬^{れもん}】。芸名【明星 レモン】。

「ほんの少しの間ですけど、よろしく願いします」

檸檬は明日香と同じクラスになった。

学校ではサインや写真撮影など禁止とされていたがアイドルが同じ学校とあって、毎日お祭り騒ぎになっていた。

しかし、檸檬には友達がいなかった。

友達になろうと言う子は多数いたが明らかに下心があった。

（ちゃんとした友達が欲しい）

贅沢だとは思ってもやはり信頼できる友達が欲しかった。

そんな、ある日。

檸檬はいつものように周りからの視線に悩まされながら登校していた。

そこに、

「お前、メス？ だよな。三毛猫だもんな」

明日香が学校近くに置いてあった段ボールの中の猫（三毛猫が一匹）に話しかけていた。

（あの人って・・・同じクラスだよな？）

「猫か。飼いたいな。といっても美和が嫌がるから無理か。よしよ

し」

猫を撫でている明日香を見て檸檬は、

（あの人、可愛い）

と思った。

明日香はそこらの男子に比べると明らかに中性の顔をしている。

女装させようと企てる生徒さえいた。

また、猫と戯れる明日香は中学男子の面影はあまりなかった。

（私、あの人と友達になりたいな）

しかし、檸檬は今までこちらから他人へ話しかける事があまり無く、
どうしていいかわからなかった。

そこで、その日の昼休み。

「このクラスで歌います！」

檸檬は禁止されていたクラスでのライブを行った。

（これで明日香君から話しかけてもらえる！）

決して明日香ピンポイントに使える技ではなかったが、確かに人は
集まった。明日香以外。

（どうして！？）

そして先生も集まった。

「明星。職員室まで来なさい」

その言葉を聴いた瞬間、檸檬は崩れ落ち、大いに泣いた。それは学
校中に響いたのではないかとまで言われるほどのものであった。

檸檬は泣き虫だった。昔からそのことで冷やかされていた。

そして、檸檬は暗かった。

アイドルとなって表向きは活発な女の子だったが、やはり根は暗い
女の子だった。

そんな彼女のあだ名は『CRY（暗い）』である。

その日から檸檬の頭の中の何かが切れ、普段のようにひよんなこ
とで泣く子になった。いや、戻った。

あっという間に檸檬は周りから色んな意味で一目置かれた。

そんなこんなで同年十二月。誰も使わなくなった北校舎図書室前。
「ウェーン エグツ エグツ」

檸檬の瞳から大粒の涙がこぼれ落ちていた。原因はこけて膝をすり
むいたことによる。

もはや今の檸檬にこらえる力は残っておらず、中学生とは思えない
泣きっぷりだった。

（誰か助けて。）

檸檬はただただ助けを待っていた。

？

あれは確か俺が中一の時だったかな。二学期の始業式の日にアイ
ドルが転校してきた。

正直に言えば俺はその子を知らなかった。なんせ中国に長くいたし、
テレビはアニメとかしか見てなかったし。今時のアイドルなんて分
からなかった。

見てみると、確かに可愛い顔をしていた。セミロングの髪にカチ
ューシャっていうのかよく分からないけどそういうのを付けていた。
でもそれはレモンとしての姿だったらしく翌日からは付けていなか
ったな。

それで、大して話す機会も無く冬が来て。

俺は一人で誰も来ない北校舎の図書室で本を読んでたんだ。その
図書室には西校舎に出来た新しい図書室に置けなかった本が置いて
いて、中々面白い空間だった。

十二月のいつだったかに、そこで何時ものように本を読んでいた
ら変な声が聴こえてきた。

（泣き声？）

すすり泣くのレベルではなかったな。中学生であそこまで泣ける人
がいるとは思わなかったから、子供でも迷い込んだのか？ なんて

考えて、その方に行くとそこには檸檬がいたんだ。

一人で両手を目に当てて典型的な子供泣きをしていた。

（そういえば泣き虫なんて言ってたっけ）

クラスでそんなことを耳にした気がする。

周りには誰もいないし、先生を呼びに行くのも面倒だったから、

「なあ。どうして泣いてるんだ？」

って、話しかけた。すると檸檬は少しだけ目をこちらに向けたと思っ
たら、

「（ビクッ）！」

って、驚いたような顔をして動かなくなった。

（この子、なんなんだ？）

「大丈夫？」

俺はハンカチを檸檬に手渡そうとしたんだ。そしたら檸檬は、

「あ、あ、あ、ありがとう」

震える手で俺の手からハンカチを受け取り、涙を拭いていた。

しばらくして檸檬がすつくと起き上がって、

「あ、明日香君」

「ん？」

「私と・・・・・・・・・・その・・・・・・・・・・友達になっ
てください！」

と、叫んだ。

「えっ？」

驚きながらも、別に断る理由も無いから、

「うん。いいよ」

と、答えた。

その瞬間、泣いて赤くなっていた顔が恥ずかしそうな赤に変わって、
そして笑顔になった。

それから俺達は四六時中一緒だった。

そのせいで、学校中で付き合っているのでは？ という噂が流れた

が二人とも別に気にしなかったさ。

まあ、今になって考えると楽しかったな。普通の日々だったはずだけど。すこし今までとは質の違う一日一日を過ごしていたような気がするよ。

中学三年の冬。檸檬は転校した。仕事の都合上、卒業式もできなかった。

卒業証書は発行されたんだがな。

とりあえず、それは今あいつの手元にある。きっと大事にしてくれているはずさ。

「まあ、こんなもんかな」

俺は話し終え、メリールに目をやった。

「で、承と結は？」

うっ、するどい。

「なんのことだ？」

「今の起と転しか無かったでしょうが！」

さすが天災。いや今回は天才か？

「速く言いなさい」

「ちっ、しょうがないな」

仕方ないから承と結も話してやるか。

中二の冬。修学旅行の二日目。登山。

俺と檸檬は同じ班だった。檸檬の親が修学旅行はダメだと言ったらしいが反対を押し切り参加となった。

班員は四名。男女それぞれ二人ずつ。

俺と檸檬。あと武田っていうのと黒田だったかな。そいつらは付き合ってるっていう噂だったからこの班はダブルデート班って呼ばれていた。当然ながら俺と檸檬は付き合ってなんかいない。

その登山は昼間から昇って、夕方に着き、星空を眺めて、テントで夜を明かし翌日の朝下山するというものだった。

かなり高い山だったような気がする。でも道はちゃんとあって、どんな方向音痴でも大丈夫だと言われていた。そう言われていただけ。

俺と檸檬は遭難した。というのも檸檬が足を挫き、少し道の脇に行った。

しばらくして、俺は檸檬をおんぶして先を急いだ。

どんな方向音痴でも大丈夫な道は元気で誰も背負っていない状態の人間という条件付きだったみたいだ。

下を向いていた俺と痛みで大して前が見えない檸檬では遭難もするというものだ。

日が傾いてきた。

「ウェーン エグツ エグツ ご、ごめんなさい」

「謝るなよ。俺も悪いんだ。それより泣くな。ほら」

俺は檸檬にいつものごとくハンカチを手渡し、帰る方法を考えた。

「あ、明日香は怖くないの？」

「そりゃあ、怖いさ」

「えっ——」

「でもな。俺は今、恐怖よりも帰りたい気持ちの方が大きい。だから立ち止まらない」

「どうして、そんなに強いのか？」

「強くなんかない。強かったら怖くないんじゃないか？」

「それは・・・」

「だから、たぶん。人間に本当の意味で強いやつなんていないと思うぜ」

檸檬は少し泣きやんでいたが、また盛大に泣きだし、

「でも、でも、帰れないかも。このまま二人とも死んじゃうかもし

れない」

震える声でそんなことを何度も呟いていた。

「なあ、檸檬。帰ったらなにしたい？」

「えっ？」

「俺は速く読書がしたいな。あとアニメも見たい。録り溜めしてるのを。檸檬は？」

「私は……………」

「うん？」

檸檬はパツと笑顔になると、

「秘密」

そう言つて可愛らしく笑つた。

「そうか」

答えはなんでもいいさ。その笑顔が戻ってくるならな。

完全に夜になった。

もしかしたら助けが来るかもしれないが、結構深いところまで来ているのでどうなるかわからない。

「明日香」

「なんだ？」

「上見て！」

「うん？ おっ！」

そこには夜空いっぱい星々があつた。

「綺麗だな」

「うん！」

それから暫し俺達は星空を見上げたまま時間が流れるのを忘れ、心地よい沈黙を楽しんでいた。

俺達はそれからそれぞれ寝袋に入って眠りに着いた。多少寒くはあつたが焚火をしていたから凍えはしなかった。

ふと目を覚ますと早朝だった。

俺達は昨日の弁当の残りを食べ、道を探した。

どのくらい歩いたのか。俺達は広い道を見つけた。

「やっとか」

「ワイワイワイ」

俺達はその道から一行を追った。檸檬の足はだいぶ治っていたから、ゆっくりながらもその道を精一杯歩いた。

それから三時間程で一行に追いついた。そこにはキョトンとして
いる武田と黒田がいた。

「あれ、何処に行ってたの？」

「「えっ？」」

俺と檸檬は顔を見合わせた。

なぜか。それはその場の誰ひとり俺達がないことに気付いてい
なかったからだ。

昨日は自由行動が多く、そこらへんに行っているのだと思ったそう
だ。

責任者いや担任出てこい！

まあ、問題にならなかったのは良しとみるべきか。

それからすぐ下山。

山頂では大してなにも楽しめなかった。でも昨日の夜の思い出があ
るからいいかな。

修学旅行最終日。バスの中。

俺の隣は檸檬だ。

「ねえ明日香」

「なんだ？」

檸檬はニコニコ笑顔だ。なにかいいことでもあったのか？

「星空の夜、楽しかったね」

そのことか。ああ。確かに楽しかった。

「明日香さあ。帰ったら何したいかって聞いたでしょ？」

「ああ。でも秘密なんだろう？」

秘密って言った時の笑顔が脳裏に焼き付いている。

「うん。でも教えてあげるよ」

そう言う——

「まあ。こんなもんだ」

結構、話したな。

「なにがこんなもんよ。まだ結にも入ってないでしょうが！ それにそう言うとの後は？」

「秘密」

「殺すわよ」

「お前ってやつは・・・」

なんでそんなに知りたいのかね　俺の初恋話なんて。

気付くと俺達は俺の家の前まで来ていた。

「じゃあ、また今度な」

「あゝ、逃げる気ね。絶対に月曜日に話してもらおうから！」

「わかったよ。ところで来週から俺とアルルは——」

「当然、軽音楽部に来なさい！」

やっぱりな。

「じゃあ、私は帰るわ」

「ああ。またな」

「ふ、ふん。そ、そのギター教えなさいよ」

「わかってる。でも少しは自分でもやれよ」

「わ、わかったわよ！」

そう言うときメリールは勢いよく俺に背を向けスタスタと早歩きで消えていった。

俺が家に入ると、いつものように茉莉が迎えてくれた。そういえば、茉莉にもこの話はしていなかったような。

俺は特に考えもなしにテレビをつけた。そんな時に限って謀った

かのようにテレビ画面には明星レモンが映っていた。

不意打ちに少し顔が赤くなるのを感じる。

「どうしたの？ あれ、珍しいね、明日香が普通のアイドル見るなんて」

「つけたら映ってたただけだ」

「ふうん。でも満更でもなさそうだよ？ もしかして好み？ でもタイプが違うような」

「眼鏡をかけたら可愛いんだぞ」

俺は茉莉に聞こえないくらい小さな声で言った。

「え？」

「いや、なんでもない。夕食にしよう」

「うん」

あいつの眼鏡姿は反則的だ。それは現に匹敵する。以前、茉莉が言っていた俺の好みは二つ間違っている。本当の答えを知っているのは茉莉と檸檬だけだ。

夢現 第二話「スターチスの花が咲き」

第二話「スターチスの花が咲き」

月曜日。TND学園第五アリーナ。

「それでは専用トルネード持ちタッグトーナメント練習を始めます。専用トルネードを持っている生徒は前に出てください。」

そう言われ、前に出たのは俺と現、丹花とアルル、ライラとエリー、メリールと館。館は前回の大会（ドラゴンマスターのせいで大いなる被害を招いた）で専用機を持ちになった一組の男子だ。メリールはあいつと組んだのか。

・・・・・・待てよ。

俺はあいつと組めばよかったんじゃない？ まあ、いいか。なんとなくだが現と組まなきゃいけない気もした。逃げるのに必死だったということもあるが第六感的なものも働いていた気がする。幽霊的なシックスセンスはいらないが、非常時に働いてくれるのなら致し方ない。

「では、皆さん。展開してください」

俺達は先生の声に従って、一斉にトルネードを召喚した。

俺は言うまでもなく【ブラウアー・ヴィントUW】。メリールは【ユア・ラヴァー】だ。

問題はこの後の六人の機体。

まず、アルルの機体は【エンジェルズ・ブラッシュ（Angel's Blush）】。名付け親は俺。見たまんま最初に頭に浮かんだ名前を言っつて、と言われたからスノー・エンジェルと言ったらナイターゲームもできるほどの眩しい笑顔くれた。

その機体は遠距離型で巨大なスナイパーライフルを持っており、一発一発が重い。またアルルのR型の能力である相手の心を読むという力を最大限活かせるものとなっており、相手がどこに向かおうとしているかを察知し、そのライフルで狙い撃ち。驚異的な機体だ。機体色は白。というより純白。そこに赤色のラインが入っており、美しい仕上がりだ。

スナイパーライフルはスノー・エンジェル時の身長である約三メートルはあり、また手元から三分の二程いくと細くなっている。その細くなっている部分が百八十度折れると必殺技的なものが撃てるらしいが詳しくは教えてくれなかった。

少し細身な機体で、ライフル以外の装備は無いのでスピード重視されており、身軽な機体だ。

丹花の機体は【十六夜^{いざよひ}】。名付け親は俺。丹花もイメージ通りのを、と言ったのでこんな感じに。少し膨れてはいたから、「変えようか？」と聞いたがこれで良いと一括された。でも、丹花はやっぱり日本語の漢字が合う気がする。

その機体は中距離型で、持久力と機動力に優れ、武器は巨大な剣と巨大なエネルギー粒子砲。

それらを一度に両方使うことができないのが弱点であるが、零コンマ三秒で剣から大砲へ。またはその逆への変換が可能なので、そう支障はない。なんといってもパワー戦が得意な機体である。

機体色は黒。こちらは漆黒。色と機体の大きさを見ればまさにアルルと対になるような機体だ。その機体はアルルと違い重武装と呼べる大きな機体で、力自慢だな、とすぐに分かる。黒に赤いラインがあるがアルルの淡紅色に対し濃緋色といった感じである。

ライラの機体は【イニニューメラブル・ウイング(Innumerable Wing)】。名付け親は不明。意味は【無数の羽】。機体を見た感じだと意味不明。あまりにもシンプルすぎるというか

無防備だ。装備は何一つなく、唯、装甲があるだけといった感じ。アルルのよりも薄い。

機体色は淡い水色。

エリーの機体は【タイガーズ・ロー（Tiger's Roar）】。名付け親はエリー本人。意味は【虎の咆哮】。

機体色は白に大胆な青いライン。

装備は薄い。両手以外。両手に虎の前足を縦横に広くしたようなものがあり、爪は剣のように鋭く長い。それは飛ばせるらしく遠距離にも対応している。表向きは近距離型。両手は盾にもなり、かなり厚い。スピードもあるらしく後ろに回り込むのは難しそうだ。その両手以外は大きくて装備は無く、やはり身軽さを重視しているようだ。

館の機体は【ABSP（Active behind the scenes person）】。読み方は【エービーエスピー】で、意味は【暗躍者】。たぶん自分でつけた名前だろう。

機体色は黄色に白いライン。俺と同じような剣にメリールと同じような銃を一丁というシンプルな機体。盾も左手に召喚可能。言っちゃ悪いが量産機の進化版といった感じだな。

最後に現の機体。その名は【パープル・レイン（Purple Rain）】。名付け親は現本人。

機体色はその名の通り紫。

装備は標準的でメリールのように両手に銃だが、光線ではなく実弾であり、威力より連射性を高めている銃口が一つのガトリング銃と思えばいい。銃口が一つと言っても中には三つの区切られた穴があるので実質銃口は三つということになる。それらをいつぺんに何発も撃てるので普通のガトリング銃より強力だ。両手の銃を剣にすることも出来る。しかも片手に銃、片手に剣というやり方も出来る。二つの銃で右手の方を後ろ、左手の方を前にして合体させると左

手の方（前にきている方）の銃口から細い棒のような物が出て、チヤージして放つことも可能で、それが現の必殺技だ。

と、ここまで機体の説明をしたがどれも強力そうだ。ライラはよく分からないのがかえって恐怖を煽る。遠距離や中距離が多い中、近距離の俺は残れるのか？ スピードはWFシステムを使えば誰にも負けないだろうが直接勝利に繋がるかどうかはわからない。

「では、始めましょう。量産型の皆さんはよく見ておいってくださいね。」

俺達は一斉に飛んだ。空中で何度か旋回し止まる。

「それでは皆さんには鬼ごっこをしてもらいます。」

「鬼ごっこ！」「鬼ごっこ！」「鬼ごっこ！」「鬼ごっこ！」

「はい。タッチされたら負けです。ただし普通の鬼ごっこではありません。自分のトルネード能力でタッチさせないようにするのはあります。だからスピードだけでは勝利はできません。」

なるほど。ある意味すごい練習だ。

「タッチは関係なくしてください。あと——」

そういうと先生の声が聞こえなくなった。あれっ？ 故障？

ふと周りに目をやると他の女子全員が俺の方をネコ科動物の目で見ている。あっ、イエ猫じゃないよ。豹とかジャガー的な目だ。

俺は館の方にも目をやったが館はそっぽを向いていた。

しばらくすると、

「村雨君、故障じゃないので安心してください。わざとこちらから回線を切っていました」

先生の声だ。

「なぜです？」

「そんなことはどうでもいいんです。それより本気出さないとやばいですよ」

「えっ？」

「がんばって逃げてくださいね。では」

そして声が途切れた。どういう意味だ？

ブ——ン

サイレンの音が響いた。その瞬間、

「明日香は私が殺る！」「私がつかまえる！」「私だ！」「あんたら引つこんでなさい！」

「……………私が」……………（コクン）」

ギャ——

六対一？ 館は？ 無視を決め込んでる！？
なんで俺だけ！？

俺は急降下したり急上昇したり、地面すれすれを滑空したり雲の上まで行ったり…………

「先生！ 女子たちに何を言っただんです？」

「えっ？ ナンノコトデシヨウ？」

露骨に嘘が下手くそだ、こんちくしょう！

俺はWFを発動。六人の女子を煙に巻く。

再びサイレンが鳴り、勝者なしで鬼ごっこという名のいじめは終わった。

俺が館の近くでWFを解除し、

「お前はいいよな。追われなくて。」

なんて話しかけると館の顔がこちらを向いた。しかし館の眼を見た俺は息をのんだ。

その眼は明らかに人間の黒眼ではなかったからだ。黒色ではあつたが機械のような眼だつた。

（なんだ、この眼？）

そう思つたのもつかの間、館が瞬きするとその眼は普通の黒眼になつていた。

「どうかしました？」

館が丁寧な俺に話しかける。

「いや、別に」

今のは俺の錯覚か？ 下手したら字が流れだしそんな眼だった。考える時間はそんなに与えられなかった。先生の指示で地上に降り、その日の練習は終了した。

全員が自分の能力を使わなかったから練習で新たな発見はなかった。

ただ、館の眼が異常に俺の脳内にこびりついていて気持ち悪い。考えすぎだろうか？

それから毎日、放課後に個別の練習をし、ほとんど他者の能力を知ることができないまま週末が来た。そう。波乱の週末の幕開けだ。

？

土曜日。エンジェルズ・ワンダーランド。

明日香とアレラーテはTND駅から一時間程で到着し、その不思議の国の中に入って行った。

「ねえ、明日香は何をしたい？」

アレラーテは満面の笑みで明日香に問うた。

「俺はアルルがやりたいやつでいいぞ」

二人はまず一番の目玉であるジェットコースターである【エクストリーム・クラッシュ】の列に並んだ。

「日本人って本当に並ぶの好きだな」

「そうだね」

そんなごく普通の会話でもアレラーテは明日香というだけで幸せであつた。

（これはリードしてるよね？ 他の子より！）

そんな気持ちで心がいつぱいになっている今のアレラーテには並ぶ苦痛なんて感じられなかった。

TND学園。メリールの寮室。

（明日香は今日、家だよ。茉莉にばかり取られてたまるもんですか！）

メリールは携帯を勢いよく開くと驚異のスピードで明日香宅に電話をかけた。

『はい。村雨ですけど』

出たのは茉莉だ。

『あつ、メリールだけ。明日香いる？』

この数週間で二人は普通の友達のように会話できるほど親しくなっていた。

『あつ、メリール。明日香は出かけてるよ』

『えっ、どこに？』

『エンジェルズ・ワンダーランドだよ』

『……誰と？』

『あつ……！ えっと……』

『正直に言っているのよ。責めないから……あなたは』

『すっごく最後の言葉が引かかるんだけど』

『大丈夫よ。さあ！』

『あ、アレラーテさん』

『カチャ』

『あれっ今の銃の——』

プー プー プー

『よし、殺る！ 殺る！ 殺る！』

メリールの眼はいつていた。

TND学園。丹花の寮室。

（今日、明日香は茉莉さんと一緒だよ。よし！）

丹花は携帯で明日香宅に電話をかけた。

『あつ、メリール？』

『えっ、いや私は丹花だが？』

『ああ。丹花さん。なに?』

「明日香は?」

『えっ、いや・・・その〜』

「もしかして・・・」

『あゝ あかね』

「正直に言ってくれ」

『エンジェルズ・ワンダーランド・・・』

「そう・・・」

『えっと、丹花さ——』

「ア・ス・カ」

丹花はブツブツ言いながら部屋を出た。

TND学園。一階廊下。

「ねえ、ライラ。ここ行かない? エンジェルズ・ワンダーランド」

「・・・」

「下見だよ、下見。明日香と明日行くんでしょ?」

「・・・(コクン)」

「よし、行こう!」

TND学園。現の寮室。

「・・・明日香、なにしてるんだろ?」

現は明日香から誘われてからずっと、そんなことを考えていた。

「・・・明日香は携帯持たない派らしいし」

それから十分程考え、現は決心した。

「・・・五十嵐さんかけよう」

喋るのが苦手な現だが思い立ったらすぐに行動に移す。それはあの夕陽の日から変わらない。

「・・・もしもし」

『え、えっと今度は現ちゃん?』

「・・・はい」

『明日香?』

「!」

『エンジェルズ・ワンダーランドだよ。私も行こうかな。入れるかどうかは別にして明日香が心配なんだ』

「………私もいいですか?」

『もちろん。明日香の味方になってくれるならね』

茉莉の声は少し震えていた。

エンジェルズ・ワンダーランド。否、修羅場。

「えっと……これは、これは皆さん……お揃いで……」

明日香の目の前にはどうやって券を使わずに入ったのか。メリール、丹花、ライラ、エリーがいた。

「明日香? なにをしてるのかしらね?」

「ア・ス・カ」

「いい度胸じゃない! 第一回文芸部芸術観賞会はどうしたのよ!」

「………」

「あつ、えっと、これはね。その、あの」

「「アレラーテは黙って!」」

「!」

アレラーテは泣きそうになっている。

「おい、ちよつと言いすぎじゃ——」

「「はい?」」

「「すいません」」

明日香とアレラーテは同時に謝った。

?

悪いことは出来ないもんだな。いや元々ここに来るのが悪かったわけじゃない。ウソが悪かったんだよね
どつぷり怒られたアルルと俺はエンジェルズ・ワンダーランドを後

にした。

と、外で待っていたのは、

「茉莉に現？ どうしたんだ？」

「どうしたじゃないよ！ 明日香が心配で来たんだけど大丈夫だった？」

「いや、大丈夫ではないような」

にしても俺はいい幼馴染を持ったな。一人以外。

「現もそれで来たのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・私は」

相変わらずだな。まあ、そこが現の良いところなんだが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・明日香に会いたかったから。」

「えっ！？」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

なんだって！？

「・・・・・・・・・・・・・・・・私は明日香に会いたくて来た」

恥ずかしがり屋で大胆ってどんなやねん。

「あ、ありがとう」

不意打ち過ぎてぎこちない応答しかできん。

「えっ、それで現ちゃんここに来たの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん」

「この子」

「すぐく」

「強敵」

「の予感」

「（コクン）」

おお。メリール、アルル、丹花、エリー、ライラの連携コンボだ。
何時そんなに仲良くなっただ？

それにしても現は、いや別に嫌じゃないけど。

「じゃあ、帰るか」

「そうだね」

「そうね。明日はライラと明日香がここに来るのよ！」

「あんたも勝手ね」

と、メリール。

「呆れて言葉も出ない」

と、丹花。

「ほんと」

と、アルル・・・って

「アレラーテには言われたくない！」

「うっ」

そりや言われるだろうな。やれやれ。

この言い争いは永遠に続きそうだな。よし、

「なあ茉莉、現」

俺は小さな、小さな声で茉莉と現を呼んだ。

「帰ろう」

「うん」

「・・・・・・・・・・わかった」

俺達はその場から忍者顔負けの動きで離れた。だから、あの言い争いが何時まで続いたかなんてわからない。

「なんか疲れたな」

「明日香が嘘つくからだよ」

「反省してます」

「よろしい！」

「・・・・・・・・・・」

現、さっきから話に入らないな。入りづらいのか？

「なあ、二人とも。花屋さん寄っていいか？」

「うん。いいけど、何買うの？」

「それは、お楽しみだ」

俺はそこから一番近い花屋に入り、【スターチス】を買った。
「なんて花？」

茉莉が興味深げに聞いてきた。

「スターチス」

「なんで、その花なの？」

「花言葉ってあるだろ？」

「うん」

茉莉と現は、それで？ という顔をしている。なんとなく壮観だ。

「花言葉って言っても一つの花にいくつもあるから、これって言うえるわけじゃないんだけど、スターチスの花言葉の一つは——」

「一つは？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「【永遠に変わらない心】と【変わらない誓い】」

「ふん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

おつ、やっぱり現は反応したな。

「あれっ？ 現ちゃんどうしたの？ 顔、真っ赤だよ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんでもない」

現も覚えてたんだな。あの日のこと。

と言つても最近まで俺も忘れていた。うん、今あの日のことを持ってきたのは少し意地悪だったかな？

「明日香。現ちゃんとかあったんでしょ？ その花が関係してるんじゃない？」

「ご名答——と言つのはやめておこつ。なんとなく、さ。」

あの日みたいな夕陽が俺達の眼前にあった。

決してこれが不安の象徴ではあつてほしくないな。

？

日曜日。朝七時。明日香宅。来客あり。

「お前の辞書に非常識という言葉は無いのか？」

明日香がパジャマ姿で目をこすりながらつぶやいている。

「どっちが非常識よ！ みんなを置いて行つて！」

と、日曜朝七時からライラと共に明日香宅へ乗り込んだエリーが甲高い声を上げている。

「みんなは置いて行つてない。ちゃんと選別した」

「で、なんで五十嵐さんと誰時さんなわけ！」

要するにどっちもどっちである。

今日は明日香とライラがデートをする日。

ライラは基本あまり喋ることをせず、ほぼエリーに行動などを一任している。

しかも、二人は暮らしているマンションで隣同士らしく、いわゆるエリーはライラの通い妻的存在である。

そんなエリーの、明日香とライラのラブラブ大作戦であるが、よく考えるとおかしいものであり、ライラは明日香が好きで、明日香を好きにさせたい（と思っているのはエリー）のであるが、その作戦を明日香にさせている。常識的にはライラが行動するのが普通だが、明日香は振り回されており、ライラは話について行けず、エリーは特に何も考えていないのでその辺に気が付いていない。

朝八時。

「じゃあ。行つてきます」

不機嫌顔の明日香がドアを開けながら言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ライラは頬を少し赤らめたのみ。

「い、いつてらっしゃい」

茉莉が心配そうな声で見送る。

「今日は二人きりにしてあげる。でもライラを放っておいたら殺すから」

エリーは今回、明日香とライラを二人きり（尾行なし）にする作戦にした。

「はい。はい。はい、は一回」

と明日香は半ば自暴自棄な発言を残し、ライラと共に外出した。

「なあ、ライラ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何処行く？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ライラはよりうつむく。

「えっと、本当は俺といえるの、嫌なんじゃ——」

「（ブン　ブン　ブン　ブン）」

ライラは珍しくオーバーアクションで首を横に振った。

「そ、そうか」

明日香は多少戸惑いつつもライラと並び、歩いている。

「じゃあ、このまま歩くか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

ライラは首を少し傾げた。

「いや、こうやって並んで歩くだけって、いうのも悪くないかなって。あつ、ライラがどこかに行きたいって言うなら別だが。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ライラは少し考えるようなそぶりを見せた後、

「（コクン）・・・・・・・・（コクン）」

と間をおいて二回うなずいた。

二人の若い男女が歩くのを薄暗いビルの陰から見ている男がいた。

二人の若い男女は明日香とライラ。そして陰にいる男は——

「トーナメントは火の海に。村雨明日香を血祭りに。アナザーマジシャンは地の底に」

無表情で語る彼の眼はビデオカメラのように感情を感じさせない冷たい視線であった。

「ドラゴンマスター。いや兄の仇は我が。リリパットがはらす」
リリパットと名乗るその男は館翼だった。

リリパットはクククと小さく声だけ笑うと、白昼に生まれた闇に消えて行った。

「今日は楽しかったか？」

明日香が笑顔でライラに聞いた。

「（コクン）・・・・・・（コクン）」

「そうか」

この一日で明日香はライラをかなり理解しており、行動パターンや僅かな仕草で気持ちが分かるようになっていた。

「何か記念でも買つか？」

「！・・・・・・」

ライラはうつむきつつも何やらキョロキョロしていた。そして目が留まった場所は、

「お花がいいのか？」

花屋さんだった。それは昨日、明日香と茉莉、現で来た所と同じ店である。

二人は花屋に入り、一通り店内を回った後、

「どれがいい？」

と明日香がライラに問う。

ライラは少し焦るような目をし、元来た道をもう一度回ると薔薇のコーナーに止まった。

ライラは無口ではあったが何事にも素直に反応した。

「どの色がいいんだ？」

「！・・・・・・」

ライラは帯紅の薔薇を指差した。

明日香はその薔薇を何本か取ると、会計をすませライラに手渡した。

ライラは顔を真っ赤にして、コクンとうなずいた。

「どういたしまして」

明日香はそう言うのと店から出て歩き出した。ライラもその後を追う。

「ありがとう」

小さく、今にも消えて無くなりそうな淡い声が明日香の耳に届いた。
明日香は振り返り、

「こちらこそ」

そう笑いながら答え、

「ありがとう」

と言って歩き出した。

ライラの顔は手に持つ薔薇と同じくらい赤くなっていた。

夕方。明日香宅。

「おかえり二人とも」

茉莉が笑顔で明日香とライラを出迎えた。

「ふーん。思ったよりいい感じじゃない。あつ、薔薇！？ もう二人は恋人ね」

浮かれたエリーが餌を待つ雛鳥のように甲高い声を上げている。

「違う」

明日香は淡々と答える。

「まっ、いいわ。今日のところは許してあげる。じゃあ私達帰らなきゃだから」

エリーは早口でそう明日香と茉莉に伝えたと靴を履きだした。

「ご飯は食べていかないの？」

茉莉がエリーとライラに向かって訪ねた。

「うん。私はちよつとね」

「……………（コクン）」

「そう」

茉莉は少し残念そうな顔をしたのち、

「また遊びに来てね」

そう笑顔で二人を送った。

「その笑顔は凶器ね」

「（コクン）……………（コクン）」

「そうだな」

ここにきて、三人の意見が初めて一致した。

？

「あつ、ライラ」

俺が帰ろうとしたライラを呼びとめると小さく振り向いた。

俺は手で銃を作り、

「バーン」

と撃つ真似をした。

「！・・・・・・」

「なにやってんの、あんた？」

「帯紅の薔薇の花言葉は『私を射ぬいて』だからな」

「！・・・・・・」

うん。なんとなくのサプライズは成功したかな。

「あんたって、なんというか」

エリーが不機嫌顔に！？ なぜですかね？

「今のは犯罪に匹敵するよ、明日香」

茉莉まで！？ 失敗？ 今の演出よかったと思ったんだがな

そうこうしているうちにライラとエリーは帰って行った。

俺がリビングへ行って、夕飯の支度をしようとする、

「いいなあ、ライラさん」

「なにがだ？」

茉莉が遠い目をしている。どうしたんだ、一体？

「薔薇」

「はい？」

「薔薇を買ってもらっていいなあ」

それか。あれっ、茉莉って薔薇好きだったっけ？

「言っとくけど、薔薇が好きってことではないよ」

え〜〜〜 じゃあ・・・プレゼントが欲しいのか。って、人の心読

んでるのか？

「今度なにか買ってやるよ。だから機嫌を直してくれ」

「じゃあ、なにかお花がいいな。素敵な花言葉を持ったの！」

「素敵だ、か。アバウトすぎて何を買っていいのか分からない。」

「わかった。今度な」

月曜日。TND学園。特別休日。

いきなり「明日は学園お休みです」って電話が掛かってくるとは、まっ、休みっていうのは有難いんだが、生憎今日は現とトルネード関係の約束があるからゆっくりはできない。

「待たせたな」

「……………うん。私も今来たところ」

現は青いジャージを着ている。今日はトルネードのメンテナンスをするから丁度いい服装だな。そういう俺は制服なんだがな……

「じゃあ始めるか」

「……………うん」

俺達はまずパープル・レインからメンテを始めた。ちなみに俺も現もメアリー博士からトルネードの扱いは習っているから手慣れたものだ。

現とパープル・レインとの友情度は73%だ。最高が74%と言われているから、かなり友情度は高い。

「……………明日香とブラウアー・ヴィントは？」

あつ、確かに友情度を見てなかったな。あいつは一体どれくらい俺と友情を育んでいるのかな？

俺はブレスレットを操作し、数字を空中投影させた。すると、

「Lu Lu Lu（起動音）【96%】La（終了音）」

「……………」

二人して沈黙。頭の中で念仏が聞こえてきた。

「えっ！？ 96パーセント？ どういうこと！？」

「・・・・・・・・・・すごい」

最高記録だ。ギネスに載るぞ、これは。

「博士に伝えるか」

「・・・・・・・・・・うん」

数分後。メアリー・デイソン博士到着。

「やつほ〜〜 明日香君！ 現ちゃ〜〜ん！ どうどう？ この機体！」

と、博士は自分が乗ってきた赤黒いトルネード「ブラッディー・メアリー」を見せびらかした。どうやら新作らしい。

で、何しに来たのか、おぼえてますか？

「96%なんてすごいね！ ありえないよ。さすが明日香君とでも言おうかな」

「ギネスに載れます？」

「うん。無理」

えっ？ なんで？ 新記録なんじゃ・・・？

「だって、トルネードだから」

妙に納得いくのは俺だけ？ 確かにね。トルネードだからね。シクシク。

「まあ、残念だけどね。その代わり私がチューしてあげる！」

「遠慮します」

この疲労感をどうしたものか。

「い〜じゃん！ い〜じゃん！」

「そういうことを淑女はしませんよ」

「私は淑女ではない。」

自分で否定するな。この人はもう！

「冗談だよ。明日香君のファーストキスはメリールが現ちゃんが奪うんだから！」

「・・・・・・・・・・！」

今までじっとしていた現が急にあたふたしはじめた。そりゃそうだ

な。冗談にも程がある。

「博士。言つていいことと悪いことがありますよ」

「……うん。うん」

「事実ですから！」

ダメだ、こりゃ。現も災難だな。

「現、気にするな。そんなことにはならない」

「……」

あ……れ？ 頬をプクーと膨らませている。なんだ？

「あちゃ、明日香君ダメだよそんなこと言っちゃ！」

えっ？ 俺のせい？ 何か言葉のチョイスを誤ったのか？

「明日香君は罰として現ちゃんにキス！」

「その手にのるか…… もつと機嫌を悪くするわ……」

隙あらば好き勝手言ってくれる実年齢二十代半ば、精神年齢十代前半のトルネード開発者だ。

「大丈夫よ。不機嫌にはならないから」

「あなたは信用しません」

いや、信用できません。

「現ちゃんを見て！」

と言われ俺が現を見ると、

「……（ジト……）」

えっ！？ 俺が悪いのか？ くそっ、騙されている気がする！

「さっ、してあげな。ファーストキス！」

「あつ、それ無理だな」

「……どうして？」

どうしても、なにも、

「もうファーストでは——」

まずい、地雷臭がする！ 言わなければよかつ——

「なんだって！」

「……（ヒクッ ヒクッ）」

あゝ 博士はのってくるし、現は泣きそうだ。うん？ なぜ泣く？

「聞かせなさい。お姉さんにその話を詳しく！」
今更お姉さん面するな！

それから二時間。地獄に俺はいた。

夕方。寮室。

「っ、疲れた」

俺は這うように自室に入った。

「明日香、大丈夫？」

そういつて気遣ってくれているのはアルルだ。ほんまええ子やな

「どうしたの？」

「博士と現に追われた。」

「追われた！？」

まあ、トーナメントの練習にはなったかな。トルネードで追われたから。二対一はかなりきついな。練習にはなったがコンビの現との絆が危うい。

「アルル。女の子って何を貰ったらうれしいんだ？」

「えっ！？」

現に何か持つて行こう。

「な、なんで？」

「まあ、よく分からないがどうも現が怒ったのは俺のせいみたいだからプレゼントをと思ってな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

またやってしまったのか？俺はどうも女の子を怒らせる天才のようだ。間違いなく汚名だな。

「アルル。お、お前もなにか欲しいのか？」

「えっ！？ いいの？」

やった！汚名返上！

「ああ。今度買い物行くか」

「うん！ ありがとう明日香！」

アルルは満面の笑みを浮かべた。茉莉といい勝負だな。要は東洋

派が西洋派かという問題だ。

それにしてもここまで笑顔になれるのも考え物だな。

「楽しみだな〜」

女の子って難しい。と再認識させられる今日この頃であった。チャンチャン。

？

闇夜の中。一人の男が円形の筒を持って立っている。

その男はその筒の上の方をゆっくりとまわし開けようとしていた。

その男の名は館翼もといリリパット。

リリパットがその筒を開けると、中から紫色に輝く小さな光の塊が無数に出てきた。その紫色の光はホタルのようにリリパットの周りを飛び交い時たまその不気味な顔を映し出していた。リリパットは無表情なまま「ククク」と笑うと、その光を集めるように手を広げ、「手駒は揃った。この憎悪。紅蓮の如く」

そう言うのと、その光がリリパットの持つ筒に戻った。

リリパットは闇に消えていく。しかし、「ククク」という不気味な笑い声はその姿が消えてもしばらくその場所を支配していた。

闇夜の中。三人の女性が一人の男の行動を監視していた。

明日香と同じくらいの背のロングヘアが一人、百七十センチくらいのセミロングが一人、小柄で細身なボブカットのようなショートヘアが一人。

「それで？ うまくいきそうなの？」

ロングヘアの少女が言う。

「いきそう」

小柄の少女が答えた。その声にはあまり感情がこもっていない。

「よかったね」

セミロングの少女が幼い声で相槌を打つ。

「ふ〜ん で、そのアナザーマジシャンってどんな男なの？」

ロングヘアの少女は少し不機嫌そうに空を見上げながら聞いた。

「えっと〜 確か、名前は村雨明日香。十五歳で、R型で身長は百七十五センチ〜 私達と同じブルーイリージュニストでアナザーマジシャン！ えっと〜 探偵を目指していて、すごく可愛い顔しているの」

セミロングの少女がハイテンションで語っている。

「メビューは本当にいいわね」

セミロングの子はメビューという名らしい。

「ソニアこそ、そんなふくれっ面しなくても〜」

ロングヘアの少女はソニアというらしい。

「楽しみ」

一番小さい子がボソツと呟いた。

「ノアの考えていることはまったく理解できない」

「ほんとにもう。行くわよ、メビュー」

「はい！」

三人は溶けるように闇に消えた。蒼い髪の三人は小さな風を起こし、闇に溶けるように消えた。

？

金曜日。専用トルネード持ちによるトーナメント当日。

今回もTND学園以外の人が大勢集まり満員御礼。始まる一時間前から歓声が絶えない。

「現。調子はどうだ？」

「……………大丈夫。やれる」

よかった。俺はなんか疲れてるな。まあ、やれるけどね。

「……………明日香。がんばろう」

「ああ」

さて、スイッチを入れ換えよう。俺達の力、見せつけるか！

夢現 第三話「死と生の狭間に」

第三話「死と生の狭間に」

第一試合 村雨明日香 & 誰時現 VS アレラーテ・オランジュ
& 江戸川丹花

「いきなりか」

第一試合からとは本当に俺は運がいい。ああ。運がいい。ハア~~~~

どうやら現はやる気まんまん。少し分けてくれ。

そんな言い草でも俺は負ける気はない。さて、やるか。

ブ————ン

『試合開始』

アナウンスが会場に響いた。

「行くぞ、現！」

「……………うん！」

俺とブラウアー・ヴィントUW、現とパープル・レインはそれぞれ左右に分かれた。

俺を標的とするのはアルルとエンジェルス・ブラッシュ。現への攻撃が丹花と十六夜だ。アルルは俺に巨大なスナイパーライフルを向けている。あれは、

「明日香、私の力、見せてあげる！」

俺は専用剣、月光を召喚。アルルの攻撃を相殺する。避けられないのは俺が動く所をよまれているからだ。アルルのR型の能力は相手の心をよむというものだ。トルネードに乗ることでその能力を増す。くそつ、アルルの光線、重い」

一発一発が重いうえに確実に当たり、確実にダメージが溜まる。

「WF発動！」

俺は超高速移動能力WFシステムを発動した。

白い光を放ち俺は自分の分身（速く動いているのでそう見える）を作りながらアルルに接近する。アルルは俺の分身を撃っている。
「行くぜ！」

？

現は両手に連射銃を召喚し丹花に放つ。

丹花は左手に盾（体を全て覆う程の巨大なもの）を召喚し現の銃弾を防ぎ、右手にエネルギー粒子砲を出し、現へその砲口を向ける。
エネルギー粒子砲はチャージに時間がかかるがその威力を持つ。

「行くぞ、現！」

五秒のチャージで一発放つ粒子砲を現は避けているがそちらに気を向けすぎて自分が攻撃するのを忘れていた。

丹花は、

「フフツ　甘い！」

急にスピードを上げ、粒子砲を大剣にチェンジさせ現の懐に入った。

「！」

「もらっ——えっ？」

丹花は驚いた。丹花が振りかざした剣は現の体ではなく違う剣にあたっていた。

「大丈夫か？」

その剣は月光だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・明日香！？」

「あ、明日香！？」

明日香はWFのまま丹花を押し退けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫？　明日香！」

「ああ。大丈夫だ」

明日香がそう言った瞬間アレラーテの光弾が五発、明日香の背中に直撃した。

「くっ」

「明日香！」

現は明日香に近づく。

「大丈夫だ。行くぞ！」

「……………うん」

再び明日香と現は左右に分かれた。明日香は既に【64・78%】になっている。

現は地上で丹花と、明日香は急上昇した。

「明日香、もらった！」

アレラーテはチャージしファイナルウェポンを発動した。その光線の波動は空気を切り裂き明日香に向かって行った。

「フルチャージ・クラウン・クラッシュ！」

明日香がそう叫ぶとWFの光が体から消え、逆に月光にその光が移った。そしてその輝く月光でアレラーテの光線を切りつけると光線の向きが変わり丹花へと向かった。

「なっ！？」

丹花は急に自分へ向かってきた光線を必死に盾で受ける。

その瞬間、明日香は再び月光にエネルギーを溜め、

「インスタント・ショック！」

アレラーテを切りつけた。

アレラーテは丹花に気が回っており明日香が近づくのに気付かず、諸にその攻撃を受けた。

「キャ！？」

切りつけられたアレラーテは丹花の方へ向かって急降下して行った。丹花はそれを盾でなく、体で受け止める。

「……………もらった」

三人の戦いの中、現は両手の銃を一つに合体させチャージ、ファイナルウェポンを発動させる。

現もアレラーテと同じようなエネルギーをチャージさせ一気に放つ技だが、アレラーテが五秒のチャージに対して現は十秒である。

しかし威力は二倍どころか十倍になる。

「「！？」」

アレラーテと丹花が気付いたときにはもう遅かった。二人に現の光線が直撃した。

？

『試合終了 勝者村雨・誰時ペア』

勝った。いやゝ 思ったより危なかったな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・明日香」

現が悲しそうな目をして俺に話しかけてきた。

「うん？ なんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫？」

「なんだ。そんなことか。大丈夫だ。心配するな。俺は道化師だぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どーけし？」

現はキョトンとしている。えっと。

「ピエロだ。ピエロ。俺は絶対に死なないぞ。神出鬼没なんだ。望

まれなくても舞い戻ってやるさ。だから気にするな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

現はまだ気にしたような顔をしていた。

「道化師憲章一章・村雨明日香は誰時現を守りきる。二章・絶対に死なない。三章・たとえ現の前から消えても必ず帰ってくる。以上」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

「俺の誓いだ。俺はお前を守る。な？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん！」

第一試合は俺達の勝利。次はエリーとライラ対メリールと館か。

俺達は一時休むため裏に回った。

そこで三人の女性とすれ違った。なぜそんな事を言うのかというと三人とも蒼い髪をしていたからだ。異常に目立つはずなのに他の人は気にも留めていない。俺だけ？

その時は少し不思議な気分になっただけで終わった。それから思い出しもしなかったさ。あの時までは。本当に死にかけた、あの時まではな。

？

『第三試合 村雨・誰時ペア 対 デyson・館ペア 試合開始』
半ば会場の声援にかき消されながらアナウンスが流れ、第三試合もとい第一学年決勝戦が始まった。

「明日香。私が殺つてあげるわ！」

メリールがユア・ラヴァーを纏い叫ぶ。

「こっちのセリフだ」

明日香もメリールに合わせるように叫んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・がんばる」

現は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

前回に引き続き、明日香と現は左右に分かれ、明日香は上空へ、現は地上での戦いに持つて行く。

明日香を狙うのがメリール、そして現を狙うのが館の構図だった。しかし、館は剣を召喚するや否やその剣をメリールに向けた。すると剣から黒い光が走り、メリールを包み込んだ。

「なに、これ！？」

メリールは抵抗するがその黒い光はユア・ラヴァーのエネルギーを奪って行った。

「うぐっ なによ これ！」

会場は騒然となり誰も状況を掴めていなかった。

「館、なにしてるんだ！」

明日香の叫びはまるで館の耳に入っていない。

数秒の後、ユア・ラヴァーのエネルギーは尽き、メリールは真逆さまに落ちていく。

「メリール！」

明日香は急降下し、メリールを墜落寸前で抱きかかえた。

「メリール！ メリール！ おい！」

メリールは薄く呼吸をしているのみで意識はなかった。

「どうだい？」

明日香の背後から聞きなれない声がする。とつさに明日香が振り返るとそこには館が立っていた。

「貴様——なっ！？」

館は明日香の懷に手をやり、黒い光、しかしさっきのものとは明らかに違う光を明日香に浴びせた。

「なんだ・・・これ！？」

「ククク 今に分かる。」

館の声は今まで明日香達が聞いてきた声とは違うものだった。憎惡に満ちたその声は心の底から恐怖を呼ぶ声であった。

「くっ くそっ！」

館は明日香に浴びせた光を操るように手を天に掲げた。するとその光は館を包み、館のトルネードの形状を粘土細工のように変えていった。

その形は——

「ブラウアー・ヴィント！？」

館のトルネードはブラウアー・ヴィントの姿に変わっていった。しかし、色は黒である。

「ククク 死を持って償え。我が兄の死。ククク」

館は口を歪め明日香を見下ろしていた。

「兄・・・・・・？」

ククク という声が会場内にこだまする。

「さあ立て。我、リリパットと戦え。ククク」

「リリパット？ お前の名か？ 兄って誰だ！」

明日香は館もといリリパットを見上げ叫んだ。

「兄はドラゴンマスター。ボリス」

リリパットは表情を変えずにつぶやいた。

「ボリス………あいつはボリスといったのか」

「ククク 戦え！」

リリパットは急上昇した。そして明日香を見下ろしながらクククと笑い、

「お前が戦わなければ仲間が死ぬぞ」

そういつてリリパットは月光フエイクを現達に向けた。

「なぜ俺のエネルギーは奪わない！」

明日香のエネルギーはメリールと違い奪われていなかった。

「面白くないから。我がお前が殺すから。殺すから。殺すから」

リリパットはさも面白そうにクククと笑っている。

「貴様！」

明日香は立ち上がり月光を構えた。そしてWFを発動しリリパットと同じ高さについた。

「絶対に俺以外に手を出すな！ いいな！」

「それはお前の力次第だ」

二人はその言葉を合図に交錯し始めた。その度に剣が交わされる度に火花が散る。しかし明らかに明日香は押されていた。

リリパットは自分のトルネードとブラウアー・ヴィントUWの力を併せ持っていた。

「ククク これじゃ君死ぬよ！」

明日香は月光に光を宿しリリパットを切りつけるがスピードも明日香を上回っているリリパットはそれを交わし、逆に明日香に切りかかった。

明日香はダメージが溜まり【34・87%】となっていた。
「ククク」

リリパットの強烈な蹴りが明日香の腹に食い込んだ。

「グッ ハッ！」

そして月光フエイクで頭から一刀両断される。バリアが千切れるような鈍い音が明日香のダメージの大きさを物語っていた。

現？ 現か・・・・・・・・顔が見えない。見たい。現・・・・・・・・

こんな所で死ぬわけには、いけない、のに、俺は、道化、道化師なんだ。守らなきゃ、いけないんだ！

？

「ククク」

リリパットは一人上空で笑っていた。

「明日香！ しっかりして！」

現は必死に明日香を揺すっていたが何の反応も帰ってこなかった。
ズイン

現はその音に驚きリリパットの方を向いた。するとリリパットから煙が出ている。

「明日香をこれ以上やらせない！」

回復したアレラーテが応戦していた。

「私もいるぞ！」

丹花がりりパットに向かって行く。しかし丹花の攻撃は避けられ、
「笑止！」

リリパットはそう言うのと丹花の後ろに回りその背中に強烈な蹴りを入れさらに月光フェイクから黒い光線を出し、丹花は地面に落下した。

（・・・・・・・・私も・・・・・・・・やらなきゃ！）

現は両手に銃を持ち、地面を滑空しながらリリパットを攻撃した。実弾の上にリリパットのスピードのせいで弾はかすりもしない。

アレラーテ、丹花もそれぞれビームを放つが、当たる気配はない。

しばらく、リリパットは避け続けていたが明日香の方に目をやり、例の如くクククと笑うと、

「さあ、死ね！」

と叫び、月光フェイクに黒い雷を溜め、その剣を現に向ける。すると現に向かって黒く太い光線が向かって行った。

「あっ!？」

空気が割れんばかりに衝撃を周りにばらまきながらその一筋の黒い光線が現に当たる寸前、

【WAKE UP】

という機会音が現の耳に届く。

その機械音の後、衝撃波が壁にぶつかるような音がした。

(・・・・・・・・・・私、死んでない?)

現は目を開けた。すると誰かが前に立っていた。

「明日香!」

明日香は手を広げ現の前に立っていた。しかし、その体はボロボロになっており先ほどの攻撃の衝撃を生々しく印象付けた。ブラウアー・ヴィントUWは既に地面に崩れ落ちている。

「明日香!・・・・・・・・・・明日香!」

明日香はその場に倒れ込んだ。

「ククク なはり庇ったか。ククク」

リリパットは嘲笑うかの如く二人を見下ろす。

「明日香! 明日香!」

現は既に顔を真っ赤にして泣きだしていた。涙が明日香の頬に何度も落ちる。

「起きて! 明日香!」

現は明日香の顔を抱いた。そうしないと離れていくような気がした。自分の前からいなくなる気がした。

「明日香! 道化師憲章守ってよ! 死なないで! 私を守って!」

心の中で自分は何を言っているんだ、と叫んでいる。でも今はそれしか言葉が出てこなかった。

「・・・・・・・・・・うつ・・・・・」

明日香の口元が微妙に動いた。そして絞り出すように現の名を呼んだ。

「明日香!」

「な、泣くなよ。俺は死んじゃ——いない」

明日香は妙に落ち着いた声をしていた。それが逆に死期が迫っていることを色濃く感じさせた。

「明日香！ ダメだよ！ 死んだらダメだよ！」

その声が引き金だったかのように地面に転がっていたブラウアー・ヴィントUWの破片から光が現れた。それは空中投影ディスプレイで、

【100%】と表示した。

それは友情度の数字だった。

「ひゃく……パーセント!？」

現は夢でも見ているようだった。

それを知ってか知らずか、リリパットが現の方にさっきと同じ光線を放った。

（明日香！）

現は再び目をつむる。

横から強い衝撃があった。しかしそれは光線によるものではなく、「危なかったね！」

現を抱え、リリパットから離れるように飛行しているのは、

「……博士!」

メアリー・デイソンだった。

「博士！ 明日香は？」

現は懷に明日香がいないのに気付き、声を荒げる。

「明日香君？」

博士は？マークを頭上に掲げた後、

「いなかったよ」

と言った。

博士は現を地面に下ろす。改めて光線の当たった場所を見ても明日香は見当たらない。

「……まさか……明日香!」

現の頭の中には悪夢しかなかった。巻き込まれた。自分は明日香を抱いていたはずなのに。あの光線で明日香は――

「本当に君は誰も抱えていなかったんだよ！」
博士の言葉も耳を通らない。

（私のせいだ）（私のせいで明日香は）（死んだ）（死んじゃった）
（明日香）（会いたい）
（守って）（行かないで）（私も行く）（死にたい）（死んじゃいたい）（生きていても）

（明日香 明日香 明日香 明日香 明日香 明日香 明日香 明日香
日香 明日香 明日香 明日香 明日香 明日香 明日香 明日香
香 明日香 明日香 明日香 明日香 明日香 明日香 明日香）

「ククク 死んじゃえ！」

リリパットは再び光線を撃った。以前の五倍ほどは威力がありそうな黒い光線を――

ズウウウウイン

鋭い音が会場を包んだ。音源は、

「あす・・・・・・・・・・か？」

「俺の顔を忘れたか？」

現と博士の前にいたのは金色の光を放っているブラウアー・ヴィントUWを纏った明日香だった。

その明日香の顔の前に空中投影されている文字は、

【100%】という文字であった。しかしそれだけではなく、【100・00%】という文字も浮かんでいる。

「明日香君には驚かされるね」 友情度とエネルギー共に百だなんて！」

明日香の持っている月光は一回り大きくなっており、ブラウアー・ヴィントUWも多少形状が変わっていた。翼は孔雀のように広がり、神々しい雰囲気を出している。

「現。ただいま」

「・・・・・・・・・・おかえり！」

明日香、現、メアリーはリリパットを見上げた。

「ククク しぶといね。でも、我はもつとしぶとい」

リリパットの体から黒い煙が溢れだす。

「現、チャージしろ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

「ファイナルウェポンを使おう。俺があいつの動きを止める」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった！ ねえ、明日香」

「うん？」

現は深く深呼吸をして、

「道化師憲章。守ってね」

と、はつきり言った。

「当たり前だ」

そう言っただけで明日香はその進化を遂げたブラウアー・ヴィントUWでリリパットへ向かって行った。

「ハアアアアアアア」

一回り大きくなった月光でリリパットに切りかかる明日香。

「ククク 血祭りです！」

リリパットは身をよじりその攻撃を避け、旋回しつつ明日香に襲いかかる。明日香はスピードも以前より速くなっておりリリパットから適度な距離をとりつつ効果的にダメージを与えていった。

「ククク 変わったのは姿形だけではないってことかな？」

リリパットはそれでも笑みを浮かべている。

「お察しの通りだ！」

明日香はエネルギーの溜まった月光をリリパットに突き刺した。

「前も言っただけ。我は痛くないと。ククク」

それは異様な光景だった。胸から下腹まである剣が刺さっているにもかかわらず、笑ったままで平然としている。

「痛くなくてもいいんだよ」

「な・・・・に？」

余裕の笑みを浮かべていたリリパットの表情に一瞬影が生まれた。

「いけ！ 現！」

明日香はWFを発動させながら叫んだ。WFの輝きも以前とは比べ物にならないくらい神々しかった。

「・・・・・・・・・・もらった！」

現の持つ合体銃から一筋の光が放たれる。それは以前よりもチャージ時間が増し、その威力は魚雷五十数個分に達する。

「ちっ、でもお前も我と死ね！ 逃がさない！」

一瞬で切り替えたリリパットは月光を掴んでいた。

「逃げるつもりはない」

「なっ」

明日香はWFで逃げると思わせて現に安心して撃てるようにした。しかしそれは、

「俺の分もくらえ！」

【90・32%】のエネルギーが一気に【5・00%】になり、月光にそのエネルギーが送られた。

「お前——」

リリパットの顔が笑みではなく憎しみに歪んだ時、二人は現の攻撃を同時に受け、

ドユユユユユユユユユユユユユユユユ

という音が学園中に響き、その振動が同心円状に広がった。

眩い光の後に二人の姿は無かった。

「あす————か？」

現はこの状況を認識できていなかった。

「現・・・・・・・・・・ちゃん・・・・・・・・・・」

メアリーは放心状態になっている現に何と声をかけて良いかわからなかった。

「私が・・・・・・・・・・明日香を・・・・・・・・・・殺しちやった・・・・・・・・・・？ 私が・・・・・・・・・・？ 死にたい・・・・・・・・・・私も・・・・・・・・・・一緒に・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・死にたい！」

そう言つと、現のトルネードが解除され、現は地面に倒れ込んだ。

鷹月病院。203号室。誰時 現の病室。

「現ちゃんは一命を取り留めたわ。うん。大丈夫みたい。うん。それじゃ、また」

メアリーはメリール達に電話をかけていた。

現は倒れてから二日間眠り続けていた。しかし、医師によれば命の危険はないそうだ。

「明日香君・・・・・・・・・・」

明日香はあれから当然見つかつていない。

二週間後。

現は自分の寮室にいた。そう。【いる】だけだった。何もせずとあれからベッドに籠っていた。

コンコン コンコン

「現！ 起きてる？ 現！」

メリールは多少やつれた顔で現の部屋の前にいた。

「現・・・・・・・・・・」

（明日香、帰ってくるわよね？）

（・・・・・・・・・・明日香。私は死ぬ勇気もない。あなたに会いたい。帰ってきてよ。弱い私を助けて。早く来てよ。明日香は死んでない。私・・・・・・・・・・私）

現は病んでいた。明日香がいなくなつてから現は碌に食事も摂らず一歩も部屋を出ていなかった。

ガチャ ガララ

窓の空いたような音がした。現は気にしなかった。その気力さえなかった。

『現、何時まで寝ているんだ？』

それは明日香の声だった。それに対し現は、

(夢・・・・・・・・・・・・・・・・明日香が迎えに来たの？)

『明日香？』

『ああ』

『迎えに来てくれたの？』

『うん、まあ、そんなところかな』

『私、行くよ。天国に』

『はい？ 縁起でもない。天国になんか行つてたまるか。まだな』

『でも、明日香は行つたんでしょ？』

『お前、ジョークのセンスが皆無だな』

『私の知っている明日香はそんなこと言わない』

『当たり前だ』

『なんで？』

『なんで、つて、そりゃ俺は現にそんなセリフ過去に言ったことないからな』

『私、やっぱり。頭が変になつてる』

『大丈夫か現？ 本気で心配になつてきたぞ』

『明日香のせいだよ』

『そう・・・・なのか？ それは悪い』

『謝らないで。私・・・・・・・・・・私』

TND学園。一年一組教室。

『アレラーテ、大丈夫？』

メリールがアレラーテに話しかけていた。

『正直・・・・ううん。メリールは？』

『大丈夫な訳ないじゃない』

二人は今にも泣き出しそうな顔をしている。

『明日香なら帰ってくる』

丹花が二人に向かって叫んだ。

「丹花」

「明日香は帰ってくる。そう信じていなければ」

「うん」

「そう………よね」

三人はそれぞれを励まし合っていた。それは同時に自分に言い聞かせているようでもある。

「そういえば」

メリールが不意に、

「現の攻撃が当たる瞬間、明日香、なにかを口ずさんでいたような」と言った。

「なにかって？」

アレラーテは何時もの明るさを無くした声でメリールに問う。

「口の動きからして、確か——」

そしてメリールは二人の前である言葉を呟いた。

「【クラウン・タイム】………だったかな」

「私、死にたいよ！」

『おい、おい。さすがに「冗談きつい」』

「冗談じゃ、ないよ。生きててもしょうがないもん」

『悩みなら、相談にのるぞ？』

「本当に？」

『ああ。本当に』

「明日香に会いたい」

『はい？』

「明日香に会いたいよー！」

『それは簡単に解決するぞ』

「私の頭もついに」

『……いつのまに現は電波に？』

「出来るもんなら………やってみてよ！」

『いや、行動するのはお前だから』

「えっ？」

『ベッドから出る』

「出てどうなるの？ 色褪せた世界しか見えないのに」

『色をやるよ。俺が』

「明日香が？」

『ああ。道化師明日香が。だから出る。今すぐ』

「………うん」

現は恐る恐るベッドから出る。暗闇に慣れた眼に眩い光が差し込む。その光源に人影があった。それは――

「………明日香？」

「おはよう。現」

開いた窓の枠に腰かけていたのは紛れもなく明日香だった。

「明日香………なの？」

現は何が起きたのか分からないような顔をしている。

「俺以外でこの顔を持った奴がいたか？」

明日香はそう言って少し笑った。

「明日香………明日香！」

現は走り出し明日香に思いっきり抱きついた。その衝撃で明日香と現は十階から真つ逆さまに落ちていく。

「うつ………あっ！」

現は目を見開き地面を見つめる。

「おっと」

明日香はブラウアー・ヴィントUWを起動させ地面すれすれで止まった。

「お姫様、ジェットコースターはいかがでしたか？」

明日香は現をお姫様抱っこしながら学園の教室のある棟へ飛ぶ。

「ど、何処に？」

「結構消えてたからな。復活のお知らせに」

「そう」

現は笑顔を取り戻していた。明日香も笑顔でメリール達の所へ向かった。

夢現 第三・五話「夢現の境界線」

第三・五話「夢現の境界線」

俺の失踪事件から一週間が経った。

俺はこの間、検査入院のため病院に缶詰。今日やっと退院できたのだが、

「あん？」

自宅の俺の部屋の机の上に携帯電話が置いてあった。誰の？ 見るからに新しい。

「あつ、明日香。おかえり。それメリールが退院祝いだって」

あいつか。勝手に契約しやがったのか。

一応、電源を入れた。

自分の番号はちゃっかり登録済み。

あれっ？ 茉莉のも、もう入ってる……。

ブーン ブーン ブーン

携帯が揺れた。マナーモードか。メールの受信？

『件名・部室で待つ』内容なし。

とことん自分勝手な奴。

学園。軽音楽部室。

「あつ、明日香！ 退院おめでとう！」

真っ先に話しかけてきたのはアルルだ。いつもの笑顔は健在、と。病院生活はどうだった？」

と言ったのは丹花。どうもこつも毎日が暇でした。

「さあ〜て。明日からまた作戦実行よ！」

エリーはスルー。

「……………（コクン コクン）」

ライラも何時も通り、つと。

「遅かったわね？ どう私が選んだ携帯？ いいでしょう？」

「勝手に契約しやがって」

「失礼ね。今の時代このくらい普通よ！」

人の個人情報を持携帯の会社に勝手に持って行っているの何処が普通だ！

「ちなみに、お揃いよ！」

とメリールは自分の携帯を差し出した。確かに同じ会社、同じ機種、同じ・・・色。

「お前な。色まで同じにしてどうする」

「いいじゃない！ 緑、似合ってるわよ」

確かにライトグリーンのこの携帯のセンスはいいと思った。

「~~~~~（ジト~~~~~）」

うつ、ジト目×4。

「な、なんだ？」

「仲いいね、二人」

「むしろ良すぎるくらいだ」

「契約違反ね」

「（コクン）……………（コクン）」

「な、なによ！ いいじゃない！ 久しぶりなんだし！」

こいつらチームワークないな。この先、このバンドやっていけるのか？

「あつ、そうだ！」

メリールが何かを思い出したように顔を輝かせ、

「バンド名とファーストソングが出来上がったわよ！」

「えっ？」↑俺

「すごい」↑アルル

「速いな」↑丹花

「何時の間に」↑エリー

「（コクン）……………（コクン）」↑ライラ

バンド名はとにかく歌まで出来ているとは。意外とこいつやる。

「バンド名は『スイート・エデン』よ！」

「……………うん？」

「可愛い！」とアルル。

「なか、なかだな」と恥ずかしがりながら丹花。

「ふーん、意外とセンスあるじゃん」とエリー

「（コクン）」とライラ

あつ、女子には好評なのか。にしても、

「あなさ」

「なによ、明日香」

「俺は男なんだが？」

「それで？」

「スイートって」

「関係ないわ」

「いや…………」

「女装する？」

「スイート・エデンでいいです！」

くそ、負けた。

「次は歌ね」

「どんな歌なんだ？」

「Jポップ」

範囲が広い。

「作詞は私！ 作曲はライラ！」

「……………えっ！…………」

これは俺、アルル、丹花、エリーと皆驚いた。ライラが作曲！？

「すごい」

「人はみかけによらないな」

「教えてくれればよかったのに！」

すごいハイテンションな軽音楽部。まずい、雰囲気飲まれそう
だ…………。

「今から楽譜を配るわね！」

そう言ってメリールがライラ以外の四人に楽譜を配った。高そうな紙だな。

「ご意見ご感想をどしどしご応募ください！」

何かのテレビかここは！と心の中でつつこみつ、目を通す俺。さて、あいつはどんな歌を作ったのかな。

題名は『I really felt silly』。たぶん『あゝあ。なにやってんだろ。』といった嘆きの意味だろう。すごい題名だな。

「三日後、みんなで演奏よ！」

久しぶりにメリールに殺意を覚えた。

三日後はあつという間に来た。

放課後、軽音楽部室。

「じゃあ、始めるわよ！」

みんなメリールの言うことに割と忠実に動いている。案外あいつは人徳があるのか？

「っていうかメリールはギター弾けるようになったのか？するとメリールは「ギクツ」というように反応して、

「こ、今回、私は歌うだけよ」

と顔を赤らめボソツと呟いた。

「やっぱりな」

「あんたが消えてたからでしょう！」

ぐっ、逆ギレかい！

「こ、今度弾き方教えなさい！」

「わかった、わかった」

まあ、教えるって言ったのは俺だからな。

「じゃあ、歌うわよ！」

とメリールが高らかに宣言した。

「こ、おゝゝゝ」

「（コクン）……………（コクン）」

「おー（棒）」

誰がどれを言ったかはわかるよね？

エリーの掛け声で始まる我らがスイート・エデンのファーストソング。

『 I really felt silly 』

作詞 メリール・デイソン 作曲 ライラ・エマール

A 彼方は何時も私の一步前を歩いて時々降り返る その瞳に私が映っている

私は何時も彼方の背中を見つめて時々俯いて その瞳をいつい避けてしまう

B 明日なら伝えられるかな 勇気ほしいよ もう！ 大事な時に喧嘩腰

昨日より強くなれるかな 飛び込みたいよ うん！ 想いを胸に走り出す

サビ ずっと ずっと好きだったんだ 愛って言葉でもまだ軽いよ
もっと もっと一緒にいたい 何時か素直に告げる・・・
その日まで

A 彼方はたまに強くて黒い目を近付け優しさ振り撒くの 私だけにその目を向けてほしい

私はたまに彼方に酷いこと言うけどそれはね嘘だから 私だけを生見つめてて

B 過去からの贈り物なんだ 今の私は そう！ だから負けずに伝えるよ

未来へのお返し贈るよ 愛を増やして さあ！ 彼方
の胸に飛び込んで

サビ きつと きつと輝いてる 星の光にも負けてないよ
 そつと そつと眩くから 聴いてその後言つてよ・・・好
 きだよつて

C 傍にいたいのに(I really felt si
lly) 何時も空回り(I really felt s
illy)

二人でいたいけど(I really felt s
illy) ライバルが多くて(I really felt
silly)

あなた愛すると(I really felt si
lly) 道が拓けてく(I really felt s
illy)

最高の笑顔を(I really felt sil
ly) 見せてあげたいよ

サビ ずっと ずっと好きだったんだ 愛つて言葉でもまだ軽いよ
 もっと もっと一緒にいたい 何時か素直に告げる

 きつと きつと輝いてる 星の光にも負けてないよ
 そつと そつと眩くから 聴いてその後言つてよ
 私のこと好きって・・・だいスキつて

大人しい音楽のラブソングだな。 ライラの曲いいな！ メリール
の歌詞もまあ今どきの歌つて感じ・・・なのかな？ なにせ最近の
ヒットソングなんて知らないからな。

「どう、どう？ 私達の歌！」

メリールは楽しそうに皆に感想を聴きに行っている。まあ出来たてのバンドにしては上出来だよな。

「あ、明日香」

メリールは少し上目づかいで俺を見てきた。

「うん？　なんだ？」

「ど、どうだった？」

なんでそんなに顔を赤くして聞くんだ？

「いいんじゃないか。俺はまあ好きだぞ」

「！」

全身真っ赤になったな。なんなんだ？

「ど、どう思う？」

「はい？」

「か、歌詞」

どう思う？　まあ好きだって言っただけだ？

「・・・・・・や、やっぱりいいわ！　それよりギター教

えなさい！」

「へいへい」

まったくわからん。こいつの考えていることは。

それから二十分後。

ガチャン！

「うん？」

勢いよくドアが開き、俺達はそっちを向いた。そこには、

「現？」

現がいた。走ってきたのか息が荒れている。

「どうした現？」

俺が聞くと、

「・・・・・・入れて」

「？」

「・・・・・・軽音楽部に入れて！」

「『『『『えっ!?』『』『』『(ビクッ)!』」
「『『『『『ダメ?』」

現の目は既に潤んでいる。泣きそうだ。

「メリール。入れていいよな?」

「うっ、うん………ん」

これでダメって言うてたら確実に泣いてたな現。今は笑顔になっている。ますますガールズバンドだるここ。

「な」 現が入ったんだから俺は抜けてもいいんじゃない——」

「『『『『ダメ!』『』『』『(ブン ブン ブン)!』」

全員からの総攻撃。統一感ないだろ男一人入ってたら。男子から反感買いそうだな。でも、まあ何を言っても無駄か。まだ六人が睨んでいるので仕方ないから言っておくか。

「わかったよ」

「今日はみんなにお題を出すわ!」

と実に嬉しそうにメリールが言い放った。今度は何だ? 聞くだけは聞いてやる。

「みんなに歌を作ってきてほしいの! 歌詞の方よ。曲はライラが全部やってくれるって!」

何を言うかと思えば、歌詞を書いて来いと。

「全部ラブソングで! そうね、自分の恋愛観なんてどうかしら嫌だ」

「いいね!」

「す、少し恥ずかしいがやってみるか」

「私、好きな人いないんだけど」

「………わかった」

「(コクン)………(コクン)」

あつ、れ? 否定しているのは俺だけ?

「異議がある人は聞いてあげる」

「異議あり!」

「はい聞いた」

悪魔がいる。しかも昭和生まれっぽい悪魔が！

「じゃあ、そういうことで。今日は解散よ！」

解放よ、の間違いでは？

「なんで軽音楽部に？」

俺は今、現と下校中だ。

「……………明日香と部活やりたかったから」

ふん

「（ジト〜〜〜〜）」

「なんだ？」

現がジト目で睨んできた。なんだ？

「……………なんでもない」

「そうか」

「（ジト〜〜〜〜）」

「だから何なんだよ！」

今日の現はなんか分らないな。

「ところで現はどんな楽器が出来るんだ？」

「……………」

「うん？」

「……………何も」

「えっ!？」

マジか。まあ、今から始めれば……いいか。

「なにがしたいんだ？」

「……………明日香と同じの」

「ベース三人っていうのもなあ」

どうしたものか。ギター二人、ベース三人、ドラム一人、キーボード一人って。ドラムとキーボードはいいとして、ベース三人は多いよな。たぶん。

逆にギターをもう一人入れるっていうのはどうかな？ いや知り

合いがもついない。茉莉は学校違うし、な。

本当はこんなことより悩まなければいけない【問題】が一つあるんだが。

もうすぐ来る。あの三姉妹、【蒼き三姉妹】について、とかな。

夢現 第四話「蒼き三姉妹と夢の誕生」

第四話「蒼き三姉妹と夢の誕生」

週末。ある【約束】の日。

「お待たせしました」

向こうの方から三人の蒼い髪の女性が三人歩いてきた。

「それでは行きましょう」

「ああ」

そう。俺はこの三人について行かなければならない。

理由を語る前に、リリパットとの戦いの話からしなければなら
ない。

？

「俺の分もくらえ！」

明日香はリリパットに刺した月光にエネルギーを溜めた。そして
現のファイナルウェポンがリリパットに直撃する瞬間、

『あなたは、まだ死んではいけない』

という声が明日香の脳裏に過ぎった。

『私達主導で強制的に【クラウン・タイム】を発動させる』

キューーン

という高い音が鳴り、明日香は無意識に、

シンフォニー クラウン・タイム
「交響曲・第一章」

その瞬間、明日香とリリパットは光に包まれ消えた。

？

えっと、ここは所謂、俺の世界、ってやつだよな？

トランプが空中でヒラヒラと回転している灰色の空をした世界。
俺って実は根暗なのか？

俺が物思いに耽っていると、

「ククク ここがお前の世界か」

とリリパットが地面から突き出した岩に腰かけ話しかけてきた。

「いたのか」

「巻き込まれたんだ」

「で、やるのか？」

「ククク それは不本意だ。確かお前は発動時に【交響曲】シンフォニーと言ったな。それは我々にとっては不吉な言葉だ。我は帰らしてもらつよ。構わないね？」

「自分勝手だな」

俺は蒼く輝く マークが刻まれている右手をリリパットに向けた。

「ククク その代わりにいいことを教えてあげよう」

「いいこと？」

リリパットは笑みを浮かべつつ、例のクククという声を上げた後、
「お前が奏でる【交響曲】シンフォニーには色々の種類がある。お前は今、クラウン・タイムの第一章だろう。その内、その力は重ねられ、お前は強くなる。交響曲^{シンフォニー}とは言っても今のお前は独唱曲^{アリア}というわけだ。ククク お前の【子守唄】^{ララバイ}もしくは【鎮魂歌】^{レクイエム}を速く聴きたいよ。まあ段階を踏むのは必要だけだね」

と、リリパットは語った。まったく意味不明だ。交響曲^{シンフォニー}だの独奏曲^{アリア}だの子守唄^{ララバイ}だの鎮魂歌^{レクイエム}だの。しかも第一章だとか言ってたよな。クラウン・タイムの種類？

「ククク 為になったかな？」

「まったく意味不明だから、やっぱりお前は倒す」

「ククク じゃあ、もう一つだけ教えてあげよう」

こいつ命乞いのつもりなのか？

「【奇巖城】を知っているか？」

奇巖城・・・っていうと『L・aiguille（空洞の）
euse（針）』っていうアルセーヌ・ルパンの・・・
で、それがどうした？

「その奇巖城が実在するとしたら。お前の中に」

「俺の中に・・・？」

また意味が分からない。こいつ、もしかして狂ったのか？

「じゃあ、邪魔者が来たから我は帰る。命がけでな」

「なにっ？」

そう俺が叫んだときにはリリパットは光に包まれ俺の世界から消えていた。

邪魔者？

「やっと思えましたか」

後ろから声が聞こえた。俺が振り向くとそこには蒼い髪をした三人の女性が立っていた。

「あなた方・・・は？」

すると俺とほぼ同じくらいの背（三人中最長）の女性が、

「私達はブルーイリユージョニストの『蒼き三姉妹』よ」

「ブルーイリユージョニスト・・・俺と同じ？」

「ええ。私達はアナザーマジシャンではないけれどね。だからクラウン・タイムなんて代物も使えない。大体、それ自体得体のしれない物。あなた何者？」

「いやいや、そんな急に聴かれてもなあ。

「まあ、いいわ」

「いいんかい！

「私はソニアよ。長女なの」

唐突な自己紹介・・・。

「私はメビューです。次女です」

おっとりというかのほほんというか。

「ノア」

・・・えっ！？ それだけ？ いや三女ってわかるけどさ。うー

んと無口キャラなのか？

「俺は明日香」

「それでお願いがあるんだけどさ」

あつ、れ？ スルーされたのか？

「お願い？」

嫌な予感しかない。

「私達の国を助けてほしい」

的中・・・・・・・・・・・・・・・・・・しかも内容が重すぎる・・・・・・・・・・

「く・・・・・・・・・・に・・・・・・・・・・？」

「そう。私達の国は今、ブラックイリユージヨニスト（黒き魔導士）によって壊滅させられそうになってるの」

「対抗出来るのは士ただけだけど、私達の国にはこのノアしか士がないの」

「あなたの力が必要」

どうしたら？

「あなたは、さっき死にかけたのよ。それを助けたのは私達なんだから恩を返しなさい！」

とソニアが胸を張って言う。ちなみに胸はあまりない。ノアも。メビューは少しある。チェ。

「今度のこの世界の週末、迎えに行くから一緒に来なさい。」

ソニアは相変わらず図々しく言う。

「お願いします！」

メビューは深く頭を下げた。

「・・・・・・・・・・」

ノアはただ俺を見つめていた。まずい。蒼い瞳に吸い込まれそうだ。

ソニア、メビュー、ノア。蒼い髪に蒼い瞳。清らかな雰囲気の人姉妹から出た言葉は決して清らかなって言えない内容だった。

そして今に至る。

週末。俺は三姉妹に連れられ、ブルーイリユージョニストの国――カルンジンゴ――へ向かった。

カルンジンゴはノア達の故郷だ。

ブルーイリユージョニストの国っていうのはある意味同族である俺も興味がわく。

まあ、観光は出来ないだろう。なにせ戦時中なんだからな。

カルンジンゴは、

「なんだ、ここ………！」

そこは地球（俺達が住んでいる場所）より空が蒼く（なんと一日中蒼いらしい）、太陽も雲もない。どうしてこんなに明るいんだ？ 風は吹いているが穏やかなものばかりだ。

気温は二十度前後くらいだろう。結構過ごしやすい。

「なんか、変な気分になるな」

「失礼ね！」

ソニアがそっぽを向く。

「人間界よりましよ！」

それは大いに賛同したいね。いや、待てよ……

俺が考え事をしていると、

「早速、戦地に行く」

とノアが言った。

えっ！？

「先手必勝」

淡々と述べるノアだが土ってみんなこんなに好戦的なのか？

「では」

ノアはそう言うつと懐から杖を出した。

典型的な魔法使い像だな。細い枝みたいな杖。君はイギリス人……ではないよね。

ふと気付くとソニア、メビューも持っている。形はそれぞれ違う

が。

ソニアのは魔女が持つていそうな大きな木で出来てそうな杖だ。これも典型的な魔法使い像だな。

メビューのは王族の人が持つていそうな鋭く蒼い宝石が先に付いた五十センチ程の杖（？）だ。

うーん。性格もなんとなくそうだがメビューだけ浮いてるな。天然キャラって言っただっけ？

三人はそれぞれの杖を掲げるとブツブツと何かを唱えだしている。接客はレッドイリユージョニストの方がいいな。アリスはどうしているだろう？

そうこうしていると杖から蒼い光が放たれ、俺達を包みこんだ。それから何時か感じたことのある浮遊感に襲われ気が遠くなってきた。

まずい。これは辛い……ぞ。

「うくつ、こ、ここは？」

俺は気を失っていたのか草原に横になっていた。

「気が付いたの？」

ソニアが俺の顔を覗き込む。

「ああ。ところでここは？」

少し不気味な光景だ。蒼い芝生。どんだけ蒼が好きなんだ？ 食欲が失せるな。

「戦地よ」

「はい？」

こんな静かな所が戦地？ 兵士一人いないぞ？
「これから始まるわ。備えて」

いや、備えてって言われても。何処から来るかも分からないのに。・・と思いかけて気付いた。今の俺は何処から敵が来るか分かる。いつの間にか俺はクラウン・タイムを発動していた。これは、たぶん交響曲シンフォニーだろう。

俺はある一点を見つめていた。もうすぐ来る。右手の　が輝きを増す。ソニアも同じだろう。

後ろに人の気配が現れた。何人もいる。たぶんブルーイリユージヨニスト達だろう。

もうすぐ戦争が始まる。

ブルーイリユージヨニストとブラックイリユージヨニストとの戦争が。

風の動きが少し変わった。

その瞬間空間に歪みが生じ、その中に無数の人影が現れる。いや人影だけじゃない。あれはドラゴン。ドラゴンマスター以外にもいるのか。ドラゴン使いが。

人数がかなり多い。こちらの二倍。いや三倍はいる。

勝てるのかこの戦い？　臭い言葉で言つと「勝たなければいけない」とかだろう。

言つてたまるかそんなセリフ。

「帰りたいから戦う」

俺の言葉にソニアが目を丸くする。

「なに？」

「俺は速く家に帰りたい。だから、あいつらを倒す。それだけ」
行くぞ。俺は帰る！

そう思つた瞬間、血流が変わつた気がした。妙に心臓の音が高鳴る。頭がボーとしてくる。

何かが聞こえる。

これは……時計台の時計の音。

頭の中にイメージが浮かぶ。

これは……城？　ノイズ音が聞こえ、テレビの砂嵐のように視界がおかしくなる。

今は……戦いの時だ。

そつだ……明日に向かうんだ！

？

歪曲空間から無数の敵——ブラックイリュージョニスト——が現れる。

「行くわよ。みんな！」

ソニアが掛け声を上げ、ブルーイリュージョニストを促した。

明日香の後ろにいた兵士たちは次々と敵へと向かい、魔法の光球や光線が飛び交い、黒や蒼の陣風が巻き起こっている。

「行きましょう」

メビューは明日香を促す。

「はい」

明日香は疾風のごとく走り、敵軍に突っ込んだ。

「ドリーム白虎！」

明日香の右手の星が光り、白い波動が敵軍に炸裂する。

明日香は高く飛び、敵軍の中心へと躍り出、

「ドリーム青龍！」

その言葉と共に蒼い光が明日香の腕を包み、明日香はそれを地面へ叩きつける。

同心円状に広がった蒼い衝撃波は敵軍先進部隊の半数を倒した。

「明日香！ 後ろ！」

ソニアの声が響き、明日香が振り向くと、そこにはブラックイリュージョニストが西洋の刀のようなものを持ち、物凄い勢いで明日香に迫っていた。

「ドリーム玄武！」

緑色の盾が明日香の前方を覆ったがその刀は盾を貫き、明日香の腹を刺した。

「くっ………！」

そのブラックイリュージョニストは顔を笑みで緩めていたが、
「………」

ノアの放った蒼い光の一閃がその顔を崩す間もなく貫き、そいつの顔は吹っ飛んだ。

明日香はその場に倒れ込む。

それを狙い多くのブラックイリユージョニストが襲いかかるがソニア、メビュー、ノアが明日香を囲む形を作り、それを阻止している。

「明日香、大丈夫なの!？」

•

明日香は答えない。もはや息をする音も聞こえない。

「ノア！明日香が！」

ソニアの聲が響いた瞬間、

[illegible]

明日香が天を仰ぎ笑いだした。狂氣的に。

「明日香？」

「明日香さん？」

┐
•
•
•
•
•
?
└

三人はその光景に目を丸くしている。すると、

「交響曲・第二章！」

明日香は半ば機械的な声でそれを発した。

すると、右手の甲の蒼い星が冷たい氷のような色へと変わり、

「俺が殺る！ 全員この俺が相手だ！」

そう叫ぶと明日香は三人の円の中から飛びあがり、空中で静止した。

そして指をパチンと鳴らした。

ズイイイイイイイイイイイ！

耳を塞ぎたくなるような不愉快な風の音がしたかと思うと敵兵の約半分がその風により舞い上がった。しかし、その光景は異様なもので舞い上がった兵士たちはあらゆる関節が人型の生物ではありえない方向へと曲がり、その痛みを感じる間もなく空中で即死し、地

面へは屍のみが舞い落ちた。

次に明日香は右手を空高く掲げる。そしてその手を開き、フツと笑った後、勢いよくその手を閉じる。

すると空に無数のナイフのような物が出現し敵兵に向けて急降下する。

そのナイフは魔法の力でも止められず、意外な展開に回避行動の遅れた兵は次々にそのナイフを急所に受け、地面に伏していく。

雨のように降るナイフから逃れられる者はおらず、ドラゴン使い以外の兵はみな血を流し死んでいた。

その血は初めこそ赤かったが、明日香の攻撃を受けると蒼く変色した。

ドラゴン使いはその光景に唾然としつつ五十数体のドラゴンに乗り、進軍してくる。

「死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、死ね！」

明日香はドラゴンを見据え、今度は両手を掲げる。

すると、さっきのナイフの巨大版のようなものが現れ瞬時にドラゴンの腹を抉る。

そして明日香が地面に向けて手を伸ばすとワームホールが地面に出現し、悶え苦しむドラゴンをドラゴン使いごと喰らうかのごとく吸い込んだ。

明日香が地面に降り立つ。

その後ろ姿はさっきまでの明日香のものではなく憎悪や恐怖を持ち合わせているようであった。

「・・・・・・・・えっと、明日香？」

ソニアがいち早く明日香に歩み寄る。

ブルーイリユージョニストの兵士たちは戦いの意外な展開とその結末に驚きを隠せないといった感じにたた明日香を見つめていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・か？」

明日香が何かをソニアに聞いた。

「えっ？」

「面白かったか？」

「なっ、なにを——」

ソニアが全てを言い終わらないうちにノアが明日香とソニアの間に入り、杖を明日香に向けた。

「ノア？」

「明日香から離れて！」

一緒に暮らしていたからわかるが初めてと言っていいほどノアは語調を荒げた。

ソニアは数歩明日香から離れる。

すると、

「どうせなら全軍引き返した方がいいんじゃないか？」

狂気的な笑みを浮かべた明日香が振り向く。その瞬間、カルンジンゴの空気が変わり、あの【明日香の空間】になった。

灰色の空に無数の巨大トランプが回転しているあの空間。

「ここは！？」

兵士たちが驚きの声を上げる。

魔法使いにはそれぞれ自分の力を最大限活かせる空間を作り出す能力がある。それは紅、蒼、黒の全てのイリュージョニストに共通する能力だ。

そしてその空間に敵を追いやることにより有利に事を進めるだ。しかし、この状況に誰もが驚いた。

どんなに強力な魔法使いだろうと数千人を一気にその空間に連れてくることなど不可能——なはずだった。

しかし、明日香はそれをやったのだ。アナザーマジシャンである明日香が。

「こんなこと………！！」

皆、状況を把握するのに時間がかかっていた。

「ようこそ皆様」

そう言って明日香は右手をブルーイリュージョニスト達に向けた。

「な、なんのつもりですか!？」

慌てたメビューが明日香に問う。

「殺るつもりなんです」

明日香は淡々と述べた。まさに本音だと言わんばかりの口調だった。裏はない。ただ殺るつもりだと。

「やめて」

ノアも淡々と告げるがこちらには多少焦りもみえる。

「やめない、と言ったら？」

「あなたを止める」

「どうやって？」

あまり関心がないような声で明日香が問う。

すると、ノアはその杖に光を溜める。

蒼い玉が出来た瞬間、明日香は目を見開く。するとその杖は呆気なく折れる。

「!」

ノアは少しずつ明日香から離れる。

「さあどうする？」

明日香は兵より前に出ている蒼き三姉妹に向けて言い放った。

「ハハハ」と、言ってももう時間だ。楽しい『デュエット』だった。ハハハ」

明日香の言葉に三人は目を丸くする。

「意味がわからないと見える。まあそれはそうだ。俺は明日香だが、明日香でない。と言っても多重人格なんて安っぽいものでもない。

簡単に言えば『ある感情』だけで埋められた明日香とも言つのかな。今は」

「感情？」

ソニアが聞き返す。

「そうさ。教えてやるよ、第二章——デュオ——が司りし感情は『恐怖』だ」

「恐怖………?」

今度はノアが呟くように言った。

「明日香が持つ全ての恐怖を集めた力がこの俺だ。さっきの戦いは明日香の恐怖の心が生んだものだ」

明日香は淡々と語る。

「俺の、いや明日香の体がボロボロになっている………恐怖で覆い尽くされて。さてと君達三人を招待しよう」

「どこへ……ですか？」

メビューが恐る恐るを絵にかいたような姿で聞いた。

「——奇巖城——」

明日香は道化師のような笑みを浮かべ、

「もう一人の【夢】も生まれた頃だろうし」

そう言って指を鳴らした。

パチン

そんな音が響いた瞬間、明日香は消え、三人は巨大な西洋風の城の前にいた。

三人が歩み寄ると橋が降ろされ、大きな口が開いた。見た目では奇巖城という雰囲気はなかった。

中は全面紅い床が広がっており電気はほとんどついておらず不気味な暗さだった。

「これは………」

三人は本能的な勘で明かりのついた部屋を見つけ、その中に入る。ギイイイイイ

古いドアなのか、そんな音が響く。

部屋には暖炉があり、炎が上がっていた。それ以外には明かりはない。

暖炉の前に大きな椅子が置いてある。その椅子が急に動いた。

三人は警戒し杖を向ける。

そこには、

「やあ。よく来たね」

一人の少女がいた。

背は百六十センチ程のセミロングの女の子。

「あなたは………?」

メビューが恐る恐る聞く。

「ワタシ? うん。難しい質問だな」

その少女は面白そうに三人を見つめながら言った。

「難しい? 名前を聞いていただけよ?」

ソニアが怪訝そうに言う。

「今のワタシにとっては一番難しい質問だよ。さっきの明日香は何? とかの方が十分答えやすい。名前は考えておくから他の質問したら?」

終始、人の顔を窺うような目でその少女は言った。

「他のつて………じゃあ、ここは何?」

ソニアが呆れたように聞く。

「なるほどね。何処? じゃないところがミソだね。ここは奇巖城。またの名を『明日香の頭の中にある城』かな」

「頭の中の?」

「そう。詳しく説明すると、明日香が幼稚園に通っていたところに作りだした『Mind Garden』だね。だからボクも明日香によって生み出された存在なんだよ」

そこまで言ったところでノアが、

「なぜ彼は戦いをやめたの?」

と口をはさんだ。

「積極的だね。いいよ。教えてあげる。彼は時間切れだと言ったっけ? 時間っていうのは明日香の体や神経がもつ時間っていうこと。あれ以上やっていたら明日香は危なかった。【デュオ】だって明日香に変わりはないのだから本能的に自分の体の限界が分かっていたのだと思うよ。でも、もう少し体もっていたら君達は今頃ここにいない。たぶん死んでいたと思うよ。聞かれる前に答えるけど彼の性格というか雰囲気? みたいなものが途中から変わったでし

よ？最初は「死ね、死ね」とか言っていたのに。あれはね、明日香が、あつ、本来の明日香の方だよ？ その明日香の意識が戻りかけていたからさ。戻ったら取り返しのつかないことになっていたけどギリギリセーフだったよ。リリパットの性格が変わったのはなぜか知らないけど」

「……」

三人とも言葉を無くした。

「あれっ？ 喋りすぎた？ でも質問したのは君達だしね。普段はワタシ、そんなに喋らないけど。三人もお客さんが来たら少しはサービスしなきゃかな？ と思っただけ」

ほとんど息継ぎをせず話したその少女は椅子をくるっとまわし、自分姿を三人の前から消した。そして小さく呟く。

「明日香は大変なんだ。誰も明日香の気持ちをわかっていない。もしかしたら明日香自身も。いや、それは隠しているんだ。気付きたくないんだ。あの存在に」

「あの……存在？」

ソニアは急に話し方を変えた少女が気になり、椅子に向かって問う。

「とっても恐ろしい存在。どんな敵よりもずっと怖い存在。その存在に気付いた明日香はこの城を作った。逃げる為に。私と一緒に二人で暮らすために、ね」

少女はさっきまでとはまるで違う、悲しそうな、また哀れむような声で話した。

「最後に三姉妹さん、明日香を恨まないでね。やりたくてやったわけじゃないから」

「わ、わかってるわ」

三人ともそれだけは同意していた。

「もう、さよならの時間だよ。また何時か会えると……いいいな」

そう少女が言うと三人の足元が揺らぎ一瞬意識が飛んだ。

三人はカルンジンゴに立っていた。
まるで何事も無かったかのように。

さっきまでの白昼夢では？ と疑いたくなった。
しかし、それが現実であったという証拠があった。
ノアの手には一冊の本が握られていた。

古代文字なのか異星もしくは異世界の文字なのか、その内容は
まったく分からなかった。

「そういえば、名前……聞き忘れたわね」
ソニアがフツと呟いた。

奇巖城。

その少女は暖炉の前にある椅子に腰かけていた。
その部屋には暗くて見えにくいが無数のドアがあった。

その中の一つから小柄な小学生低学年程の背の子供が入ってきた。
「お主はあれでよかったのか？」

声は高く子供のものであったが顔はどこか大人びている。性別は
判断できない。

灰色の着物（それを見ても男女の区別はできない）を着ており、
それは身軽にするためか短く切られている。

「うん」

少女は短く答えた。

「明日香はなんとか大丈夫じゃ。儂と【あやつ】のおかげで」
「よかった」

少女は抑揚のない声で答える。

「面白くないのう、お主は」

そう言つてその子はまた元来た道を行つた。

「『夢の香り』、か。ワタシもそんな名前が欲しい、かな」

そう言つと少女は椅子に腰かけたまま目を瞑り、しばらくすると
寝息をたてはじめた。

夢現 第五話「夢の香りに誘われて」

第五話「夢の香りに誘われて」

俺が目を覚ました時、何故か俺の体はダブルいやトリプルサイズベッドの上にいた。

なぜ俺はこんな所で寝ていたんだ？

っていうか戦争はどうなった？ まったく記憶にない。

これもブルーイリ्यूジョニストの得意技である【忘却】か何かだろうか？

今の俺は少しボーとしていて真面目に何かを考える気分には到底なれていない。

それにしても、ここは何処だ？

部屋の作りは西洋の城の中ってかんじだな。

何処かで見た気もする。

何時だったか遠い昔に、来たことがあるような……………。

俺がそんなことを考えていると、

コンコン

とドアを叩く音がした。

現在、俺が何故ここにいるのかも分からないでいるのだが一応、

「はい」

と言っておいた。

「起きたんだね、明日香」

そう言って入ってきたのは一人の少女だ。

百六十センチ程の背にセミロングの髪。どこか落ちついていて利口そうな少女。どこかで会ったような気もする。

「君は……………」

「ボク？ やっぱり覚えてないのか。残念だな」

その少女は本当に残念そうに俯き黙った。

やはりどこかで会ったことがあるらしい。そんな記憶が無いこともない。

「えつと……」

確か幼稚園生の頃にこんな城で……うん？ 待てよ。

俺は来ている筈がない。こんな城に家族旅行をした覚えはないし、まして一人でなんて来れる筈もない。

いや、待てよ。なんとなく思い出してきた。

そうだ。俺はここに来てはいない。

『現実』では。

「奇巖城……」

俺は不意にそんな言葉を呟いていた。

ふと見るとその少女は嬉しそうに俺を見つめていた。

そうだ。思い出した。

俺は心の中に Mind Garden——心の庭——を作った。

そこには二人の住人を描いた。

俺はそこで遊んだ。この少女と。もう一人は確か保護者的ポジションにいたはずだ。

ということはこの少女は——

「『村雨 夢香』か？」

「うん！ ボクだよ！」

夢香は満面の笑みで俺に飛びついてきた。

「思い出してくれたんだね！」

「ああ。一応な」

俺はもう既に『どうして頭の中の存在と遊んだり一緒にいたりできるのか？』という疑問はない。

ここで強制的に思い出された俺のR型の能力。

自分の思い描く世界を無限に作りだす能力。

要は自分の思い描く力を持つことができる。

通称『Create Of Ability（能力の創造）』。

俺はそれを『夢幻』と呼んでいる。

俺には勿体ない代物だ。

俺にとつてそれは逃げ道にしかならなかったのだから。

だから俺はそれを忘れた。

記憶の底に沈めた。

だが今この瞬間俺は思い出してしまった。

「明日香！ なにか食べたいものはある？」

そうそう。夢香は面倒見がいい。いわばこいつは俺の理想像なのだ。

「ボクがなんでも作るよ！」

「まかせるよ」

昔はここで過ごした時間がそのまま現実反映していた。

しかし今はクラウン・タイムの力で体ごとこの奇巖城に來ているので浦島太郎になる心配はない。だったらゆつくりさせてもらうか。

「明日香」

「うん？」

「ゆつくりしていつてね」

「そのつもりだ」

弱さは変わっていないな、俺よ。だが今は前よりこの世界が現実味をおびている。いたくなる気持ちはわかるさ。

でも、ずっとは駄目だぜ。

？

明日香はそれから奇巖城での体感時間約四日を過ごした。

そして今日、明日香は帰ることにした。

「明日香………もう帰るの？」

「ああ。心配かけるのもなんだからな」

明日香はそう言つと右手をかざした。

「収穫もあつた」

明日香の右手の甲は光っていない。

「エチュードだね？」

夢香が問う。

「ああ。案外、便利なんだなクラウン・タイムって」

明日香はそう言つと夢香の頭に手をやり、

「また来る。それまで」

と言つて頭を撫でた。

「うん！」

夢香は満面の笑みを浮かべつつ明日香に抱きついた。

明日香は奇巖城の門の前に行くつと右手を前に突き出し目を瞑り、

「クラウン・タイム・エチュード！」

と叫んだ。

その瞬間、明日香の右手の甲が 型に光り輝いた。

「じゃあね、明日香！」

「ああ！」

明日香はその手に宿つた蒼い光に包まれ奇巖城を後にした。

？

『クラウン・タイム・エチュード』というのは最大一分間、クラウン・タイムの五分の一の力を発揮できる能力だ。

どうもシンフォニーのおかげでそんな能力がついたらしい。結構便利だよな、これは。

五分の一といえども中々の力だ。

一分間という制限はあるが。

ていうか数字がありきたりだ……。。

まあ、練習曲^{エチュード}って感じだよな。たぶん。

なぜそれに気付いたのか。それは後に語ることにしよう。

今日は土曜日。

人間界に帰ってきた。

曜日は行った時と変わっていない。

そう『曜日』は・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「ありえん」

日付は一回りしていた。

あつ、れ？

一週間、経ったのか？

体感で四日か五日だったはずだ。

って、

「なんで魔法的な空間の方が人間界より時間の流れが遅いんだよ！
？ 普通こういうのは『あれ』 あっち（魔法の国）では三カ月くらいに感じていたのにこっち（普通の世界）では一週間しか経っていない！ なんて？」 みたいになるのがお約束だろ！？ なんて逆なんだよ！？」

なんて一人で叫んでみたものの、どうしようもなく。

「とりあえず家に帰ろう」

というわけで家に帰った。

玄関に入るなりゲンナリした。

家に入ると茉莉が駆けてきて玄関で泣きじゃくりだした。

「ちょ、茉莉！？」

駄目だ。号泣だ。

「明日香！ えぐつ 何処に行ってたの！？」

「ど、何処かと言われれば・・・・・・・・『奇巖城』に・・・・・・・・」

「（ピキッ）」

や、やばい！？ 茉莉が怒った！？ どうする俺！？ こういう

のの耐性がないぞ！？　だって今まであいつが怒ったの、一回だよ！？　あれっ、前回はなんで怒ったんだっけ？

「『また』行っただ」

また・・・？

「それで・・・『また』夢香ちゃんと遊んでいたの・・・？」

やべ～～～！　もはや『なんでそのことを知っているの？』なんて質問するのも馬鹿らしくなるような形相をしている！

だが、あえてここはKYでいく！

「なんで奇巖城を知っているんだ？」

「知ってるよ！」

まずい、地雷踏んでしまった！

「もう知らない！」

そう言って茉莉は自室に閉じこもった。

茉莉は夕食時も部屋から出てこなかった。

お風呂を湧かしても。

深アニが始まって。あつ、深夜アニメな。

一応BDM？(Blue Ray Disc Mark？)に録画しておいた。おつとCMカットしなきゃ。

まあ、一週間居なかったのは悪いと思っではいるがあそこまで怒らなくても・・・。

それにどうして奇巖城を知っているんだ？

さて、どうしたものか・・・。

翌日、日曜日。

茉莉は出てこない。

さすがに心配になってきた。

コンコン

ドアをノックしても返事はない。

「茉莉？　寝てるのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

怒っているのか寝ているのか。

「大丈夫か？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事なし、か。

「あのさ」

俺はドアに背をかけ自分でもよく分らないが話し始めた。

「俺、この前学校で死にかけただろ？ その時に同じブルーイリュージョニストに助けてもらったんだ。その変わりにそいつらの戦争に加勢してくれ、と言われてな。まあ明らかに敵が悪い奴らだったから加勢したんだ。でも、その時に俺、なんかおかしくなっちゃって。それで色々あつて奇巖城に。でもお前なんで奇巖城のことを知ってるんだ？」

聞いているかどうかなんてわからないが一応聞いてみた。返事はない。もしかしていない、とか言わないよな。洒落にならんぞ。

夜。

茉莉は昨日から何も食べていない。マジで大丈夫か？

入って、みるか。

尚更怒るかもしれないが。

思い立ったが吉日だ。

コンコン

応答なし。

俺は茉莉の部屋に入った。真っ暗だ。

電気を点けようとして壁のスイッチを押そうとすると不意にドアが閉まった。

うわっ、なにも見えん！

俺がスイッチに手をやると俺の手に何かが被さった。

それは何か。

茉莉の手だった。

「ふえ!？」

思わず変な声を上げてしまった。

「……茉莉？」

茉莉は次に俺の背後にまわり背中にピトッとくつついてきた。ゾ

ワ~~~~

「心配になったんでしょ？」

茉莉は悲しげな声で言った。

「あ、ああ」

「私、その七倍くらいは心配したんだよ」
はっ……………。

「ごめん」

「ううん」

茉莉はそう言った後、

「でも、もう勝手に消えたりしないで」

それは何処か切なげで淡くて、手の上から零れていきそうな声だ。

「それは、約束できない」

「……………」

「俺はなにせ普通の人間じゃない。こういつことにまた巻き込まれないとも限らない」

茉莉は泣くのを必死で堪えるように肩を震わせている。

「明日香」

「なんだ？」

数秒茉莉は黙り込んだ後、

「ううん。なんでもない」

と言った。

それから茉莉は「今日はもう寝るね」と言っって俺は部屋を後にした。

翌日。月曜日。

茉莉は何事も無かったかのように部屋を出てきて朝食を摂った。

俺もそれに合わせて何も言わなかった。

俺達はそれぞれの学校へ向かうため家を出た。その間も特に引きずった感じは見せていなかった。

その時まででは。

学校につくなり俺は何時もの面々からの質問攻めにあつた。

「体の調子悪いの？」

と優しく聞いてきたのはアルル。

「先生は何も教えてくれなかったのだが・・・」

と、あえて核心をつかない程度に言うのが丹花。

「何かあるんだったら、その、相談・・・しなさいよ！」

と妙に素直さを隠そうとするのがメリール。

「・・・」

と唯心配そうに見つめるのがライラ。

「もう！ ライラが悲しみじゃない！」

と怒り心頭なのがエリー。

「・・・大丈夫？」

と言葉少なではあるが明らかに心配してくれてるのが分かる表情を見せているのが現。

それぞれ違って面白いな。

「大丈夫だ。心配させてごめん」

まさか魔法の国に行っておかしくなつて後半では夢香と遊んでいたなんて言えない。

放課後。

一応、病み上がりのはずの俺は軽音楽部に居た。

「なぜ、俺はここに・・・」

するとメリールが、

「だってギターを教えてくれるんでしょ？」

と言いだす。

「今日!？」

こいつ鬼か？ 鬼なのか？

「あ・た・り・ま・え・よ。あんたは四日間も遊んでいたんだもんね。『夢香』ちゃんと」

今日は俺の厄日、いや命日だ。

待てよ。なぜこいつはそれを!？

いや、どうも視線的に周りのみんなが知っているみたいなんだが・
・・・。

「メールが来たの」とアルル。

「五十嵐さんから」と丹花。

「明日香はずっと」とエリー。

「夢香ちゃんって」と現。

「女と遊んでいた」とメリール。

「「「「つて!!!」「」「」「」・・・・・（コクン）」

この連携感すごいな。なんて言っている場合ではない。

茉莉！ 一斉送信しやがったな！

「いや、えっと」

仮にも探偵を目指しているのにこんな風に追い詰められるとは・
・。

「それで。夢香って誰!」

メリールは顔を真っ赤にして問い詰めてくる。疑問符になってないぞセリフ。

「誰かと言えば、そうだな、俺が作った人間、かな?」

「「「「「は?」「」「」「」

まあ、当たり前前の反応だな。

「だから、頭の中に作りだした人間なんだよ。だから名字は村雨だ。村雨夢香だ」

シ~~~~ン

何この沈黙。雰囲気が怪談映画の幽霊が出てくる直前だ……。

「「「「ふざけるな！！」「」「」「（コクン）……………」

……（コクン）」

それから数時間、俺は地獄絵顔負けの光景の中心にいた。

ギヤ

地獄の中心で以下略。

その日、茉莉はメリールの家に泊まるとメールを送ってきた。
怒ると一番怖いのは茉莉である。

？

夜七時すぎ。メリールの家。

「ねえ、メリールは明日香の何処が好き？」

「ブッ！」

メリールが口に含んでいたオレンジジュースを盛大に噴き出した。

「ちょ、茉莉、急になに聞してるのよ！」

「あつ、ごめん。でも少し気になって……………」

茉莉は顔を真っ赤にしている。

「そういう茉莉はどうなのよ？」

「私？ 私は優しいとか、かっこいいとか、頼りになると
ことか、趣味が合うとか……」

「戸惑いっつも割と数出てくるのね」

「ふえ！ いや、その……………」

二人はご飯をとくに済ませ、ガールズトークに勤しんでいた。

「茉莉はどうして明日香を好きになったの？」

「えっと、話すと長くなるんだけどね」

そういう話をする二人はいつもより二倍増しに輝いていた。

それから一時間程した後、話は夢香についての話になっていた。

「ところで夢香って何者なの？」

「うーんと。明日香が頭の中で作りだした存在、かな？」

「えっ？ あの話、本当だったんだ」

「あの話？」

メリールは茉莉に軽音楽部室での話をした。

「うん。それは本当の話。明日香はね。小さい頃、あつ、本当に小さい頃だよ。私も明日香を認識していないような頃のこと。明日香ってすごく暗い子だったらしいの。私と明日香が知り合ったのって年長さんくらいの頃だから、そんな過去知らなかった。明日香のお姉さんから聞いたんだけど、明日香は決して他人と交わることをしなかったんだって。何時も一人で遊んでいたらしいの。でもね」

茉莉はそこで一息つき、少し深刻そうな顔つきになった。

「急に明るくなったんだって。嘘みたいに。明日香の両親もお姉さんも心配してたみたい。違う意味で。明日香が明日香でなくなっただいになったんだって。まるで雰囲気の違い。言うならば別人格かな」

「それって、明日香が多重人格者っていうこと？」

「最初はその可能性を考えて医者に診てもらったらしいの。でもそういう人って前の人格の痕跡が多少残るらしいんだけど明日香には無かったんだって。だから明日香はただ何かのきっかけで明るくなっただけなのか、もしくは」

「もしくは？」

メリールは茉莉に吸い込まれるように顔を近づけた。

「もっと、深い所に隠れているか。そのどちらかなんだって」

茉莉が話し終えた後、二人の間に沈黙が横たわった。

数十秒間、二人は無表情で考え込んだ後、

「もしかして、私達が知っている明日香って別人、なのかな？」

とメリールが呟いた。

「わからない」

茉莉も小さく短く返す。

しばらくして茉莉は夢香の話始めた。

「明日香が明るくなった後にね、明日香はよく眠るようになったんだって。それも一日中寝てることもあったそうだよ。私はあんまりそういう明日香は見たことなかったんだけど。それであるとき明日香は眠っている時の話をし始めたんだって。その内容がね、『奇巖城』っていう所に行つて『夢香』って子と遊んでいるって言うんだ。明日香の両親やお姉さん聞くには何時もそこに行つて遊んでいる。だからこつちの世界にはあんまり帰ってきたくないとかなんとか。ちよつと危ない感じもするけど、明るくなったことに変わりはなし、病院とかで負担をかけたくない、だからそのままにしておいたそうだよ。それから数カ月後にご両親は射殺されて中国へ。ここからはメリールにバトンパスだね」

茉莉は不安げな顔を無理に笑顔にしていた。

メリールはそんな気持ちがかかるような気もした。しかし、かける言葉が見つからなかったので中国での明日香の話始めた。

深夜零時すぎ。寝室。

二人はツインベッドで眠りに就こうとしていた。

「今度、カラオケでも行く？ 明日香も誘つて」

とメリールが提案した。

「そうだね。行こうか！」

茉莉も快諾し、二人は『明日香が行くことを前提』にその日のことを思い描きながら甘い眠りに就いた。

？

深夜零時半すぎ。行方不明等の理由で強制療養のため自宅。

唐突にこういうことを言うのはどうなのだろうか？ と自分でも思うがいつそのことに気にせずと言ってしまおうと思う。

目の前にリリパットがいる。

なぜか。俺も分からない。逆に聞きたい。だから、まあ、聞く。

「なんでお前がここにいる？」

「理由が必要かな？」

そういうセリフは物語のキーパーソンであり、妙にイケメンな奴が、明らかに理由の分かる状況の中で言うセリフだ。今はそれに該当していない。

「必要だ」

「探偵ならそのくらい察するんだな」

何処までも食えない奴だ。

「今日は我が直々に忠告しに来てあげたんだが」

そう言ってリリパットはクククと笑う。何がおかしい？

「交響曲は如何だったかな？」

「残念ながらあまり覚えていない。気付いたらベッドの上だ。奇巖城の」

「やはり、奇巖城に行ったのか。予想通りだ」

リリパットはさぞ嬉しそうに笑う。

「君にいいことを教えてあげよう。今後起きることについて」

とことんキャラが定まらない奴だな。一瞬多重人格を疑ったぞ。

口調も少し変わるし。

「我はね。君の良き戦友になりたくてね。確かに君は兄の敵だが実に興味深いよ。クラウン・タイム。それについての研究もしたいしね。だから物々交換をしよう。私の情報が有益だと思えば君も何かしらの情報をくれ」

「お前の方が俺より知っているだろう。それに敵に塩を贈る気はないんだが？」

「ククク まあどちらでもいい。結局は我が君に教えたいだけだ」

なんだそりゃ？

「我には従弟がいる。そいつは士だ。黒のね。我らが一族でも危険視されている人物だ。そいつが動き始めている。君を殺るために」
思わず呼吸を忘れていた。ブラックイリユージョニストの中でも

危険な奴が俺を狙っている？

「そいつの名は『ブロボディンナグ』。我らにはブロボと呼ばれている」

「ブロボ？」

「そう。奴は自分の邪魔者は即殺す。しかもブロボの得意技が厄介だ」

もう得意技と聞いただけで身震いがする。その先は聞きたくないような・・・聞きたいような。

「何れ君にも降りかかるだろう」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「で、その得意技ってなんだよ！」

「教える事は出来ない」

殴っていいですか？ いや、殴ります。

俺が拳を握ると、

「だが、ここで忠告だ。仲間を信じることができるか？」

忠告とかいってなんで疑問文なんだ！

「できる」

俺は短く答えた。

「たとえ君の仲間が君を陰で貶していてもか？」

リリパットはそう続けた。

貶すか・・・。

「まあ、原因は俺にあるだろうし。それでも俺は仲間を信じる。何があってもだ」

リリパットはその言葉を聞いて、少し俯いた後、

「なら、君はブロボに勝てるだろう」

「うん？」

どういう意味だ？ もしかして俺の仲間に変装して絆を壊すとかそういう系統の敵なのか？

「ククク オタクであることは君にとって有益なことだ。大事にする」

当たり前だ。捨てるわけあるか！

「もう一話題いこう。クラウン・タイムについてだ」

「お前はなんでクラウン・タイムに詳しいんだ？」

「我はその手の力の研究をしている。いわば学者だ」

学者！？ 魔法の？ 夢が広がる話だな。

「我が知っている限りの知識を君にやろう」

嫌に気前がいい。のっていいのかこの話。

「見返りは？」

俺が問うとリリパットは、

「ククク 今後君は大勢の敵と戦う。その中で進化を遂げるだろう。

その進化の過程を見る事が出来ればそれこそが大いなる見返りだ。

そして最後はお前を火だるまにして兄さんを弔おう」

と言った。

「君はなぜクラウン・タイムの力を得た？」

リリパットが最初に聞いてきたのはそんなことだった。

「レッドイリユー・ジオニストに覚醒させてもらった」

アリスやトウインクルはどうしているだろう。

「違う。聞きたいのはそこではない」

「なに？」

「何時、その力を覚醒させたかではなく、何時、その力を得たのかを聞きたい」

うん？ 待てよ。それは要するにその力は体の中に既にいたってことか。よく考えればそうだな。覚醒っていうことは元々俺の中に力はあったということだ。

でも何時からなんて考えたこともないし分からない。

「チツ 忘却か」

「というと？」

「君はその力を得た時の記憶を無くしている、ということだ。何者かの手によって消された、もしくは自らの意思で消したか、どちら

かだ」

忘却。それはブルーイリユージョニストの十八番みたいなものだ。特性といってもいい。俺も何度かそれを使ったことがある。

「奇巖城に行きたい。そこに鍵がありそうだ」

そうか！ 奇巖城に！ って

「簡単に言っな！ 好き勝手に行けるわけではない！」

「行けるさ。夢香を呼べ。そうすれば扉は開く。当然エチユードは使え」

なんだが気に食わないが、というか本当に信じていいのか？ こいつはつい最近戦った奴だぞ？ 俺はお人よしになったのか？

俺がそんなことを考えていると悟ったのかリリパットは、

「仲間は信じるのだろう？」

とクククと笑いながら言った。

俺はその言葉に微笑みを返す。

そして満面の笑みで言った。

「誰が仲間だ！」

「クラウン・タイム・エチユード」

結局、俺はリリパットの口車に乗せられ制限付き魔法を発動。

現在、奇巖城前。

俺が扉の前に立つと俺の十倍はありそうな高さの扉が瞬時に開いた。はやっ！？

「これでいいのか？ いっっておくがここで暴れたら容赦しないぞ」

俺がリリパットに念を押す。

「わかってるさ」

そう言っ俺とリリパットは奇巖城の中に入った。

少し歩くと奥から、

ドドドドドドドド

何かが来る？

身構えた瞬間、

「明日香~~~~~!」

と叫びながら夢香が飛びついてきた。跳びついたのではなく飛びついたので。

「グアッ!」

俺は鈍声を響かせ倒れた。

「久しぶりだね!」

そうでもないだろ。しかもこっちの方が短く感じるのでは?

夢香はニコニコ笑顔だったがリリパットを見るなり目つきが変わり、

「誰、この男」

と感情が籠っていないが故に恐ろしい声でリリパットを一瞥する。

「こいつは学者だ」

と一応嘘ではないのでそういう説明にしておく。

「はじめまして。リリパットと申します」

リリパットは紳士風に挨拶すると俺に目を向け、

「あなたのお部屋は何処です?」

と聞いてきた。

俺の部屋って認識でいいのだろうか。

確かに俺が以前ベッドで寝かされていた部屋はここであり、部屋の扉に金文字で、

ASUKA MURASAME

と書かれている。

「にしても」

すごい部屋だ。なにせ広い。テレビで出てくるVIPルーム以上だ。そして異常だ。

「ほんの少し広くしたんだ」

と夢香がえへと笑っている。本当に少しだろうか?

リリパットは部屋の一角にいた。

そこには銀文字で何やら文字が書かれているようだが、象形文字

？ いや違う。とにかく現人類の言葉ではないことは確かだ。

「学者さん。何が書いてあるんだ？」

「ククク 興味深いよ。訳してあげようか？」

是非そうしてほしい。ここは俺が作り出した世界のはずなのに俺に読めない字があるのは少し嫌だからな。

リリパットはその字に指をあて、左から右へスライドさせていく。どうも英語と同じように読むようだ。

「では。」

『運命を愛する者のみがその手中に有りし光を得

運命を信じぬ者のみがその手中に有りし己を知らず

運命に背を向ける者のみがその手中に有りし宝を得ず

運命を受け入れる者のみがその手中を手中とせず

運命を変えようとする者のみがその手中の無限を知り

運命を信じる者のみがその手中で夢を見る』

どうです？ 思い出しましたか？」

リリパットがこちらを振り向き問ってくる。

ああ。変な気分だな。聞かされて思いだした。

その言葉は俺が昔考えた言葉だ。

この奇巖城を作ったところだから幼稚園生の頃か？

マジか？ 自分で言いながら信じられん。

俺は昔【すごかった】のか？ 色んな意味で……。

おっ、でもあと一文あるような。

「なにか言いたいことでも？」

リリパットが俺をにやにやした顔で見つめてくる。

どうやら言わせたいのか最後の一文を。

「えっと

『そして運命を殺した者のみがそれを手中に治める』

だったかな？」

「その通りです」

リリパットは満足そうにその銀文字を見つめていた。

やっぱり俺は記憶を消されているようだな。

「でも、それに関われば思いだすシステムなのか？」

「いえ、そうとは限らないでしょう」

記憶を消した者にとって重要なものはそう簡単には、とりりパツトは続けた。

消したのが俺だったらどうなるんだろうな。俺は何を消したかったんだ？ 駄目だ。考えてわかるものじゃない。

「どうしたの明日香？」

夢香が心配そうな顔で俺を見ている。

「いや、大丈夫だ……そうだ夢香」

こいつなら、何か。

「夢香は何か俺について知らないか？ クラウン・タイム関係とか」

夢香は少し思案顔をしたかと思うと、

「明日香のことは全部知ってるよ？」

な……に？

「それは、どういう？」

「だから、ボクは明日香のことなら何でも知ってるよ！」

「ククク それは好都合。では、明日香君にその情報を教えてやればいい」

うん？

「普通教えるじゃないのか？ 態々俺を通すのか？ そりゃ俺も知りたいけど」

するとりりパツトはバカな子を見るような表情し、

「君は調査通りの男のようだね。鈍感だ。少しは考えてみる」

「なっ!？」

こいつにまでも鈍感と言われるのか俺!？

「いいんだよボクは。明日香のそういう所も好きなんだよ」

へ？

「ボクは明日香を愛しているんだ」

……

いやいやいやいや。何この展開！？

「ククク 可愛い女の子からストレートに言われたら人間の男子はどうなるんだろうね？」

リリパットはさぞ面白そうに例のクククを五倍増して発している。どうなるか？ そりゃ、照れるだろ！ ていうかさ。

「展開が読めない」

深夜の自宅にリリパット↓成り行きで奇巖城へ↓俺の記憶は消されている↓夢香の告白。

「我にとつては好都合だ。この展開はな。そのうち分かるさ。ククク」

要は、俺はこれから先苦労するってことなのか。

それから奇巖城の部屋を一通り調べ、リリパットは突然姿を消した。

なにも言わず一人で帰るとは。

そういえば、あいつは自分からこっちには来れないが出る事は出来るんだな。

俺はそれから奇巖城に泊まった。

帰っても茉莉はいないしな。

奇巖城。それは俺が頭の中で作りだした空間。

現在、その想像でしかなかった空間はクラウン・タイムの力で実在化している。

それは住民も同様だ。

俺は記憶を消されている。

たぶんクラウン・タイム関連のことを。

当然、何時頃の記憶を消されているかは分からない。

そして、それを思い出すことが出来るかどうかも・・・。

翌日。火曜日。

茉莉は何事もなかったかのように帰ってきた。

会話はない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙は朝食間ずっと続いた。

「いつてきます」

そう言つて茉莉はお坊ちゃんお嬢様学校（霧百合高等学園）へ向かった。

その学園はTND学園と違い、普通の学校だが、私立で進学校、お金持ちの集まりである。

茉莉の両親はほとんど仕事で帰つてこず、学校だけということ
で贅沢な所へ通わせてもらっている。

そういえば噂では霧百合学園には日本で最大の美男子・美女が集
う学園だと言われている。

昔、茉莉に明日香は来ちゃ駄目だよと言われた記憶がある。

自分が美男子だとは言わないが失礼じゃない？　いくらなんでも
泣くぞ？

なんて頭の中でバカみたいなことを考えながら俺はTND学園に
向かった。

家からだとも少時間がかかるので何時もより早く家を出なければ
ならない。

朝が億劫な俺としては療養になっていない。

一年一組の教室に入るなりメリール（なぜ一組に？）が、

「来週末、カラオケに行くわよ！」

と耳元で呟いた。

「カラオケ？」

なぜ急に？　歌の練習か？

「詳しいことはメールで送るわ！」

それで思いだした。

携帯を家に忘れてきた。

四時間目。 日本史。

坂上田村麻呂が征夷大將軍に任命された頃、俺の机に丸められた紙が跳んできた。

中には、

『今日、一緒にお昼ご飯をどうですか？ 駄目ですか？』

と達筆な字で書かれていた。

跳んできた方を見ると、それは以外にもライラだった（こういう行動的なものは大抵エリーが行う）。

俺はこちらを恥ずかしそうに凝視（思えばすごい光景だな）しているライラに頷く形で同意した。

その頃、日本初の征夷大將軍様は蝦夷を討伐し終えていた。

昼休み。 食堂。

「ライラ主導でのお誘いは初めてだな」

「（コクン）……………（コクン）」

俺達は空いている席を見つけ、俺は味噌ラーメン、ライラは冷やし中華（思ったより早く解禁したな……）を食べている。

なんとなく四方から視線を感じるが気にしない方向で。

「そういえば、何か俺に話してもあるのか？」

俺が何気なく聞くと、

「（コクン！）」

と何時もより強くライラは頷いた。

最近、碌な事が起きていないせいかこういう時には不吉な予感しかしない。今はおみくじ引いたら間違いなく大凶だろうな。

ライラは制服のポケットから紙きれを取り出して俺の前に置いた。

その紙には、

『交響曲、お疲れ様です』

と書かれていた。

交響曲って、まさか。

俺はライラの方を見た。

ライラはこちらを見つめたまま、また紙を取り出した。

『クラウン・タイムについてお話しがあります』

間違いない。

ライラは知っている。俺の正体を。もしくはもっと詳しい何かを。
「お前は、何者なんだ？」

こういうセリフが一番無難な所だろう。まさか現実で言うことになるとは、食堂で・・・。

するとライラはその質問を予期していたかのように紙を取り出した。

『私は^{ライラ}靚？麗』

すげえ難しい字だな。

『私はあなたを導く者』

『それが私の使命。そして存在意義』

まずい。話しが重い。いや決して軽い話にしようというわけではなく、でも存在意義って。

『ある人から頼まれた』

頼まれた？

「誰からだ？」

『それは言えない。どうしても』

言わなくていいから書いてくれ・・・なんて言ったら怒るかな？

『プロブが動き出した』

「なにっ!？」

俺は思わず立ちあがった。すると周りがザワザワし始めて、

「ついに告白したのかなライラ？」

「明日香君のお返事はいかに！」

などなどの話し声が聞こえてきたので俺達は一旦食堂を後にした。

「それで、お前はどうするんだ？」

言った後に漠然とした質問だなとは思ったがこの際仕方がない。

『あなたの近くにいます。今までよりも
色んな意味で試練だ。』

「そうか。だから俺のことを好きだとエリーに言って自動的に近づけるようにしたのか？」

と俺が言っているとライラはもじもじし始めた。うん？ なんだ？

ライラは一向に紙を出さない。予想外の質問だったとみえる。

「紙じゃなくて、額けば？」

そう促しても駄目だった。なんだ？

『私は後にあなたの必要な存在になる』

そんな紙を俺に向けるライラ。

盛大に誤魔化したな。

するとライラはペコリと頭を下げダツシュで消えた……………。

速い……………。

いや、そんな呑気な感想はいらない。

まさかライラが俺の関係者だったなんて。

くそ、最近謎しか増えない。

探偵の卵でも常識を逸している問題は答えられないぞ！

放課後。

今日から寮での生活に復帰。

この世で二番目に好きな地球の現象である夕焼けを背に寮へ向かっている、少し陰になっている草むらのような所に人影があった。シルエットは女性。ロングヘアでスラッとしている。

丹花だった。

「どうした丹花？」

俺が話しかけると丹花はビクツと少し跳び跳ねた。どうしたんだ？

「あ、明日香。えっと、明日は朝だけだったよな？」

朝だけというのは要するに午後には授業が無いということだ。明日は職員会議か何かで午前中だけで終わりだった。

「ああ。それがどうかしたのか？」

丹花は俺の言葉一つ一つに過敏に反応している。大丈夫か？

「できれば、買い物に付き合ってもらいたいんだが、駄目か？」

「うん？ 別にいいぞ」

「本当か！？」

「ああ」

そんなに喜ばなくてもいいと思う。荷物持ちかな俺？

「丹花が買い物か。扇子かお琴、和服か簪、それとも日本刀？」

「……………明日香、お前は私にどんなイメージを持っているのだ？」

あ、れ？ 何か俺気に障るようなこと言ったかな？

「えっと、なにを買いに行くんだ？」

「服、とかだ」

やっぱり着物とか？

と頭の中で考えているとものすごい眼光がこちらを向いた。うん。言わないでおこう。

「じゃあ、明日昼食とってから寮の前に集合でいいか？」

「ああ。では一時半頃にしよう」

たまには気晴らし、という気分でもないが、まあいいか。

俺と丹花はその後寮まで他愛もない話をしながら帰った。

夕日は既に沈んでいた。

翌日。午後一時半。寮前。

俺は丹花を待っていた。

今日はちゃんと携帯を持ってきている。

まあ、中に入っているのはメリールと茉莉の電話番号&メールアドレスだけだな。

丹花は携帯持っているのか？ あとで聞いてみるか。

俺が携帯の機能で遊んでいると、私服姿の丹花が走ってきた。あつ、俺も一応私服だ。

「遅れてすまん。選ぶのに時間がかかってな」

そう言う丹花だが、時間的に言っていると遅れてはいない。

丹花の私服は洋服だった。

以外だ。

なんて考えていると眼光が以下略。

「丹花つてなに着ても似合うんだな」

これは素直な感想だ。

大和撫子というのは洋服でも似合うということが今日判明した。

「な、なにを言う！」

いや、褒めているのになぜ、どつかれる？

「じゃあ、行くか」

「ああ」

丹花は顔を真っ赤にしている。恥ずかしいのか？ そんな赤みだと俺の経験は言っているんだが。

俺は丹花に連れられTND学園駅から五駅の所——鴉谷駅——に着いた。

その商店街に入り、二人で如何にも今どきのお店といった感じの服屋さんに入った。

「えっと、明日香はどれが私に似合うと思う？」

照れ隠しで語調を強めて丹花が俺に問う。

「すまんが俺はこういうのに疎い。俺の感性は当てにならないぞ？」

「それでもいいのだ！」

いや、俺が困るなんて言えず、一通りレディースの所を見て回り（それだけで一時間かかる程広い）、大和撫子様に似合う服を探す。と言いつつ俺の目に留まったのは薄く淡い桃色をしたワンピースだった。やはり俺の感性は死んでいる。

「これなんかどうだ？」

俺がその服を持って行くと、

「！ お前、言ってることとやってることがバラバラだぞ！」

だよな。それは同感だ。

「まあ、明日香が、それがいいと言うなら着てやつても……いいぞ」

「うん？ ああ、せっかくだし着てみてくれ」

丹花は顔を真つ赤にしながら試着室に入って行った。

二分ほどして出てきた丹花は、うん、綺麗だ！

「おお。やっぱり丹花、なんでも似合うな！」

さすが和洋両用大和撫子江戸川丹花。って、中国語みたいになつた。

「そうか？」

「おう！ あつ、そうだ！」

俺は携帯を取り出し写真を撮った。

「なっ！？」

「いや、写メでメリールと茉莉に送ろうかと」

きっと二人とも似合っていると言うはずだ。

「そ、それはさすがに恥ずかしい！」

「でも、どうせ着るんだろ？ だったら同じだし」

「しかし——」

ドォ————ン

丹花が言った瞬間外で爆発音がした。

「キャ——」

店中に悲鳴がこだまする。

「なんだ！？」

「明日香、外へ出るぞ」

「ああ」

俺達は走って店の外に出る。

一階にいたのですねに外へ出られた。

俺達が太陽の下に出た時、最初に目にしたのは、

「これは……！！」

身長十メートル程の人型黒金だった。

巨大なロボットが三つ指の回転する手から光線や光弾を出している（よく見ると右手から光弾、左手から光線のようにだ）。

首は無く、胴体と頭が一体化している。

アルタイルキラーとは少し外見が異なっている。

あいつは、なんだ？

何者だ？

俺がそういうことを考えていると、

「トルネードで倒そう」

と丹花が言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は答える事ができない。

もしかしたらプロブが送りだした敵かもしれない。

そんなのをトルネードで倒せるのか？

俺はともかく丹花に何かあつたらどうする。

「明日香！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

考えている暇は、ないか。

「「ログイン」」

俺はブラウアー・ヴィントUW、丹花は十六夜。

俺達はその名も分らない敵の眼前（推測でその辺だろうと判断した位置）に浮く。

案の定、そいつは反応し、その鞭のように撓る腕が俺達を襲う。

「行くぞ、丹花！」

「ああ！」

俺達はその腕から逃れ、高度を上げた。

するとそいつは何らかの方法で空を飛んだ。

そのまま、俺達はそいつを誘導し、雲を抜け、ジャンボジェット機が飛ぶくらいの高度に達した。

？

雲を下に見据えながら明日香と丹花は黒金ロボへと直接攻撃を与える。

明日香は月光にパワーを溜め、敵の攻撃源である腕を中心に。丹花は巨大剣で敵の意識を明日香にやらないようにしている。

しかし、明日香の攻撃は敵に傷は与えるが致命傷とまではいかなかった。

敵は明日香を右手の光弾で、丹花を左手の光線で退ける。

丹花の機体、十六夜は左手に盾を装備しており光線をダメージは皆無だが、明日香の装備は月光のみであり、避けると光弾は落下し町への被害となるので、月光で相殺させるほか無い。よって刻一刻とダメージが溜まっていく。

「チツ、丹花頼む！」

「分かった！」

丹花は剣を粒子砲に変換し敵の顔面に放つ。

敵はその瞬間、二秒ほど明日香の姿を見失った。

「もらった！」

WFを発動させた明日香は月光にエネルギーを溜め、

「インスタント・シヨック！」

その刃は敵の右手を切断した。

鈍い音が響き、その手は空中で爆発、したかに見えたが。

「なっ！？」

その手は空中を浮遊し、ゴムのようにグネグネとなり元あった敵の右腕に接着された。

切り落とされた手は元通りになる。

「まじか」

敵は右手が戻るとすぐさま攻撃を再開。

再び明日香は防御の態勢へ。

「明日香、どうする。敵は不死身のようにだが！」

丹花は少し動揺していた。

実戦経験の少ない丹花は対応の仕方がわからない。

「丹花！ 粒子砲の放射範囲を広げる！ 百パーセントにだ！」

明日香は通信で叫んだ。

「しかし、それでは威力が！」

「威力はこの際、いい。この作戦自体うまくいくかわからない。でも、やるしかないだろ？」

明日香は穏やかに話していた。

狼狽した丹花を落ちつかせるために。

「広げる！」

「……わかった！」

丹花はエネルギー粒子砲の放射範囲を全開にした。

この手の銃は放射範囲を狭めることで威力を上げる事が出来る。しかし、その分命中率は低くなっていく。

全開にすると、前面にいる敵には確実に当たるが威力が限りなく弱くなるのだ。

「できたぞ、明日香！」

「よし」

明日香は光弾を相殺しながら精神統一を始めた。

そして、

「行くぞ、ブラウアー・ヴィント！」

そう叫んだ瞬間、エネルギー残量及び友情度が【100%】を表示する。

それまで蒼い体に白いオーラを放っていたブラウアー・ヴィントUWは黄金色に輝きだした。

「行け！」

姿が変わった機体と月光を持った明日香は敵に一直線に突き進む。一瞬、明日香の姿が霞むとそこに明日香はいなかった。そう『そこ』には。

明日香はほぼ音速に達し、エネルギーの満ちた月光で敵を縦横無尽に切り裂く。

当にトルネードが起きたかのように敵の周りに疾風が起き、敵の体は引き裂かれてゆく。

細かく裂かれた敵に部品が風に乗リ一か所に集まりだした。

その瞬間、丹花の通信に響いた声は、

「今だ、丹花！」

「おう！」

丹花は一か所に集った黒金に粒子砲を放った。

光に包まれた黒金は徐々にゴムのようになったが以前のように一つになることはなく一つずつ【蒸発】していった。

ドラゴンマスターが消えた時と同じような黒い煙を出しながら黒金は消えて無くなった。

？

まあ、当たり前のことだが【黒金】事件はかなり大きな騒動になった。

運よく死者は出なかったが重傷者は二十数名出た。

俺と丹花は警察からの事情聴取でその日は削られた。

翌日。学園にて。

「はあゝ！ 昨日の騒ぎ、あんた達だったの！？」

メリールは立ちあがって驚いていた。

「あ、ああ」

それにしても昨日のは何だったんだ？ あれがプロブの刺客にしては弱すぎる。

念のためライラに電話したが知らないみたいだった。

あれからリリパットも現れていない。

全く手掛かり無し、か。

と普通ならここで一段落といけるはず、なのだが・・・。

「で、どうして明日香は丹花と二人きりでいたわけ？」

一瞬頭に電があたったのか？　と思うぐらいの破壊力のあるセリフをエリーが呟いた。

これはまずい。特になんてことはない「買い物に付き合っただけ」というセリフはエリーには通用しない。

理由はどうあれ二人きりという情報がエリーの耳に届くのは非常事態だ。

「買い物に付き合ってもあっただけだ！」

俺より先に丹花が口火を切った。語尾も強い。これなら勝てるのでは？

「なんで男子に、いや明日香に頼んだの？　うん？」

エリー、今の口調はヤンキー以上では？

「そ、それは男の方がたくさん買っても持ってくれるではないか！」
ナイス丹花！

「じゃあ、たくさん女子を連れて行けばいいじゃん」

その言葉にエリーの後ろからメリール、アルル、現、ライラが顔を出す。ジト目で。

「そ、それは思いつかなかった」

一瞬でこちら側が劣勢に！？

「で、明日香はどう思ってるのかしら……」

矛先がこちらに向いた。俺の発言はエリーにまともにつて合われたことが無い。

「なにをどう思っつて？」

せいぜいこの程度の返しが精一杯だ。

「丹花とのデート面白かった？」

笑顔でエリーが聞いてくる。

当然目は笑っていない。

「というかこいつは人の話を聞いてないのか？」

「いや、デートではないし」

このセリフを言った後、俺の軍勢にいたはずの丹花がエリー軍についた。いやいやいやいや。なんでそんなことになってるの！？

俺、今なにか言った？

その日の放課後はリリパットの言葉を借りるなら『血祭り』になった。

夕方六時。寮。

俺は自分のベッドに横になっていた。

あの時の敵との戦いよりも今の方が疲れている自信がある。

「大丈夫？」

心配そうな顔でアルルが顔をのぞかせる。

心配に思ってくれるのなら我が軍に入ってほしかった。

「一応」

もう短い返事しか出来ない。

「ねえ明日香、今度は私の買い物に付き合ってよ！」

「うーん、またこんなことになるのは避けたいのだが」

するとアルルは世界の終わりの日を聞いた人のように落ち込んだ。
「いや、アルルと行くのが嫌とかでは戦争は二度と繰り返してはいけないのであって、それにお前にも被害が——」

「いいよ」

「えっ？」

「被害があってもいい。私は明日香と出かけた」

グハッ！　ここまで来ると俺は今、夢をみているのでは？　と思
ってしまう。リアルにこんなセリフが聞ける日がこようとは。

「じゃあ、行くか」

「うん！」

アルルの笑顔が戦争で傷ついた俺の心を癒してくれた。

？

幽霊さえも眠りについていないか、と思わる程静かな深夜四時。

もう少し日が上がるはずなのにその一帯は真っ暗であった。

そこは村雨家。

現在、家には茉莉が一人で眠っている。

その家の中に一人の少年が立っていた。

背はかなり低い。

紅いコートに紅い帽子。そして右手には巨大な鎌が握られている。

その少年は音をまったく立てず茉莉の部屋に侵入した。

茉莉は一人静かに寝息を立てている。

その少年は口が裂けんばかりに笑顔になり、充血とは違う純粋な紅い瞳を茉莉に向けていた。

それから、左手を茉莉に向け、何やらブツブツと呪文のようなものを呟くと、黒い煙と共に姿を消した。

？

奇巖城。

「俺は、なにを忘れてんだろうな」

俺は奇巖城にある大きなソファに腰掛けながらそんなセリフをいつの間にか呟いていた。

「そのうち、思い出すよ。きっと！」

俺にだけはやけにテンションの高い声で話す夢香が隣にいた。

「お前は、知っているんだっけ」

「うん。ボクは明日香の全てを知っているから」

「やっぱり、教えられないのか？」

「ボクは明日香が大好き、だけど、それは出来ない。ゴメンネ・・・ほんと・・・ごめん」

今にも泣きだしそうだった夢香に、

「もういいよ、ごめん」

とそれだけ言って俺は夢香の頭を撫でた。

「でも、一つだけ、教えてあげる」

夢香は小さな声でこう言った。

「檸檬さんは【今の明日香】の初恋であって【昔の明日香】の初恋じゃ、ないんだよ」

数日後。

日常に帰還した俺は何時もならもうすぐ梅雨だなあとワクワク気分んでいるのだが今はそんな気分になれるはずもなく、ただ外の景色を眺めていた。

現在、「羅生門」で男がお婆さんに出会った。

まあ、要するに古文の授業中だ。

思った以上に時間というものはあっという間に過ぎていく。

気付けば昼休み。

俺の席の前にいつの間にかメリールが座っている。どこから湧いてきたのだろうか。

「人の話聞いてる？」

「聞いてなかった」

バコッ

グーで脳天を！？ 地味に痛い。

「だ・か・ら、あんたの初恋話の続きをしなさい！」

ああ、あの話か。でも本当の初恋ではなかったらしいな。

「あれ、初恋じゃなかった」

正直すぎだろ俺。

「は？」

メリールは怒りでプルプル震えていたが暫くすると、

「もう、それでいいから続き！」

とほぼゼロ距離まで俺の顔に近づいてくる。

「わかったよ」

どこから話せばいいんだっけ？

檸檬は「教えてあげる」と言って俺の頬にキスをした。

「ひゃえ!？」

経験値の少ない俺は動揺し変な声を出してしまう。
今になって考えてもあの声は恥ずかしい。

「これが私のしたかったこと」

檸檬は今まで見たこともないような笑顔を見せた。

「あ、ありがとう」

俺は何を言っているんだろうな、まったく。

すると檸檬は少しおどけた顔で、

「お返しは？ フッフ」

なんて言った。

「お返し!？」

えっと、考える俺！ 考える俺！ この場合のお返しは・・・う

ん、下手したら社会的に死ぬぞ!？

俺は勢いで檸檬の頬にキスをした。

「!？」

檸檬はビクツと体を揺らす。

あ、俺、死んだかな？

檸檬は顔を真っ赤にして、

「あ、ありがとう」

と小さく呟いた。

まずい、まずい、まずい、まずい、まずい。

顔熱い、隣を向けない。

どうもお互い意識してしまっている。

そんな中、口火を切ったのは檸檬だった。

「えっと、さ。明日香は好きな人いる？」

「・・・・・・・・これは一種の地獄だな。地雷臭がぶんぶん
と（恐）。

「好きな・・・人？」

「うん」

修羅場というのは一日に二回も体験するものなのか？ 神様の悪戯なんて洒落た言葉じゃすませられないぞ、これは！

「いるけど秘密だ」

「え〜〜〜ケチ！」

それは決して抗議をしている感じではなかった。

「これで、満足か？」

これにて『ドラマスペシャル』俺の（記憶上の）初恋・村雨明日香の場合の終了だ。

「えっ、うん………」

あれっ？　なんで元氣なくしたんだこいつ？　聞きたいって言うから教えたのに。腑に落ちん。

「なんでそんな不満顔なんだ？　ちゃんと話したる？」

「う……うん」

メリールはそれから終始黙り込んでいた。そして、

「じゃあ、放課後にね」

と言って教室を出た。

この後の展開が読めた気がした。

数時間後には六人の鬼が俺の前に。

あつ、救急車お願いできます？

？

放課後。

明日香は軽音楽部の部室へと足を引きずりながら向かった。

明らかにひきつった顔で部室のドアを開けると、何時もとなんら変わりない風景が広がっていた。

「あれ？」

明日香がキョトンとしていると、

「なにしてんの明日香！ 練習するわよ！」

とメリールが明日香を急かす。

周りのメンバーはそんな二人を不思議そうに眺めていた。

夕日がTND学園軽音楽部員七人の顔を照らしている。

明日香は金曜日であることもあつて今日は自宅へ帰る。

六人の女性陣は学園の外に出るゲートまで明日香を半ば強引に送っていた。

「じゃあ、また月曜日」

そんな常套句を皆がかけ合った後、明日香は一人自宅へと向かう。

明日香の後を追う人影があつた。

それは明日香を慕う女性陣ではない。

紅い服に紅い帽子、真紅の瞳をもった少年。

ブロボ。

ブロボは陰になっているところを歩きながら徐々に明日香との差

を詰めた。

そして、

「最後の仕上げ」

と右手を明日香に向けて、呪文を唱えだす。

それからすぐ、ブロボは闇に消えた。

？

自分が魔法使いであることもブロボに狙われていることも忘れかけていた日曜日。

五月三十一日。

深アニ（深夜アニメ）を見終わった俺と茉莉はそれぞれ自分の部屋に向かった。

「おやすみ明日香」

「ああ、おやすみ」

そんなありふれた挨拶の後、俺は自室で今までにない睡魔に襲われる。

一瞬でベッドの中に。

半ば気絶をしたかと思った。

眠い割にこんな風に考えられて記憶もあるという矛盾を多少感じながら、俺は床に就いた。

その瞬間、日付が回った。

夢現 エピローグ「The glow of the sunset」

エピローグ「The glow of the sunset」

「ウェーン えぐっ えぐっ」

放課後。

明日香と檸檬しかない教室に泣き声が響いた。

「えっ？　なんで泣くの？」

明日香は焦り、檸檬にハンカチを渡しながら宥めようとする。

「どうした？」

檸檬はしばらくすると、

「私、明日でこの学校に来るの最後の……」

それは小さくこぼれ落ちるような声だった。

突然のその言葉に明日香は、

「……そうか」

それ以外に言葉を発しなかった。

いつかはこういう日が来る。それは両者ともわかっていたことだった。

しかし、いざその事実が目の前に現れるとどうしていいかわからない。

ましてや中学生の二人にはその解決策は見つかるはずもなかった。

「私、明日香と離れたくないよ！」

絞り出したような声で檸檬が叫んだ。

明日香はそれでも何も言わなかった。言えなかった。「俺も」とは。

「ほら、よく言うだろ。えっとさよならは次に会う……」

明日香はその言葉を最後まで紡げない。

でも、なんとかしなきゃ、そう思った。

「俺、正直最初に檸檬に会った時、あんまりお前のこと知らなかった。テレビとかもアニメしか見ないし、今どきの話題もわからない。でも、今思うとあの時図書室の前でお前と会えて良かったよ。初めてアイドルに興味を持ったし。なによりこんなに仲良くなれた」

「だったら私を止めて！」

檸檬は明日香に抱きつき、縋るように叫んだ。

それは、まさに悲痛の叫びだった。

「それは——」

明日香の答えは決まっていた。

いや、それしか正答はなかった。

たった一つの答えを認識するのに何十年分もの苦痛を感じるようだった。

そう。

「それは出来ないよ」

檸檬の明日香を掴み手の力が増した。

誤答で良かった。むしろ檸檬は誤答が聞きたかった。

しかし、明日香は正答を口にした。

「だって、この地球上にはあと二、三人は俺みたいに『明星レモン』を知らない奴がいるかもしれないだろ？ そいつらにも教えてやらなきゃな。お前のこと」

明日香はそう言つと檸檬の頭を撫でる。

文字通り甘酸っぱい香りが明日香を包んだ。

檸檬は涙で濡れた顔を明日香に向ける。

明日香はそんな檸檬の顔を伝う涙を指で拭う。

「もし、それでも辛いなら俺のことは忘れてもいいよ」

明日香は小さく呟いた。

「えっ——」

檸檬は目を見開かせる。

明日香はその後、

「でも、俺は檸檬のことを忘れないし、何時か何処かで会う機会が

あつたら俺が思い出せてやる。だから今は忘れてもいい」と続けた。

檸檬は目を閉じて暫く震えた後、
「うん。でもね、忘れるのは魔法が必要なんだ」
檸檬は急に笑顔になり、

「
」
自分の唇を明日香のそれに重ねた。

二人の影が重なる瞬間を夕陽の輝きだけが見つめていた。

クラウン・タイム！ 夢現 了

夢現 エピソード「The glow of the sunset」(後書き

「クラウン・タイム! 夢現」がこれで終了です。

フラグの数が最高潮の中、「クラウン・タイム! 離魂」へと続きます。

では。

離魂 プロローグ「闇を殺して」

プロローグ「闇を殺して」

一人の少年が自分の部屋で誰かを待っていた。

その少年の年は三歳から四歳程。

少年は終始笑顔で待っていた。

机にはケーキとオレンジジュースが二つずつ並んでいる。

「もういいよ！」

少年がそう言うのと暫くして一人の女の子がその部屋に入ってきた。

少年は嬉しそうに女の子に駆け寄った。

その瞬間、

グシャ

鋭利な物が何かに刺さったような鈍い音がした。

少年の目が見開かれる。

女の子の手には日本刀の柄が握られていた。

その刃は少年の腹を貫いている。

「あつ……………くつ……………」

少年はその場に倒れこんだ。

女の子はその場に立ち尽くしたまま、

「ゴメンなさい」

と震えながら呟くだけ。

それから涙を堪えるように手を握り締め、

「……………」

何も言わずにその部屋を後にした。

ドアを閉めた途端その部屋の電気がすべて消え、闇が生まれる。

その闇の中に突然『人の気配』が生まれた。

背の高い男、紳士風の男、着物を着た女性。

四、五人の人々が口々に呟いた。
「ほら、やつぱり」

それから人の気配は消えた。
無の空間。

少年は静かに立ちあがった。

IS(sirasu)×クラウン・タイム！(晴野有希)

Christmas

今回はsirasu様とコラボさせていただきました。

短い期間でしたが面白かったです。

では、どうぞ。

十二月二十四日、終業式から三日経ったこの日。

俺は自宅をクリスマスパーティー仕立てにしていた。

茉莉がどうしても言うてきかなかったたのでやることになったのだが、仕事配分が今のところ――

・ツリーの飾り付け――俺。

・部屋の飾り付け――俺。

・買いだし――俺。

・料理全般――俺。

――っておい。さすがにこれは無理だなと速いうちから単独戦を諦め、現を電話で呼んだ。もう少ししたら来るだろう。

「さて、と」

俺は焼いたターキーを保温容器に入れ、一休みしようとしていると、

♪ ♪ ♪

ケータイのメール受信音が鳴った。

少し前に檸檬こと明星レモンがアニメの主題歌を担当した時の歌が今の俺のメール受信音だ。ちなみに電話はワ。ダバ。

ケータイを開けて送信主を確認――俺はケータイを閉じた。そこに浮かんでいた名前は『メアリー博士』。タイミング的に嫌な予感しかない。見たくない。

とは言っても本当に見ないわけにはいかないので早々に現実逃避を止め再びケータイを開いた。

件名「明日香君にお・」

えっ? 「お・」ってなんだ?

内容「ね・が・い! ここに逝って」

どう操作すれば件名と内容をこんなことに出来るのだろうか。

矢印の下には地図データが添付されており……………

って「いく」が「行く」じゃなくて「逝く」になってる！？ もしかして死ぬ危険があるの！？

不穩すぎるメールに対し俺は一言。

件名「博士へ」

内容「丁重にお断りいたします」

送信！

三秒後 ♪ ♪ ♪ はやつ！？

件名「だつたら・・・」

内容「明日香君は一生私の奴隷！」

「奴隷！？ そここまでされなきゃなの！？ っていうか三秒でどうやってこの文章書いたんだ！？ 指速っ！？」

速攻変身・・・いやいや返信。やばい。焦りすぎてテンションが狂つてる。

件名「・・・」

内容「分かりました」

送られてきたデータをブラウザー・ヴィントUWに取り込み、自動操縦で行くことにする。できれば逝きたくない。

俺が発済するためTND学園に行（トルネードは『基本』TND学園外での展開は禁止だ。『基本』だからドラゴンや魔法使いが現れた時は例外だ。というかそう信じたい）こうしていると、

「あっ」

「・・・えっ？」

玄関で現と出くわした。

「・・・何処か行くの？」

不安げな顔で見つめてくる現。眼鏡＋その顔は卑怯だと思った。

「ちょっとメアリー博士に頼まれてな。どういう用件かはまだよく分からないんだが。だから現、俺が帰ってくるまでここに残って――」

「・・・」

（抗議＋批難＋不安＋拒否）×眼鏡×上目使い＝所謂玩具を強請る

子供のような愛くるしく何とも言えないあの感じ。

「———と思ったが一緒に行くか？」

「うん」

とても嬉しそうな笑顔を浮かべ現は即答した。

俺、娘が出来たら甘やかすタイプの父親になりそうだな……。

心中穏やかではなかったが、俺と現はTND学園へと向かった。

TND学園。

「やあやあ明日香君！　そして現ちゃん！　うん、このカップリングも中々……お姉さん困っちゃうよ……」

到着して早々博士と出くわしたのは良かったが安心と安全のメアリー品質。変わらぬメアリー節だ。

そして何故か現は頬を朱に染めている。そして博士は思案顔。なんだこれ？

「ところでどうして俺を？」

「あ……明日香君にね、行ってほしい所があるんだ！」

博士は思案顔を止め俺の前でパタパタ動きながら話す。

「それは地図を見れば分かりますが……」

「うん！　じゃあ、行ってらっしゃい！　現ちゃんも行くんだよね？」

この様子だと真相を言う気は無いらしい。昔から悪戯好きな博士がまた何か仕掛けたのかもしれない。はまってあげますかドッキリに。

「じゃあ、行くか現」

「………うん」

俺達は学園の屋上に行きトルネードを展開。あとは自動的に地図の示す所まで飛んでくれる。

屋上に蒼と紫の機体。現の専用機【パープル・レイン】には既にデータは転送済み。

俺達は徐々に浮上し、勢いよく目的地へ向け発進した。

「カオスだ……………」

「……………カオス」

カオスとは混沌である。そして俺の目の前に繰り広げられている情景、それこそが混沌の一言につきた。

状況説明の前に備考として少し。

【フェニックスSS】——日本国軍所持の戦闘機。海、空両

用戦闘機で海でもほとんど抵抗を感じず移動することが出来る。装備は両翼付け根のレーザー砲と内蔵されている海、空両用ミサイル。
【M・ラビット】——海軍所持の小型偵察船。潜水も出来る
優れたもの。武器は搭載された散弾レーザー。機動力が重視された当
に三月兔（狂った兔）だ。

と、俺が何故こんな説明をしたのか。

それはこの日本軍が所有する最新鋭戦闘機と戦船が鉄屑となつて海の上に浮かんでいたからだ。

惨劇。そんな言葉がびつたりな光景だ。そして犯人は分かっていた。なにせ性懲りも無く『宙に浮いていた』からだ。

トルネードよりメカメカしい装甲で覆われた人間（顔が出ていてそれがまさに人間だ）が四人宙に浮いている。

一人は白い装甲。外見は男。

一人は黒い装甲。外見は男。

一人は紅い装甲。外見は女。

一人は黒い装甲。外見は女。

だが、これは俺が修行不足だからだろうか、彼らから敵意や戦意が感じられない。

そんなことを考えているとその四人と完全に目が合った。

これが所謂『未知との遭遇』というやつなのか。第一声はどうしたものだろう。

俺は考えた末、本当にどうしようもないくらい普通の問いを投げ

かけた。

「お前達……何者だ？」

その問いに四人は安心したような、それでも煮え切れない感じの渋い顔をして口を開く。

「やつと話せるやつが来た」

「死に掛けたぞ？ 普通に……」

「しかしここは一体どこなのだ？」

「どこからどうみても地球でしょうが……たく、どうなってるのよ」
求めていた解答とは多少ズレが、というか決して解答は無かったが情報はもらえた。

とりあえず地球語、いや日本語を話している。よく見ると男二人は日本人顔、紅い機体の女はたぶん中国人、もう一人はコーカソイドのようなのでヨーロッパの方だろうか？

とは言っても考えてみればアリスやリリパットも日本語を話すのだからそれだけじゃ地球人の証明にはなっていない。

「念のため交信を試みるが、お前たちは何処の星の人間だ？」

俺の問いに四人は多少嫌そうな顔をする。

「いや、地球人なんですけど……」

「待て、宙。ISを相手は装備していないぞ！？」

「そつえば……男だな」

「男ね」

白い機体の男と紅い機体の女が『男』に食いついた。ちなみに現は後ろの方にいるので接触しているとは言えない状況だ。

「そんなに俺がめずらしいのか？」

「お前たち、注目するところはそこじゃない。ISを使ってるのに空を飛んでいるのだぞ？」

「確かに……他の国の新兵器か？」

「そんな情報知らないわよ」

「鈴モラウラも知らないのか、じゃあ、あれは一体？」

「まあ、とにかくにも……こちらに戦闘の意思はない」

とりあえず分かったのはこの人たちは人の話しを聞かないということとだけだ。そしていつの間にか話が変わっている。『IS』なるワードが目立つがこちらから言わせればISなんて知らない。そしてどうも男の一人の名前は『宙』、女性がそれぞれ『鈴』と『ラウラ』。そして皆地球人（自称）。

「ひとついいか？」

「ああ」

今度はちゃんと返事をしてくれた。ってこれが普通だよな？

「本当に地球人なのか？」

「ちゃんと日本語はなせているだろうが・・・ドイツ語だって、中国語だって話せるぞ？」

「ほう」

素直に感心してみた。ちなみに俺は、ドイツ語は多少分かる。中国語も住んでいたから会話程度なら。

「ラウラと鈴がな・・・」

「宙はドイツ語も中国語も話せるのか・・・さすが、わが夫」
「え？」

「どうだ？　これが一夏と夫の差だ」

「いや、ラウラ？　俺は話せないと・・・」

「ふん！　一夏だって話せるわよ。ねっ？」

「だから、ラウラ？　話せないと・・・」

「いや、俺は話せないぞ中国語」「俺も話せない」

「それぐらい話してみせなさいよ！　帰ったらしっかりと教育・・・ブツブツ」

「俺の話を聞けーーーーー！！！」

「あのーーーー　って聞いてない？」

とりあえず文脈的に鈴という女性が中国人、ラウラという女性がドイツ人、そしてもう一人の男の名前は『一夏』。そして宙はラウラの夫。同じ年くらいに見えるのに結婚しているのか。そして何気に地球人かどうか未だに分からない。

「で？ お前たちは何をしているんだ？」

「クリスマスパーティーをしていただけなんだ。それ以外にすることなどない！」

「一夏…お前……」

「尋問されているというのに・・・馬鹿か？」

弁明すれば尋問はしていない。そして尋問だと思っのなら何故さつきから名前や出身を漏らしているのか。

「馬鹿よ、馬鹿」

「馬鹿って何だよ、鈴。パーティーをしていただけじゃないか」

「あの人が変なことをしなければなく、ホント」

「パーティーをしていただけだな」

「私は軍人だ。尋問などに屈しない」

弁明すれ以下略。

「私も軍人だから、しゃべる気ないわ」

「なんなんだ一体・・・？」

とりあえず女性二人は軍人であるという新情報。

「ふう、とにかくここは・・・かくまってくれとうれしい」

「だな、軍隊に追いかけられるのはこりごりだ」

「せっかくのクリスマスに、まったく」

「ほんと、ここからだったんだが・・・宙、マフラーは落としてないだろうな」

言葉も出ないとはこのことだろうか？ としみじみ感じた今日のこの頃。そして四人が四人ともクリスマスパーティーに未練ないし何かしらあるらしい。

「落とすかよ、せっかくのプレゼントだぞ？」

「ふ、ふん。それでいい」

嬉しそうに頬を赤らめるラウラ（たぶん）という女性。人間性は有るようだ。

「でも、これからどうする？」

「あ、あんたが言ってるじゃないわよ！ あんたがああ箱を開けな

ければ良かったことじゃない!!」

「はあ、俺の責任か？ 別にどうでも良い、とか何とかお前が言ったじゃないか」

「なんで巻き込むのよ!!」

これでは埒があかないと思った俺はとりあえずこれが『メアリー博士の悪戯』だと考え、

「ちよつとストップ！ とりあえず俺の家に来るか？ クリスマスパーティーの準備中なんだが」

と誘うはめになっていた。

「で、結局・・・こうなったわけか」

現在地、俺の家。総員六名。俺、現、宙君、ラウラさん、一夏君、鈴さん。

「おお、すげえなこれは」

「二次会になるのか？」

「でも、なかなか楽しめそうね、これ」

これ、扱いかよ・・・

「こちらにもクリスマスあるんだな」

「それは一応、俺たちのセリフなんだがな」

するとガチャンと勢いよく玄関のドアが開く音がしてマシンガンが如し足音を鳴らしながらリビングの扉をバンと開け放ったのは、

「美和」

「お兄ちゃん！」

そう叫ぶと美和は俺にダイブ。俺はそれを受け止める。

「お兄ちゃん！ パーティー楽しみ！」

「分かったから、美和。ほらちゃんとお客さんに挨拶して」

明らかに周りが見えていない美和にそう促すと美和はその見たことのないお客さんに対し頭を下げる。

「はじめまして。村雨美和です。兄がお世話になっております」
何時になく律儀かつ丁寧だった。

「妹か？」

「そうだが」

「ふーん、デジャブだ」

この状況にデジャブ！？ それはもう同士しかあり得ない気がする。

「お前も苦勞してるんだな……」

「お前もか……」

俺と宙さんはいつの間にか抱き合っていた。変な意味は無い。しかしそこには尊大な意味が有る。

男同士でそんなことをしているうちに茉莉、メリールが家に入ってきていて「なに、これ？」と動揺していた。

とりあえず事情を説明し、納得してもらい、改めて皆でクリスマスパーティーを開くことになった。

？

明日香宅のクリスマスパーティーはイレギュラーを含め行われることになった。

「なんかあつちで抱き合ってるぞー」

明日香は妹というキーワードにおいて共感の持てた宙と抱き合っている。それを美和が引き離しにかかっていた。

「一夏、あんたも混ざってくれば？」

「え？」

「てか、今からガールズトークするんだから気を利かせなさいよ」

「……了解」

明日香とはまた違う苦勞を抱えていそうな一夏は不貞腐れつつも明日香や宙がいる方へと向かった。

リビングに女性陣が集まっていた。

恋する乙女の結託は時にどんな絆より強い、それを体現するように初めて会った鈴音とラウラを含めてメリール、茉莉、現は打ち解

けあっていた。現は多少人見知りの気があるがメリールや茉莉のおかげで面と向かって話せるほどになっている。

そしてそこに流れる空気は少し甘美で蠱惑的な雰囲気だ。そう、それは所謂『ガールズトーク』の雰囲気だった。当然その議題は恋話。

「じゃあ、早速！」

茉莉が皆に促すように威勢よく声を上げる。

「とりあえず見て取れる感じでは鈴音は織斑君、ラウラは宙君が好きなわけよね」

ついさっきまでメリール達はそれぞれを『鳳さん』『ボーデヴィツヒさん』と呼んでいたが「名前がいい」という二人の意見を尊重し今はもう名前で呼んでいる。ちなみに鈴音は普段『鈴』と皆から呼ばれているので多少むず痒い感じがしていたがさすがにそれは速いというメリール達の意見に譲歩した。

「なっ！？　べ、別にあたしは幼馴染ってだけで・・・」

「うむ。宙は私の夫だからな」

両者の反応に茉莉はそれぞれ違う意味で「アハハ」と乾いた笑いを洩らす。

「こんな機会そう無いんだからさ。正直に言っちゃいなよ」

茉莉が鈴音に向かって意地悪な笑みを贈った。それに対し鈴音は頬を朱に染めながら、

「う・・・・・・」

と黙り込みながら小さく首肯。その場の女性陣にはそれで十分だった。

「あ、あ、あんた達はどんなのよ！　やっぱりあの明日香っていうのが好きなわけ？」

復活した鈴音がメリール、茉莉、現をいっぺんに見つめながら捲くし立てた。

「はっ！？　いや、私は別に・・・いや、えっと・・・」
人のことを言えないメリールだった。

「わっ、私はず、好きだよ……明日香が」

誰もが「なにこの可愛いの」と思うほどの初心な表情を浮かべた茉莉。

「……………好き……………うっ」

言っただけが良いが自分のセリフで自爆しかけてうろたえた現。これ
もまた「なにこの可愛いの」。

「ほう。三人で一人の男をめぐって争っているのか。大変だな」

何処か他人事なラウラ。彼女の自信に普段の状況を知る鈴音だけが溜息をはく。

「さ、三人じゃないのよ！」

例の如く復活したメリールが悔しげに叫んだ。その心からの叫びに茉莉と現も「うっ」とダメージを負う。

「他にもいるわけ？」

なんとなく同じ匂いにするメリール達に俄然興味が湧く鈴音。ラウラは物語でも聞くかのような表情だ。

「いるのよ。笑顔の可愛いフランス人やクールで美人なフィンランド人、大和撫子を具現化させた日本人、そして極めつけはアイドルときてる」

綺麗で巨乳な日本人、容姿端麗なイギリス人、下手したら誰よりも近い位置にいるフランス人などを相手にしている鈴音も多少驚いた。

「あんたも苦労してるのね」

「く、苦労なんてしてないわよ！ 私が勝つに決まってるの！」

そのメリールの言葉に突っかかる若干二名。

「まだ決まったわけじゃないよ！ 私も負けないもん！」

「……………明日香は私が……………道化師
憲章……………」

（道化師憲章？）

鈴音、ラウラは当然のことながらメリールや茉莉さえもそのワードの意味は分かっていない。

「ふん、それにしても大変だなお前たちも」

夫のいるラウラには何処吹く風。

「あんただって油断してると宙盗られるわよ」

「そんなことはない！」

自信満々だったラウラの顔に僅かに影が差す。

「えっ？ 普通『夫』って盗られるものなの？」

既に宙「ラウラの夫神話が完成していたメリールはキョトンとした。ちなみにキョトンとしたのはメリールだけだった。

「どうしたら落とせるのかしらね」

何時に無く神妙な面持ちで鈴音が唸る。

「水攻めがいいんじゃないかな？」

「城じゃないわよ！」

完全に打ち解けていた女性陣には既に冗談を言えるほどのムードが空間を支配している。ここでの主な尽力者は茉莉であり「水攻め」も茉莉である。

「や、やっぱり胸が大きい方がいいのかな？」

メリールの発言により四名の被害者が出ました。

「そ、そ、そんなことあるわけじゃない！ い、一夏はその・

・小さい方が・・きつと・・」

と徐々に自信を失くし覇気が無くなっていく鈴音。

「やはり胸は大きい方がいいのか・・」

と一瞬悩みつつもそれは宙の好みだから仕方ないと男前なことを考えるラウラ。

「・・・・・それは・・・・・難しい」

と自分の小さな膨らみを見つめつつ落胆する現。

「大体、男子はどうしてそんなに大きい胸が好きなのよ！」

と明日香が聞けば俺はそうでもないかと答えるだろうに勝手に巨乳好きだと決めつけたメリール。

（無くはないし・・・・・ちょうどいいサイズなんじゃないかな？）

と口には出せないものの心の中で少しガツポーズをした茉莉。

「あゝもう！ 無いものを考えてもしょうがないじゃない！ 折角違う世界（？）みたいな所に運ばれたんだからそれを活かさないわけにはいかないわ！」

復活した鈴音は勢いよく立ちあがり一夏がいるであろうドアの方向を睨む。

「活かすとはどうするのだ？」

ラウラが鈴音に問う。

「当然、一夏に優しくしてもらってことよ！」

クリスマスと似た様な処遇の女性陣を見て鈴音は多少ハイ状態になっていた。

「やさ、しく!？」

何を想像したのかラウラが驚くほどのスピードで全身を赤く染めた。

「なるほど！ じゃあ、私も明日香に！」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ！ 茉莉は普段から一緒に住んでるんだから少しは譲りなさいよ！」

「えゝ それは関係ないよ！ だってメリールは明日香と同じ学校に行ってるじゃん！」

「うっ」

鈴音から発生した『優しくしてもらいたい』菌はあっという間に伝染しもはや治療薬は存在していなかった。

「でも、どうしたら優しくしてくれるんだろう？」

茉莉が素朴且つ一番の難題を口にする。それを聞いた女性陣は一片に黙り込んだ。ちなみにラウラはまだ「優しく・・・宙がわたしに・・・」とうわ言のように呟いていた。

「普通、クリスマスなんだから言われなくとも優しくするのが本当よね！」

ある意味本末転倒なことを鈴音が漏らす。そして一夏にそれを求めていいのかそれも分からない。

「す、素直に甘えてみる……とか？」

茉莉の発言に鈴音とメリールが「それは……」と今世紀最大の思案顔を浮かべた。それはさすがに恥ずかしいし悔しいしでも、と二つの乙女心が戦っていた。そして、それが出来そうな人が目の前にいるのも決して起爆剤にはならず微妙な棘となり心に突き刺さる。そんな複雑な心境が絡み合う何とも言えないもどかしさが感じられる。

茉莉は茉莉で普段そういうことをしないメリールのそういう姿は破壊力があるだろうな、と乙女の危険察知レーダーと多少のオタクの血が警鐘を鳴らす。

そんなことを皆が考えていると「あっ」と茉莉が言って急に頬を朱に染めた。

「どうかした？」

鈴音とラウラ、そしてメリールと現が訝しげに茉莉を見つめる。すると、

「明日香って優しいんだ」

と言った。

「……は？？？」

眼が点。それが今の四人の状況を一番的確に表現していると思われる。

「あっ、いや素直に甘えるにはそういう雰囲気っていうか、心構えていうか、そういうのが必要かなって思ってた。だから明日香の良い所を……そ、そんな目で見ないで！」

ちなみに四人の目は哀れみや慈悲ではなく羨望だった。

「い、一夏はか、か、格好いいのよ！それに背も高くなってるし……時々ドキツとすることを言うこともあるし……」

鈴音も茉莉に影響されもとい乗っかり好きな人自慢を始めた。

「明日香は……『そういうの』は鈍感だけどそれ以外はすごく人の気持ちがあつて優しいし、強いし、一緒にいると安心するし……」

メリールは途中でソファに顔を埋め「ううゝ ううゝ」と唸り出した。その顔は真つ赤に染まり皆が心の中で「がんばったね!」と激励の言葉を贈った。

「私は断然『強さ』だ。宙は強い」

強さ。それに必要なのは『優しさ』か『勇氣』か『希望』か。明日香がこの場にいたならば、そんなことを考えるのではないだろうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・で・・・・・・・・・・
だし・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・それに・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・みたい・・・・・・・・・・」

主に接続語しか聞こえないくらいの小さな声で明日香評を語る現。まだ唸っているメリール以外の三人が耳を現の口元に近づける。一秒、二秒、三秒・・・・赤、紅、真紅・・・・予想以上の明日香評に他の面々の方が恥ずかしくなり自分のことのように顔色が変わっていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・の・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・だった時・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・それで・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

現の明日香評はSSくらいなら書けそうなほどだった。しかしそれは彼女たちを萎えさせるどころか逆に好きな異性談議をより一層激化させた。

「ていうか一夏は鈍感過ぎるのよ! 唐変木!」

「あつ、明日香も恋愛系のことには鈍感だね。もしかして先生のせい?」

「先生とはなんだ?」

「明日香には尊敬してる探偵の先生がいるのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・明日香の夢は探偵」

可憐な花が語るのは初めて出会った王子様のこと。

「好きなんだ……?」

状況を整理しよう。たぶん宙が言いたい『あいつら』はメリール達のことだろう。で、誰が好きか? ああ、成程。

「いや、誰が好きかと聞かれても。でもどうしてそんなことを?」

「いやー、聞いてみたかったんだよ」

打ち解けたことが分かる笑い声を上げながら宙が返した。

そうだな……。友達としては全員好きなんだがそういう質問ではないだろう。というか明らかにこれは恋愛系のお話だ。男同士でもこういう話するんだな。男友達が少ないとどうも経験が無く知識だけでは追いつかない部分がある。

「こいつもお前と同じ状態かもな」

そう言っただけ宙は一夏の肩を抱き寄せた。そうか、一夏にも女友達が多いということか。今度は一夏に親近感が湧いてくる。

「そんな羨ましいやつじゃないって」

たぶんTND学園一年一組でその発言をしたら一夏は一日で村八状態になってしまうだろう。まあ残念ながら今の俺は村八とまで言わなくてもそれに近い状態ではある。何時も男子には避けられる。そんな時は一先ず思春期のせいにするのだけでも。

「で、結局どうなんだよ?」

一夏も宙に乗っかり俺に『どの娘が好きなのか』を問うてくる。はつきり言えば現在俺は恋をしていない。言い方によっては『していた』が正しい感じだ。だから誰が好きなのかと問われても困るのだ。

「いや、特に好きとかそういうのは無いんだが」

そう返すと宙は何処か呆れたと言わんばかりの表情を浮かべた。しかしそれが事実なのだから仕方ないだろ。

「それよりラウラさんは宙の奥さんなのか?」

とりあえず『お返し』と微笑ましさと可笑しさを込めて俺は宙にそう問うた。

「ん、難しい」

「確かにな・・・」

宙だけでなく一夏も一緒に悩み始めた。こちとて宙が十六なので結婚出来るわけがないことは分かっている。もしかしたら許嫁的な小説やアニメでしか見たことのないレアな状況を目の当たりに出来るのかと思いい興味湧いたただけだった。

「引きずってんだよ。俺が色々とな」

宙はそう答えた。その表情は焦燥と若干の苦悩、自分への不甲斐なさなんかで構築されていた。

多少空気が悪くなってしまったか、と少し焦ったがすかさず一夏が、

「で、はぐらかしたつもりか？」

と蒸し返した。文法的に俺の好きな人の話なのだろうが、俺としてはもう終わったとばかり思っていたので若干虚をつかれた。

一夏はニヤニヤと笑いながら詰め寄ってくる。この状況で俺が言える事は唯一つ。

探偵の卵をなめるなよ！

「そういう一夏の方はどうなんだ？ 鈴音さんとの関係は？」

俺の言葉に一夏は「り、鈴のことか？」と少し頬を高揚させている。THE 転換とはこのことですよ旦那。

さっきの威勢は何処へやら、一夏は完全に話をはぐらかされた。

すると一夏は俺の方を向いて、

「り、鈴てさ・・・メリール・デイソンさん？ に似てるよね」

と、明らかに逃げの言葉を発した。

しかし、言われてみるとそうかもしれない。髪型はツインテールで口調も自称以外は似ているし体系も似ているような・・・如何、これ以上考えたら蹴り倒されそうだ。

「関係ないだろ、一夏」

「て、宙！ お前どっちの味方だよ」

完全に動揺している一夏を見て少し可哀想かな？ と思っただが脳

裏に「やらないか」と言った一夏が浮かび考えを改めた。

「さあ、言おうか一夏」

俺と宙は一夏に詰め寄る。

「う、うううううう」

一夏は今まで以上に狼狽ししどろもどろになっている。その横でニヒルな笑みを浮かべた宙が気になったが、まあ今は考えないことにしよう。

クリスマスパーティーの神様は俺達にどうしろと言っのか。

「どうしてこうなった？」

宙が呟くのも分かる。なぜなら今俺達が遭遇しているのは空気がピンク色に染まった女性陣だからだ。どれくらいピンク色かと言うと――

「撫でる宙」

ラウラさんが真面目な表情で宙にそう言った。

「まじで？」

「まじだ」

「まあ、いいけど・・・」

宙も満更でもない感じでラウラを撫でる。

「い、一夏。ちょっとそっちにつめなさいよ」

鈴音さんが一夏の座っている場所に歩み寄り、恥ずかしそうにしながらも嬉しそうにそう言った。

「急にどうしたんだ鈴？」

「いいから・・・よつと」

訝しがる一夏を無視し鈴音さんは彼の隣に無理矢理割って入った。

「狭いだろうが」

「これがいいのよ」

鈴音さん嬉しそう。そしてラウラさんも満足そうに頬を緩める。

これは所謂イチャイチャというやつだな。リアルで見ることが出来るなんて。本日何度目かの未知との遭遇。

そんな彼らを微笑ましく見つめていると、

「あ、明日香！ え、えっと……ちょっとそこに座りなさい！」

メリールが少し震えながら俺にそう言っ
て椅子を指差している。

「なぜ？」

「いいから！」

仕方なく俺は座った。何だろ
うこの嫌な予感。

俺が座るとメリールは無理矢理俺に背を向ける形で、俺の前に座った。要は俺がメリールを後ろから抱いているような形になっている。

「ちょ、なんだなんだ！？」

俺の言葉など無視しメリールは幸せそうに微笑んでいる。さっき宙達とした恋話のせいで余計に意識してしまうメリールの温かみや鼻を通るいい匂いで俺は紅くなっているのを隠し切れていない。やはり。非常にやばい。

「はい、交代！」

にこやかな毒気の無い笑顔で俺は茉莉から引つ張られた。助かった……このままでは正直やばかった。

不満顔のメリールを横目に茉莉は俺をソファに座らせる。そして彼女自身は俺の隣へ。

「じゃあ今度は私の番ね♪」

「うん？ 茉莉の——ドアッ」

茉莉は急に俺の頭を掴み、その柔らかな膝へと……ああ、これが伝説の膝枕ですか。

「……半ば諦めているんだが、これはなんだ茉莉？」

「うっっん、折角のクリスマスなんだから優しくしてもらおうと思っ
て♪」

「でもこれは俺が優しくされてないか？」

「いいのいいの」

それにしても膝枕ってこんなに気持ちがいいんだな。ふと視線を

動かすと宙が優しくラウラさんを撫でている。一夏も鈴音さんとい
い雰囲気だ。本当にあいつらは付き合っていないのか？ お似合いに
しか見えん。

「じゃあ、明日香。交代ね」

「うん？」

俺は起き上がり茉莉の方を見ると、茉莉はスタッと後ろに跳び、
俺と茉莉の間に今度は現が入った。さっきから言ってる交代って俺
を順々に回しているのか。なんとなく複雑な心境だ。

「……………明日香」

「うん？」

現は下を向いたまま小さな声で俺に話しかける。そして俺の左側
に立ち「動くな」と言うように両腕で俺の左腕を抱く。そして暫く
黙った後、それは起きた。

チュ

頬にキスをされた。現から頬にキスをされた。うああああああ
あああああああああああああああ！

「……………あつ！？」「……………」（鈴音さん、ラウラさん、メリール、茉
莉の声）

「おつ！」「（宙、一夏）

「キャ……………」

「……………」（美和）

「現、それは反則！」「現ちゃん、ずるいよ……………」「さすがに真
似できないわ」「その手もあるか」

「やるな、明日香」「これは……………」

「お兄ちゃん……………」
「……………」

ああ、天国と地獄ってこれのことだな——俺はそんなこと
を考えながら、それでもキスの感触を思い出しつつ一言。
「クリスマス……………だな」

?

騒がしくも楽しい一時に終止符を打つのはこの聖夜を彩った主。
「やー、やー明日香君！ 楽しんでる？」

意氣揚々と村雨家に入ってきたのは他でもないメアリーその人であつた。

「メアリー博士!？」

メリール、現、そして明日香は同時に彼女の方に向き直る。

「ふふん、私のプレゼントは喜んでもらえたみたいだね！」

その言葉で明日香は悟る。これは全て仕組まれたこと。博士が宙達をこの世界に呼んだのだと。

「でも、人の夢は儚いんだよ……」

「博士、それ言ってみただけですよね？」

「まあね！」

いつもと変わらぬメアリー。しかし、誰もが『終わり』を認識していた。

「これを見てよ」

そう言ってメアリーが取り出したのは箱状の何か。それを見た異世界の住人である宙達^{そうちだ}が反応する。

「あれ？　それどっかで……」

「これはね、人を平行世界に運ぶ道具なんだよ！」

「えー……」

その場にいた全ての者が驚嘆する。

彼女によれば、偶然異世界の人間とコンタクトが取れ、そこから人を送るので時がくれば帰してほしいという感じで話が進んだのだという。迷惑極まりなかった。

「お前達、戻れるかもしれないぞ」

明日香がそう言くと宙は喜び半分悲しみ半分という顔をする。そして「そうか………」と返した。

それに対しメアリーが一言。

「あゝ 急いで帰らないと色々和不味いんだよね〜」

「それを先に言え！」

一夏の盛大なつつこみが入った。それをメアリーは嬉しそうに聞いている。

「いくか・・・」

宙の言葉にラウラが「いいのか？」と顔を覗き見る。すると、

「未練がないと言ったら嘘になるが、言葉を飾るのに意味は無い」と、そう言って歩き出した。

「かつこつけすぎだ・・・たく、また会おう」

ラウラも宙に続きメアリーの元へ向かう。

「そうね、また会いましょう」

「じゃあな」

鈴音と一夏もそれぞれ一言残し後に続いた。メアリーの持つ装置の近く寄って立つ。

「博士、どうせ外部に起動装置かなにかあるんでしょ？」

「ご名答〜〜〜〜」

宙は勝手知ったるこの装置から明日香を離すため手で「近づくな」とジェスチャーした。

「じゃあな」

明日香は在り来たりな、誰もが使うそんな言葉で彼らを見送る。

その言葉の主成分は「さよなら」ではなく「また会おう」。どんな臭いセリフより明日香はそんなシンプルな一言を選んだ。

そんな姿に宙は微笑み、そして――

「中々面白かったんじゃないかい？」

「そう？」

星空の下、一人の男と一人の少女が村雨家を高い塔から見下ろしていた。

「私には関係ないから」

「素っ気ないな」

少女は大人びた表情で退屈そうに呟く。

「とはいえ『ある天才』が異世界の天才を見つけ、交信。そして人間を転送。科学の進歩はすごいな」

青年は一人達観し微笑を浮かべた。

「でも正規の世界に送れなくしたのは誰だったっけ？」

少女が青年に意地悪な笑みで返した。青年は「あはは」と誤魔化すように笑い続ける。

「仕方ないだろ？ 送られる人間からしてみたら平和な世界の方がいいに決まってる」

「それで？ この世界はどうするの？」

青年は少女の問いに思案顔を浮かべた後、返答した――
「消す、しかないかな」

と。

「じゃあ、行こう！」

少女は屈託のない笑顔で青年にそう言うと手を引き無理矢理歩き出した。青年は苦笑しつつも歩みを止めず進み続ける。

「メリークリスマス」

彼はそう言うとうつ右手を高らかに掲げ、指を鳴らした。

その音はサンタクロースの鈴の音のように町中に響き渡り、そして消えた。

IS(sirasu)×クラウン・タイム！(晴野有希)

Christmas

如何だったでしょうか？

何時もと違う明日香たちの姿が見られたのではないのでしょうか。

機会があればまたコラボしたいと勝手ながら思っています。

では、皆さまメリークリスマス。

そして、良いお年を。

離魂 第一話「交錯と歪曲」

第一話「交錯と歪曲」

六月一日。早朝。

また一週間が始まる。

月曜日ってやっぱり憂鬱だ。

俺は目覚ましを止めつつ、部屋を出て右側へ曲がって――

ゴツッ！

えっ？

俺は壁に激突した。

額が異常なまでに赤くなっている。

なぜぶつかった？

まず俺の頭の中にある疑問はそれだ。

俺の家の二階には部屋が六つほどある。

階段は一番奥。

俺の部屋は真逆の奥。

向かって左側。

茉莉の部屋が俺の向かい。

よって俺は部屋から出ると階段へ向かうため右側に曲がる必要がある。

俺は今それをした。

そして壁にぶつかった。

俺は暫くその場に座り込み少しさえた頭で考えていると、俺の前の部屋の扉が開き、中から人が出てきて、

ゴッン！

と壁にぶつかった。

俺と同じことをした！　なんて半ば面白いがる時間さえ神様は与え

てくれなかった。

目の前で壁にぶつかったのは【俺】だった。
もつと言えば【村雨明日香】がぶつかった。

俺の前で。

「いた~~~~い」

やわらかい声で俺が唸っている。

夢？ これは夢？ いや、さっきの激突は痛かった。
だとするとこいつは俺で、じゃあ俺は……

「あれっ？ ……えっ!？」

俺を見た【俺】が絶叫を上げた。

こんな言い方はおかしいかもしれないが、大方理解した。

最近は魔法関係のことで耐性がついていてあまり驚かなくなった。
人間、慣れるのって怖いね。

まあ、ドラゴンやその使い手、魔法使い通しの戦争にククク魔人
そりゃ異常事態にも慣れる筈だ。

さて、じゃあ、一応確認してみますか。

「俺と茉莉が入れ替わった」

【俺】は今にも気絶しそうになっている。

「さてと、どうしたもんか」

俺は茉莉（姿は俺）とリビングで話しあいを始めようとしていた。
さすがに今回の問題は難しい。

なにせ俺個人だけの問題ではない。

わかっているのはプロブかその周辺による仕業であるということ。
俺は知っていることは一通り茉莉に話した。

俺が魔法使いであると告白した時よりもは時間がかかったが、な
んとか理解してくれたらしい。

この理解力は凄まじい。

「そ、それで、どうすればいいの？」

弱弱しく茉莉（何度も言うが姿は俺）が問うてくる。

見た目がものすごく気持ち悪い。

「そうだな。今のところリリパットも出てこないし、ソニア達からも何もない。なんとかして連絡をとるとして、今日は……………」
学校休むか？」

個人的には休みたい。

茉莉が俺を演じ切れるかが心配だ。

俺も茉莉を演じるのは至難の業だ。

「うん。そうだね。今日はお休みしようか。でも、明日は大事な試験があるんだ」

「じゃあ、明日は行こう。今日中にこの現象が丸く治まるとは思えないけど。とりあえず今日は休もう。明日は明日考えればいいし」
とは言うものの内心はかなり焦っている。

いくらなんでも入れ替わりはきつい。

当然だが俺と茉莉は頭同士をぶついたりはしていない。

明らかに魔法の力だろう。

なんとか奇巖城へ行ってリリパットか蒼き三姉妹に会う必要がある。

「とりあえず、気持ちの整理も必要だろ？ 一回部屋に帰るか。それぞれ」

そうして俺達は解散。

それぞれの部屋（俺は茉莉の、茉莉は俺の）に入った。

色々心配なことは多々ある。

一つはこの現象がそのまま平行線に進むのかどうか。

悪化すること考えられる。

思考が相手と同じになったり相手の記憶がわかったりするかもしれない。推測ではあるが。

二つ目はそれぞれの精神面。

姓さえ逆の体に長時間入り続けることでなんらかの精神病にかからないとも限らない。

三つ目は茉莉のこと。

今までといい、今回といい、あまりにもすんなりと理解しすぎている。

溜めこんだ末に大爆発なんてことが起きなければいいんだが。

俺は少し落ち着かない気分を無理やり落ちつかせ、奇巖城へ行くことにした。

できれば気付きたくなかったのだが、どうも俺は奇巖城に行けならしい………

そして「クラウン・タイム・エチュード」も使えない。
簡単に言えば大ピンチだ。

大好きな六月、梅雨時に入って早々この仕打ち。

でも、逆に言えば茉莉が奇巖城に行けるのではないか？

そしてクラウン・タイムも茉莉が現在使えるのでは？

思い立ったが吉日。

茉莉に試してもらうか。

俺は部屋を後にして気がついた。

普通、部屋に割り振り逆じゃない？

？

「それで、どうやったら奇巖城に行けるの？」

茉莉は濡れた臉を拭きながら明日香に問うた。

「目を閉じて、行きたいと思えば行ける。意外と単純だろ？」

「うん………」

茉莉は数秒間俯いたまま自分の足元を見つめていた。そして、

「うん！ 行ってくる！」

と言って茉莉は瞳を閉じた。

明日香の気配が遠ざかっている。

恐怖心が芽生え茉莉は目を開けた。するとそこには、

「うつ………わ~~~~」

目を見張るほどの大きな城が月夜の中そびえたっていた。

（ここが、奇巖城………?）

茉莉は機械的な動きで城の扉の前までやってきた。

大きな扉には読めない字で何かが書かれている。

ふと、茉莉が後ろを振り向くと、そこには大きな庭が広がっていた。

「うわああ！　すごい！」

しかし、茉莉はある違和感に気がついた。

その庭には季節が無い。

あらゆる季節の花がそこにはあった。

スターチス、ひまわり、ノースポール、芍薬、ビヨウヤナギ、デンドロビウム、そして茉莉草。

それらの花が庭の中で咲いている中で、よく見ると城の周りには、
『私を忘れないで（スイートピー）』ジャノメエリカ『孤独』アネモネ『寂しさに耐える（カタクリ）』
『薄れゆく希望』
などが咲いていた。

大きな割に扉は簡単に開いた。

茉莉が一步中に踏み込むと、

ポ——ン

と柱時計が鳴る。

「五十嵐茉莉」

少女の声が茉莉の名を呟いた。

茉莉は姿の见えない声に対し、

「だ、だれ!？」

と肩を震わせながら尋ねる。

「ボクは夢香。村雨夢香」

少女はそう言うと言正面に有る大きな扉から音もなく現れた。

「奇妙な魔法。こちらの世界ではその姿か」

言われて茉莉は自分が本来の【自分】の姿であることに気付く。

「あなたが………夢香さん………」

「そう。明日香がいつもお世話になってます」

夢香は何処か余所余所しく茉莉に言う。

「いえ、こちらこそ」

茉莉は多少戸惑いながらも明日香が作り出した女性を見つめていた。

（あれが、明日香が生んだ女の子か。もしかして、ああいうのが好みなのかな？）

こういう事態の時でも乙女心は変わらない、ということか。

「そ、それで、この魔法のことなんですけど！」

茉莉は我に帰り夢香に詰め寄った。

「ボクにもどうしようもないよ。この入れ替わりは事例が違う。あなたも分かっている通り、『アニメ』とかでは普通、何らかの接触によって入れ替わりは起こる。まあ、今回はそれが魔法になったということだけでも、だったら明日香はここに来れる筈。でも明日香は来れずあなたがここに来た。奇巖城へのアクセスに【身体】は関係が無い筈。しかし、【精神】ではなく身体が影響し、明日香は奇巖城へも来れず、クラウン・タイムも使えない。しかもあなたは精神だけがこちらに来ている。以前の明日香なら体ごと持ってこられた。明日香やあなた風に言えば、これは『最終回から二話前くらいに来る大ピンチ』かな」

茉莉の動揺も気にせず夢香は一気に話した。

（ていうか、どんだけ私と明日香ってオタクっぽく思われているんだろう？）

色んな意味で不安になる十五歳。

？

茉莉は眠ったようにグタツとなったので俺は茉莉をベッドに寝かせた。

体は俺なので重いのでは？ と思ったそこの君！ いや何処の君だよ、と半ば自暴自棄気味だな。

ちなみに俺の体重は四十二キロ。

・・・・・・そうです、軽すぎです。

なんだっけ？ あの健康を示す数値が『十四（一番健康的なのは二十くらい）』だった。

大丈夫です。頗る健康ですから！

あつ、この数値は身長×身長を体重で割ってくださいね♪

俺は何を言っているんだ？

俺は茉莉の体を弄びつつ、一階のソファでグタ〜としていると、ある意味で今一番聞きたい声が俺の耳に届いた。

「元々可愛らしい顔が益々可愛らしくなったな、ククク」

「遅いぞ、リリパット」

「ククク、迫力がないな」

リリパットは俺の姿（正確には茉莉の姿）を賞めるように見つめた。

「ククク、プロブだな」

「やはり、か」

プロブ。ブラックイリユージョニストの中でも恐れられている存在。

「プロブの常套手段。ククク、怪奇現象はこれだけじゃないぞ。クク、いいか。今の我は残念ながらこれしかいえない」

リリパットはそれから何かを追うように目線を泳がせた後、

「――絆を忘れるな――」

と、そう言った。

？

茉莉と夢香が向かい合ってテーブルに座っていた。

「リリパットが明日香に接触」

夢香が業務連絡のように呟いた。

「えっと………もしかして私のこと、嫌いなのかな？」

いつもは人からどう見られているかなんて茉莉は気にしない。しかし今回は違った。明日香が生みだした存在である夢香から自分がどう見られているか、それは茉莉にとって重要なことであつた。

「こんな時に何を気にしているんです？」

夢香は冷ややかに返す。

「あつ、いや、その………」

（この子、明日香に似てない！）

それどこではないでしょ？ と呟いてくれた茉莉の天使はもうそこには居らず、色々聞いちゃえ！ と叫ぶ悪魔しかいなくなつていた。

「えっと、この入れ替わりは何時か戻るのかな？」

（まずは掴み！）

「戻ってもらわなきゃ困りますし」

空気が凍てつく。

「リリパットの反応が消えました」

尚も夢香は固い言葉で呟いた。

「今日は帰ります」

茉莉がそう言ったのはそれから五秒後であつた。

意識が朦朧とする中、茉莉は元の世界へ帰ってきた。

目を開けると目の前に自分の顔がある。

「大丈夫か、茉莉？」

（そうか、中身は明日香、なんだよね）

再び入れ替わりを認識させられ、ドツと疲れを感じる茉莉。

しかし、今の茉莉には明日香に言っておきたいことが一つだけあつた。

「どうした？」

急に不機嫌そうな顔になった茉莉に明日香が話しかける。

「おい、茉莉・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「あのさ、明日香」

「うん？」

茉莉は立ち上がり明日香を見下ろした。

初めての体験で少し茉莉は優越感に浸ったがすぐにそんな気持ちは醒め、

「夢香って『性格』は可愛くないね！」

と言って茉莉は部屋を後にした。

？

なぜ、茉莉は急に不機嫌に？

入れ替わりのせいで情緒不安定になっているのか？

それから夕食が済んでも茉莉は一言も口を聞いてくれなかった。

翌日。姉さんは俺達が休むと電話すると何故か昨日帰って来なかった。嫌がらせ？

俺はテストがあるので茉莉の学校に行くことにした。

「茉莉は別に行かなくてもいいんじゃないのか？」

茉莉は現在、TND学園の制服を着て出かけようとしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無視、ですか。

知っていますか？　どんな罵倒よりも暴言よりも無視が一番辛いつてことを！

そんな俺の心の叫びは届かず、茉莉は終始無言のまま登校して行った。

霧百合高等学校園。

ものすごいお金持ちの集う学園。
さすがに違うな雰囲気だ。

一年五組、それが茉莉のクラス。
クラスの生徒数は二十人と割と少数。

しかし、男子十人に女子十人という綺麗に揃ったクラス。

教室はTND学園とは比べ物にならないくらいピカピカしている。
床がまるで伊。丹だ！

と、そんな感動を表に出さないように教室へ入ると、

「おはよう茉莉！ 昨日は風邪？」

とハイテンションな短髪少女（たぶん運動部だろうな）が駆け寄ってきた。

「うん。心配かけてごめんね。もう大丈夫みたい」

俺は茉莉の口調を真似、自然に返す。かなり自信あり。

「ふっふっふん、じゃあ、愛しの明日香様に看病してもらったとか？

コノコノ！」

.....

えっと、何て返したらいいんだ？ 日常茶飯事な会話なのかこれ？

「えっと、別にそんなことしてもらってないよ」 気が利かないんだもん！」

これは一種の自虐ネタだな。

「あれ〜〜 いつもの茉莉と違う！」

「ヤバッ！？」

「もう、喧嘩でもしたの？ 珍しいな茉莉が明日香君のことを貶す

なんて。明日、雪でも降るんじゃない？ アハハ」

「そ、そうかな？ アハハ」

セーフ、だよな？

危うくバレルかと思った。でも、まあ普通の人の想像力じゃこの

推理は無理だよな。

たぶん。

そんなこんなで私立の学校生活を堪能しつつ、時々「今日の茉莉

は明日香君に冷たい」などと言われながらも、なんとかこなしただ。
今日の感想と叫びたら、この最初に話しかけてきた娘以外茉莉に
誰も話しかけてこない。

友達が少ない……のか？ まさかな。

そんな放課後。

事情が事情だけに速く帰ろうとしていたら、

「あら、五十嵐さんもうお帰り？ いつものはげ気はないのかしら？」
と明らかにアニメじゃ意地悪な敵キャラとして登場しそうなお嬢様
ぶつた女性が俺の前に立ちふさがった。

「えっ？」

さすがにこういう登場人物は想定外だ。さて、どうしたものか。

「フフフ もう明日香さんには飽きたのかしら？ それとも他の人
に取られたとか？」

妄言者（この女）をなんとかしなければ！ それも早急に！

「まあ、あんな貧乏くさい男に惹かれる女性も女性ですわね。わた
くしには何処がいいのかわかりかねますわ」

俺ってこの人に何かした？ ここまで言われなきゃなのか？ ま

あ俺は確かにもてないけどな。

多少精神的苦痛を味わいつつ俺はなんとか平常心を保った。

「そうだね。でも私に何でそんなこと言うの？ 別に私は明日香の
こと好きだから一緒に住んでるわけじゃないよ？」

当たり障りのないコメント――

「え！？」

のはずだったんだがその場にいたクラスメート全員の視線が俺に集
められた。

「あなた、よくもそんなことが言えましたわね！」

「えっと、なにか変なこと言った？」

名も知らないウザキアラ女にそう返すと、

グイッ

「ウギヤ！」

後ろから襟を掴まれた。

顔が正面から百八十度縦に移動。この動きは正直死ぬる。

「茉莉どうしたの!? まだ風邪治ってないんじゃない?」

襟を掴んだのは最初に話しかけてきた娘だ。

もう少し茉莉に学校での生活環境を聞くんだった。家とのキャラ全然違うみたいだ。

「ど、どうしてそう思うの?」

首を正常な向きに戻しつつ、俺は一応尋ねた。

「だって、いつもなら影で暴言吐かれたら真っ先に言い返すじゃない! ましてや茉莉自身に向けて明日香君の悪口を言ってきているのにどうして言い返さないの!？」

俺よりもこの子の方が怒っている様子だ。肩まで震わせている。

「ねえ、殴りかかりなよ! 私も手伝うよ!」

な、殴りかかる?

すると意地悪女が、

「今更、淑女ぶっても駄目ですわよ!」

などと言いだした。

茉莉って学校と家では大分キャラが違うんだ。

もしかして友達が少ないのもそのせいかな?

そうだとしたら俺の責任もあるな。

茉莉には悪いがここは。

「もう、言い返さないよ。好きなように言わせておく」

「え~~~~~!？」

教室にいた生徒全員によるフルコーラス「え~~~~~」をお送りしました。

「どうしたの茉莉!？」

「えっとさ、もし次にまたこんなことがあつて、私が言い返そうとしたら止めて」

「な、なんで?」

「なんでも! 張り合つのが馬鹿らしくなっただけだよ」

茉莉にはこれが一番いい。
俺の為に孤立するのは良くない。
それから数秒間、この教室から音が消え去った。

I g a r a s h i S i d e

いざTND学園に来てみると、右も左も分からない。
はあ、変な意地なんか張らなきゃよかった。

とは言っても今の私は明日香！　そう明日香なんだ！　絶対に乗りきって見せる！

私はまず一年一組に入った。

「お、おはよう」

誰に言うでもないけど一応挨拶してみる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おはよう」

最初に話しかけてきたのは現ちゃんだ。

私の主観だと明日香の『女』友達の中では一番可愛いと思う。顔もキヤラも。

「おはよう」

軽く返して席に着く。

そういえば、どういう授業をしているのだろうか？

トルネードの実習以外は普通だと明日香は言っていたけど、学力レベルはどっちが上なのかな？

私が適当に授業の準備をしていると、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

と、喋ってもいないのに突然ライラが存在感を発揮した。

「うわっ、えっとライラ？　どうした？」

今のは明日香っぽかったと思う。うん。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ライラは何も言わずに紙を私の前に差し出す。

『ご気分はどうですか、茉莉さん？』

「ああ、気分は……えっ!？」

バレてる？ えっ、バレてるの？ 何で？ 私、えっ、あっ、うえ？

『私はあなた方の関係者。知っていて当然』

「あっ、そうか。ごめん」

焦った。さすがに焦った。心臓に悪いよ入れ替わりは。

私は気持ちを落ち着かせつつ、ライラに質問する。

「戻る方法は？」

『今のところは分かりません。また、残念ながら私は干渉できません』

「なんで!？」

『私の職務ではないからです。故に下手に扱うと取り返しのつかないことになりかねます』

「職務？ ライラはどんな職務なの？」

というか職務ってなに？ 段々話しについて行けなくなってきた。明日香は魔法使い。その事実は知っているけれど、どうも実感が湧かない。まあ、今回の入れ替わりでなんとなく分かった気もするけど。

『明日香さんを王と例えるなら私は左腕。簡略化すればそのようなもの』

「左腕？ じゃあ、右腕は？」

『……』

いや、いや、紙に『……』書かなくてもいいのに。

左腕か。それって明日香に近いってことだね。要は。それは少し、妬けちゃう、な。

『右腕はマロー』

「えっ？」

急にライラがそんな紙を見せてきた。

マロー？ 誰だろ？ 聞いたことが無い名前。

『ソフィー・マロー』

さらにライラは紙を出す。

ソフィー？　ますます分からない。明日香は知っているのかな？
たぶん、これは女性の名前だ。そりゃ、明日香の周りには星の数
ほどの女性が集まるだろうから見当もつかない。星の・・・数・・・
程か・・・。

気持ちを切り替えろ！　と言うかの如く、チャイムが鳴り響いた。

放課後。

下駄箱にラブレターが入っていた。

茉莉、どうする！？

差出人の名前は無かった。

ちなみに待ち合わせ場所は体育館裏・・・ではなくTND学園第
三グラウンド裏。

明日香の役は憂鬱だな、まったく・・・。
速く戻りたいよ・・・明日香・・・。

？

返答を考えつつ、茉莉は待ち合わせの場所へ向かった。
グラウンドの中で一番人目が少ないのがこの第三グラウンドであ
る。

茉莉が到着するとそこにはまだ差出人は来ていなかった。

（どんな・・・子なんだろう・・・？）

とりあえず返答は「考えさせて」にして、帰ってから明日香に聞
こうと考えた。

内心穏やかではない茉莉は無意味にソワソワする。

それから十分後。

一際暗い影から一人の女性が姿を現した。

ロングヘアで背は百六十程。

可愛いというよりは綺麗に属するタイプの女性だ。

「来てくれたのね」

声ははっきりしているが何処か寂しそうな声だった。

「うん……」

茉莉もどう反応してよいのか分からない。

すると、

「（スー）……………（ハー）」

とその女性は大きく深呼吸してから、

「ゴメンなさい」

とだけ呟くと、何処から取り出したのか右手に真紅に輝く日本刀のような物を持って勢いよく茉莉に切りかかった。

「！」

明日香なら咄嗟に反応が出来たかもしれない。

しかし、普段特別に動くわけではない学生の反応ではかなり遅れた。

（明日香！）

茉莉は死を覚悟し、心の中でただ想い人の名を叫ぶ。

その瞬間、

ビュ——ン

地面に何かが激しく当たり、その衝撃で茉莉は後ろに吹き飛ばされる。

「あつっ！ えっ？」

茉莉の目の前の地面から煙が上がっている。

その奥を見ると刀を持った女性が茉莉と同じように尻もちをついていた。

茉莉は訳も分からず周りを見渡すと上空にトルネードを展開したライラがいた。

「ラ……………ライラ！」

「……………」

ライラは茉莉の声には答えず、鋭い眼差しを立ちあがろうとする

女性に向けている。

イニニューメラブル・ウイングを纏ったライラの周りに機械のフィ
ンが無数に現れる。

この機体は自分のエネルギーを使い、大小様々な羽を作りだす。
そのフィンの先端にはスナイパーライフルと同じ砲口が備えられ
ており、小さい羽を作り雨のように光線を放ったり、巨大な一つの
羽にし、アレラーテのような強大なエネルギー砲にもなる。

ライラは女性を見つめる。

そして女性もライラを見つめていた。

緊迫した空気が辺りに立ち込めている。

そんな時間が二十秒ほど続いたその時。

「我慢強いんですね、お二人とも」

急に女性の背後から少し高い男の声が聞こえた。

「！」

茉莉はその男を見て腰が抜けそうになった。

その男の顔はパツと見【村雨明日香】だった。

よく見ると少し明日香に女性の要素を足して（もともと明日香自
身中性の顔をしている）ほんの少し童顔にしたような男性だった。

「あな……たは？」

茉莉の反応をみた女性も振り返り同じような表情をしていた。

「ふふ そんなに警戒しないでよ、『五十嵐茉莉』さん」

その男はうすら笑いを浮かべながら言った。

そのセリフを聞いて、茉莉以上に女性が驚いた。

「えっ、明日香じゃない？」

あからさまに狼狽した女性はあたふたと茉莉と男を交互に何度も
見た。

「そうさ、【中身】が違う。中身は五十嵐茉莉という女性だ。ふふ
勘違い姫、この後のご予定は？」

その男は涼しい顔で話す。

「あなたは誰なの！」

女性は少し顔を赤らめながら怒鳴る。それはかなりの迫力で後ろから聞いていた茉莉までが身震いしたほどだった。

しかし男はその笑みを消すことなく、

「僕かい？ 僕は」

男は一瞬目線を茉莉に移した後、また女性に向き直る。

湿った風がその場にいる全員を撫でるように通り過ぎていく。

「僕は

【村雨 明日夢^{アスム}】

明日香の同素体？？（ナンバーフォー）さ」

Dayson Side

絶対におかしい。

あつ、私はメリール・デイソン。

と言ってもこれは偽名。

本名を知っているのは親と博士と明日香くらい。

絶滅危惧種じゃない？

って、そんなことはどうでもいい。

今日一日ずっと明日香を見てた。

まあ今日特別にずっと見てたわけじゃなくて毎日欠かさず……

・いや、今そんなことはど、どうでもいい！

今日の明日香の様子は変だ。

他の人は気付いてないみたいだけど、私には分かる。

なにせ過ごしてきた時間が違うのよ！

問題は私だけ気付いたって所じゃない。ここで私が相談にのって

解決するのが大切！

そしたら少しは明日香も私を……

うん、ガンバ私！

とは言っても、今日の明日香は人を避けている感じがする。

放課後も早々に教室を出て行った。

こうなったらあれよね、尾行。そうよ、悩みは身の回りから生じるものなのよ！ たぶん。

第三グラウンドに向かう明日香を尾行。

なんとなく嫌な予感がする。

ドラマでの告白シーンはほとんど体育館裏。

それに近いものを感じる。

昔から明日香はもてる。むかつくほどもてる。告白されるかは別としてもてる。

呼び出されているとしたらソワソワしていたのも頷ける。

尾行なんてしなきゃよかった・・・とは正直思わない。

茉莉、アレラーテ、丹花、ライラ、現、ついでに檸檬。ただでさえライバルが多いのだから、今日は敵を知るいいチャンス。

それから暫く待っていると女性が現れた。

同じくらいの年の女の子。

凄く綺麗で、スラッとしている。

胸は・・・小さい！ 私と同じくらいの貧乳！ あれっ、で

もこの学園にこんな女の子いたっけ？

その女の子は深呼吸すると、

「ゴメンなさい」

って呟いて走り出す。

その手には真紅の日本刀が握られている。その刀を持つ手先はプロのようだ！

まずい、反応が遅れ・・・た！

私が出ようとした瞬間、光線の発射音が響いた。

明日香はその光線のおかげで刺されなかったようだ。

その光線の発射主は――

(ライラ・・・！)

ライラがトルネードで明日香と女の子の間に光線を放ったようだ。どうしたら、いいのか？ 私も出て行く？ でも、うん、行こう！

その決断に約二十秒。

(行け、わたし！)

出ようとした瞬間、別の人影が現れた。

慣性の法則………だったわけ？ 作用反作用？ 知らない

！ 勉強は苦手！ じゃなくて、それっぽいのをなんとか殺して私はまた物陰に隠れた。

昔から勉強は苦手。いつも明日香に教えられている。

今までで一番明日香に怒られたのは鎌倉幕府が出来た年は？ と

いう問いに、

『1192296年』と答えてしまったこと。

「お前、今を何年だと思っっているんだ？」って言われた。

って、今はそれどころじゃないのよ！！

出てきた人は

あす………

………

違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違う！ 違う！

！ 違う！ 違う！

誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ！ 誰だ

！ 誰だ！ 誰だ！

明日香の真似をするのは誰だ！

その時感じた感情は今まで感じたことのない程、強大な憎悪だった。

？

【村雨明日夢】と名乗った男は、明日香の体を持つ茉莉、トルネードを纏ったライラ、真紅の日本刀を握った女性を一瞥した。

そして、不敵な笑みを浮かべた。

「意味不明………ですか？」

そう言った瞬間、茉莉の背後から爆音が轟いた。

その場にいた全員がそちらに目を向ける。

そこにいたのは、

「誰だ、お前！」

憎悪をむき出し、トルネード、ユア・ラヴァーを展開した【メリール・デイソン】だった。

「お前は誰だ！」

怒りに震えた両手にはビームライフルが握られている。

「説明しますよ。だから、少し静かに、してくれないか？」

丁寧な口調から徐々に暗く、恐ろしい声に変わって行った。

明日夢は右手を天に掲げ、指を鳴らした。

パチ——ン

その音が水面に何かが落ちた時生じる同心円状の波のように広がり、世界は一変した。

茉莉の姿の茉莉、トルネードを解除されたメリールとライラ、そして刀を握ったままの女性。

四人は立っていた。

『縦横三百六十度暗い背景に光の点が幾つも並んでいる空間』

【宇宙空間】に。

四人は少しごつごつした巨大な岩の様なものの上に立っていた。

「ここ……は？」

あまりの驚きにメリールはさっきまでの形相から半ば無表情に近いものになっている。

さすがの茉莉もそう簡単には状況を把握できない。

ただ、ライラは動じずその場で静かに立っている。

そして、女性は頻りに何かを探していた。

「なんなのよ、これ!？」

今にも狂いそうなメリールが叫んだ。

「ここは『恐怖の谷』です」

そう言ったのは紛れもなく村雨明日夢だった。

メリールはその顔を見た途端、再び顔色を変え跳びかかろうとす

る。

しかし、その体は石のように固くなり動けなくなった。四人全員が。

「まあ、そう怒らないください。説明します。その前に」

明日夢はまた指を鳴らした。

その瞬間、メリールは頭を抱え蹲る。

「うくっ……ああ……うくっ……」

苦しそくに悶えるメリール。

そして、すつくと立ちあがると、

「なんなのよ！　なによ、これ！　どうして『学園に【ドラゴン】なんかがいるのよ！』どうして！」
と叫んだ。

メリールは涙を浮かべながら叫ぶ。

「桜花さんは行方不明になっていて、動物園に変な機械が現れて、学園にドラゴンが……そして明日香がいなくなつて、必死で探して」

それは現場に居なかった茉莉までも心を抉られているような、そんな気持ちにさせる悲痛の叫びだった。

メリールは堪え切れず涙を零し、倒れ込む。

明日夢はメリールの消された（改竄された）記憶を修復した。

ドラゴンマスターによる襲撃などによる一連の記憶はメリールとアレラーテ、そして丹花の中から明日香によって消されている。

その記憶を蘇らせた。

一気に記憶がメリールの中に流れ込んで行つた。

メリールはそれから五分近く呻きながら倒れ込んでいる。

「あなた……何をしたの!？」

茉莉が明日夢に向かって叫ぶ。

「後処理を忘れていた。少し反省。さすがに同時期の記憶を混在さ

せるのは問題だな。消すか」

明日夢は例のごとく指をならす。

メリールの唸りがなくなる。

音もなく立ちあがり、

「もう……どうにでもなれ！」

それは全てをふっ切ったかのような声だった。

「説明、しましうか」

明日夢のそのセリフから現時点で起きていることの説明が始まった。

明日香と茉莉の入れ替わり。

それはプロブの【高等黒魔法】によるもので、ブラックイリユージョニストの中でも最高位の者にしか扱えない魔法だ。

それ故に解呪の方法は不明。影響拡大もあり得るらしい。

刀を持つ女性。

それは、ある意味で現在その場にいる人の間で一番気になることでもあった。

「私は何も話さないわ」

プロブの話しの間、律儀にその場で話を聞いていた彼女だが自分については何も語らない。

「なら僕が君について知っていることを話そう」

そう言ったのは明日夢だ。

明日夢のセリフにその女性は苦い顔をする。

「大丈夫。明日香君や君の【後ろにいる人】には分からないようにする」

【後ろにいる人】。それは彼女が何者かによって命令され明日香を襲っている、という意味なのか。それは明日夢と本人にしか分からない事であった。

「彼女の名前は【手束たつか 無花果いちじく】。十五歳。明日香をアナザーマジシャンにした張本人」

その言葉に茉莉は絶句、数分前に事情を聞かされたメリールは無花果を睨み（既に驚いているので茉莉ほど動揺はしていない）、ライラは既に知っていたのかは不明だが何時ものように沈黙を保っていた。

「簡単に言えば、以前にも彼女は明日香君を刺した。その時の日本刀の色は蒼。そして今持つているのは紅。危うく【二重魔導師インベルツ】にされる所でした」

明日夢は続けて語る。

「二重魔導師と書いてインベルツ。いわば業界用語です。普通なら生まれる筈のない言葉と称してもいいくらい稀な言葉ですよ。アナザーマジシャンとなった者が二つの魔法使いの力を持つ。今回の場合は蒼と紅の混色になる所でした。なぜ、そんな『危険』なことをしたのか、まあ聞いても答えてくれないでしょうけど」

そう言って明日夢は含み笑いをし、無花果を見つめた。

無花果は終始無言のまま俯いていた。

そして、

「・・・・・・・・・・・・・・・・明日香・・・・・・・・・・・・・・・・」

とだけ呟いた。

「明日香君風に言えば【イチジク】さん、ですか？」

それはほとんど変わらない発音の違いだったが、無花果にとっては完全なる挑発行為だった。

「その呼び方はやめろ！」

無花果は真紅の日本刀で明日夢に切りかかる。

「ふっ」

明日夢は息を吐くと一瞬で無花果の背後に回る。

「なっ!？」

無花果は前方へと進む自らの勢いを殺すことができない。

「また会いましょう」

明日夢は皆に聞こえるようにそう言つと風に舞う砂のように消え、空間が歪みそこにいた女性陣は不愉快な浮遊感を感じながら元の第三グラウンドに戻っていた。

ライラはいつの間にか姿を消した。

メリールと明日香の姿の茉莉は放心状態。

無花果は刀を握ったまま夕陽を見つめている。

先に正氣に戻った茉莉は無花果を見つめていた。

その視線を感じ取ったのか、無花果は茉莉とメリールを順に見つめ少し苦しそうな顔をした後、全てを悟るように、または全てを捨てるように小さく、小さく微笑み言った。

「全部・・・・・・・・・・・・・・・・・・教えてあげる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8668x/>

クラウン・タイム！

2011年12月27日21時57分発行